山梨県甲府市

大坪遺跡 発掘調査報告書Ⅲ

―ケアハウス グレープハウス建設に伴う調査―

1996.3

甲府市遺跡調査会
甲府市教育委員会
社会福祉法人 緑樹会

山梨県甲府市

大坪遺跡 発掘調査報告書Ⅲ

― ケアハウス グレープハウス建設に伴う調査 ―

1996.3

甲府市遺跡調査会
甲府市教育委員会
社会福祉法人 緑樹会

序　　文

甲府市遺跡調査会は、市域において急速に増大している、大規模開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を円滑に推進することを目的に、平成６年１月24日に設立されました。爾来、受託した山梨英和短期大学移転予定地内遺跡群・亥の兎遺跡・大坪遺跡・甲府城関係遺跡の調査をほぼ計画通りに進め、遺跡の記録保存に多大な成果を上げることができましたことは、喜ばしい限りでございます。

この度報告書発刊の運びとなりました大坪遺跡の発掘調査につきましては、他の大規模発掘調査と併行して実施することが困難な状況であったことから、財団法人山梨文化財研究所に職員の派遣をお願いし、同研究所を主体とする大坪遺跡調査団（谷口一夫代表）を遺跡調査会内に編成して発掘作業にあたっていただいたものでございます。

何分、大坪遺跡につきましては、古代に土師器の生産を行ったことで著名な、甲府市を代表する遺跡の一つであることから、極めて精度の高い発掘調査が望まれていたところでございますが、水準の高い学術調査の実施で知られる財団法人山梨文化財研究所のスタッフに発掘調査から遺物整理、報告書の執筆・編集までの一連の作業を行っていただくことができ、感謝の念にたえません。

また、社会福祉法人緑樹会（中島真人理事長）におかれましては、埋蔵文化財の発掘調査に深いご理解を示され、一方ならぬご支援とご協力をいただきました。深甚なる謝意を表しますとともに、本書が地域史の解明や文化財保護行政の推進などに広く活用されますよう、祈念申し上げる次第でございます。

平成８年３月31日

甲府市遺跡調査会
会長　金　丸　　晃

序　　文

大坪遺跡が所在する甲府市東部地域は、洪水による災害が多い甲府盆地のなかにあって、その影響を唯一逃れた地域であります。そのため、後背低地や湿地が広範にひろがる安定した土地条件をもった当該地域は、市内でも古代の遺跡が数多く存在する地域で、人々の生活の歴史を探るうえでも大変重要な地域であります。

さて、大坪遺跡は、山梨県教育委員会と甲府市教育委員会によって、過去２回にわたって発掘調査が行われ、古代、とりわけ平安時代の土師器製作遺跡として知られてきました。今回の調査の成果は、後で詳しく述べておりますが、そのなかでも注目されるのは、土師器製作に関わったと思われる竪穴建物跡や土師器焼成遺構が検出されたこと、そしてそれらの遺構から坏や皿を中心とした土師器が非常に多く出土したことであります。こうした遺構や遺物が検出されたことから、当該地域に土師器作りのムラが存在したことが、より一層確かなものになったと考えられます。

しかしながら古代甲斐国における土師器生産の実態については、未だ解明されていない問題が数多く残っております。今回の調査で得られた成果が、古代における土師器生産の立体的な復元に向けての一資料として、有意義に活用されることを切に願うものであります。

おわりに、真夏の猛暑、そして豪雨による冠水など、劣悪な諸条件のなか、黙々と調査に従事していただいた調査関係者の皆様、ならびに甲府市遺跡調査会、甲府市教育委員会、社会福祉法人緑樹会、その他関係各位の御指導、御協力に対し深く感謝申し上げる次第であります。

平成８年３月31日

大坪遺跡調査団
代表　谷口一夫

例　　言

1．本書は山梨県甲府市桜井町字角田610番地所在の大坪遺跡の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は甲府市遺跡調査会が社会福祉法人緑樹会の委託を受けて、大坪遺跡調査団が実施した。調査体制については第Ⅱ章に記してある。

3．本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

◇遺物復原　　矢房静江、名取もと子
◇遺物実測・拓本　　矢房静江、名取もと子
◇遺構トレース　　平野　修
◇遺物トレース　　平野　修、矢房静江
◇遺構写真　　平野　修、森原智恵子
◇遺物写真　　栗田かず子
◇挿図・写真図版作成　　平野　修、矢房静江
◇観察表作成　　平野　修、矢房静江

4．本書の作成および編集・執筆は、甲府市遺跡調査会と大坪遺跡調査団の責任のもと、平野　修が行った（第Ⅵ章は除く）。

5．発掘調査および整理作業において次の調査・業務を以下の機関・各位に委託した。

◇航空写真測量・基準点設置　　㈱シン技術コンサル
◇テフラ分析　　㈶山梨文化財研究所　河西　学氏
◇花粉、プラント・オパール分析　　㈱パレオ・ラボ　鈴木　茂氏
◇金属製品保存処理　　㈶山梨文化財研究所

6．石器の石質鑑定では、㈶山梨文化財研究所地質火山灰研究室長の河西　学氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げたい。

7．本書にかかる出土品および記録図面、写真等の諸記録は、甲府市教育委員会にて保管している。

8．発掘調査から報告書作成に際しては、以下の諸氏、諸機関から多大なる御助言・御配慮を賜った。御芳名を記し心より感謝申し上げたい（順不同・敬称略）。

高橋　学、外山秀一、萩原三雄、河西　学、畑　大介、宮澤公雄、櫛原功一、中山千恵、伊東千代美、
若木美和、末木　健、猪股喜彦、瀬田正明、森原明廣、社会福祉法人 緑樹会、テクノシステム㈱、
㈶山梨文化財研究所

凡　　例

1．遺構および遺物の挿図中の縮尺は各挿図中において示してある。

2．写真図版の遺物の縮尺は特に決まっておらず、統一もとれていない。

3．遺物挿図中の土器断面が黒く塗りつぶしてあるものは須恵器、ドットのスクリーントーンは灰釉陶器、器体部内外面のドットの粗いスクリーントーンは黒色土器、細かいスクリーントーンは赤彩土器を示している。器体部の薄く黒く塗ってある範囲は黒変を示している。

4．本書の土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』1991年度版を用いて行っている。

5．挿図第１図には国土地理院発行の1/25,000甲府、甲府北部、石和・塩山を使用している。

本　文　目　次

序　文
例言・凡例
目　次
第Ⅰ章　位置と歴史的環境……1
第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過
　第１節　調査に至る経緯……4
　第２節　調査の経過……6
第Ⅲ章　調査の方法……11
第Ⅳ章　基本層序……12
第Ⅴ章　検出された遺構と遺物
　第１節　竪穴建物跡……15
　第２節　掘立柱建物跡……26
　第３節　溝状遺構……27
　第４節　ピット……38
　第５節　その他の遺構と遺物、遺構外出土遺物……64
第Ⅵ章　自然科学分析
　第１節　大坪遺跡のテフラ分析……72
　第２節　甲府市大坪遺跡の花粉化石……76
第Ⅶ章　調査の成果と総括……86
図　版

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡……2
第２図　調査区位置図およびグリッド配置図……5
第３図　大坪遺跡全体図……9・10
第４図　遺跡の層序……13・14
第５図　１号竪穴建物跡……16
第６図　１号竪穴建物跡竈……17
第７図　１号竪穴建物跡出土遺物①……18
第８図　１号竪穴建物跡出土遺物②……19
第９図　１号竪穴建物跡出土遺物③……20
第10図　１号竪穴建物跡出土遺物④……21
第11図　１号竪穴建物跡出土遺物⑤……22
第12図　２号竪穴建物跡……25
第13図　２号竪穴建物跡出土遺物……26
第14図　１号掘立柱建物跡出土遺物……27
第15図　溝状遺構①……29
第16図　溝状遺構②……30
第17図　溝状遺構③……31
第18図　溝状遺構④……32

第19図　溝状遺構出土遺物①……33
第20図　溝状遺構出土遺物②……34
第21図　溝状遺構出土遺物③……35
第22図　ピット①……39
第23図　ピット②……40
第24図　ピット③……41
第25図　ピット④……42
第26図　ピット⑤……43
第27図　ピット⑥……44
第28図　ピット⑦……45
第29図　ピット出土遺物①……46
第30図　ピット出土遺物②……47
第31図　ピット出土遺物③……48
第32図　ピット出土遺物④……49
第33図　ピット出土遺物⑤……50
第34図　ピット出土遺物⑥……51
第35図　溝状凹地遺構……65
第36図　溝状凹地遺構出土遺物（土器）……66
第37図　溝状凹地遺構出土遺物（土器・土製品・石器）……67
第38図　遺構外出土遺物①……69
第39図　遺構外出土遺物②……70
第40図　大坪遺跡の火山ガラス・植物珪酸体含有率……73
第41図　屈折率によるA・A′型火山ガラスの区分と重鉱物組成……74
第42図　試料採取地点（矢印）付近の土層断面図……76
第43図　試料採取地点の地質柱状図と花粉分析層準……77
第44図　大坪遺跡の花粉化石分布図……80

表　目　次

第１表　１号竪穴建物跡出土遺物観察表（土器）……23
第２表　１号竪穴建物跡出土遺物観察表（瓦）……25
第３表　１号竪穴建物跡出土遺物観察表（金属製品）……25
第４表　２号竪穴建物跡出土遺物観察表（土器）……26
第５表　２号竪穴建物跡出土遺物観察表（石器）……26
第６表　１号掘立柱建物跡出土遺物観察表（土器）……27
第７表　溝状遺構出土遺物観察表（土器）……36
第８表　溝状遺構出土遺物観察表（土製品）……37
第９表　溝状遺構出土遺物観察表（金属製品・石製品）……37
第10表　ピット出土遺物観察表（土器）……52
第11表　ピット出土遺物観察表（瓦）……56
第12表　ピット出土遺物観察表（金属製品・石製品）……56
第13表　大坪遺跡ピット一覧表……57
第14表　溝状凹地遺構出土遺物観察表（土器）……67

第15表　溝状凹地遺構出土遺物観察表（土製品・石製品）……68
第16表　遺構外出土遺物観察表（土器）……70
第17表　遺構外出土遺物観察表（土製品・石製品）……71
第18表　ＡＴの産出地点と諸特性……72
第19表　大坪遺跡試料の計数鉱物粒数……73
第20表　大坪遺跡の産出花粉化石一覧表……78
第21表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数……81

図　版　目　次

図版１　大坪遺跡全景空中写真、調査前風景、トレンチ掘削風景、雨のたびに水びたしとなる遺跡、遺構確認作業風景
図版２　１号竪穴建物跡遺物出土状態、１号竪穴建物跡遺物出土状態近景、１号竪穴建物跡完掘、１号竪穴建物跡竈、２号竪穴建物跡、１号溝状遺構、２号溝状遺構、３号溝状遺構
図版３　３号溝状遺構遺物出土状態、４号溝状遺構、４号溝状遺構出土土錘、４号溝状遺構出土土製玉、５号溝状遺構、５号溝状遺構遺物出土状態、６号溝状遺構
図版４　６号溝状遺構遺物出土状態①、６号溝状遺構遺物出土状態②、７号溝状遺構、７号溝状遺構遺物出土状態、８号溝状遺構、９号溝状遺構、10号溝状遺構、13号ピット
図版５　15号ピット、16号ピット、18号ピット、20号ピット、21号ピット、25号ピット、26・27号ピット、44号ピット
図版６　50号ピット、55号ピット、66号ピット、73号ピット、78号ピット、84号ピット、84号ピット遺物出土状態、90号ピット遺物出土状態
図版７　96号ピット、96号ピット遺物出土状態、106号ピット、116号ピット、135号ピット、200号ピット、199・214・217号ピット、214号ピット出土木柱痕
図版８　224号ピット、224号ピット遺物出土状態、260号ピット、344号ピット、344号ピット遺物出土状態、溝状凹地遺構、溝状凹地遺構セクション、溝状凹地遺構北側遺物出土状態
図版９　溝状凹地遺構南側遺物出土状態、溝状凹地遺構遺物出土状態①、溝状凹地遺構遺物出土状態②、水田状遺構、水田状遺構内小ピット群確認状況、テフラ分析土壌サンプリング風景、花粉分析土壌サンプリング風景
図版10　１号竪穴建物跡出土遺物
図版11　１号竪穴建物跡・２号竪穴建物跡・１号掘立柱建物跡出土遺物
図版12　溝状遺構出土遺物
図版13　溝状遺構・ピット出土遺物
図版14　ピット・溝状凹地遺構出土遺物
図版15　溝状遺構・溝状凹地遺構・遺構外出土遺物

写　真　目　次

写真１　大坪遺跡の花粉化石……83
写真２　大坪遺跡の花粉化石……84
写真３　大坪遺跡の花粉化石……85

第Ⅰ章　位置と歴史的環境

大坪遺跡は、国道140号線（青梅街道）と県道甲府青梅線（旧甲州街道）に挟まれた甲府市桜井町字角田610番地に所在する（第１図１）。当遺跡のすぐ北側には十郎川が流れ、南側にはＪＲ中央線が走っている。当該地域は甲府盆地の北部、甲府市東部の都市郊外にあたり、葡萄畑を中心としたのどかな田園風景が残っている。

当遺跡の北側には八人山・大蔵経寺山がそびえ、その両山の間には濁川の支流である大山沢川、それに続いて十郎川が流れ、急勾配な扇状地が展開している。一方、沖積地である濁川流域は、甲府盆地でも最も低平な土地で、甲府市域においても遺跡の密集地帯である。周知のとおり甲府盆地は、釜無川や笛吹川、御勅使川、荒川等といった大河川の度重なる洪水によって複合扇状地を形成しているが、その中でも濁川流域は諸河川による洪水を逃れた数少ない地域で、こうした東からの扇状地形と西からの扇状地形の埋め残しの部分に甲府市東部地域はあたる。

大坪遺跡周辺は、こうした地域でも特に洪水の影響を受けなかった地域で、旧笛吹川の支流が形成した扇状地帯のほぼ末端に位置し、旧笛吹川によって堰き止められ、湿地化が進んだ土地である。

以上のような地形環境をもつ甲府市東部地域は、歴史的にも優れた環境をもっている。大坪遺跡の所在する周辺地域の横根、和戸、川田、桜井地域を中心とした遺跡の分布状況を見ると、縄文時代から古代・中世・近世に至るまで実に多彩な様相を示している。特に古代の集落跡、古墳、遺物散布地は『甲府市史』によれば数多く確認されており、６世紀以降における当該土地への人間の働きかけは顕著である。現在では一見平坦に見える土地でも現地表面を一皮むけば、埋没した微高地や旧河道が数多く存在することが指摘されており、確認されている遺跡群は、こうした自然堤防状の微高地や埋没した微高地上に立地し、その数は50箇所前後を数える。

縄文時代の遺跡は、大蔵経寺山および八人山の山裾に広がる扇状地帯を中心に分布し、地蔵堂遺跡（桜井町）等が知られる。

弥生時代では、上土器遺跡（第１図４）で後期の土器片の散布が見られる程度であまり顕著ではない。しかし、土器片が散布することは周辺に集落跡が存在することも十分予測でき、その可能性も高いといえるだろう。

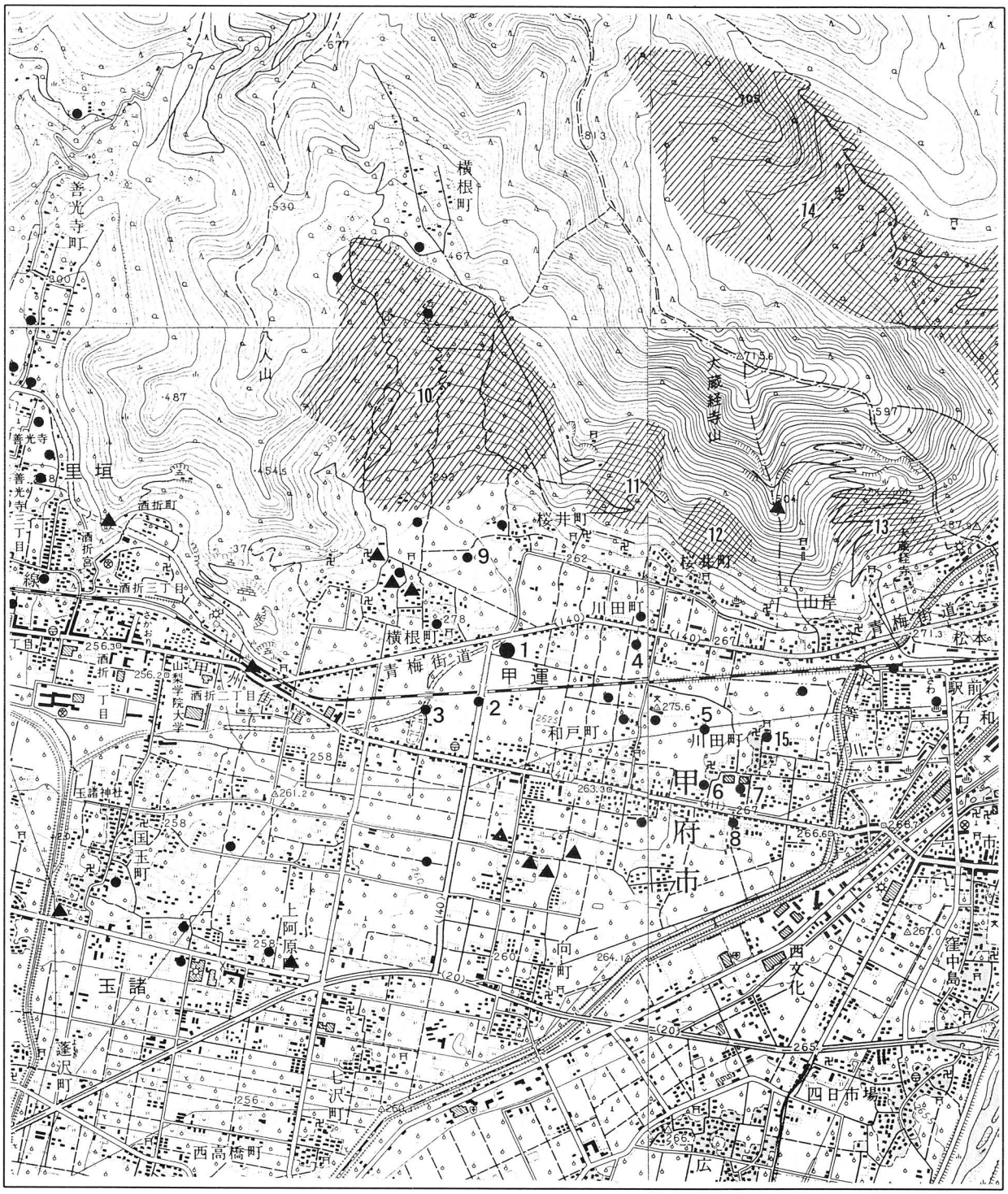
古墳時代になると、先述したとおり遺跡数は格段に増加する。集落跡では、桜井畑遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地区（第１図６・７）で、古墳時代の集落跡と方形低墳墓が検出されている。遺跡の立地と微地形との関係をみると、微高地上が居住域で微高地の縁辺部が墓域となっている。同遺跡のすぐ南側に位置する外中代遺跡（第１図８）でも古墳時代の竪穴住居跡が検出されている。

墳丘墓では、沖積地において前期古墳と考えられている琵琶塚古墳（和戸町）、太神さん古墳（和戸町）、少し離れて藤塚古墳（上阿原町）が知られるが、現在では墳丘等は残存していない。特に琵琶塚古墳は『甲斐国志』等で前方後円墳とされているものの、確実性を欠き積極的な評価は難しい。

５～６世紀を境に積石塚古墳群が横根・桜井地域に展開する。積石塚古墳群は他に甲府盆地の北縁の山腹にみられ、横根・桜井地域の西方では、甲府市山宮町羽黒天狗山宮町から武田氏の本拠地、府中防衛の一翼を担った湯村山城がある湯村山にかかる地域、東方では、石和町・春日居町の大蔵経寺山山麓に広く分布し、横根・桜井積石塚古墳群だけでもその総数は140基以上を数える。興味深いことに、同じ地域に存在する横根山田古墳、横根村内１号墳等の土盛りの古墳と積石塚古墳群とは、その立地において明確に区別されることである。これが被葬者の集団出自の違いを示すものなのかどうかは判明していない。

これに関連して積石塚古墳群の出現した背景については諸説があり、周辺山地の地質構造が、鮮新世の水ヶ森火山岩が分布する地域であることから、地質的な環境にその要因を求める説や、古墳の築造構造の特徴から朝鮮半島からの渡来人が関わったとする大陸墓説等があり、被葬者やその性格をめぐっては今後のデータの蓄積に期待がかかる。

古墳以外に地域勢力を象徴するものとして見逃せないのは、分布図には示すことができなかったが春日居町に所在する法起寺式伽藍配置をもつ寺本廃寺（白鳳期）と、その瓦を供給したとされる川田瓦窯跡（第１図５）であろう。さらに近年の発掘調査で、白鳳期の小金銅仏像が出土した東畑遺跡（第１図９）は注目される。当該期におい



1．大坪遺跡（平成６年度調査地点）　2．大坪遺跡（昭和50年度調査地点）　3．大坪遺跡（昭和57年度調査地点）
4．上土器遺跡　5．川田瓦窯跡　6．桜井畑遺跡（A・C地区）　7．桜井畑遺跡（B地区）　8．外中代遺跡
9．東畑遺跡B地点　10．横根古墳群　11・12．桜井古墳群　13．大蔵経寺山古墳群　14．春日居古墳群
15．川田館跡

※●印は奈良・平安時代、▲印は古墳および古墳時代遺跡を示す。

0　1：25,000　2km

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

て当該地域が、春日居町地域および春日居古墳群と密接な関わりがあったことは容易に推測でき、また、東畑遺跡からの小金銅仏像の出土にみられるように、同遺跡内あるいは近接して小規模な寺院が存在した可能性も強い。

古代、特に奈良・平安時代においても当該地域は、集落遺跡と生産遺跡が混在するという特異な様相をもっている。遺跡の分布域は古墳時代とほぼ変わらず、奈良・平安時代においても古墳時代から継続している遺跡が多い。発掘調査された集落遺跡の数は少ないが、先の桜井畑遺跡、外中代遺跡、東畑遺跡で当該期の集落の一部が検出されている。桜井畑遺跡では、多量の瓦群や庇付の掘立柱建物跡、「寺」と記された墨書土器等といった遺構群、遺物群が検出されており、東畑遺跡同様寺院の存在が推測できる。外中代遺跡では、甲斐型土器蓋の内面に暗文で花や鳥を描いた絵画土器が出土している。

生産遺跡では、弥生時代の土器散布地でもある上土器遺跡が、発掘調査の成果から甲斐国分寺へ瓦を供給した生産跡とされている。今回報告する大坪遺跡も、かねてから土器生産に関わる遺跡とされている他、昭和57（1982）年度調査地点からは、「甲斐国山梨郡表門」と記された刻書土器が出土し、当該地域が『和名類聚抄』記載の山梨郡表門郷の郷域であることがほぼ判明している。

また、甲府盆地にはいくつかの条里型土地割が分布する。大坪遺跡は、濁川左岸流域を中心に展開する条里型土地割のほぼ東端部分に辛うじてかかっている。甲府盆地に展開する条里型土地割の施行年代については諸説があるものの、考古学的データについては皆無に等しい。その詳細については発掘調査の成果を待たねばならないが、条里型土地割の施行年代、その継承の存否、変遷を探るうえでも当該地域は重要な位置を占めている。

中世の遺跡の分布域も奈良・平安時代の分布とほとんど変わりはなく、山裾から沖積地に至るまで広く分布している。当該地域で代表的な遺跡としては、武田氏の躑躅ヶ崎館の直前の居館として知られる川田館跡がある。その全容は未だ明らかではないが、遺跡とされている周辺には二宮神社や寿徳院といった社寺が鎮座し、「御所曲輪」「御厩屋敷」「女中屋敷」「舞台」等といった館に関連した地名も残っている。昭和62（1987）年に行われた発掘調査では決め手となるような遺構は検出されなかったが、出土遺物は15～16世紀代が主体となることから、館跡の存続時期とほぼ合致する。

以上、簡単に大坪遺跡周辺の遺跡群について概観してきたが、当該地域が古代甲斐国の政治・文化・手工業生産の歴史、さらに地形や植生といった自然環境の変化や土地利用の変遷を探るうえでも、極めて重要な地域であることは言うまでもない。

【参考文献】

菊島美夫・末木健・山崎金夫 『大坪－甲府市横根町反田大坪遺跡発掘調査報告書』 山梨県遺跡調査団 1976

甲府市史編さん委員会 『甲府市史 通史編 第一巻』 甲府市役所 1991

甲府市史編さん委員会 『甲府市史 資料編 第一巻 原始・古代・中世』 甲府市役所 1991

信藤祐仁 『大坪遺跡－十郎川河川改修工事に伴う発掘調査報告書－』 甲府市教育委員会 1984

田代 孝・櫛原功一・宮澤公雄 「上土器遺跡発掘調査報告」『甲府市史研究』第６号 甲府市史編さん委員会 1988

田代 孝・櫛原功一 「甲府市川田館跡調査報告」『甲府市史研究』第５号 甲府市史編さん委員会 1988

中山誠二 『桜井畑遺跡Ａ・Ｃ地区』 山梨県教育委員会・山梨県商工労働部 1990

山梨県考古学協会 「甲府市東部地区の歴史を考える」『山梨考古』第54号 1995

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

大坪遺跡は、昭和50（1975）年３月初め、旧国鉄中央線沿いに新設された国道140号線改良工事現場において多量の土師器が出土したことによって発見された遺跡である。当時、県教育委員会ではこうした事態をうけ、早急に対応策を講じ、故井出佐重氏を調査団長とする山梨県遺跡調査団を組織し、同年５月に道路敷内の中央線南・北両地点と十郎橋改良工事地点の発掘調査を実施した。当発掘調査の成果としては、十郎橋改良工事地点で炉穴状ピットが検出され、中央線北および南地点では土師器集積遺構や溝状遺構、性格不明焼土範囲等が検出されている。そしてそれらとともに多量の生焼成土師器群が出土したことから、当遺跡は土師器生産遺跡として注目をされるようになり、また、この発掘調査以降、周辺約10万㎡に及ぶ広範囲を「大坪遺跡」とし、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録している。

昭和57（1982）年10月には、十郎川河川改修工事を目的とした中央自動車教習所改修工事現場（以下、教習所地点とよぶ）において、多量の土師器が出土しているのが、民間の歴史団体「古代の山梨を知る会」のメンバーによって確認された。この知らせをうけた山梨県教育委員会と甲府市教育委員会は、状況を把握するため現地へ直行し、その後の対応について協議に入った。教習所地点の発掘調査は、山梨県教育委員会および甲府市教育委員会の迅速な対応によって、同年11月５日～12日にかけて行われ、さらに教習所地点に近接する濁川河川改修工事現場（以下、旧河床地点とよぶ）でも多量の土師器が散乱していたことから、同地点の調査もあわせて行われた。調査区の残存および立地条件等から、調査は土層の堆積状況の把握と遺物の分布状況を記録化する作業を中心に行われ、途中豪雨による調査区の流失というアクシデントに見舞われながらも、同年12月６日に全ての発掘を終了している。

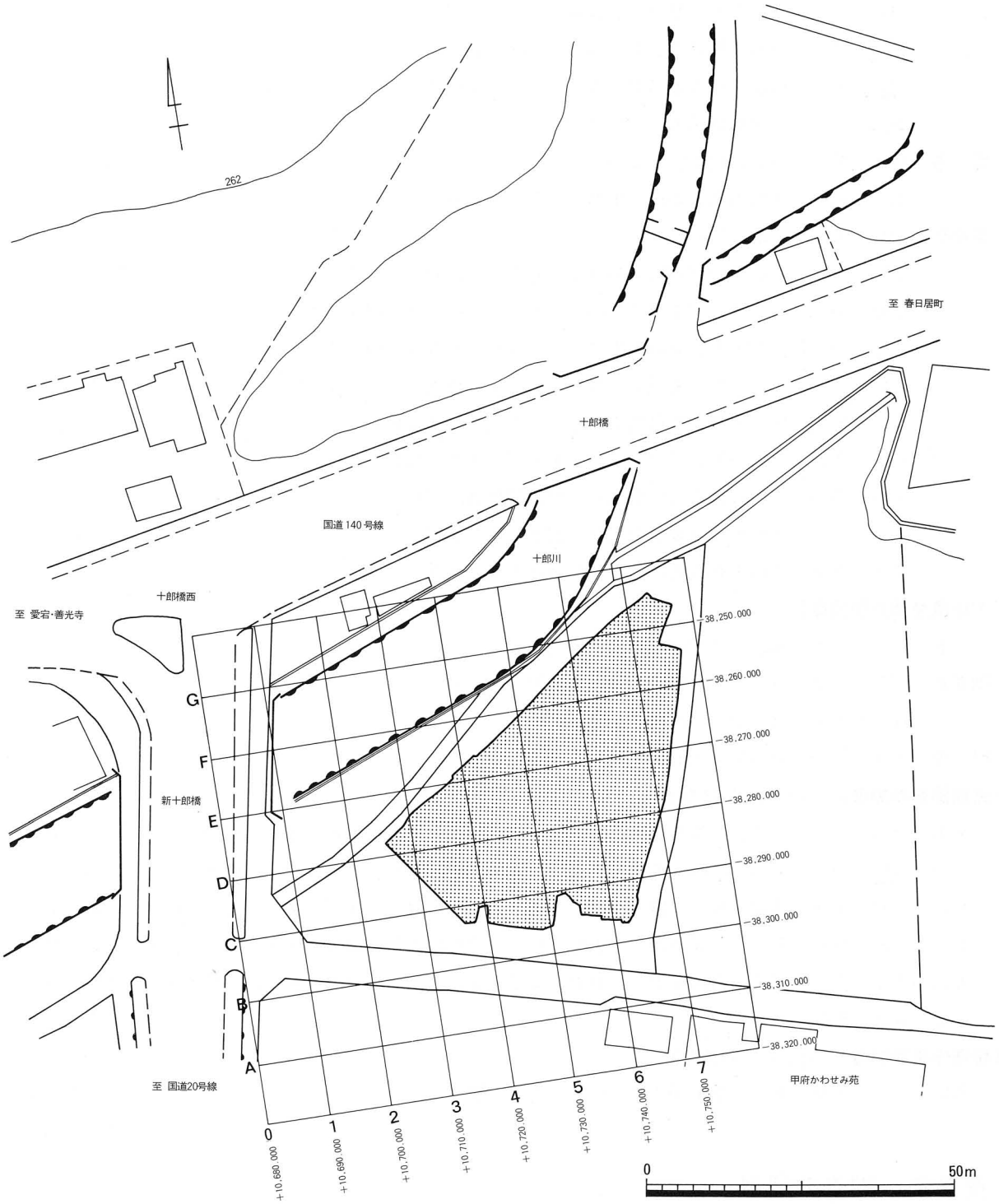
この発掘調査の成果としては、前回昭和50年度の調査と同様に、明確な遺構が確認されなかったものの、夥しい量にのぼる土師器の他に、木製品や動植物遺存体等の日常生活に関わる遺物が多く検出されたことがあげられる。なかでも教習所地点より出土した「甲斐国山梨郡表門」という国郡郷名が記された土師器皿の刻書土器は、遺称研究によって推定されてきた表門郷の郷域が、当遺跡周辺地域であることを裏付ける貴重な資料となった。

以上が大坪遺跡における既往の発掘調査概略である。

大坪遺跡周辺地域は、近年都市化が進行し、道路網の整備や公共・民間諸施設の建設から一般住宅建設にいたる大小様々な開発の波にさらされている。今回の発掘調査は、大坪遺跡として登録されている範囲内の甲府市桜井町字角田610番地内に、「ケアハウス　グレープハウス」の建設計画が示されたことが発端である。当調査区は、農道を挟んだ南側の土地に老人保健施設「甲府かわせみ苑」が建設される際に、甲府市教育委員会によりあわせて試掘調査が行われている（平成４〔1992〕年７月）。その結果、当調査区では古墳時代から平安時代にわたる土師器片等の遺物が多数出土し、竪穴建物跡に伴うと思われる焼土、溝状遺構と思われる落ち込みが、数箇所のテストピットにおいて確認された。これらの成果から甲府市教育委員会は、本格的な整備を伴う駐車場および施設を建設する場合には、文化財保護法第57条の２および第98条の２に基づき、発掘調査を実施するように開発主体者側に対し指導していた。その後、先述した新たな施設の建設計画が具体的となり、本調査を実施する運びとなった。

発掘調査は、平成６（1994）年７月12日に調査委託者である社会福祉法人緑樹会と調査受託者である甲府市遺跡調査会が業務委託契約を締結し、同年７月18日から現地での調査を開始することとなった。

なお、本遺跡については、遺跡調査会内に大坪遺跡調査団（代表　谷口一夫）を編成し、発掘調査・遺物整理・調査報告書編集を行うこととなった。



第２図　調査区位置図およびグリッド配置図　〔1：1,000〕

【調査体制】

〔甲府市遺跡調査会組織〕（平成６〔1994〕年７月12日現在）

会　長　金丸　　晃　甲府市教育委員会　教育長

副会長　田中彦次郎　甲府市教育委員会　生涯学習部長

理　事　磯貝　正義　山梨大学名誉教授

斉藤　典男　甲府市文化財調査審議会　会長

保坂　康夫　山梨県教育庁学術文化課副主査文化財主事

小沢　圭四　甲府市建設部管理課長

河西　益人　甲府市都市整備部管理課長
井上　阡彦　甲府市教育委員会生涯学習部管理課長
山村　昭二　甲府市教育委員会生涯学習部文化芸術課長
中島　真人　社会福祉法人　緑樹会　理事長

監　事　種田　源夫　甲府市代表監査委員
岡　　國昭　甲府市教育委員会生涯学習部専門主幹

事務局　山村　昭二　（前　出）
数野　雅彦　甲府市教育委員会生涯学習部文化芸術課文化財係長
信藤　祐仁　甲府市教育委員会生涯学習部文化芸術課文化財主事
伊藤　正幸　甲府市教育委員会生涯学習部文化芸術課文化財主事
平塚　洋一　甲府市教育委員会生涯学習部文化芸術課文化財主事
兒玉　好美　甲府市教育委員会生涯学習部文化芸術課文化財主事
古屋　久昭　甲府市教育委員会生涯学習部管理課庶務係長
上野　英男　甲府市教育委員会生涯学習部管理課庶務係
上田　亜紀　甲府市教育委員会生涯学習部文化芸術課
秋山ゆき子　甲府市教育委員会生涯学習部文化芸術課

〔大坪遺跡調査団組織〕

代　表　谷口　一夫　㈶山梨文化財研究所　所長
調査員　平野　　修　㈶山梨文化財研究所　考古第３研究室長
森原智恵子　㈶山梨文化財研究所　研究助手
経　理　五味　芳子　㈶山梨文化財研究所　事務主任

〔発掘調査参加者〕（順不同、敬称略）

宮川　昌蔵、伊藤　　博、三枝袈裟男、小沢菊太郎、秋山　幹夫、笹野　敏夫、堀内　博雄、中村　和雄、那須　栄樹、奥山　慎二、進藤　英樹、石澤　　玲、輿石　智也、北嶋　宏一、佐野　淳一、有賀　　健、有賀　　功、五味　武訓、柳　　博美、徳光美保子、山口　昇一、浅利　節子、小宮山博彦、佐藤　忠夫、石川　　誠、綱島　勝利、吉原　恒夫、吉原　裕子、宇野富貴子、深沢　久子、戸沢千代子、相良三枝子、丸山つぎ子、田口美智子、白沢多恵子、有賀　文子、雨宮日出子、白須真佐子、三枝多恵子、斉藤　春美、矢房　静江、竜沢みち子

〔整理作業参加者〕（順不同、敬称略）

名取もと子、矢房　静江、栗田かず子、雨宮　寛美、樋口三左生、矢房さつき、広瀬　陽子、藤井多恵子

第２節　調査の経過

発掘調査は、社会福祉法人緑樹会と甲府市遺跡調査会との事前協議によって、施設建設予定敷地内全面の調査は行わず、基本的に掘削を伴う建物部分を中心に調査を実施することとなった。調査対象面積2,474㎡のうち、調査実施面積は1,430㎡となっている。

以下、調査の経過を記す。

平成６（1994）年

７月18日㈪　器材搬入。表土除去前に調査区内の土層堆積状況の把握のため、東西・南北方向に計３本のトレンチを設定しバックフォーにて掘削。

７月19日㈫　昨日夕刻に降った豪雨のためトレンチ内は冠水。

ポンプにて排水の後、断面精査を行うが、ぬかるみ状態で困難を極める。

7月20日(水)　バックフォーによる表土除去開始。本日より作業員を動員し遺構面の検出を行うが、粘質土のため作業は思うように進捗せず。

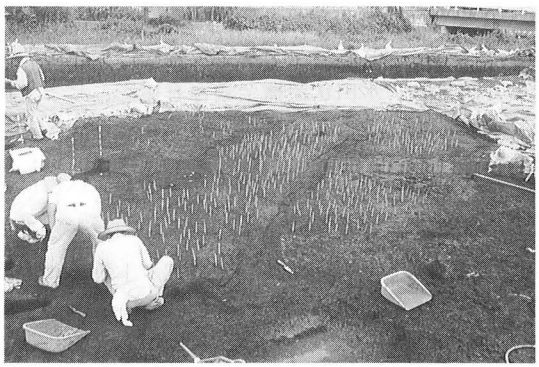
7月21日(木)　表土除去作業継続。ピット状の黒色土の落ち込みを数箇所で確認。激しい雷雨のため調査の中断を迫られる。

7月22日(金)　表土除去に伴う排土の搬出がうまくいかず、作業が滞る。また重機オペレーターに対する指示のミスで、部分的に平安時代の包含層を掘りすぎてしまう。

7月26日(火)　表土除去作業継続。排土の搬出も順調に行えるようになる。トレンチ内断面精査。地表下約1.6mの深さにてＡＴ層を確認。

7月27日(水)　表土除去作業継続。調査区中央部分平面精査。東西にのびる溝状遺構やピット等を確認。測量委託業者による基準点測量の実施。

7月28日(木)　表土除去作業継続。調査区東側を中心に平面精査。現代のゴミ穴等、撹乱坑が多い。土師器が集積した状態で数カ所から出土。何かの遺構に伴うものかどうかは不明。晴天が続き確認面の乾燥が著しくなり、遺構確認が困難。



7月29日(金)　本日にて表土除去作業終了。調査区西側を中心に平面精査。ピット等数基確認。高橋　学（立命館大学）・外山秀一（皇學館大学）両氏により、遺跡内の地形環境等の観察をお願いする(30日(土)まで)。

8月２日(火)　甲府市で気象庁観測初39.7℃の最高気温を記録。作業員を本日より増員し調査に臨む。調査区西側を中心に平面精査。測量委託業者によるグリッド杭（10mメッシュ）の設定。

8月３日(水)　調査区西側を中心に平面精査。本日より排土除去の円滑化を図るためベルトコンベアーを導入。各グリッドに名称を付す。

8月９日(火)　Ｄ－５、Ｄ－６、Ｅ－５、Ｅ－６、Ｆ－６グリッドを中心に平面精査。土師器片は多量に出土するものの、遺構は判然としない。酷暑のため乾燥がさらにひどくなり、遺構確認はますます困難となる。

8月10日(水)　Ｄ－６、Ｅ－５、Ｅ－６、Ｆ－６、Ｇ－６グリッドを中心に平面精査。Ｄ－６グリッド内にて土師器や瓦片等が集中して出土。竪穴建物跡の可能性が高い。また、Ｅ－６グリッド内でも土師器坏が５～６枚重なった状態で出土。

8月11日(木)　Ｃ－６、Ｄ－５、Ｄ－６、Ｅ－６グリッドを中心に平面精査。昨日のＤ－６グリッド内の土師器、瓦片等の集中箇所は長方形の平面プランが確認できたため、竪穴建物跡と判断する（１号竪穴建物跡と命名）。

8月17日(水)　Ｂ－５、Ｂ－６グリッドを中心に平面精査および東西トレンチ北壁断面精査。テフラ分析のための土壌サンプリングの実施。

8月18日(木)　Ｂ－５、Ｂ－６グリッドを中心に平面精査および東西トレンチ北壁断面精査。土層堆積状態を検討。

8月22日(月)　Ｅ－５グリッドを中心に平面精査および東西トレ

ンチ北壁断面精査。同トレンチ西側部分の写真撮影と断面図の作成。

8月23日(火)　Ｅ－５グリッドを中心に平面精査およびＢ－４、Ｃ－４グリッド内ピット群の調査開始（以下、グリッド名は省く）。東西トレンチ北壁断面中央部分から東側部分の写真撮影と断面図の作成。

8月29日(月)　ピット群および溝状遺構の調査の継続。完掘したものから平板測量にて実測を開始する。

8月30日(火)　ピット群および溝状遺構の調査の継続。花粉分析のための土壌サンプリングの実施。

8月31日(水)　ピット群および溝状遺構の調査の継続。１号溝状遺構完掘

9月５日(月)　昨日の雨でまたも調査区内冠水し、泥沼状態と化す。

9月８日(木)　ピット群および溝状遺構の調査の継続。水田状遺構の調査開始。

9月12日(月)　ピット群および溝状遺構の調査の継続。１号竪穴建物跡の調査開始。

9月16日(金)　ピット群および溝状遺構、竪穴建物跡の調査の継続。秋雨前線の停滞により、終日雨が断続的に降り、思うように調査が進まない。

9月19日(月)　ピット群および溝状遺構、竪穴建物跡の調査の継続。溝状凹地遺構調査開始。

9月20日(火)　ピット群および溝状遺構、竪穴建物跡、溝状凹地遺構の調査の継続。６号溝状遺構完掘。

9月22日(木)　ピット群および溝状遺構、竪穴建物跡、溝状凹地遺構の調査の継続。Ｂ－４、Ｃ－４グリッド等を中心とする調査区西側遺構群の清掃と同部分の全景写真撮影。

9月26日(月)　水田状遺構全景写真撮影、ピット群および溝状遺構、竪穴建物跡、溝状凹地遺構の調査の継続。

9月29日(木)　ピット群調査継続。新たに竪穴建物跡を平面確認。２号竪穴建物跡と命名。

9月30日(金)　台風26号に伴う大雨で調査区内はまたも冠水。遺構の掘り下げは行えず、平板測量のみ行う。

10月３日(月)　２号竪穴建物跡調査開始。ピット群および溝状凹地遺構の調査継続。

10月12日(火)　竪穴建物跡およびピット群の調査継続。遺跡内全体清掃。

10月13日(水)　竪穴建物跡およびピット群の調査継続。写真測量のためラジコンヘリコプターによる遺跡全体写真撮影。

10月14日(木)　出土遺物と発掘機材等を撤収。本日をもって調査を全て終了する。

第３図　大坪遺跡全体図〔1：200〕

第Ⅲ章　調査の方法

今回の発掘調査では、調査対象予定地内の建造物の建設箇所のみを限定して調査を行った。調査実施面積は1,430㎡で、現況は畑である。調査対象予定地と調査区をカバーするように国家座標第Ⅷ系を用い10mメッシュを基本とするグリッドを設定し、X軸方向に0・A・B・C・D・E・F・G、Y軸方向に0・1・2・3・4・5・6・7とし、両者をあわせてグリッドの名称とした(第3図)。X軸方向は真北を指し、当遺跡の原点の座標はX＝－38,320,000、Y＝＋10,680,000である。水準点は調査区北端にベンチマークを委託設置した。

発掘調査は、まず最初に遺跡内の基本的な層位の堆積状態を把握するために、東西・南北方向に断面観察用のトレンチを任意に調査予定区内に設定した。次いで遺構の存在する層位を確認した後、調査予定区を重機によって表土の除去作業を行った。その後、人力でジョレン等によって遺構確認につとめた。遺構番号やその名称については、確認および調査にかかった段階で随時遺構番号を付けていった。

遺構の調査にあたっては、竪穴建物跡・その他遺構群いずれにおいても、基本的にプラン確認の後、土層および重複関係、床面、坑底等の確認のため十文字にベルトを設定し（ピットは半截のみ)、さらにそれに沿ってサブトレンチを設定して掘り下げ、それらを確認の後、全体を掘り下げた。土層観察用ベルトは土層図作成の後、写真撮影をして取り除いた。

遺構内の遺物は極力出土した原位置を保つように掘り進めたが、やむを得ずその原位置を保てなかった遺物に関しては、その遺構の一括遺物として取り上げた。竈やその他の建物附属施設においても同様な手順で進めた。

原則的に出土した原位置を保っている遺構内外の遺物の取り上げに関しては、必要に応じてスケール1/10の出土微細図や1/20の遺物分布図を作成し、記録写真撮影の後、迅速かつ正確を期すため、テクノシステム株式会社開発の遺跡調査システム「ＳＩＴＥⅡ」を使用し、光波測量機とハンドヘルドコンピュータを用い各遺物の座標および標高を記録して取り上げている。遺構外の遺物に関しても遺構内同様、出土した原位置を保っているものは先の「ＳＩＴＥⅡ」システムで取り上げ、その他のものについては各グリッド一括遺物として取り上げている。

各遺構の測量は、平板測量を基本とし、一部先の「ＳＩＴＥⅡ」システムを用いて補完測量を行っている。遺跡全体図（1/100）の作成については、株式会社シン技術コンサルに委託し、ラジコンヘリコプターを使用した写真測量も行った。

その他、今回の調査では自然環境や植生の変化を探るために花粉分析（一部参考程度にプラント・オパール分析も実施）とテフラ分析を下記の諸機関・諸氏に委託して実施した。両分析の土壌サンプルの採取については、層序確認用の東西トレンチの断面において行っており、その採取場所の選定については、発掘担当者と各分析者との協議のうえで決定した。

◇花粉分析　　㈱パレオ・ラボ　鈴木　茂氏

◇テフラ分析　　㈶山梨文化財研究所　河西　学氏

以上の分析成果については、後章にて詳述する。

また、微地形・土地利用の変遷といった地形環境の分析は、特に委託調査を実施していないが、当分野の研究に詳しい立命館大学助教授の高橋　学氏と皇學館大学助教授の外山秀一氏には、ご無理をいって現場を視察していただき、その際に数多くのご教示、ご助言をいただいた。

第Ⅳ章　基本層序

大坪遺跡は、第Ⅰ章でも述べたように、旧笛吹川の支流が形成した扇状地帯の末端に位置する当遺跡の微地形は、ちょうど調査対象区域の中央部分をおよそ20mの幅で埋没旧河道が南北方向に貫いており、その東西両側に埋没微高地が展開するものと断面観察等から推測できる。

層序に関するここでの説明は、主層位の説明にとどめ、各層位で細分される層相の説明については第４図の説明文を参照されたい。

〔第Ⅰ層〕現代の盛土および旧耕土から構成される。調査区のいたる所で下位層まで撹乱が及んでいる。昭和初期に敷設したとされる暗渠も何箇所かで認められる。

〔第Ⅱ層〕平安時代、特に９～10世紀代の遺物を含む包含層で、黒褐色砂質シルトを主体とする土壌化層。調査区のほぼ全域に認められ、概ね上下２層から構成されるが、４層に細分できる。上層は後世において部分的に削平され、層厚は一定していない。また、土器小片の混入が著しい。下層は上層に比べしまりが良く、色調はやや灰色がかる土壌化した層である。プラント・オパール分析でもイネの機動細胞が確認されているが、断面観察では明確な畦畔等の痕跡は確認できていない。

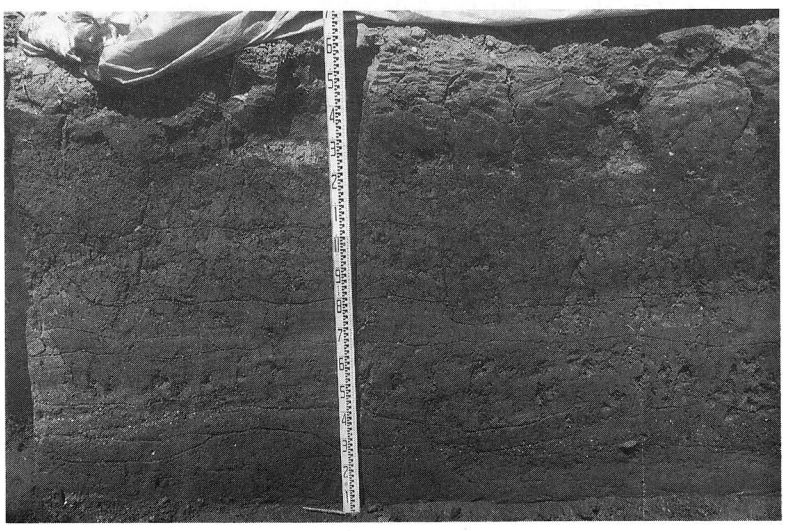
〔第Ⅲ層〕酸化鉄の集積層で、上下２層から構成される。調査区のほぼ全域で認められるが、層厚は一定しておらず、上層のみ、あるいは上層は存在するものの極めて薄い箇所が認められる。管状の斑鉄が散見される。

〔第Ⅳ層〕旧河道を埋める堆積層である。調査区内で唯一の洪水堆積物を含むシルトにより構成される。比較的大規模な洪水の後、２～３回小規模な洪水に見舞われているようである。⑮⑳㉑層等はほぼ水平方向に展開し、土壌化がある程度進んでいることから、耕作面として利用されたことも予測されたが、プラント・オパール分析でヨシが多量に検出されたことから、滞水状態をいくたびか繰り返されたものと思われる。旧河道域以外でも古墳時代後期の遺物が散見されるが、土質等からみて耕地として利用されたとは考えられない。

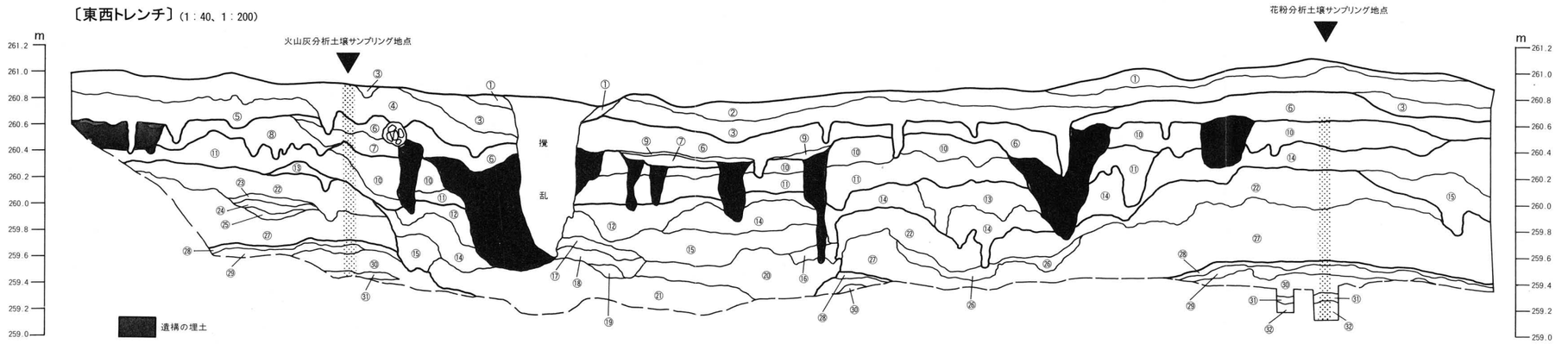
〔第Ⅴ層〕黒色腐植土、いわゆる黒泥質土を主体とする。粘質が非常に強く、植物質に富み、調査区全域で認められる。㉗層は色調によってさらに細分できそうだったが、土質等ほとんど変化がないので分層しなかった。旧河道の浸食によって、層の一部が抉りとられている他は、洪水の影響は全く受けておらず、低湿な状態での堆積が読みとれる。

〔第Ⅵ層〕シルト質の青灰色極細砂や暗褐色シルト等を主体として構成される。現表下約1.4～1.8mで、青灰色極細砂によってその上下をパックされるかたちで灰白褐色ガラス質火山灰（ＡＴ）層が認められ、層厚５～８㎝で、ほぼ水平に堆積している。その直上には灰白色シルト層が薄く堆積し、ＡＴの二次堆積が認められる。

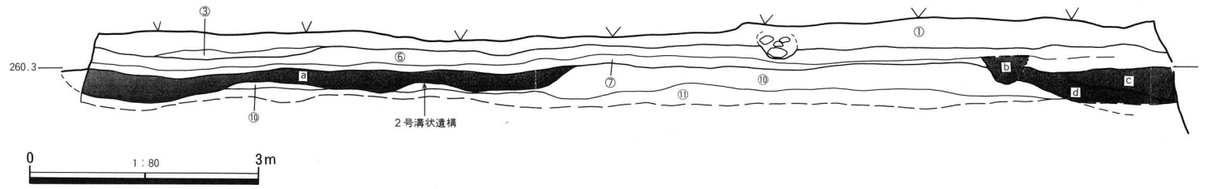
以上のように、各層は多少の微起伏をもつが、ほぼ水平に近い状態で堆積しているといえる。特に第Ⅵ層中に認められるＡＴ層は均一な層厚で、ほぼ水平に堆積している。こうした状態から、沼や池といったある程度滞水した場所へ降灰したことが推測できる。その後も大規模な洪水の影響を受けることなく、湿地の状態が長く続き植物質に富む湿地が形成され、次いで黒泥質の湿地が形成されたと思われる。しかし、時期不明ながら旧河道の浸食をうけるが、その後も洪水の影響をほとんど受けることなく低湿な状態が続いたものと思われる。平安時代に入り、微起伏の埋積が始まり、土地の平坦化が進んだと思われる。

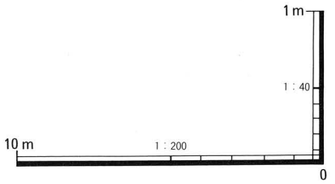


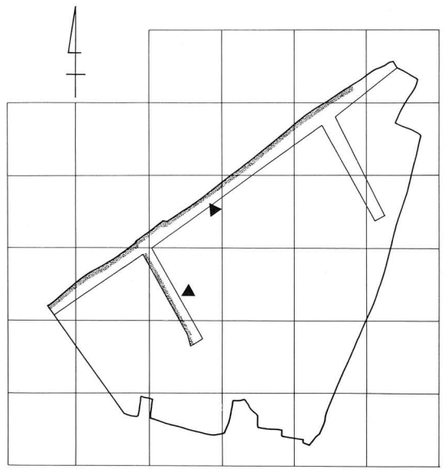
〔東西トレンチ〕(1：40、1：200)



〔南北トレンチＡ〕(1：80)







〔断面観察位置略図〕

〔東西トレンチ・南北トレンチ断面土層説明〕

第Ⅰ層
- ① 盛　土
- ② 盛　土
- ③ 盛　土
- ④ 旧耕土
- ⑤ 旧耕土

第Ⅱ層
- ⑥ 黒褐色砂質シルト　10YR2/2　小礫混じる、９～10世紀代の土器片多く含む
- ⑦ 黒褐色砂質シルト　7.5YR3/1　しまり強い、黒褐色シルトブロック含む
- ⑧ 黒褐色砂質シルト　7.5YR2/2　しまり強い
- ⑨ 褐色粗砂混じりシルト　7.5YR4/4　酸化鉄の沈着が顕著

第Ⅲ層
- ⑩ にぶい黄褐色粗砂　10YR5/3　酸化鉄の沈着が顕著、しまり強い、径３～５㎜大の小礫含む、管状斑鉄が散見される
- ⑪ にぶい黄褐色粗砂　10YR5/4　酸化鉄の沈着が顕著、しまり強い、径３～５㎜大の小礫含む

第Ⅳ層
- ⑫ 褐色粗砂混じりシルト　10YR4/6　小礫含む
- ⑬ 褐色粗砂混じりシルト　7.5YR4/3　黒色粘土小ブロック・小礫含む
- ⑭ 褐色粗砂混じりシルト　7.5YR4/4　小礫含む
- ⑮ 灰黄褐色粗砂混じりシルト　10YR4/2　小礫含む
- ⑯ にぶい黄褐色粗砂混じりシルト　10YR4/3　小礫含む
- ⑰ 灰黄褐色粗砂混じり中砂　10YR5/2
- ⑱ 灰黄褐色粗砂混じり細砂～中砂　10YR4/2
- ⑲ 灰黄褐色粗砂混じり細砂　10YR4/2
- ⑳ 黄褐色粗砂混じりシルト　10YR4/3　灰白色粘土ブロック含む
- ㉑ 灰黄褐色粗砂混じりシルト　10YR4/2　小礫含む

第Ⅴ層
- ㉒ 褐灰色粗砂混じりシルト～粘土　7.5YR4/1　粗砂・小礫・灰白色粘土ブロック含む
- ㉓ オリーブ黒色シルト～粘土　7.5Y2/2　植物根痕跡あり
- ㉔ 黒色粘土　10YR2/1　植物根痕跡あり
- ㉕ オリーブ黒色粘土　7.5Y3/1　植物根痕跡あり
- ㉖ オリーブ黒色粘土　5Y2/2　植物根痕跡あり
- ㉗ 黒色粘土　10YR1.7/1　微粒植物遺体若干含む

第Ⅵ層
- ㉘ 灰黄褐色細砂混じりシルト　10YR4/2　灰白色シルト（5Y8/1）がブロック状で混在する
- ㉙ 暗褐色細砂混じりシルト　10YR3/4
- ㉚ 青灰色シルト質極細砂　5B5/1　斑鉄が散見される、下半部にATの２次堆積が認められる
- ㉛ 灰白褐色ガラス質火山灰（AT）　7.5YR7/1　灰白色シルトが混在する
- ㉜ 青灰色極細砂　5B5/1

〔南北トレンチＡ断面図　遺構埋土土層説明〕

- a．黒褐色粘質土　10YR3/1　粗砂混じり
- b．褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロック含む
- c．黒色粘質土　7.5YR2/1　酸化鉄含む
- d．褐灰色粘質土　10YR4/1　酸化鉄含む

第４図　遺　跡　の　層　序

第Ⅴ章　検出された遺構と遺物

第１節　竪穴建物跡

今回の報告では、前章でも述べてきたとおり、当遺跡が土器生産に関わる遺跡と従来から指摘されてきていることを考慮し、寝食を伴わない工房的な竪穴が存在する可能性があると考えて、「住居」という表現ではなく、「建物」という表現を使用している。

〔１号竪穴建物跡〕（第５図）

１号竪穴建物跡は、Ｄ－６グリッド内において検出されており、その北側部分の一部は、４号溝状遺構によって切られ、西壁部分も削平等の関係ではっきりしていない。主軸方位はＮ－１°－Ｗである。

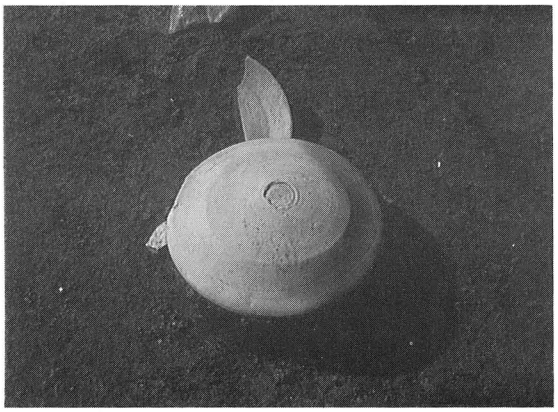
当建物跡の規模は、東西推定3.30m、南北3.82mを測り、床面積は推定9.20㎡前後を測る。平面形は隅丸長方形を呈する。床面は部分的に堅固な箇所が散在してみられるが、軟弱な部分も多い。壁の高さは、東壁部分で最大９cmを測る。壁溝は、床残存部分で確認されており、幅14～20cm、深さ４～７cmを測る。

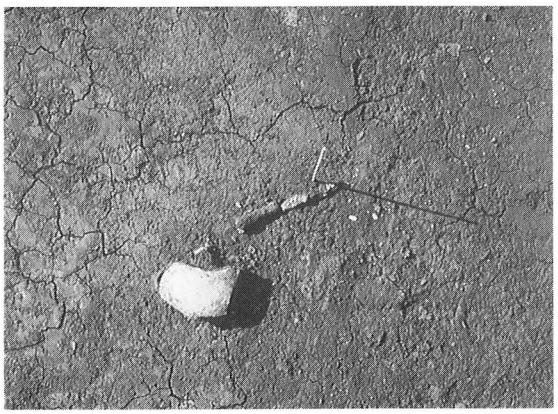
ピットは22基検出したが、柱穴と考えられるものはみられない。この中でピットＰ１は、東日本で通称「ロクロピット」とよばれている回転台の軸痕に伴うピットと考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.48m、短軸0.40mを測り、床面からの掘り込みの深さは最深部で約36cmを測る。断面形は勾配の強い擂鉢状を呈する。ただ不注意なことに土層の観察を怠ったため、断面構造が把握できなかった。そのすぐ南側には、長軸約1.0m、短軸約0.5mの範囲にわたって灰色粘土の堆積がみられる。堆積の厚さは床面上最大約６cmを測る。

竈は、北壁のやや北西コーナー寄りで検出されている。掘り方のみの検出であるため、上部構造については不明である。長軸0.82m、短軸0.77mを測り、床面からの掘り込みは最深部で17cmを測る。焼土および炭化物は、上層の灰黄褐色粘質土中において含まれる状態でみられ、それら自体の堆積はみられない。また、竈内からの遺物の出土はなかったが、竈掘り方上面から遺物が出土していることから、竈を故意に破壊している可能性もある。

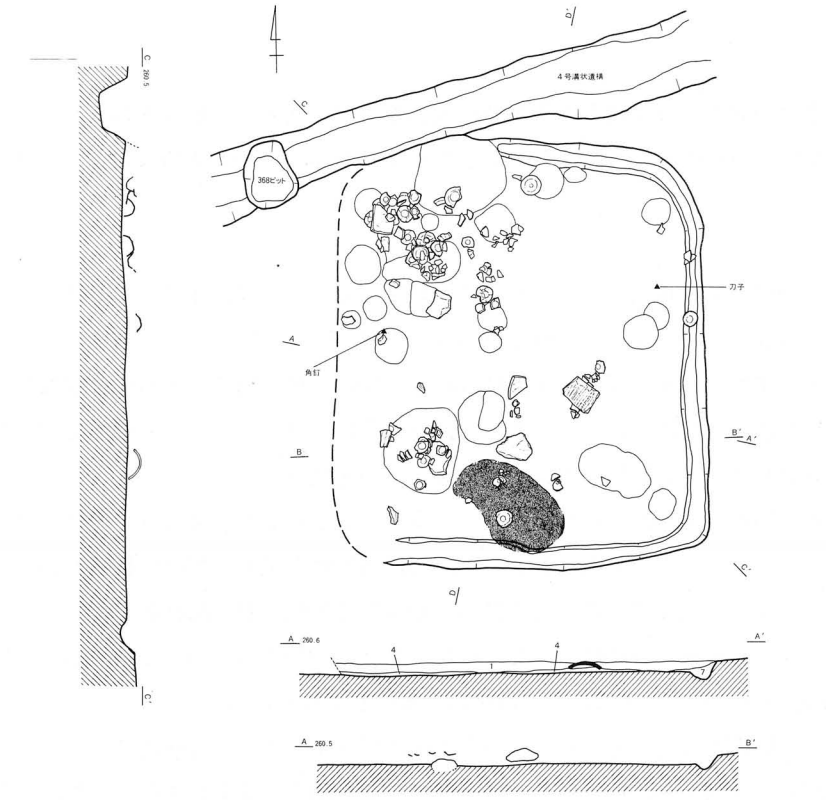
遺物は（第７～11図）、その量については非常に豊富で、竈上部および竈の前面部から特に集中して出土している他、ピットＰ２周辺部分および東壁際直下からも出土している。竈前面部の遺物群は、床面に置かれた状態で、甲斐型の坏を中心にいくつもの土器が重ねられ、瓦も混在している。他の部分では床面上から浮いた出土状態を示しているものの、土器の編年的な時間差はみられない。土器以外では釘状および刀子状鉄製品が各１点ずつ東壁北東コーナー寄り壁下の床面等から出土している。

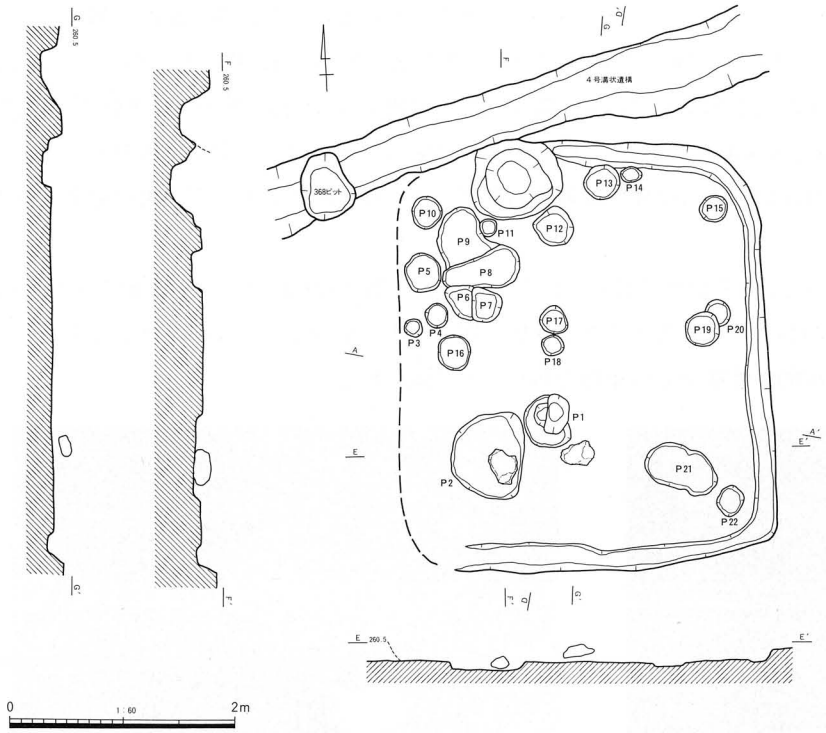
以上のような遺物の出土状態をみると、建物廃絶に伴って何らかの廃絶行為が行われたことが推測できる。また、土器は多量に出土しているのにもかかわらず、煮炊具である甕形土器等の出土がほとんどないことからすると、一般的な寝食を伴う住居ではなく、工房的な性格をもつ建物であることが窺われる。





１～48は甲斐型の坏である。体部外面は斜位の手持ちヘラ削り、底部は回転糸切りの後、周辺部を手持ちヘラ削りまたは全面をヘラ削りしている。22から40は体部内面に甲斐型土器特有の放射状暗文を施しているものである。





1．黒褐色粘質土　10YR3/1
焼土粒・炭化物含む

2．黄褐色粘質土　2.5Y5/4
焼土粒・炭化物・灰色粘土を含む混合土

3．黒褐色粘質土　10YR2/2
炭化物多く含む、灰・焼土粒含む

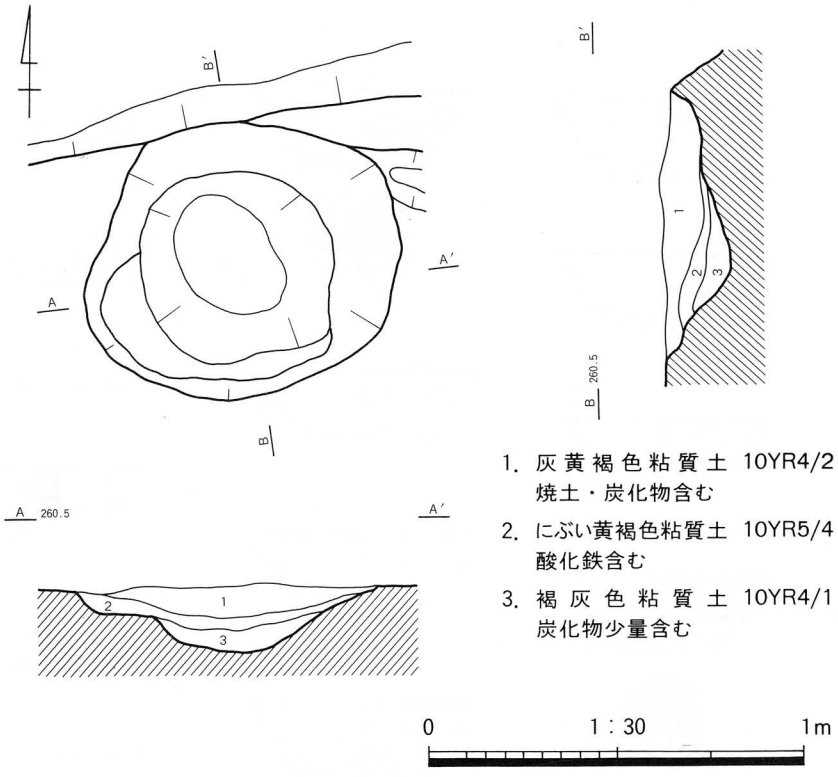
4．暗褐色粘質土　10YR3/3
黄褐色粘質土ブロック・炭化物含む

5．黒褐色粘質土　10YR3/2
焼土粒少量含む

6．黒褐色粘質土　10YR3/2
酸化鉄含む

7．黄褐色粘質土　2.5Y5/4
炭化物少量含む

40はみこみ部にも暗文がみられる。41と42は内面を黒色処理した甲斐型の黒色土器の坏で、前者には放射状暗文がみられる。43～48は削り出し高台をもつ高台坏である。49～64は皿である。体部下半部および底部は回転ヘラケズリの整形である。56～64は体部内面に同心円状の暗文を施している。65～72は甲斐型の蓋である。65と66には内面に同心円状の暗文がみられる。73～75はヘラ書および線刻土器片である。76は唯一の甕形土器片であるが、甲斐型ではなく、ロクロ整形の土師器小型甕である。77は須恵器甕片、78～84は平瓦とその破片で、凸面には長軸方向の縄目叩き、凹面には布目痕上に粗いヘラケズリを施し、側面はヘラケズリを施している。85と86は金属製品で、前者は刀子状の鉄製品と思われ、後者は途中で屈曲しているが、角釘と思われる。



第６図　１号竪穴建物跡 竈〔１：30〕

当建物跡の所属時期は、出土土器からすると９世紀半ば頃と考えられる。

〔２号竪穴建物跡〕（第12図）

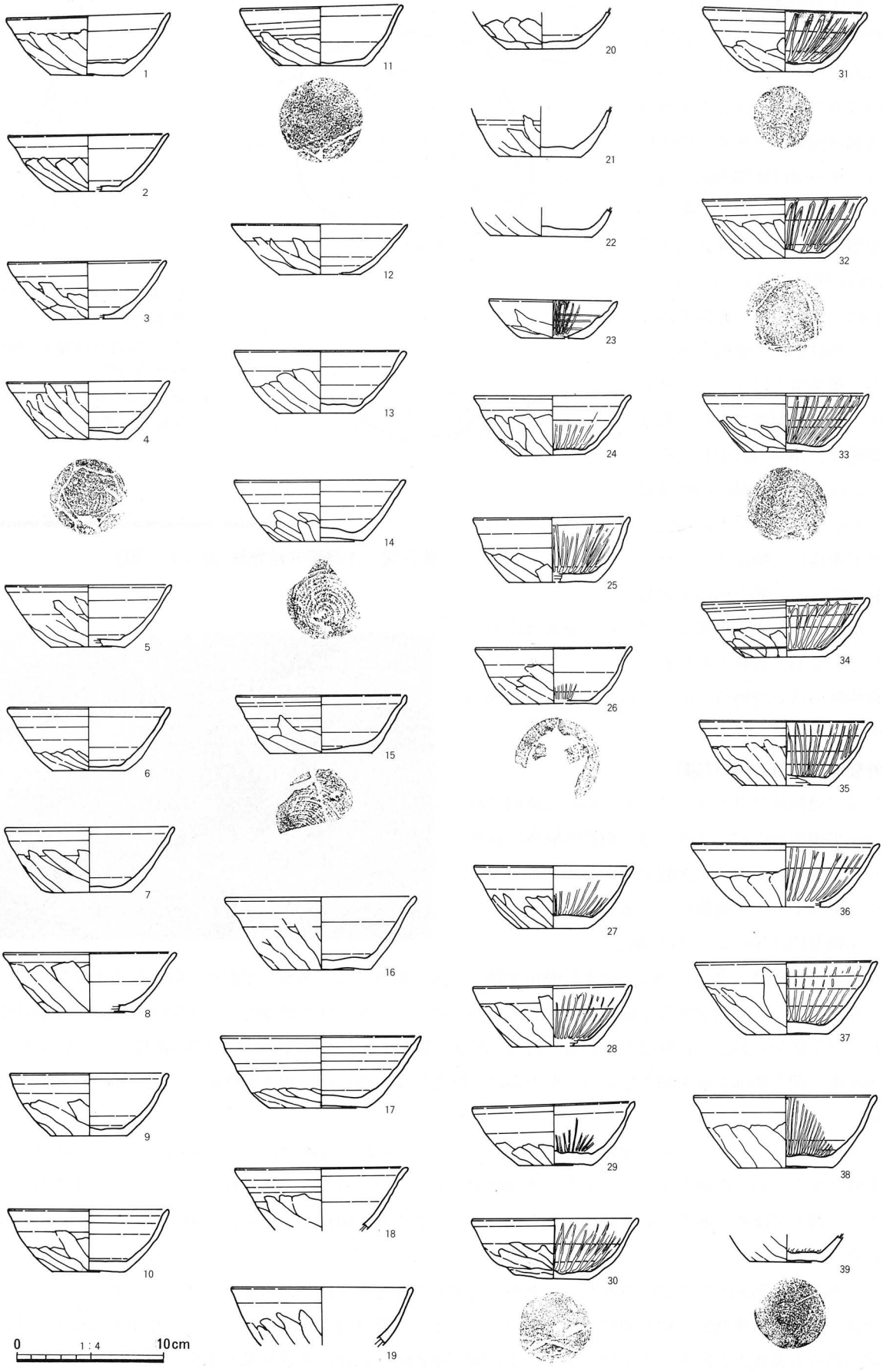
２号竪穴建物跡はＢ－６グリッドにおいて検出されており、東側部分の約1/2以上は、調査区域外に存在したり、調査開始当初に土層観察用のため掘削したテストピットによって、破壊してしまったため欠失している。主軸方位はＮ－２°－Ｗである。

当建物跡の規模は、東西3.44m、南北3.03mを測り、床面積は不明である。平面形は隅丸長方形を呈する。残存している床面は、比較的全体に堅固で確認が容易であった。壁の高さは北壁部分で最大13cmを測る。壁溝は壁が検出されている部分においては検出している。幅14～22cm、深さ５～７cmを測る。さらに壁溝内およびその付近には、径10cm前後、深さ10cm前後を測る小ピットがみられ、壁を保護するために細板を埋め込んだ痕跡か板壁の痕跡であろうか。

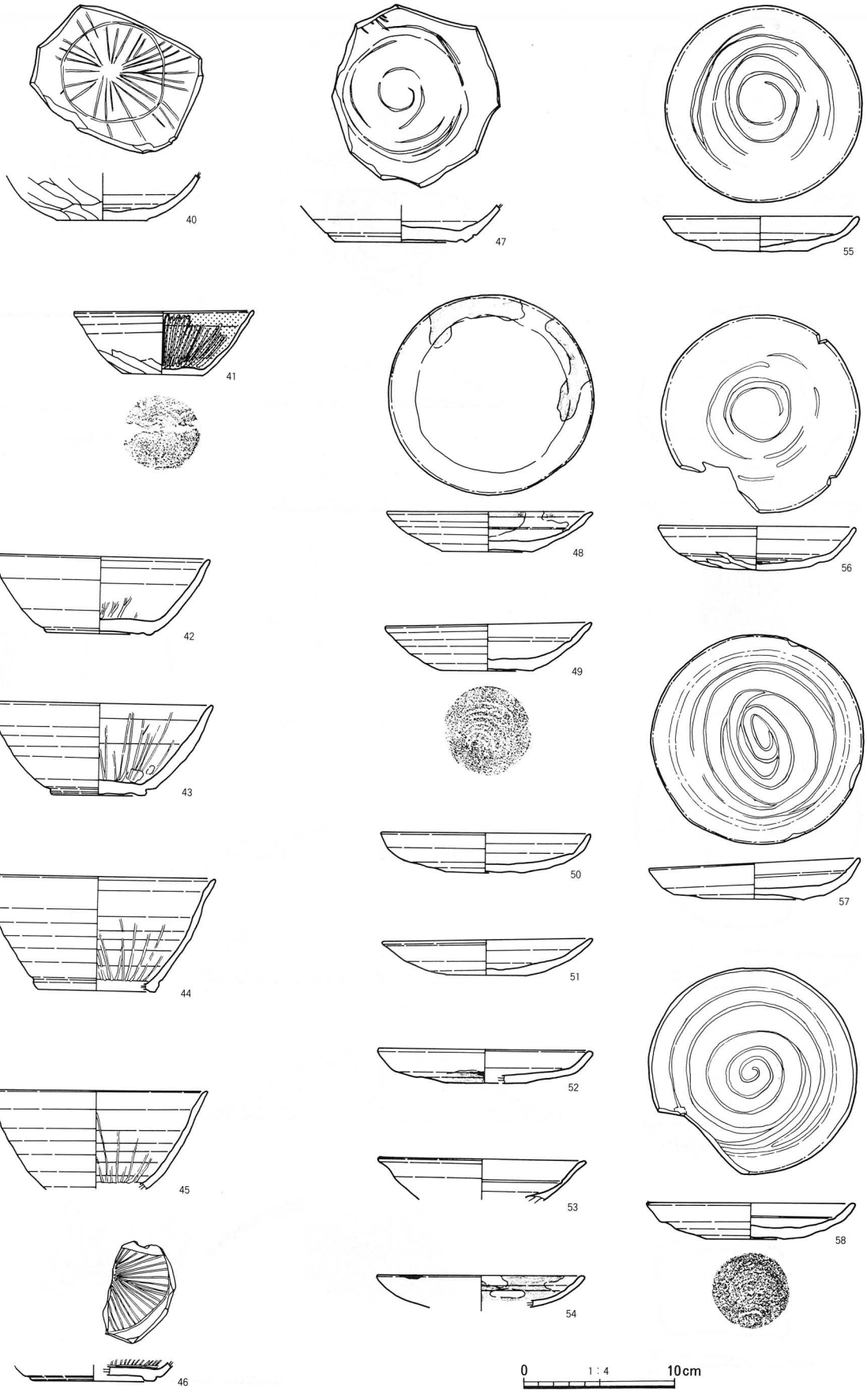
ピットは小ピットをのぞき６基検出したが、柱穴らしきピットはみられない。径30～40cm、深さ８～20cmを測り、ピットＰ３からは扁平な礫が出土している。当建物跡でもロクロピットと考えられるピットが存在するが、断定はできない。最も可能性のあるものを挙げるならば、ピットＰ１が、規模およびその断面形態等からその可能性が考えられる。

竈は、調査した範囲内では検出されなかったが、欠失した部分に存在した可能性が残っている。

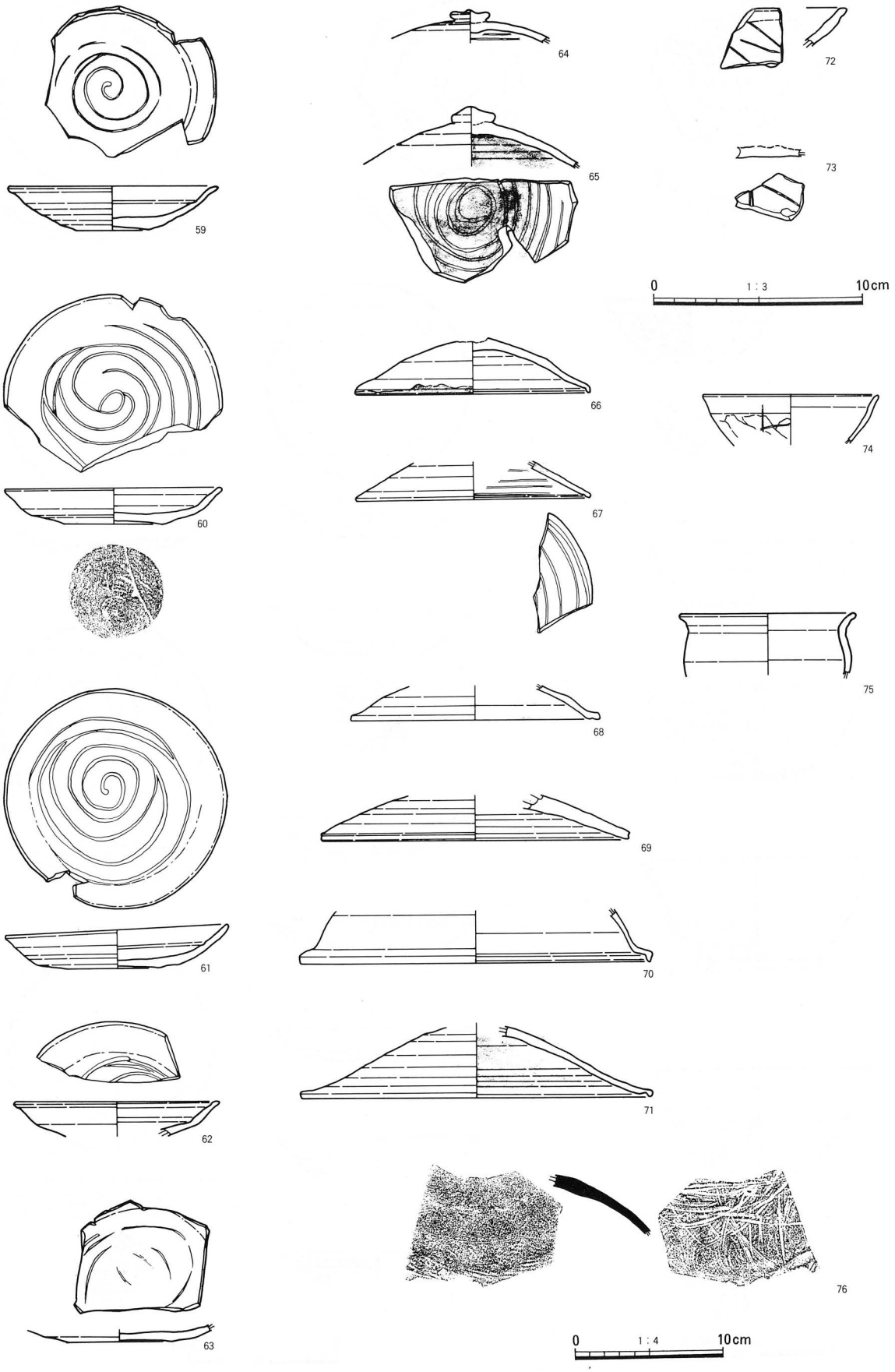
遺物は、１号竪穴建物跡とは対照的に極めて乏しい。ピットＰ２付近の床面直上から甲斐型の坏形土器片が数点と性格不明の石器数点が出土しただけである。１号竪穴建物跡と同様、煮炊具類の土器の出土はみられない。第13図１は玉縁形の口縁形態をもつ甲斐型の坏片で、暗文はみられない。２・３は甲斐型の皿、４は内面黒色の甲斐型の



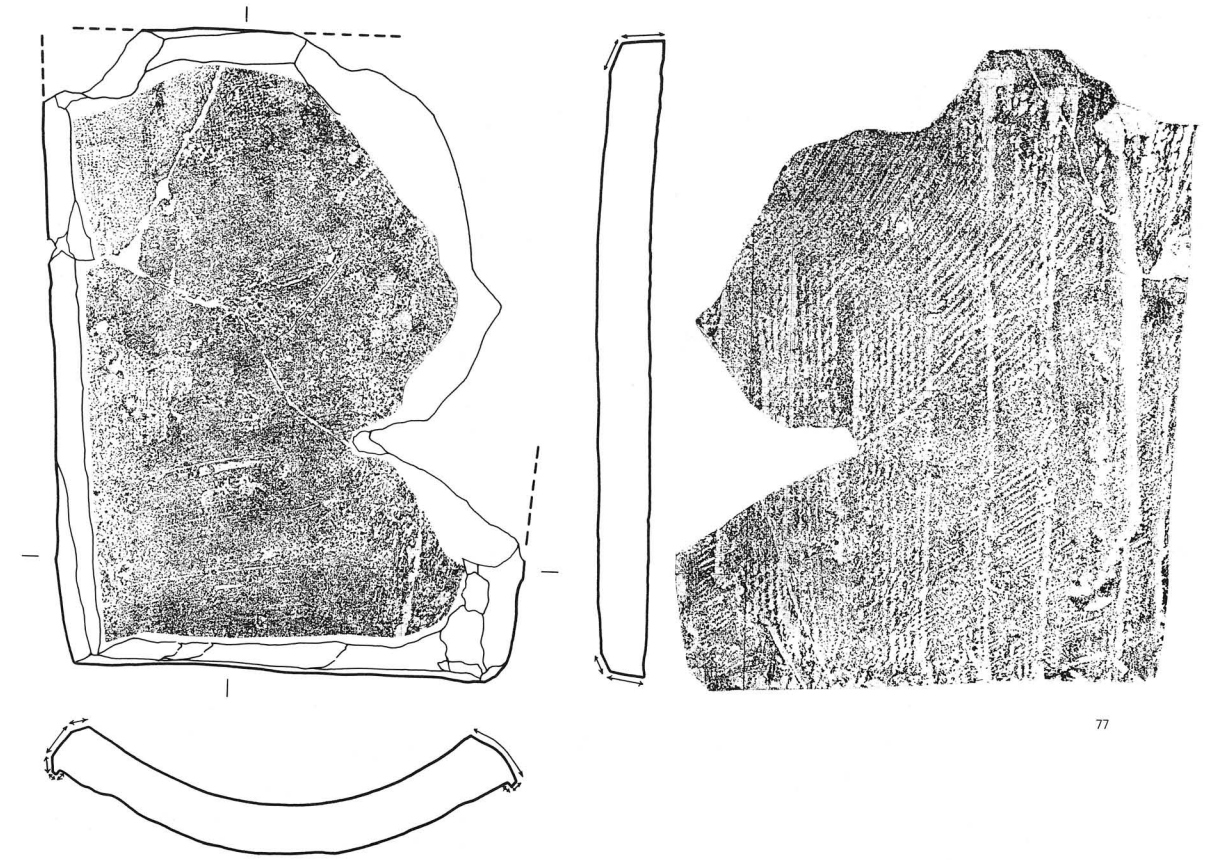
第７図　１号竪穴建物跡出土遺物①〔1：4〕

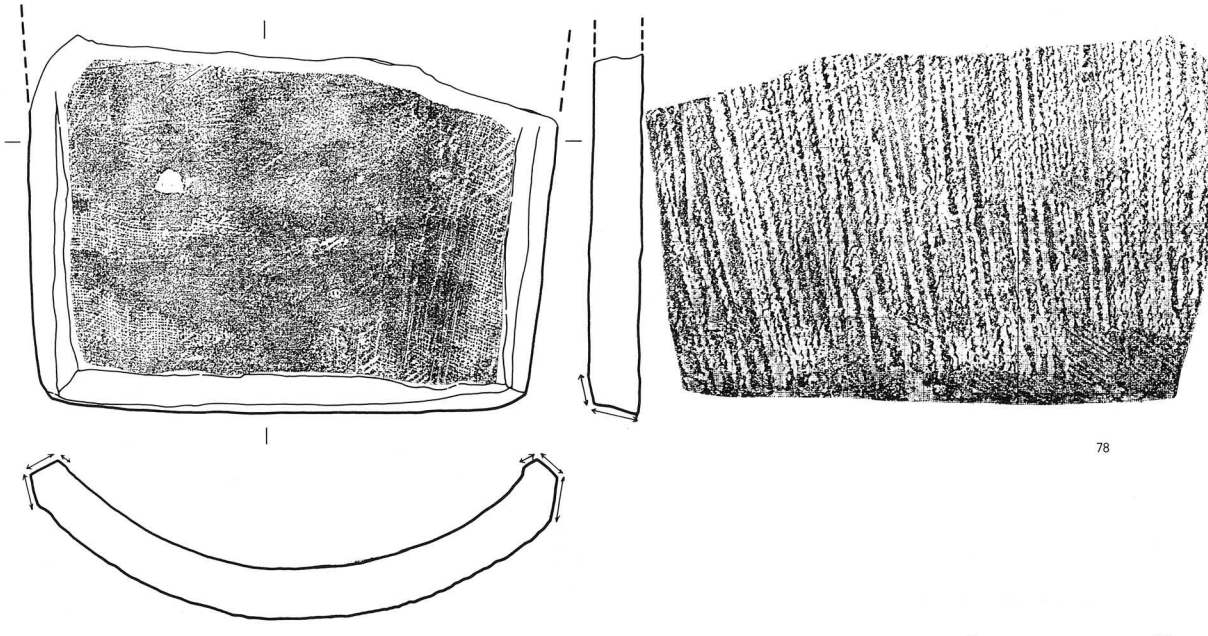


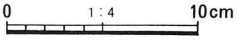
第８図　１号竪穴建物跡出土遺物②〔1：4〕



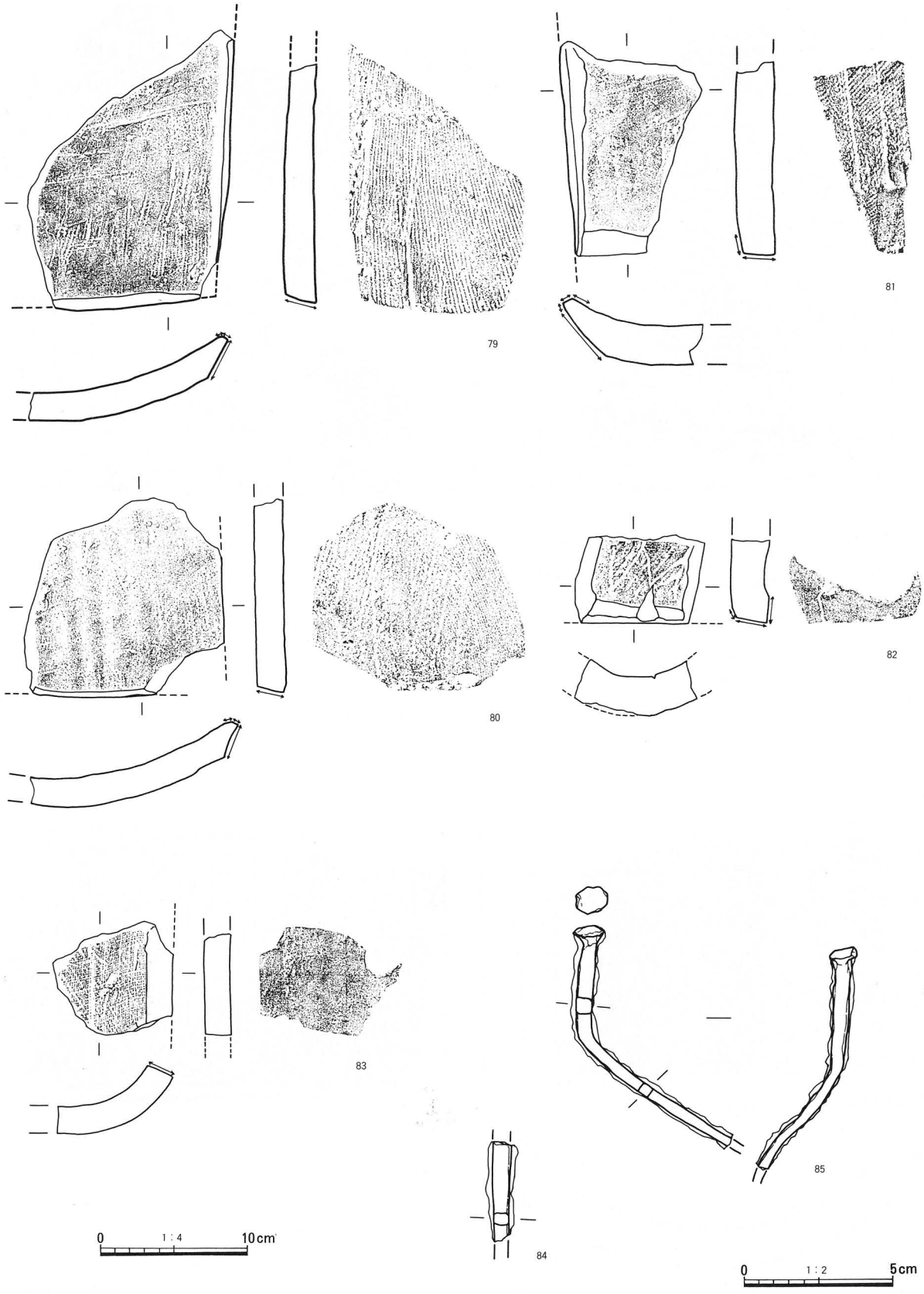
第９図　１号竪穴建物跡出土遺物③〔1：4、72･73は1：3〕







第10図　１号竪穴建物跡出土遺物④〔1：4〕



第11図　１号竪穴建物跡出土遺物⑤〔79～83は1：4、84･85は1：2〕

第１表　１号竪穴建物跡出土遺物観察表（土器）

〔法量は上から口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値を示す〕

番号	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 坏	11.3 5.0 4.1	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.44.45　一括
2	土師器 坏	(11.0) 4.5 3.9	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.72.73　反転
3	土師器 坏	(10.8) (4.8) 4.0	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.53　反転
4	土師器 坏	11.0 5.4 4.0	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.93　ほぼ完形
5	土師器 坏	(11.5) (5.0) 4.3	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.69　一括　反転
6	土師器 坏	(11.2) 4.8 4.4	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	やや軟質	No.52　一括　反転
7	土師器 坏	11.6 6.1 4.4	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.68　一括
8	土師器 坏	(11.9) (6.0) 4.2	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.16.17　反転
9	土師器 坏	(10.8) (5.2) 4.3	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.70.73.78　反転
10	土師器 坏	(10.9) (5.0) 4.3	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.100　反転
11	土師器 坏	11.0 5.9 4.1	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.66　一括
12	土師器 坏	(12.0) (5.6) 3.5	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.102　反転
13	土師器 坏	11.2 5.2 4.3	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.83
14	土師器 坏	(11.8) (6.0) 4.2	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.9　反転
15	土師器 坏	(11.6) (7.0) 4.0	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.34　一括　反転
16	土師器 坏	(13.0) 6.7 5.0	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.40.42　一括　反転
17	土師器 坏	13.8 6.7 5.0	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.97　ほぼ完形
18	土師器 坏	(11.8) — —	外面：体部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.22　反転
19	土師器 坏	(12.6) — —	外面：体部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.32　反転
20	土師器 坏	— (4.8) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.39　一括　反転
21	土師器 坏	— (5.6) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	軟質	No.61　反転 一部表面がもろくなっている
22	土師器 坏	— (7.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.28　反転
23	土師器 坏	(8.8) (4.4) 3.6	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.15　反転
24	土師器 坏	10.6 4.6 4.1	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	明褐色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.92
25	土師器 坏	(10.7) (6.0) 4.5	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.72.73　反転
26	土師器 坏	(10.6) 5.9 3.8	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.9.10　反転
27	土師器 坏	(10.9) 4.8 4.3	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.99　反転
28	土師器 坏	(10.8) (5.6) 4.2	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	明赤褐色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.20　反転
29	土師器 坏	11.1 5.0 4.2	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.100.44 ほぼ完形
30	土師器 坏	11.3 5.0 4.2	外面：体部手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ、暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.88　完形
31	土師器 坏	11.0 4.0 4.3	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文　内面黒変している	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.57.59.64 ほぼ完形
32	土師器 坏	11.0 5.4 4.2	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.71　D-6　一括 ほぼ完形
33	土師器 坏	11.2 5.7 4.0	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.89.90 ほぼ完形
34	土師器 坏	11.2 5.5 3.95	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.7　完形
35	土師器 坏	(11.8) (5.9) 4.5	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.14.17　反転
36	土師器 坏	(13.0) 6.0 4.4	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.94　一括　反転
37	土師器 坏	(12.4) 5.5 5.0	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.96

番号	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
38	土師器 坏	(12.5) 6.5 5.0	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.85 反転
39	土師器 坏	— (5.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文，内面摩滅	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.81 反転
40	土師器 坏	— (6.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，みこみ部から放射状暗文	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.79 反転
41	黒色土器 坏	11.8 5.3 4.2	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文，内面黒色	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.36 一括
42	土師器 高台坏	14.5 7.2 5.2	外面：回転ヘラ削り，底部手持ちヘラ削り，削り出し高台 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白色粒子，雲母	やや軟質	No.77.79 一括
43	土師器 高台坏	15.0 6.3 6.2	外面：体・底部回転ヘラ削り，削り出し高台 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.80
44	土師器 高台坏	(15.6) — —	外面：体部回転ヘラ削り，底部ヘラ削り，削り出し高台 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.67 反転
45	土師器 高台坏	(15.0) — —	外面：体部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.24 反転
46	土師器 高台坏	— (8.2) —	外面：ロクロナデ，底部手持ちヘラ削り，貼付高台で面取りしている 内面：ロクロナデ，みこみ部に暗文	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.43 反転
47	土師器 高台坏	— (8.9) —	外面：体・底部回転ヘラ削り，削り出し高台 内面：ロクロナデ，みこみ部に同心円状暗文	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.40.82 反転
48	土師器 皿	13.6 6.0 2.7	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，褐灰色に変色	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.95 完形
49	土師器 皿	13.7 6.0 3.1	外面：回転ヘラ削り，底部回転糸切り後ヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.84.86 ほぼ完形
50	土師器 皿	14.0 5.4 2.7	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.98 完形
51	土師器 皿	13.8 5.9 2.3	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	やや軟質	No.76
52	土師器 皿	(14.2) (5.0) 1.5	外面：回転ヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.72.73 反転 外面黒変
53	土師器 皿	(13.7) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.26 反転
54	土師器 皿	(14.0) — —	外面：ロクロナデ，器面が荒れて、剥落している。 内面：ロクロナデ　内外面黒変している	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.10 反転
55	土師器 皿	12.8 6.4 2.4	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.74 ほぼ完形
56	土師器 皿	13.0 4.0 3.0	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.62.64 ほぼ完形
57	土師器 皿	14.1 6.8 2.4	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	ほぼ完形 器形ゆがむ
58	土師器 皿	13.9 5.1 2.5	外面：回転ヘラ削り，底部回転糸切り後ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.35 ほぼ完形
59	土師器 皿	(14.0) 5.0 3.0	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.21 反転
60	土師器 皿	14.4 6.6 2.5	外面：回転ヘラ削り，底部回転糸切り後ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.25
61	土師器 皿	15.0 6.3 2.6	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	にぶい橙色	密 赤・白・黒色粒子	軟質	No.89 一括 ほぼ完形
62	土師器 皿	(14.0) — —	外面：ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.12 反転
63	土師器 皿	— (7.0) —	外面：回転ヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.63 反転
64	土師器 蓋	— — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	明赤褐色	密 赤・白・黒色粒子	良好	反転
65	土師器 蓋	— — —	外面：回転ヘラ削り 内面：回転ナデ，暗文，内面やや黒変している	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.33 一括 反転
66	土師器 蓋	(16.0) — —	外面：回転ヘラ削り，つまみ欠失，口縁部黒変している 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.11 一括 反転
67	土師器 蓋	(15.9) — —	外面：回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.92 反転
68	土師器 蓋	(16.8) — —	外面：回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
69	土師器 蓋	(20.8) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	カマド 反転
70	土師器 蓋	(23.7) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.60 反転
71	土師器 蓋	(23.8) — —	外面：回転ヘラ削り，ロクロナデ 内面：ロクロナデ，内面やや黒色している	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	No.60 反転
72	土師器 皿	(11.3) — —	外面：ロクロナデ，体部線刻 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	反転
73	土師器 黒色土器	— — —	外面：底部ヘラ書(焼成前)，黒色 内面：器面剥落している	にぶい橙色	密 白色粒子	良好	底外にヘラ書あり
74	土師器 坏	(12.0) — —	外面：手持ちヘラ削り，体部線刻 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	—	体外に線刻あり，反転
75	土師器 甕	(11.7) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	反転
76	須恵器 甕	— — —	外面：タタキ 内面：工具痕	灰白	密 白・黒色粒子	良好	No.30

第２表　１号竪穴建物跡出土遺物観察表（瓦）

〔法量は上から長軸長・短軸長・厚さの順、—は計測不能、（ ）は推定値を示す〕

番号	種　別	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
77	瓦 平　瓦	34.0 24.6 2.8	外面：縄目状タタキ後工具によるナデ、削り 内面：布目の後ナデ、削り	橙　色	やや粗 赤・白・黒色粒子	良　好	No.38
78	瓦 平　瓦	(19.4) (27.8) 2.7	外面：縄目状タタキ後工具によるナデ、削り 内面：布目の後ナデ、削り	にぶい橙色	やや粗 赤・白・黒色粒子、雲母	良　好	No.101
79	瓦 平　瓦	(18.0) (13.7) 2.1	外面：縄目状タタキ後工具によるナデ 内面：布目の後ナデ	灰　色	やや粗 赤・白・黒色粒子	良　好	No.46
80	瓦 平　瓦	(13.5) (14.2) 2.0	外面：縄目状タタキ後工具によるナデ、削り 内面：布目の後ナデ、削り	橙　色	やや粗 赤・白・黒色粒子、雲母	良　好	No.91
81	瓦 平　瓦	(14.6) (9.4) 2.6	外面：縄目状タタキ後削り 内面：布目の後ナデ、削り	灰　色	粗	良好	No.41
82	瓦 平　瓦	(6.2) (8.4) 2.6	外面：摩滅，剥離 内面：布目の後工具によるナデ、削り	橙　色	やや密 赤・白・黒色粒子	良　好	No.51
83	瓦 平　瓦	(7.3) (8.3) 1.8	外面：縄目状タタキの後削り 内面：布目後削り	にぶい橙色	やや密 赤・白・黒色粒子	良　好	No.55

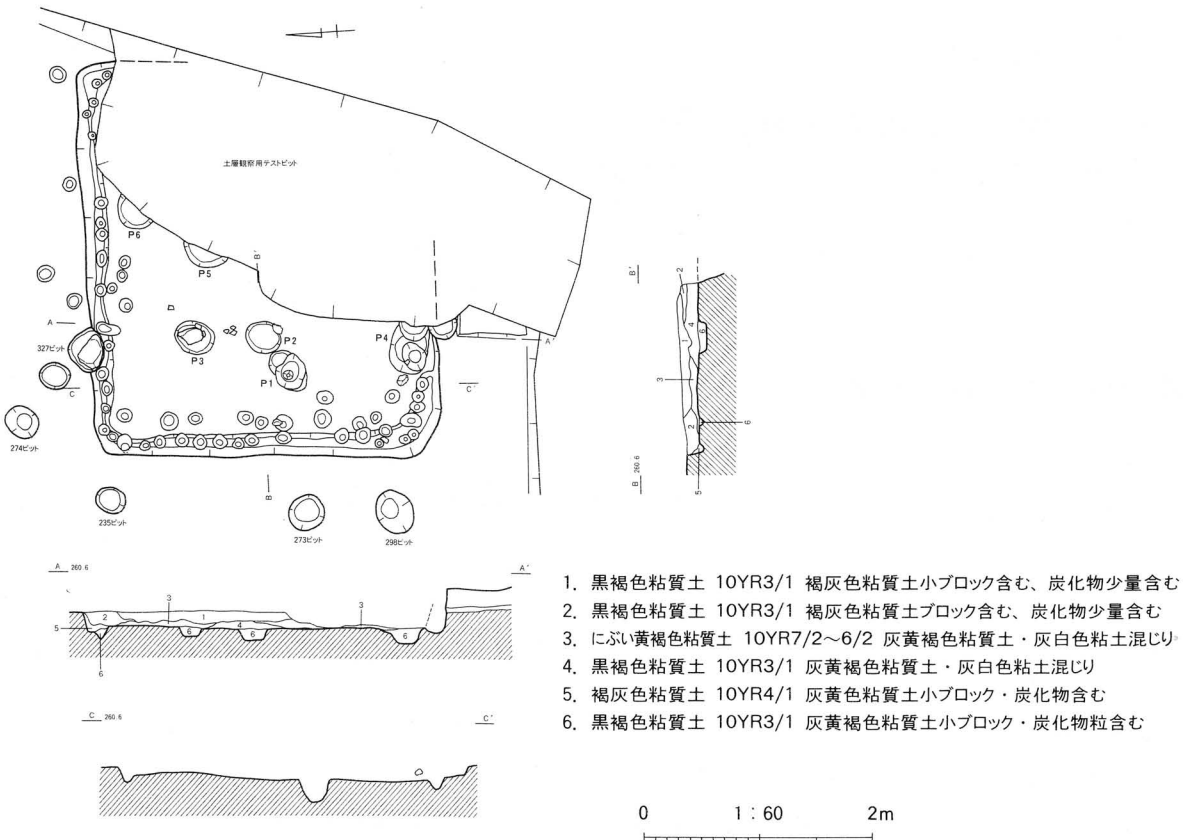
第３表　１号竪穴建物跡出土遺物観察表（金属製品）

〔単位はcmおよびｇ〕

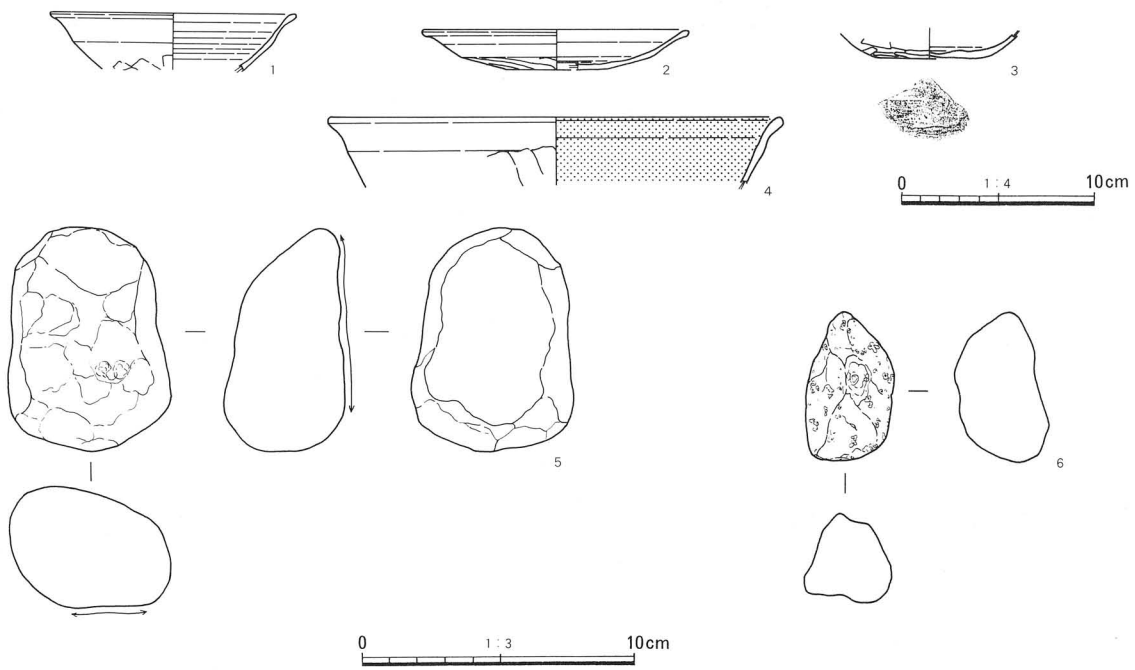
番号	器　種	材　質	長　さ	幅	厚　さ	重　量	備　考
84	鉄　器 刀　子	鉄	(3.2)	1.0	0.7	3.71	No.3
85	鉄　器 角　釘	鉄	(9.0)	0.8	0.6	6.75	No.2

黒色土器坏片である。５・６は性格不明の石器であるが、５は輝石安山岩製で、一部磨った痕跡が観察でき、磨石かもしれない。

当建物跡の所属時期は、出土土器が破片資料であるため判然としないが、10世紀前半から半ばにかけての時期と考えられ、建物の性格も一般的な住居のイメージというよりは、工房的なイメージが強い建物跡である。



第12図　２号竪穴建物跡〔1：60〕



第13図　２号竪穴建物跡出土遺物〔1～4は1：4、5･6は1：3〕

第４表　２号竪穴建物跡出土遺物観察表（土器）

〔法量は上から口径･底径･器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値を示す〕

番号	器種･器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤･白色粒子	良好	反転 No.5
2	土師器 皿	(14.0) (5.4) 2.1	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 赤･白色粒子 白色粘土混入	良好	反転 No.4
3	土師器 坏	— (5.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤･白色粒子	良好	反転 No.6
4	黒色土器 鉢?	(23.6) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	にぶい橙色	密 赤･白色粒子･雲母	良好	反転

第５表　２号竪穴建物出土遺物観察表（石器）

〔単位はcmおよびg〕

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
5	石器 磨石?	輝石安山岩	8.4	6.0	4.5	300	No.2
6	石器 ?	花崗閃緑岩	5.6	3.2	3.2	80	No.9

第２節　掘立柱建物跡

当遺跡における掘立柱建物跡は、１棟確認されている。これは発掘調査段階で確認したものではなく、調査終了後の整理段階で、全体図の図面上においてピットの配列、土層の堆積状態等から掘立柱建物跡ではないかと判断したものである。よって個別の測量図は作成しておらず、第３図の全体図内において示しているだけである。また、他にもう１棟、掘立柱建物跡ではないかと思われるピットの配列もあるが、不確定な要素も多々あることから、今回の報告では取り扱わなかった。なお、建物を構成する個々の掘り方については、後に報告するピットの節で図面等を一部掲載しているので参照していただきたい。

〔１号掘立柱建物跡〕

１号掘立柱建物跡は、Ｃ－３・４グリッド内において検出されており、18・19・20・25・30・32・38・42・128号ピットの９基の掘り方から構成される側柱式の建物跡である。主軸方位はＮ－１°－Ｗである。

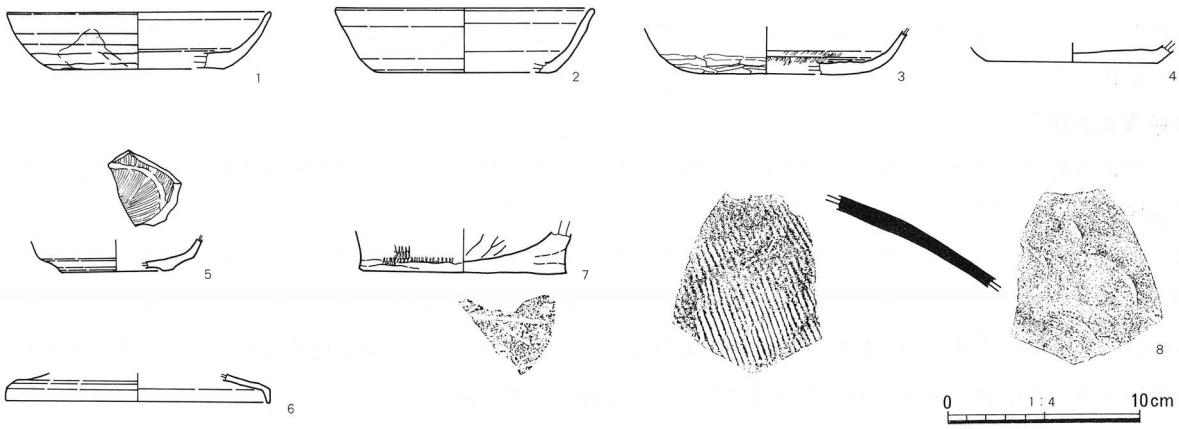
建物の規模は、東西２間（4.00m）、南北３間（5.60m）を測り、柱間の寸法は、東西方向1.80～2.00m、南北方

向2.00～2.20mを測り、床面積は推定22.4㎡を測る。

掘り方の形態は、隅丸方形あるいは隅丸長方形を基調としているが、不整円形を呈するものもある。掘り方の規模は、長軸70～114cm、短軸60～94cm、深さ12～44cmを測る。個々の掘り方の規模は、後節の第13表ピット一覧表を参照されたい。

出土遺物は破片資料ばかりである（第14図）。１～４は甲斐型坏が出現する直前段階の土師器坏で、盤状に近い形態を呈する。18・25・30・32号ピットからそれぞれ出土している。５は18号ピット出土の高台坏で底部内面および体部内面に暗文を施している。高台は貼り付け高台である。６は30号ピット出土の土師器蓋、７は20号ピット出土の甕形土器の底部破片。８は25号ピット出土のタタキ目をもつ須恵器片である。

当建物跡の所属時期であるが、各掘り方の出土遺物が、当建物跡に帰属するものであるかどうかは断定できないが、いくつかの掘り方からの出土にかかわらず、出土土器の年代にさほどばらつきがみられないこと等から、これら遺物群を当建物跡に帰属させてもいいのではなかろうか。よって当建物跡の所属時期は、出土土器の年代からみると、８世紀前半代の範疇で捉えられると考えられる。



第14図　１号掘立柱建物跡出土遺物〔1：4〕

第６表　１号堀立柱建物跡出土遺物観察表（土器）

〔法量は上から口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値を示す〕

番号	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 坏	(14.0) (9.0) 3.0	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，黒変 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	32ピット出土．反転 No.1
2	土師器 坏	(13.6) (9.0) 3.4	外面：ロクロナデ，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	30ピット出土．反転
3	土師器 坏	— (9.2) —	外面：手持ちヘラ削り，ミガキ 内面：ロクロナデ，暗文	浅黄橙	緻密 赤・白色粒子	良好	18ピット出土．反転 No.1
4	土師器 坏	— (9.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	25ピット出土．反転 No.2
5	土師器 高台坏	— (6.0) —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，暗文（みこみ・体内）	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	18ピット出土．反転
6	土師器 蓋	(14.0) —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	30ピット出土．反転
7	土師器 甕	— (11.0) —	外面：ハケ目，底部木葉痕 内面：ヘラ削り	内 茶褐色 外 暗褐色	やや粗 白・黒色粒子，小礫	良好	20ピット出土 No.1
8	須恵器 甕	— — —	外面：タタキ目，自然釉 内面：ナデ	灰色	緻密 白・黒色粒子	良好	25ピット出土 No.1

第３節　溝状遺構

本節では、人工的に掘削された溝、溝状の自然流路の両者を「溝状遺構」と総称して報告を行う。

〔１号溝状遺構〕

１号溝状遺構は、調査区のＢ・Ｃ－４グリッドにわたって検出されており、南北、ほぼ真北にのびる溝状遺構である。43・44・45・46・47号ピットを切っている。

検出されている長さは8.95m、幅50～66cm、深さ全体に約30cmを測る。断面形態はU字状を呈する。覆土は黒褐色粘質土を主体としている。

出土遺物は少なく、覆土内の高いレベルから古墳時代の土器片数点と平安時代の土器細片が多数出土している他、鉄滓が１点出土している（第19図１）。

所属時期については、良好な遺物や出土状態に恵まれていないため、不明な部分が多く、平安時代以降の所産としかいえない。

〔２号溝状遺構〕

２号溝状遺構は、調査区のＣ・Ｄ－３、Ｃ・Ｄ－４、Ｃ・Ｄ－５、Ｃ－６グリッドにわたって検出されており、蛇行しながら東西にのびる自然流路の溝状遺構で、調査区内を横切るたちで確認されている。

幅は約3.50～5.50mを測り、深さは約10cm前後を測る程度である。覆土は褐灰色砂質シルトを主体としている。

遺物は、覆土内から古墳時代を主体とする土器細片が出土している他、直接当溝に帰属するかどうか不明であるが、覆土上面から甲斐型土器の坏が集中して出土している（第19図４～９）。

当溝状遺構（自然流路）の所属時期は、他の遺構との切り合い関係や覆土の状態、出土遺物等から古墳時代の自然流路と考えられ、確認面から平安時代のピット群に切り込まれていることから、当該期には大半が埋没していたと考えられる。

〔３号溝状遺構〕

３号溝状遺構は、Ｄ－５グリッド内において検出されており、南北にのびる溝状遺構である。溝中央付近を４号溝状遺構によって分断され、北側部分は後世の削平によって消滅している。

検出されている長さは約3.70m、幅34～62cm、深さ約10cmを測る。断面形態は、削平されているためか、皿状を呈するようにもみえるが、おそらくU字状を呈していたと考えられる。覆土は黒褐色粘質土を主体としている。

遺物は、４号溝状遺構に切られたすぐ南側の溝中央付近で甲斐型の坏・皿類が積み重ねられた状態で出土している（第19図19～30）。溝の底面に接した状態ではなく、底面から若干浮いたレベルからの出土である。整然と積み重ねられたという状態ではなく、少し無雑作に正置あるいは倒置した状態で重ねられている。

当溝状遺構の所属時期は、出土土器から９世紀半ば頃と考えられる。

〔４号溝状遺構〕

４号溝状遺構は、Ｄ－４・５・６グリッドにわたって検出されており、東西にのびる溝状遺構である。１号竪穴建物跡、３・６・７号溝状遺構を切っている他、368・390・391・392号ピットと重複しているが、新旧関係が判明しているのは390号ピットとの重複のみで、同ピットが当溝状遺構を切っている。

検出されている長さは17.8m、幅25～84cm、深さは最深部で約30cmを測る。断面形態はU字状を呈する。覆土は黒褐色粘質土および褐灰色粘質土を主体とし、底面付近では若干砂が混じっている。

遺物は、散在した状態で出土しており、特に集中した傾向は示していない。土師器坏および蓋、甕形土器の底部破片、石錘と思われる石器、土製玉等が出土している（第20図31～43）。土製玉は、溝状遺構東端付近の底面から２個体が近接して出土している。

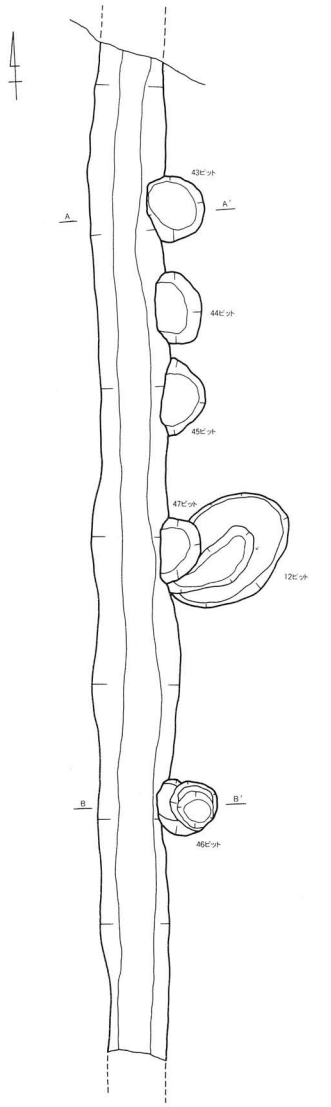
当溝状遺構の所属時期については、出土遺物だけでは判断できかねるが、他遺構との切り合いからすると、９世紀半ば以降の所産であるとしかいえない。

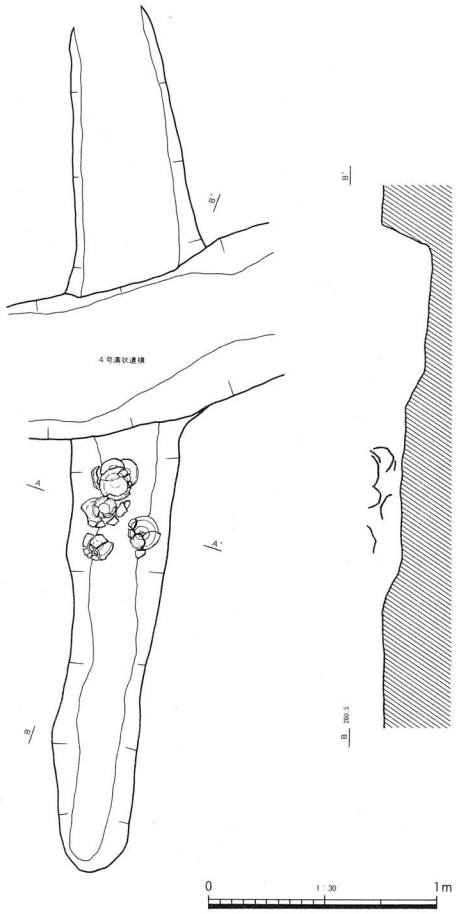
〔５号溝状遺構〕

５号溝状遺構は、Ｃ－４・５グリッドにわたって検出されており、東西にのび、西端で北に向かってＬ字状に屈曲してのびるが、表土剥ぎの際に削平していまい、その続きを欠失してしまっている。遺構内部で112・113号ピットと重複するが、それらとの新旧関係は、観察ミスで残念ながら不明である。

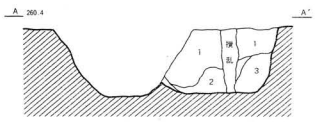
検出されている長さは東西で約3.00m、幅40～87cm、深さは最深部で約10cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈している。覆土は黒褐色粘質土を主体としている。

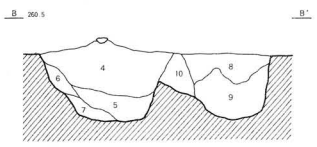
遺物は少ないが、溝状遺構内東側のほぼ中央から、口縁部を欠失した甲斐型の坏が１点、底面から約８cm浮いたレベルから出土している（第20図44）。





〔３号溝状遺構〕





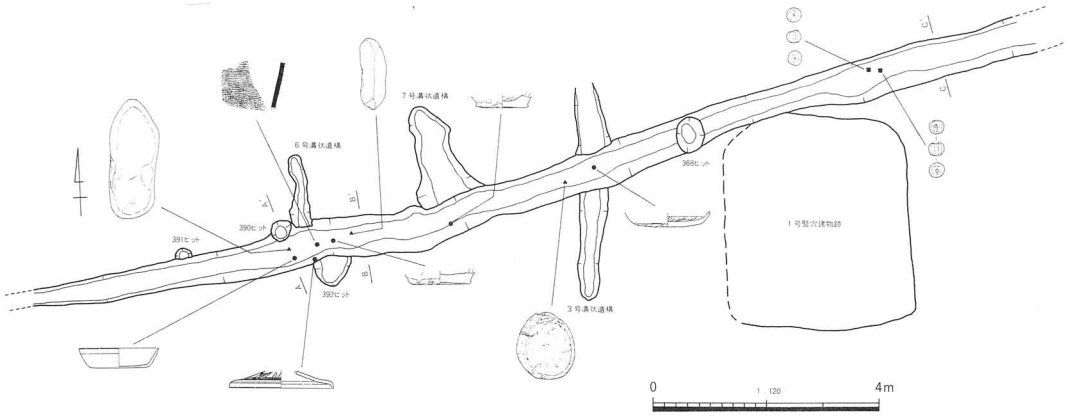
（土層図は1：30）

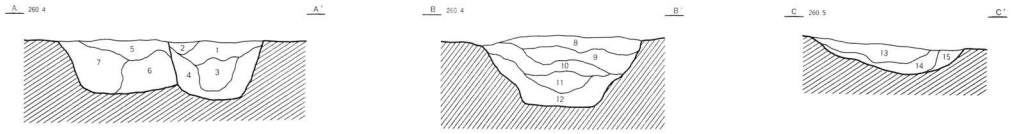
〔１号溝状遺構〕

〔１号溝状遺構・43ピット・46ピット〕

1．黒褐色粘質土　10YR3/1　酸化鉄含む
2．黒色粘質土　10YR2/1　黄褐色粘質土ブロック・酸化鉄含む
3．黒褐色粘質土　10YR2/2　黄褐色粘質土ブロック多く含む、酸化鉄含む
4．黒褐色粘質土　10YR3/1　黄褐色粘質土小ブロック少量含む
5．黒褐色粘質土　10YR3/1　にぶい黄褐色粘質土ブロック多く含む
6．黒褐色粘質土　10YR3/1　にぶい黄褐色粘質土ブロック含む
7．暗褐色粘質土　10YR4/6　酸化鉄含む
8．黒褐色粘質土　10YR3/2　酸化鉄含む
9．黒色粘質土　10YR2/1　黄褐色粘質土小ブロック・酸化鉄少量含む
10．黒褐色粘質土　10YR2/2　黄褐色粘質土小ブロック含む

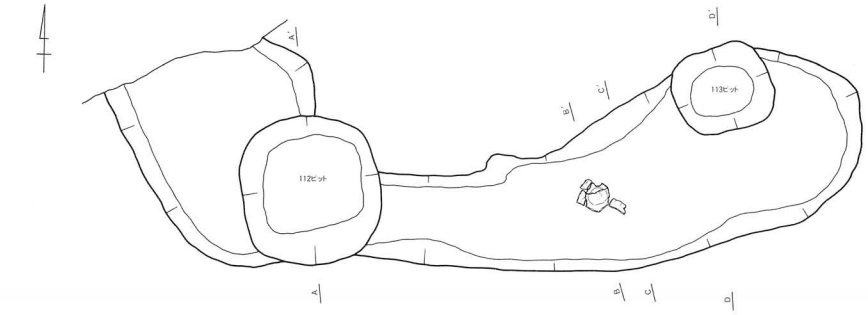
第15図　溝状遺構①〔１溝は1：60、３溝は1：30〕

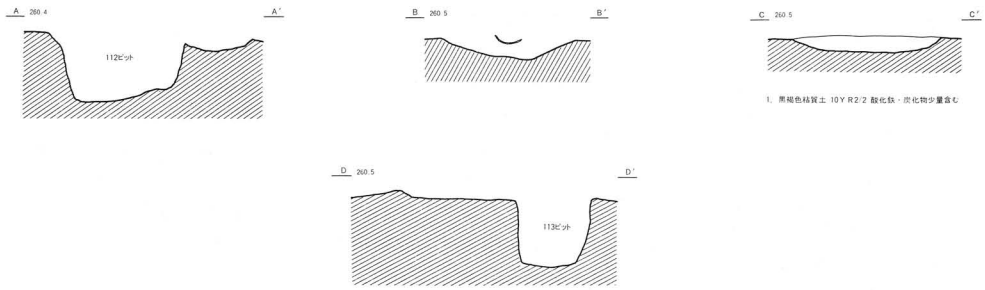




〔４号溝状遺構〕

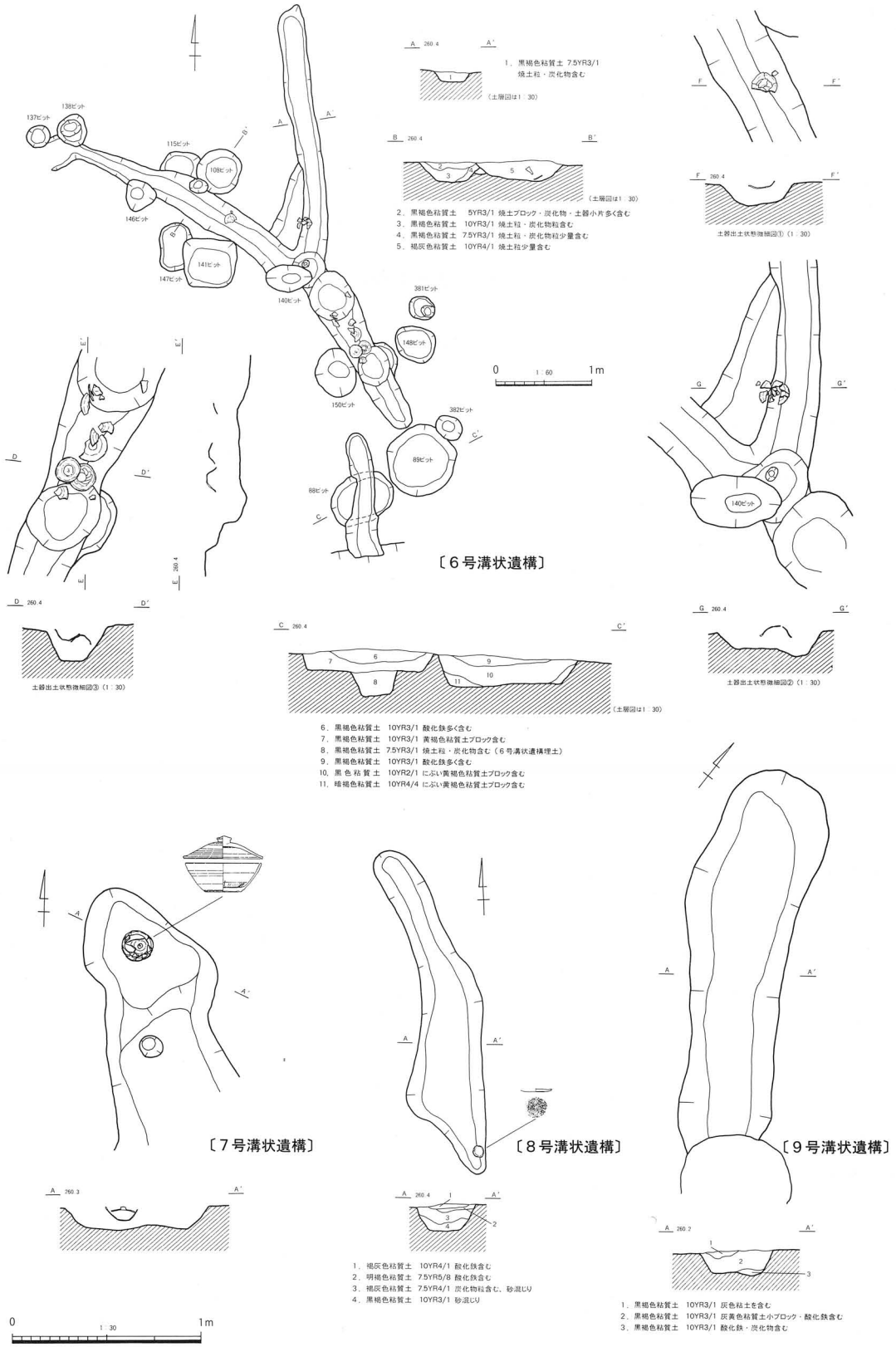
1．黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色粘質土ブロック含む
2．黄褐色粘質土 10YR5/6
3．黒褐色粘質土 10YR3/2 黄褐色粘質土小ブロック含む
4．黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色粘質土小ブロック含む
5．黒褐色粘質土 10YR3/1 酸化鉄含む
6．黒色粘質土 10YR2/1 黄褐色粘質土小ブロック含む
7．黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色粘質土小ブロック含む
8．黄褐色粘質土 10YR5/6
9．黒褐色粘質土 10YR3/1 褐灰色粘質土小ブロック含む
10．黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色粘質土混じり
11．黒褐色粘質土 10YR3/1 褐灰色粘質土混じり
12．黒褐色粘質土 10YR3/1 酸化鉄含む
13．褐灰色粘質土 10YR4/1 黄褐色粘質土・黒色粘質土混じり
14．褐灰色粘質土 10YR4/1 黄褐色粘質土混じり
15．褐灰色粘質土 10YR4/1 黄褐色粘質土小ブロック含む



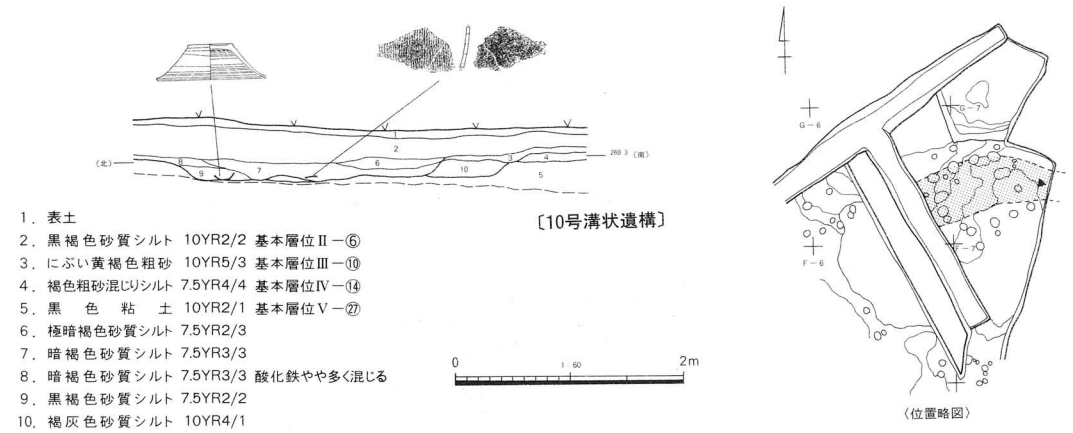


〔５号溝状遺構〕

第16図　溝状遺構②〔４溝は1：120、５溝は1：30〕



第17図　溝状遺構③〔６溝は1：60、７～９溝は1：30〕



第18図　溝状遺構④〔1：60〕

当溝状遺構の所属時期は、出土土器から判断すれば、10世紀前半代の所産と考えられる。

〔６号溝状遺構〕

６号溝状遺構は、Ｄ－４・５、Ｅ－５グリッドにわたって検出されている。基本的に南北にのびる溝であるが、断続的にしかも途中から二股に分岐する溝で、検出された範囲ではＹ字状を呈する。北側にさらにのびそうであるが、撹乱のため不明となっている。88・108・115・137・138・140号ピット等と重複しているが、新旧関係が判明しているピットは、88・108号ピットだけで両ピットが溝状遺構より新しい。

検出されている長さは、東西方向で約6.00ｍ、幅は15～44cm、深さは10～25cmを測り、断面形態は基本的に擂り鉢状を呈する。覆土は黒褐色粘質土を主体としている。溝内は所々ピット状に深くなっている箇所がみられるが、これが何を意味しているのかは現段階では不明である。

遺物は、溝分岐箇所の南側手前付近で甲斐型の坏と皿が、正置、倒置の状態でややまとまって出土している他、分岐した溝内からもそれぞれ単独で１個体ずつ坏および皿が、倒置、正置の状態で出土している。すべて底面から10cm前後浮いたレベルからの出土である。土器以外では磨石状の石器が出土している（第21図45～56)。

当溝状遺構の所属時期は、出土土器から判断すると10世紀前半代の所産と考えられる。

〔７号溝状遺構〕

７号溝状遺構は、Ｄ－５グリッド内において検出されており、南北にのびる溝状遺構である。その南側を４号溝状遺構によって切られている。

長さは1.38ｍ、幅は最大73cm、深さ最深部で15cmを測る。断面形態は鍋底状を呈するが、底面には多少の凹凸がみられる。覆土は黒褐色粘質土および褐灰色粘質土を主体としている。

遺物は、北側の先端部分から甲斐型の高台坏と蓋が、底面から約５cm浮いたレベルから出土している（第21図57・58)。それは坏に蓋をした状態で出土し、蓋は埋土の圧力で破損していた。坏内部の土壌の洗浄を行い、他の遺物の検出に努めたが、得られた遺物はない。

当溝状遺構の所属時期は、出土土器から判断すると、９世紀半ば頃と考えられる。

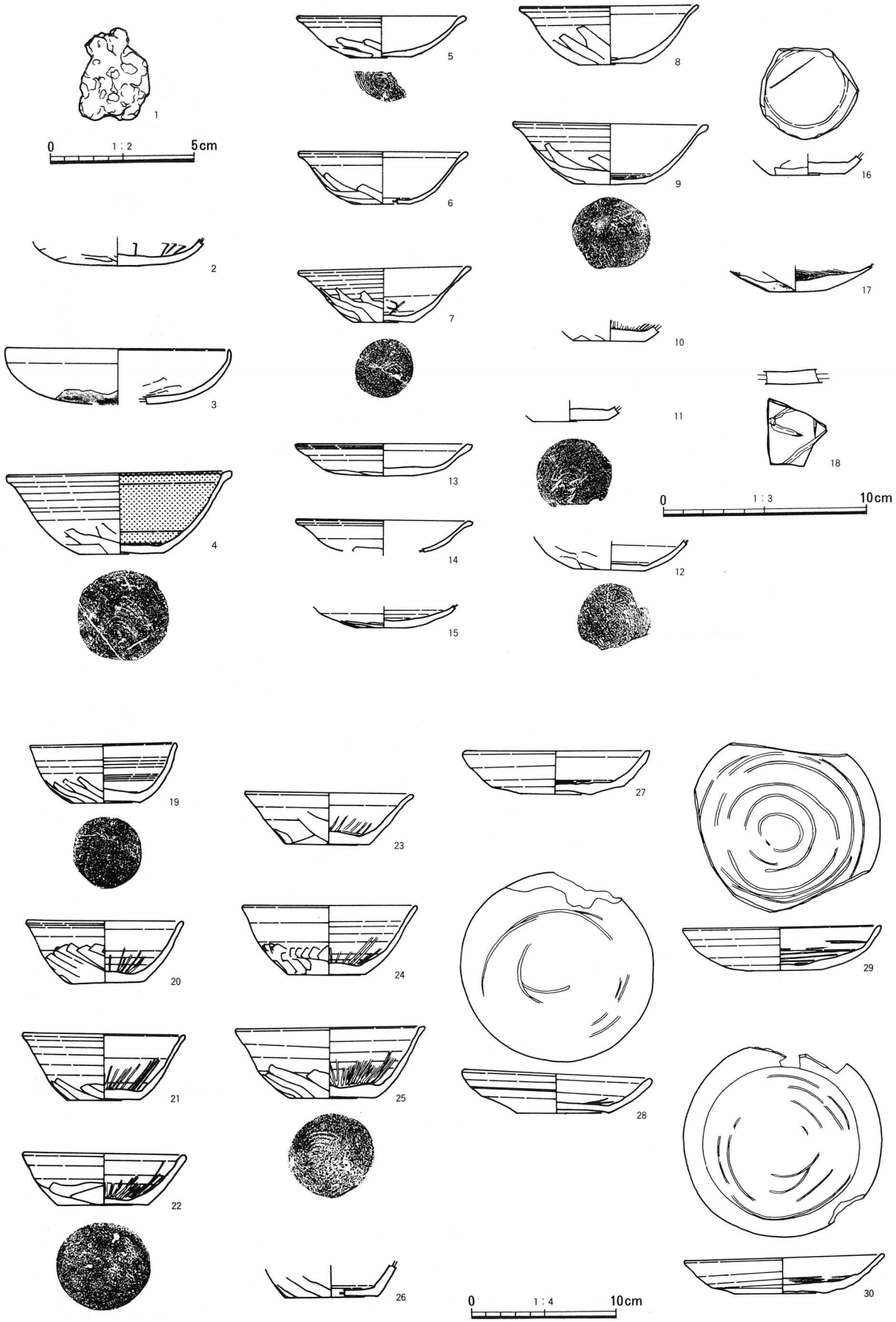
〔８号溝状遺構〕

８号溝状遺構は、Ｄ－５グリッド内で検出されており、南北にのびる溝状遺構である。２号溝状遺構の上面から切り込んで構築している。

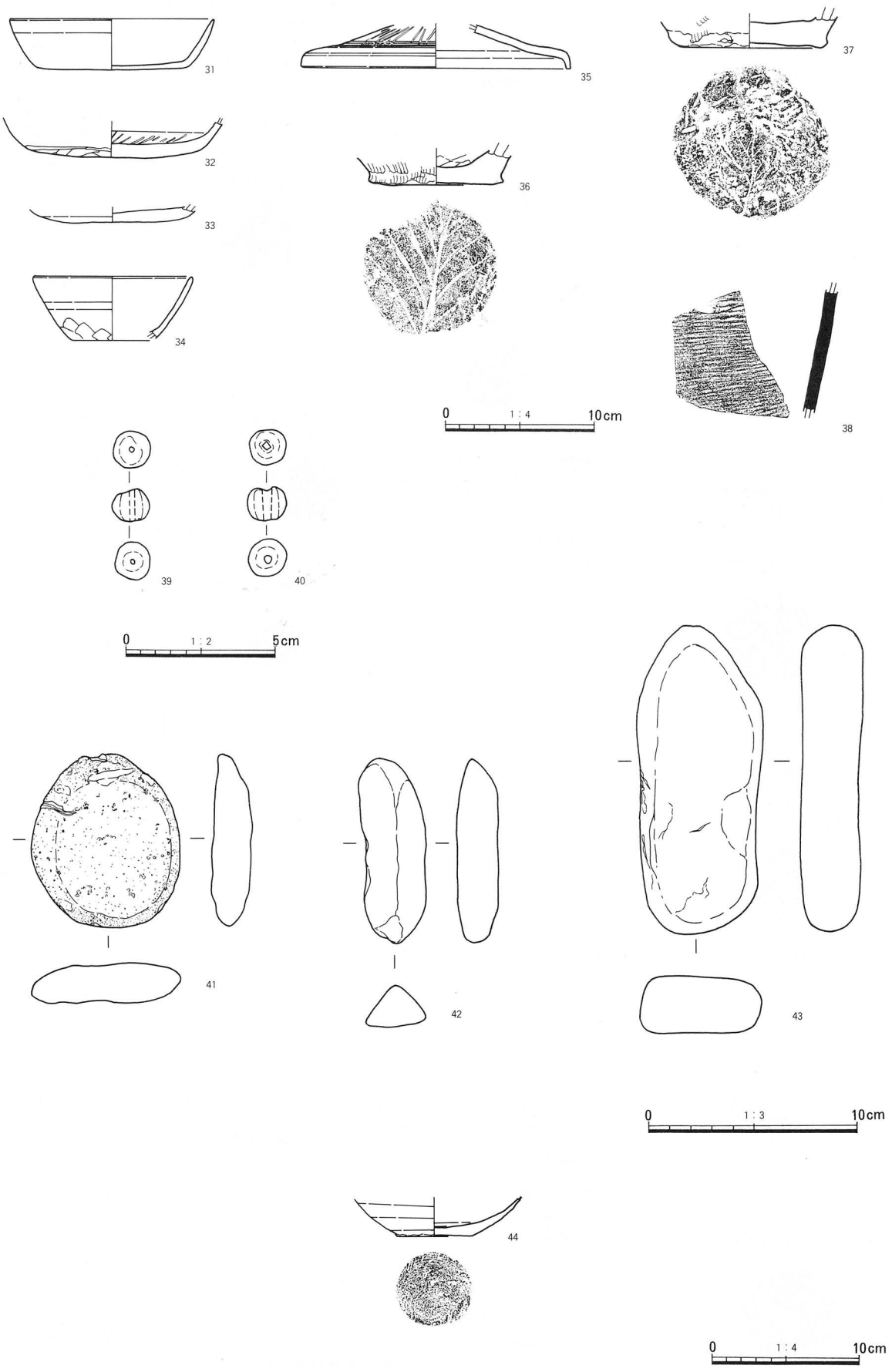
長さは1.77ｍ、幅20～40cm、深さは最深部で15cmを測る。断面形態は鍋底状を呈する。覆土は褐灰色粘質土を主体としている。

遺物は少なく、土師器細片が中心で、南端にて甲斐型の黒色土器坏底部破片が出土している程度である（第21図59)。

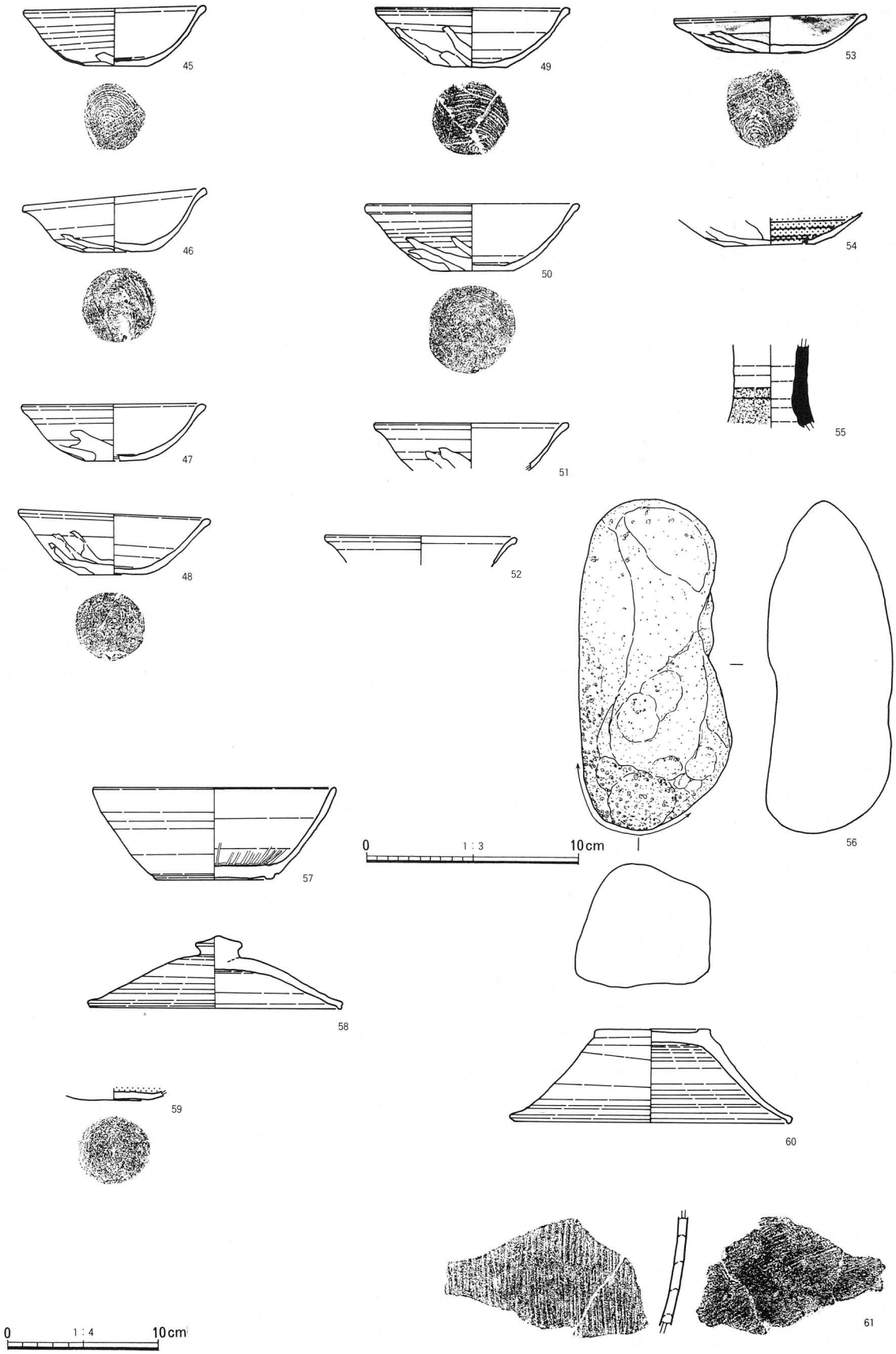
当溝状遺構の所属時期は、出土土器からだけでは判断できず、９世紀以降の所産としかいえない。



第19図　溝状遺構出土遺物①〔1：4、1は1：2、18は1：3〕



第20図　溝状遺構出土遺物②〔1：4、39・40は1：2、41～43は1：3〕



第21図　溝状遺構出土遺物③〔45～55、57～61は1：4、56は1：3〕

第７表　溝状遺構出土遺物観察表（土器）

〔法量は上から口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値を示す〕

番号	溝名	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2	1溝	土師器 坏	— — —	外面：ヘラ削り，ナデ 内面：ヘラ削り，ナデ	褐色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.3　反転
3	2溝	土師器 坏	(16.0) — —	外面：ヨコナデ，ヘラ削り，ナデ，器面磨滅 内面：ヨコナデ，ヘラ削り，ナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.38　反転 外面黒変
4	2溝	黒色土器 坏	(16.0) 6.0 5.8	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	褐色	緻密 赤色粒子	良好	No.22.28.36　2層 反転
5	2溝	土師器 坏	(12.0) 4.4 3.0	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	橙色	やや粗 赤・白色粒子 小礫	良好	No.6　反転
6	2溝	土師器 坏	(12.0) 4.0 3.8	外面：ロクロナデ，体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.17　2層　反転
7	2溝	土師器 坏	12.2 4.4 3.9	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部わずかに回転糸切り痕 内面：ロクロナデ	黄橙色	密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	No.2.9　一括 体内に「大」線刻あり
8	2溝	土師器 坏	(12.8) 4.4 4.15	外面：ロクロナデ，体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ　内外面共器面荒れている	黄橙色	密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	No.11.12　反転
9	2溝	土師器 坏	(14.0) 5.2 4.4	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り，黒変している 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子，小礫	良好	No.25.26　反転
10	2溝	土師器 坏	— 5.0 —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	褐色	やや粗 赤・白色粒子，雲母 小礫	良好	No.8
11	2溝	土師器 坏	— 5.3 —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.32
12	2溝	土師器 坏	— (5.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.27　反転
13	2溝	土師器 皿	(12.6) 4.8 2.3	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	粗 赤・白色粒子， 小礫，雲母	良好	No.21　反転
14	2溝	土師器 皿	(12.6) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	密　白色粒子，赤色粒子 多量に含む 白色粘土混入	良好	No.13　反転
15	2溝	土師器 皿	— 3.6 —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	明黄橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.18
16	2溝	土師器 皿	— (5.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.19　反転 底内ヘラ書あり
17	2溝	土師器 甕?	— 4.0 —	外面：ヘラ削り後ナデ，底部手持ちヘラ削り 内面：ハケ目	浅黄橙色	密 白色粒子	良好	No.39　一括 外面黒変
18	2溝	土師器 坏	— — —	外面：底部手持ちヘラ削り，ヘラ書き 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤色粒子	良好	
19	3溝	土師器 坏	10.4 4.8 4.2	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密　白色粒子， 赤色粒子多い 白色粘土混入	良好	No.4　完形
20	3溝	土師器 坏	11.2 5.5 4.5	外面：体・底部手持ちヘラ削り，器形にゆがみを生ずる 内面：ロクロナデ，暗文	浅黄橙 ～橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.12
21	3溝	土師器 坏	(11.5) 5.2 4.7	外面：ロクロナデ，体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	浅黄橙 ～橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.10　反転
22	3溝	土師器 坏	11.6 6.3 3.7	外面：体部手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 白色粒子，雲母 赤色粒子多い	良好	No.6　完形
23	3溝	土師器 坏	(12.0) 6.0 3.7	外面：ロクロナデ，体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.3　一括　反転
24	3溝	土師器 坏	12.6 5.5 4.9	外面：ロクロナデ，体・底部手持ちヘラ削り，器面剥離 内面：ロクロナデ，暗文	黄橙～ 橙色	密，白色粘土混入 赤色粒子多い 白色粒子	良好	No.9　一括 ほぼ完形
25	3溝	土師器 坏	13.6 6.2 5.1	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.11
26	3溝	土師器 坏	— 6.6 —	外面：ロクロナデ，体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.7
27	3溝	土師器 皿	13.2 5.0 3.1	外面：ロクロナデ，体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面荒れている	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.1
28	3溝	土師器 皿	13.5 6.7 2.8	外面：ロクロナデ，体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	浅黄橙 ～橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.2　ほぼ完形
29	3溝	土師器 皿	14.0 5.2 3.05	外面：ロクロナデ，体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母 白色粘土混入	良好	No.8
30	3溝	土師器 皿	14.0 6.8 2.5	外面：ロクロナデ，体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.5
31	4溝	土師器 坏	(14.0) 10.0 3.5	外面：ロクロナデ，底部手持ちヘラ削り，底部油煙 内面：ロクロナデ，器面の摩滅著しい	浅黄橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.1　反転
32	4溝	土師器 坏	— (12.0) —	外面：ナデ，手持ちヘラ削り 内面：ナデ，暗文	浅黄橙色 ～橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.6　反転
33	4溝	土師器 坏	— (10.0) —	外面：ナデ，底部手持ちヘラ削り，黒変している 内面：ナデ	にぶい褐色	緻密 赤色粒子	良好	反転

番号	溝名	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
34	4溝	土師器 坏	(11.0) — —	外面：手持ちヘラ削り，ロクロナデ 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤色粒子	良好	反転
35	4溝	土師器 蓋	(18.4) —	外面：ロクロナデ，暗文 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.2　反転
36	4溝	土師器 甕	— 9.2 —	外面：ハケ目，底部木葉痕 内面：ヘラ削り	明赤褐色	やや粗 赤・白・黒色粒子・小礫・雲母	良好	No.5
37	4溝	土師器 甕	— 10.0 —	外面：ハケ目，底部木葉痕 内面：ヘラ削り	にぶい褐色	密　やや粗 赤・白・黒色粒子・小礫・雲母	良好	No.4
38	4溝	須恵器 甕	— — —	外面：タタキ目 内面：ナデ	灰色	密 白・黒色粒子	良好	No.3
44	5溝	土師器 坏	— 5.4 —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	内 灰白色 外 にぶい橙色	密 赤・白色粒子	やや軟質	No.1
45	6溝	土師器 坏	12.2 4.3 3.85	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	粗 赤色粒子，白色粒子多く含む	良好	No.3　完形
46	6溝	土師器 坏	12.4 5.0 3.7	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	粗 赤色粒子・白色粒子多く含む	良好	No.6　一括
47	6溝	土師器 坏	(12.4) 4.4 3.8	外面：ロクロナデ，体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	やや粗 赤・白色粒子	良好	No.2.8　一括　反転
48	6溝	土師器 坏	13.0 4.6 4.05	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	粗 赤・白色粒子・小礫	良好	No.4　完形
49	6溝	土師器 坏	13.0 5.0 3.95	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.12　一括
50	6溝	土師器 坏	14.4 5.7 4.5	外面：手持ちヘラ削り，回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	粗 赤・白色粒子，小礫	良好	No.7.9　完形
51	6溝	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.5　反転
52	6溝	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	やや粗 赤・白色粒子	良好	No.8　反転
53	6溝	土師器 皿	13.0 5.2 2.5	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	灰白色	やや粗 赤・白色粒子，小礫	やや軟質	No.13　内外面黒変
54	6溝	黒色土器 皿	— (6.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.11　反転
55	6溝	須恵器 長頸壷	— — —	外面：ロクロナデ，自然釉かかる 内面：ロクロナデ	灰色	密 黒色粒子	良好	No.1　反転
57	7溝	土師器 高台坏	16.4 8.0 6.2	外面：ロクロナデ，回転ヘラ削り，底部回転ヘラ削り，器面剥離 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.2　完形 高台は削り出し
58	7溝	土師器 蓋	17.0 — 4.85	外面：ロクロナデ，回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.1　90%残
59	8溝	黒色土器 坏	— 4.4 —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	黄橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.1
60	10溝	土師器 蓋	19.0 — 6.2	外面：ロクロナデ，回転ヘラ削り，環状鈕 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.1　70%残
61	10溝	土師器 甕	— — —	外面：ハケ目 内面：ハケ目	暗褐色	やや粗 白・黒色粒子・雲母，小礫	良好	No.2

第８表　溝状遺構出土遺物観察表（土製品）

〔単位はcmおよびｇ〕

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
39	玉	土製	1.1	1.3	1.25	1.38	４溝出土　No.11
40	玉	土製	1.15	1.35	1.2	1.52	４溝出土　No.12

第９表　溝状遺構出土遺物観察表（金属製品・石製品）

〔単位はcmおよびｇ〕

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	鉄滓	鉄	2.8	2.4	—	8.75	１溝出土　No.2
41	石錘	輝石安山岩	8.5	7.2	1.8	157	４溝出土　No.15
42	不明	ホルンフェルス	8.9	2.9	2.0	70	４溝出土　No.14 俵編み石器か？
43	不明	花崗岩類	15.0	6.1	—	506	４溝出土　No.13 俵編み石器か？
56	磨石？	花崗岩類～玢岩	15.7	7.2	5.8	1900	６溝出土　No.16 先端部磨痕あり

〔９号溝状遺構〕

９号溝状遺構は、Ｃ－６グリッド内において検出されており、南北にのびる溝状遺構である。２号溝状遺構を切り込んで構築さているが、南端を288号ピットによって切られている。

長さは1.95m、幅46～62cm、深さは最深部で15cmを測る。断面形態は鍋底状を呈する。覆土は黒褐色粘質土を主体としている。

出土遺物は、土師器と思われる細片が少量で、図化できる遺物はない。よって所属年代も不明で、重複関係から、８～９世紀以降の所産としかいえない。

〔10号溝状遺構〕

10号溝状遺構は、Ｆ－６・７グリッドにおいて検出されている自然流路の溝状遺構で、平面的には明確に捉えられないが、調査区境界の断面において確認している。おそらく東西方向にのびる流路であろう。

第18図には断面図のみ掲載しているが、断面において観察する限り、幅約3.00m、深さ約16cmを測り、底面にはやや凹凸がみられる。覆土を観察すると、暗褐色砂質シルトを主体とする流路と褐灰色砂質シルトを主体とする流路が確認でき、複数の時期にわたって流路として存在したことが窺われる。

遺物は、暗褐色砂質シルトを主体とする流路の底面付近から甲斐型土器のバリエーションと捉えられる蓋と甕の胴部破片が出土している（第21図60・61）。

当溝状遺構の所属時期は、断面観察および出土遺物から判断すると、暗褐色砂質シルトを主体とする流路は９～10世紀代の時期と判断でき、褐灰色砂質シルトを主体とする流路は、古墳時代の流路と考えられる２号溝状遺構の覆土と酷似することから、同時期と捉えられる流路と判断できる。よって10号溝状遺構は、古墳時代から平安時代にわたって継続もしくは断続的に存在した自然流路であり、平坦化が進んだ平安時代でも存在した自然流路と思われる。

第４節　ピット

ピットは、調査区内において396基検出されている。今回の調査では、遺構の名称および遺構番号の見落とし、繁雑さを避けるためにいわゆる「土坑」とされる形態・規模をもつものもすべて「ピット」として扱っている。

ピットは、大局的にみると調査区全体にわたって広がりをもち、それらの中には先述した掘立柱建物跡のように、ある程度の規則性をもって存在するピット群も存在している。また、規則性は認められないものの、ピット群の中には様々な性格をもつピットが存在する。例えば土器（土師器）焼成遺構と考えられるものや、完形の土器あるいは故意に打ち欠いた土器を埋納した土器埋納遺構等がある。以下、それらのピット群を中心に説明を行うが、ここに挙げたピット以外にもそれぞれの性格をもつ可能性のあるピットも存在することはいうまでもない。今後の類例の増加を待ちたい。

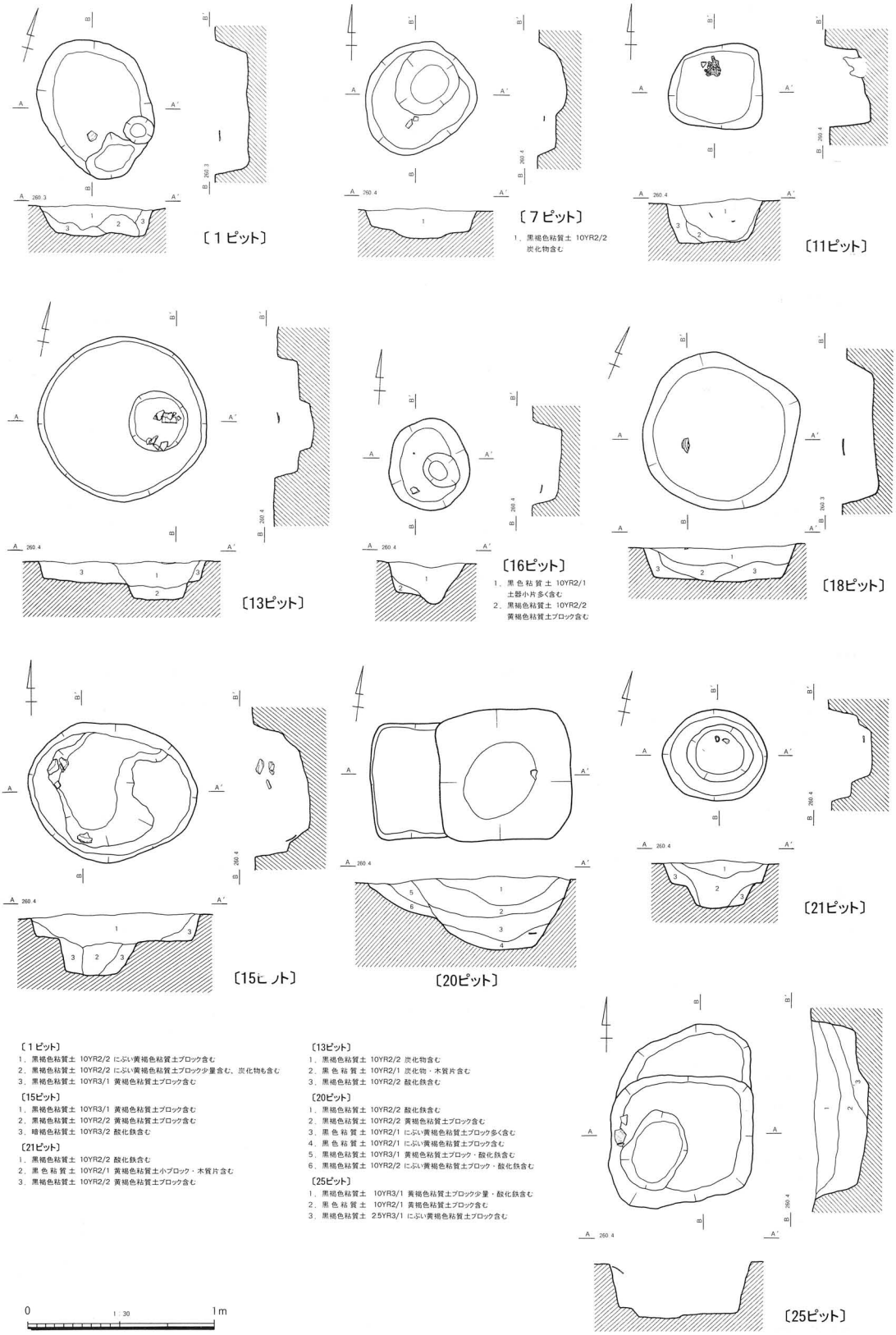
なお、その他のピットについては、本報告にもかかわらず紙数の都合で、すべてを報告できないため、一覧表（第13表）においてその規模等を示しておいた。挿図も同様で、ある程度の出土遺物がみられたピットのみを掲載している。ご了承願いたい。

【土器（土師器）焼成遺構】

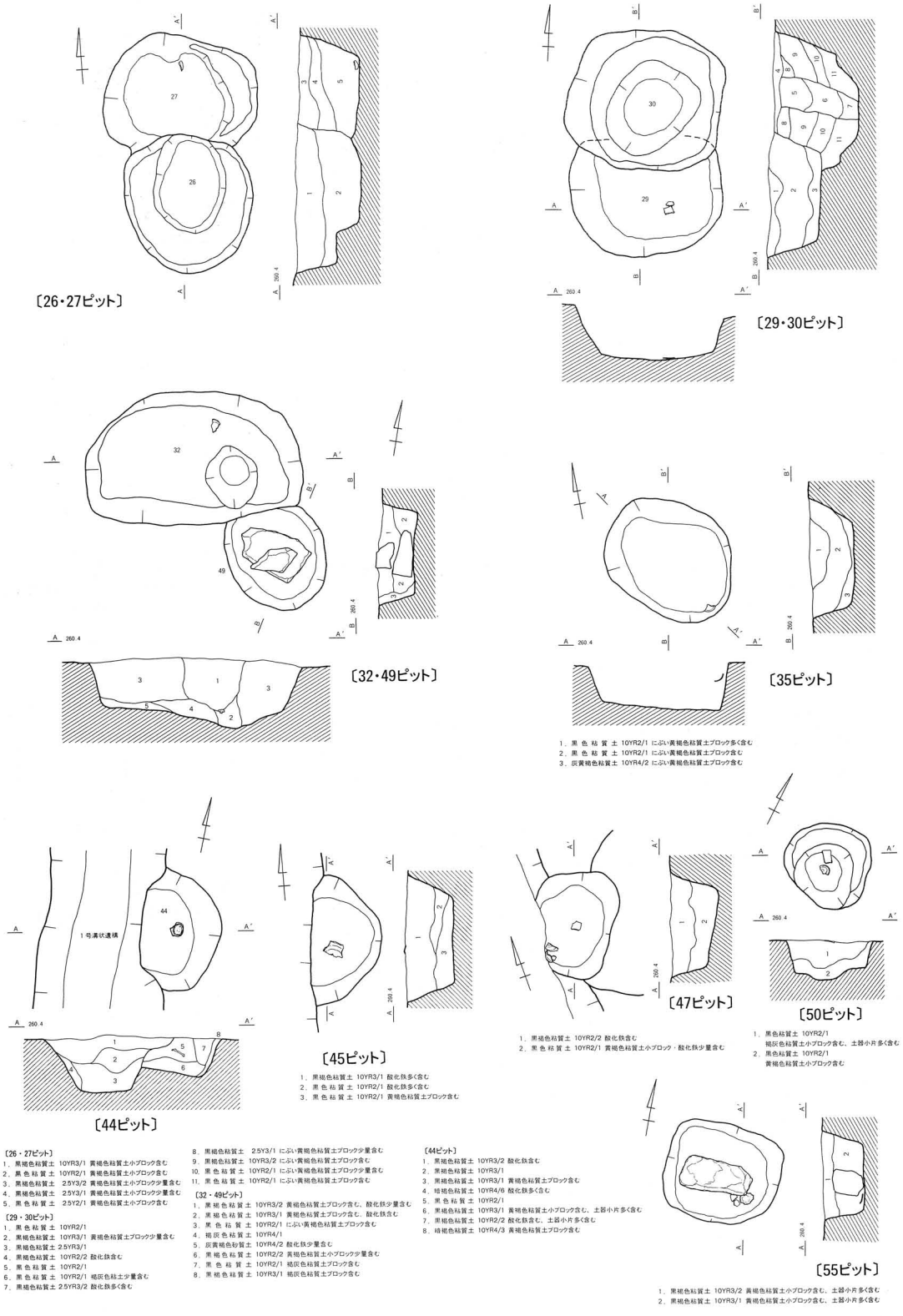
〔96号ピット〕（第25図）

Ｄ－５グリッド北端で検出されており、後世の削平をうけ、焼土と遺物がすでに露出していた。平面形態は、大小の不整楕円形の掘り方が組合わさった形状で、大局的にみれば台形状あるいは二等辺三角形状を呈する。規模は長軸1.17m、短軸0.84m、深さは現状で12cmを測る。焼土の広がりが顕著で、３～４cmの厚さで層をなしている。この焼土の上面に土器が集中して出土している。焼土層の下部にはさらに焼土および焼土ブロック、灰が混じった層の広がりが１～５cmの厚さで認められる。底面は特に硬化した箇所はみられない。

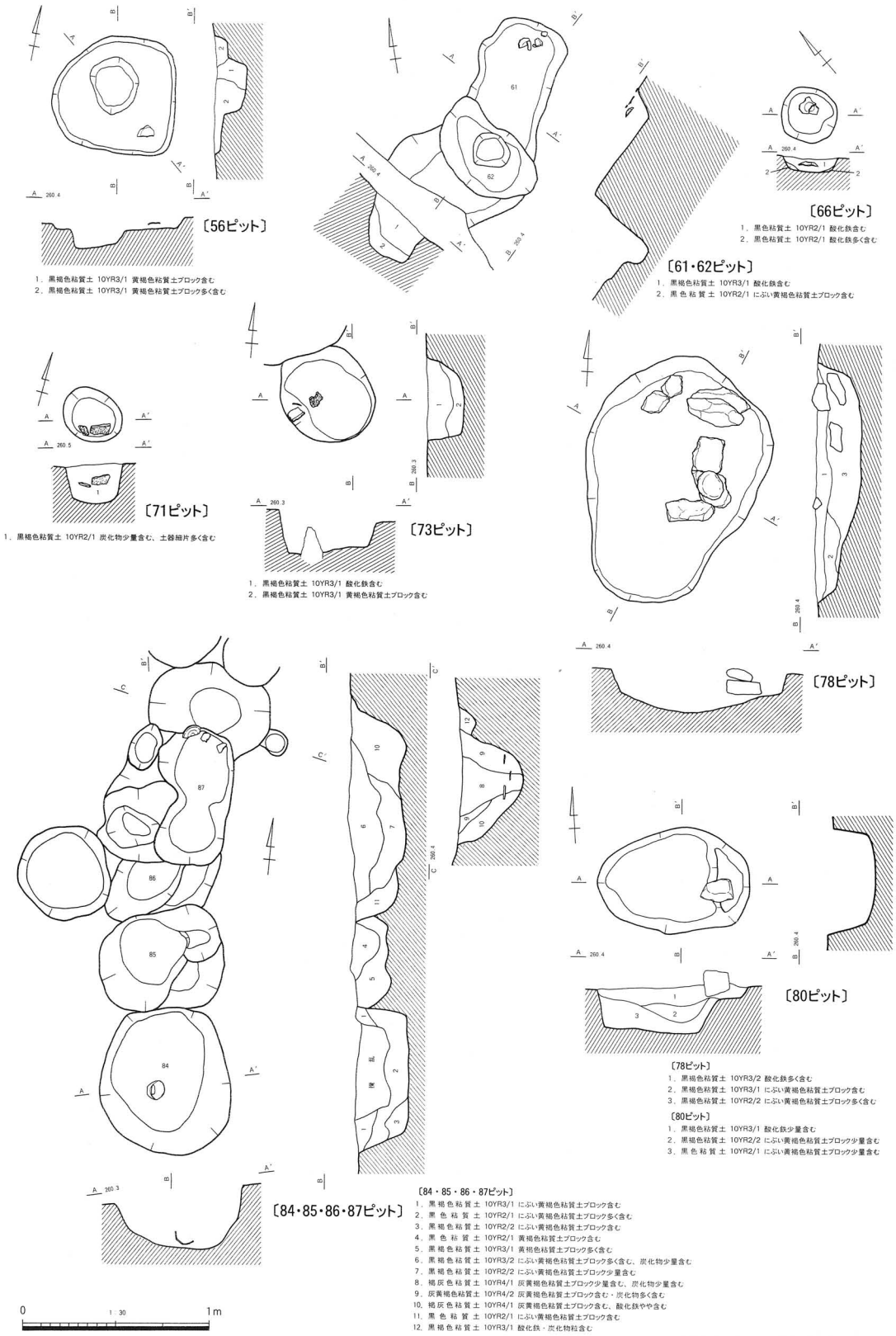
遺物は、甲斐型の坏を中心に出土しており（第30・31図59～81）、完形品はみられない。土器は甲斐型終末段階のもので、10世紀前半代～半ばのものと判断できる。



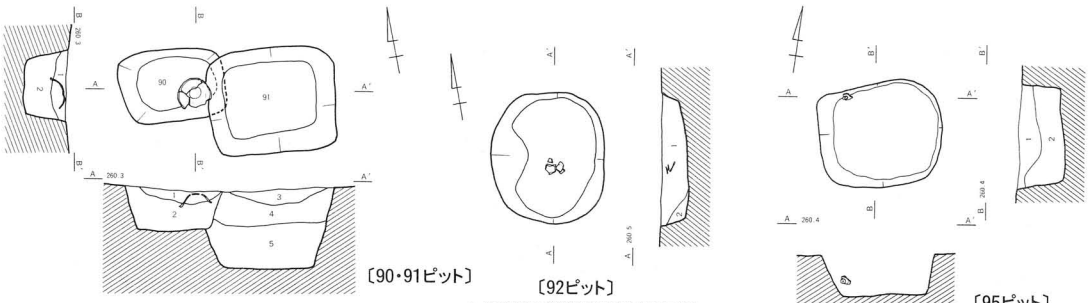
第22図　ピット①〔1：30〕



第23図　ピット②〔1：30〕



第24図　ピット③〔1：30〕

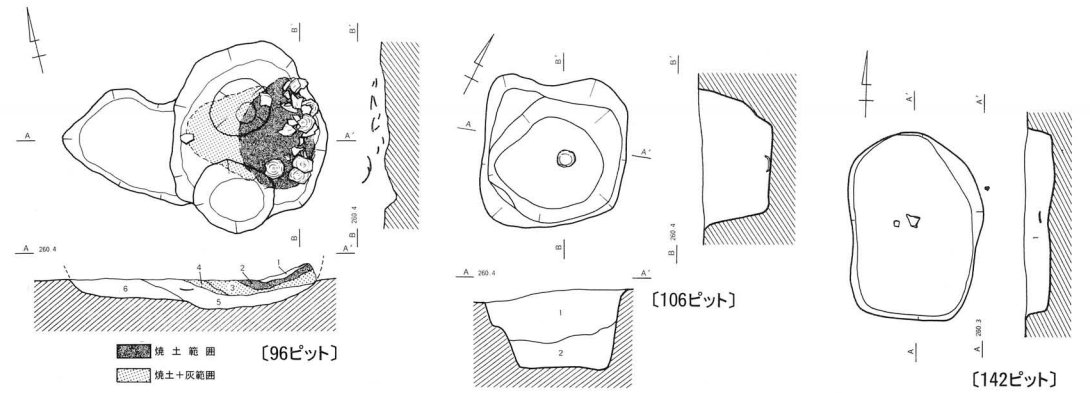


〔90・91ピット〕

〔92ピット〕

1．黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色粘質土小ブロック含む
2．黒褐色粘質土 10YR3/2 黄褐色粘質土ブロック含む

〔95ピット〕



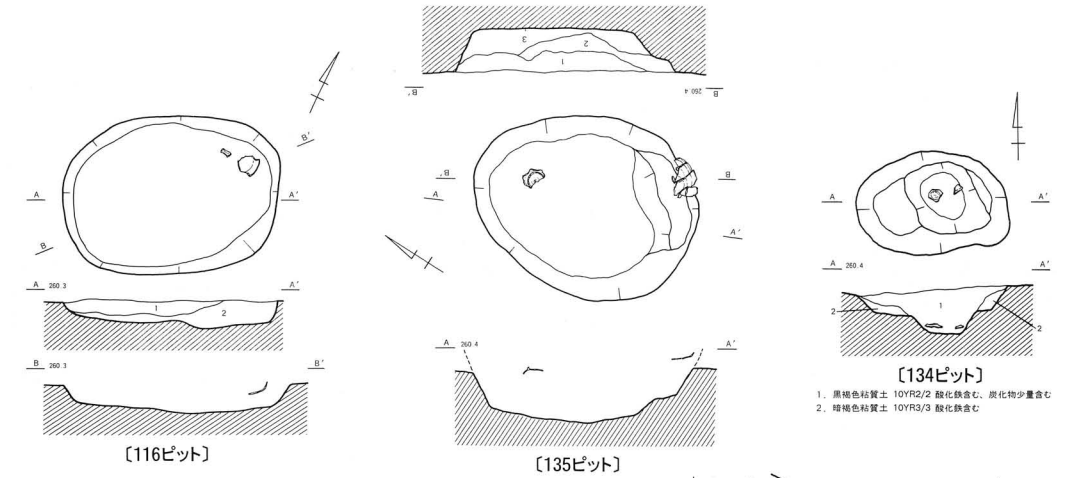
焼土範囲
焼土＋灰範囲

〔96ピット〕

〔106ピット〕

〔142ピット〕

1．褐灰色粘質土 10YR4/1 灰褐色粘質土ブロック・黒褐色粘質土ブロック含む

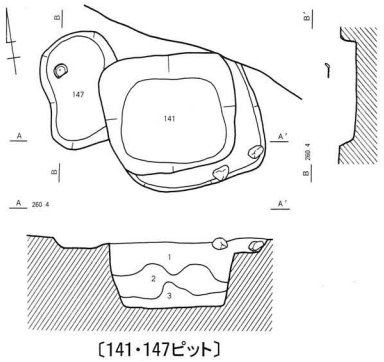


〔116ピット〕

〔135ピット〕

〔134ピット〕

1．黒褐色粘質土 10YR2/2 酸化鉄含む、炭化物少量含む
2．暗褐色粘質土 10YR3/3 酸化鉄含む



〔141・147ピット〕

〔90・91ピット〕
1．黒色粘質土 10YR2/1 酸化鉄多く含む
2．黒色粘質土 10YR2/1 にぶい黄褐色粘質土ブロック含む
3．黒褐色粘質土 10YR3/2 酸化鉄多く含む
4．黒色粘質土 10YR2/1 黄褐色粘質土小ブロック少量含む、酸化鉄多く含む
5．黒色粘質土 10YR2/1 黄褐色粘質土小ブロック少量含む、砂が混じる

〔95ピット〕
1．黒褐色粘質土 10YR3/2 酸化鉄多く含む
2．黒色粘質土 10YR2/1 酸化鉄少量含む

〔96ピット〕
1．黒褐色粘質土 10YR3/1 径2～3mmの焼土粒が混じる
2．焼　土
3．黒褐色粘質土 10YR2/2 焼土と灰が混じる
4．黒褐色粘質土 10YR2/2 焼土ブロック多く含む
5．黒褐色粘質土 10YR2/2 黄褐色粘質土ブロック多く含む
6．黒褐色粘質土 10YR3/2 酸化鉄・黄褐色粘質土ブロック含む

〔106ピット〕
1．黒褐色粘質土 7.5YR3/1 黒色粘質土ブロック・黄褐色粘質土ブロック含む
2．黒色粘質土 7.5YR2/1 黄褐色粘質土ブロック含む

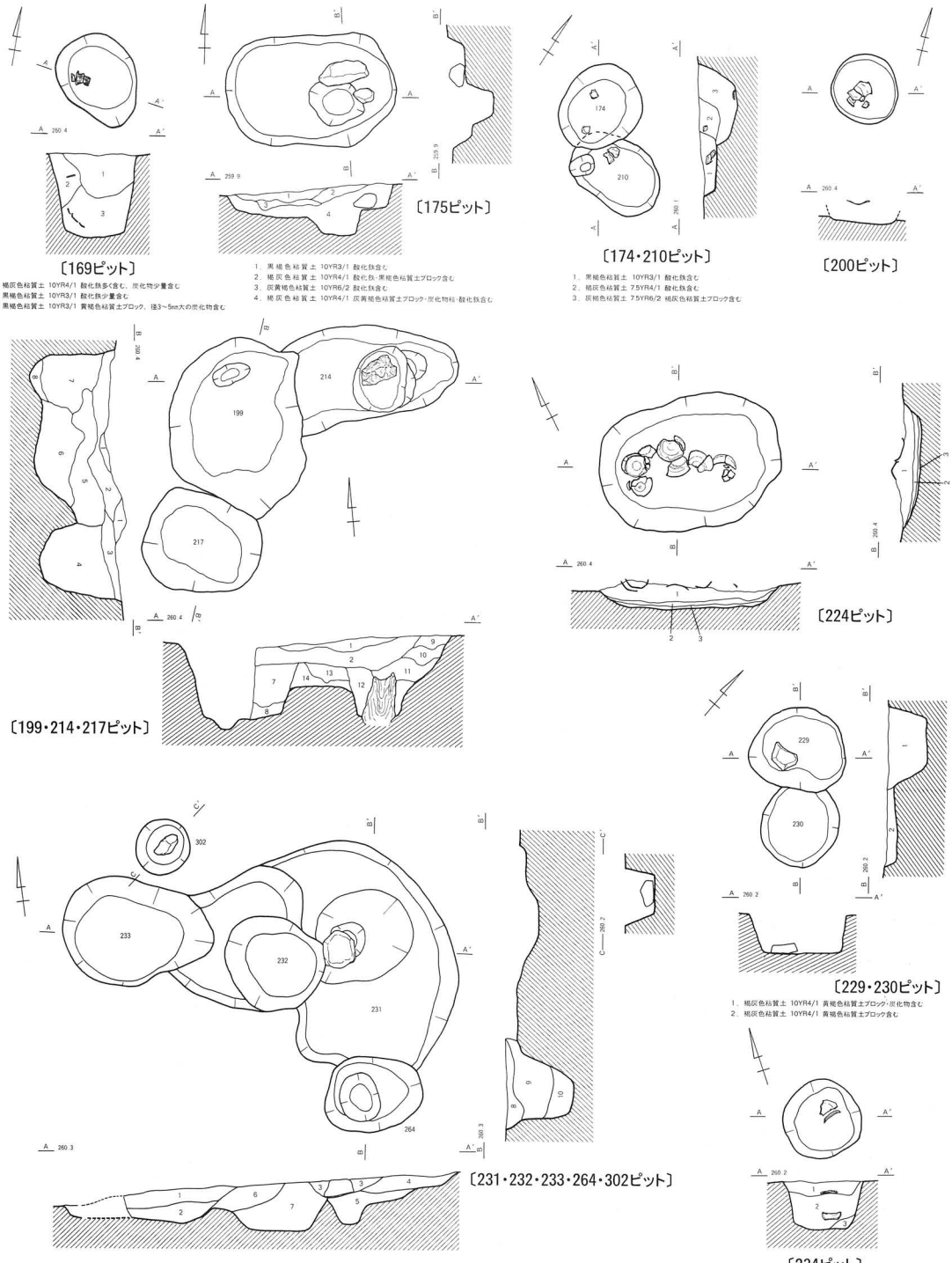
〔116ピット〕
1．黒褐色粘質土　10YR3/1 炭化物含む、酸化鉄少量含む
2．黒褐色粘質土　7.5YR3/1 炭化物やや多く含む、酸化鉄少量含む

〔135ピット〕
1．黒褐色粘質土 10YR2/2 酸化鉄含む
2．黒褐色粘質土 10YR2/2 酸化鉄多く含む
3．灰黄褐色粘質土 10YR4/2 にぶい黄褐色粘質土小ブロック含む

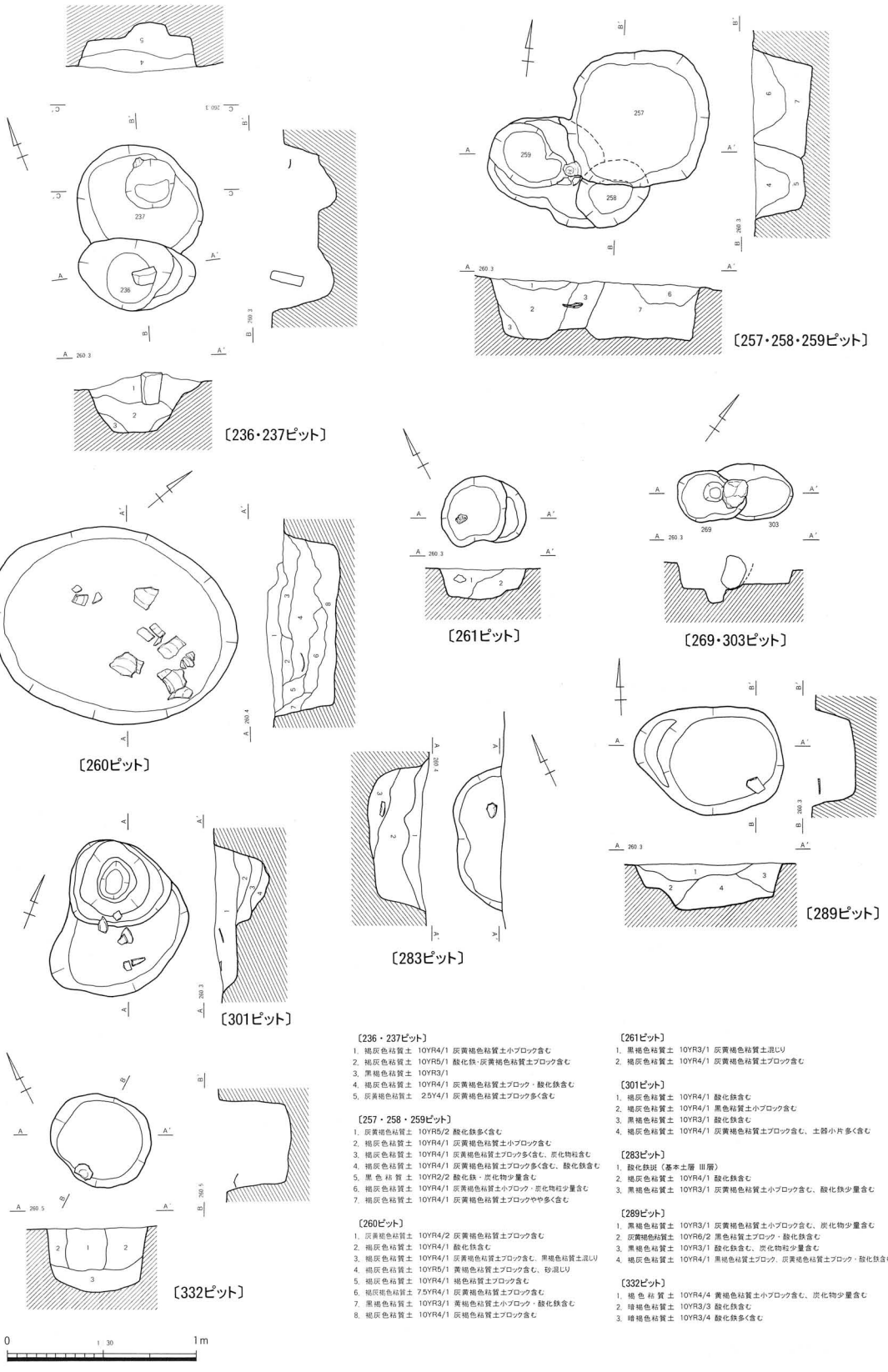
〔141・147ピット〕
1．褐灰色粘質土 10YR4/1 黄褐色粘質土小ブロック含む
2．黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色粘質土ブロック多く含む、炭化物少量含む
3．褐灰色粘質土 10YR4/1 やや大きめの黄褐色粘質土ブロック多く含む

0　1：30　1m

第25図　ピット④〔1：30〕



第26図　ピット⑤〔1：30〕



〔236・237ピット〕
1. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土小ブロック含む
2. 褐灰色粘質土　10YR5/1　酸化鉄・灰黄褐色粘質土ブロック含む
3. 黒褐色粘質土　10YR3/1
4. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロック・酸化鉄含む
5. 灰黄褐色粘質土　2.5Y4/1　灰黄褐色粘質土ブロック多く含む

〔257・258・259ピット〕
1. 灰黄褐色粘質土　10YR5/2　酸化鉄多く含む
2. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土小ブロック含む
3. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロック多く含む、炭化物粒含む
4. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロック多く含む、酸化鉄含む
5. 黒色粘質土　10YR2/2　酸化鉄・炭化物少量含む
6. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土小ブロック・炭化物粒少量含む
7. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロックやや多く含む

〔260ピット〕
1. 灰黄褐色粘質土　10YR4/2　灰黄褐色粘質土ブロック含む
2. 褐灰色粘質土　10YR4/1　酸化鉄含む
3. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロック含む、黒褐色粘質土混じり
4. 褐灰色粘質土　10YR5/1　黄褐色粘質土ブロック含む、砂混じり
5. 褐灰色粘質土　10YR4/1　褐色粘質土ブロック含む
6. 褐灰褐色粘質土　7.5YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロック含む
7. 黒褐色粘質土　10YR3/1　黄褐色粘質土小ブロック・酸化鉄含む
8. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰褐色粘質土ブロック含む

〔261ピット〕
1. 黒褐色粘質土　10YR3/1　灰黄褐色粘質土混じり
2. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロック含む

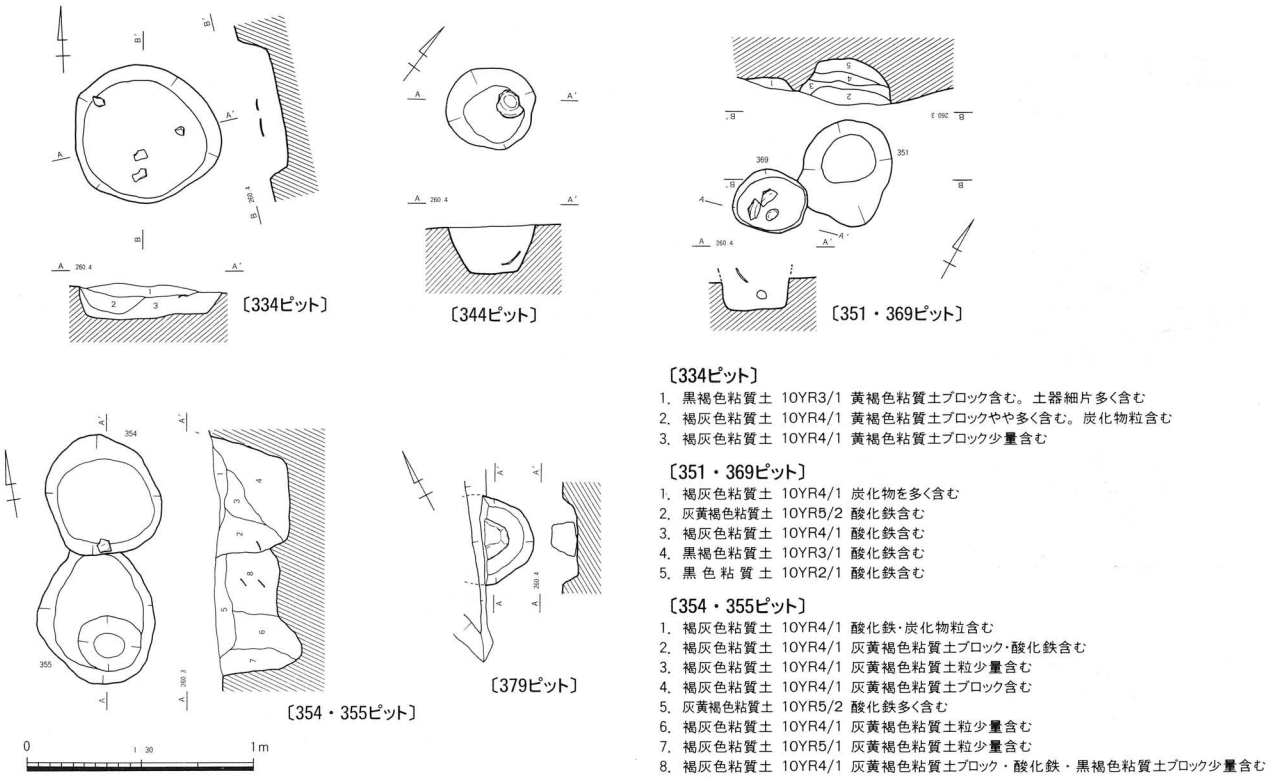
〔301ピット〕
1. 褐灰色粘質土　10YR4/1　酸化鉄含む
2. 褐灰色粘質土　10YR4/1　黒色粘質土小ブロック含む
3. 黒褐色粘質土　10YR3/1　酸化鉄含む
4. 褐灰色粘質土　10YR4/1　灰黄褐色粘質土ブロック含む、土器小片多く含む

〔283ピット〕
1. 酸化鉄斑（基本土層 III層）
2. 褐灰色粘質土　10YR4/1　酸化鉄含む
3. 黒褐色粘質土　10YR3/1　灰黄褐色粘質土小ブロック含む、酸化鉄少量含む

〔289ピット〕
1. 黒褐色粘質土　10YR3/1　灰黄褐色粘質土小ブロック含む、炭化物少量含む
2. 灰黄褐色粘質土　10YR6/2　黒色粘質土ブロック・酸化鉄含む
3. 黒褐色粘質土　10YR3/1　酸化鉄含む、炭化物粒少量含む
4. 褐灰色粘質土　10YR4/1　黒褐色粘質土ブロック、灰黄褐色粘質土ブロック・酸化鉄含む

〔332ピット〕
1. 褐色粘質土　10YR4/4　黄褐色粘質土小ブロック含む、炭化物少量含む
2. 暗褐色粘質土　10YR3/3　酸化鉄含む
3. 暗褐色粘質土　10YR3/4　酸化鉄多く含む

第27図　ピット⑥〔1：30〕



〔334ピット〕
1. 黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色粘質土ブロック含む。土器細片多く含む
2. 褐灰色粘質土 10YR4/1 黄褐色粘質土ブロックやや多く含む。炭化物粒含む
3. 褐灰色粘質土 10YR4/1 黄褐色粘質土ブロック少量含む

〔351・369ピット〕
1. 褐灰色粘質土 10YR4/1 炭化物を多く含む
2. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 酸化鉄含む
3. 褐灰色粘質土 10YR4/1 酸化鉄含む
4. 黒褐色粘質土 10YR3/1 酸化鉄含む
5. 黒色粘質土 10YR2/1 酸化鉄含む

〔354・355ピット〕
1. 褐灰色粘質土 10YR4/1 酸化鉄・炭化物粒含む
2. 褐灰色粘質土 10YR4/1 灰黄褐色粘質土ブロック・酸化鉄含む
3. 褐灰色粘質土 10YR4/1 灰黄褐色粘質土粒少量含む
4. 褐灰色粘質土 10YR4/1 灰黄褐色粘質土ブロック含む
5. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 酸化鉄多く含む
6. 褐灰色粘質土 10YR4/1 灰黄褐色粘質土粒少量含む
7. 褐灰色粘質土 10YR5/1 灰黄褐色粘質土粒少量含む
8. 褐灰色粘質土 10YR4/1 灰黄褐色粘質土ブロック・酸化鉄・黒褐色粘質土ブロック少量含む

第28図　ピット⑦〔1：30〕

〔224号ピット〕（第26図）

土器（土師器）焼成遺構ではないかもしれないが、わずかな可能性を残しているのでここで挙げておく。

Ｅ－６グリッド南西隅で検出されており、平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸0.90m、短軸0.65m、深さは現状で10cmを測る。焼土等は特にみられないが、底面の直上層である第３層の灰黄褐色粘質土中には、多量の炭化物が混入し、第１層にも炭化物が混じっている。土器は底面上約８cmのレベルの第１層上面で、重ねられた状態で出土している。土器は９世紀半ば頃のものと判断できる（第32図123～131）。

【土器埋納遺構】

〔66号ピット〕（第24図）

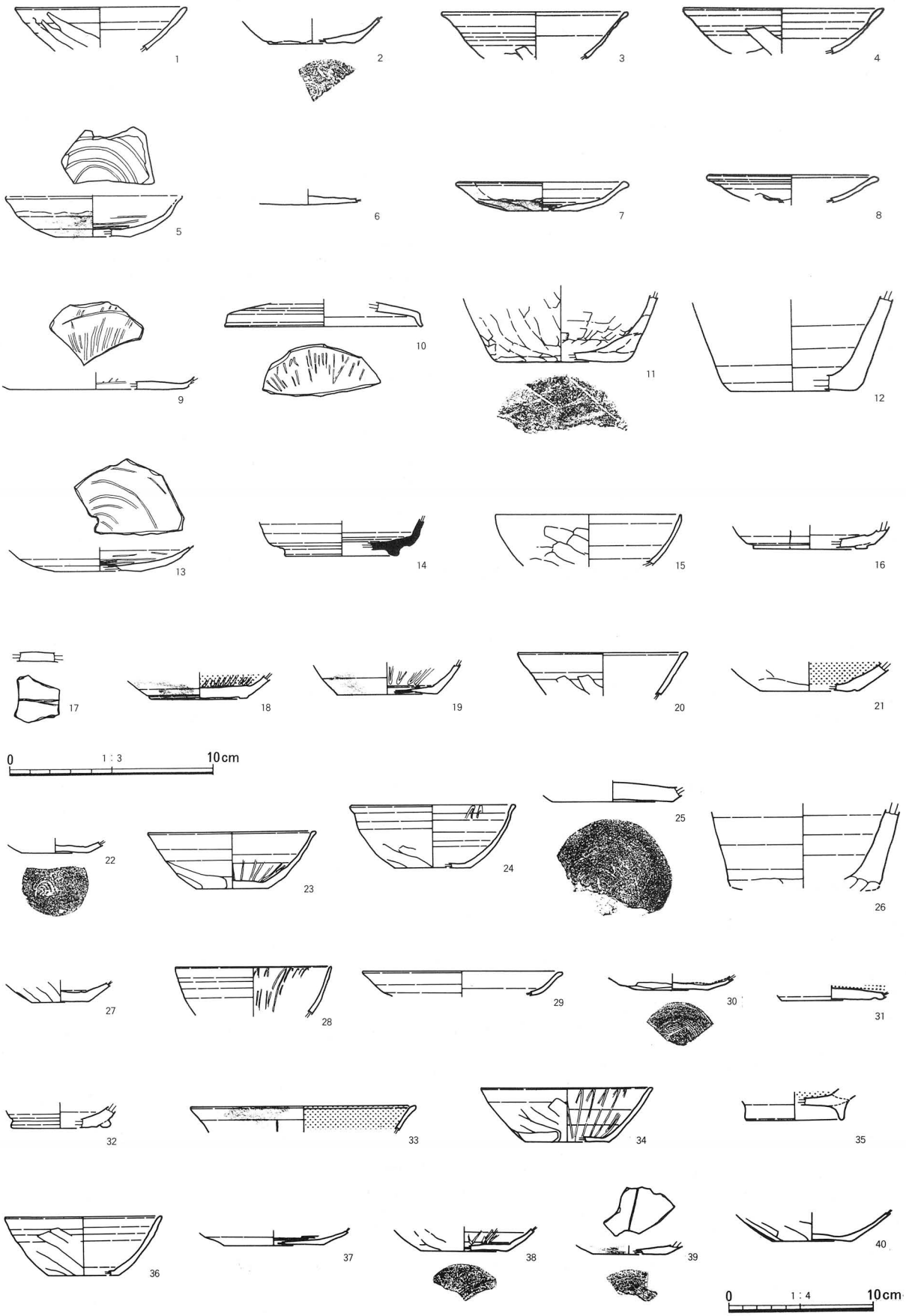
Ｃ－５グリッド南西部で検出されており、67号ピットが隣接している。平面形態は不整円形を呈し、規模は長軸30cm、短軸29cm、深さは現状で７cmを測る。覆土は黒色粘質土である。土器は口縁部のほとんどを打ち欠いた坏が、ピット内のやや北北西寄りの位置から、倒置の状態で底面上４cmのレベルで出土している。土器は10世紀前半代のものと判断できる（第30図42）。

〔84号ピット〕（第24図）

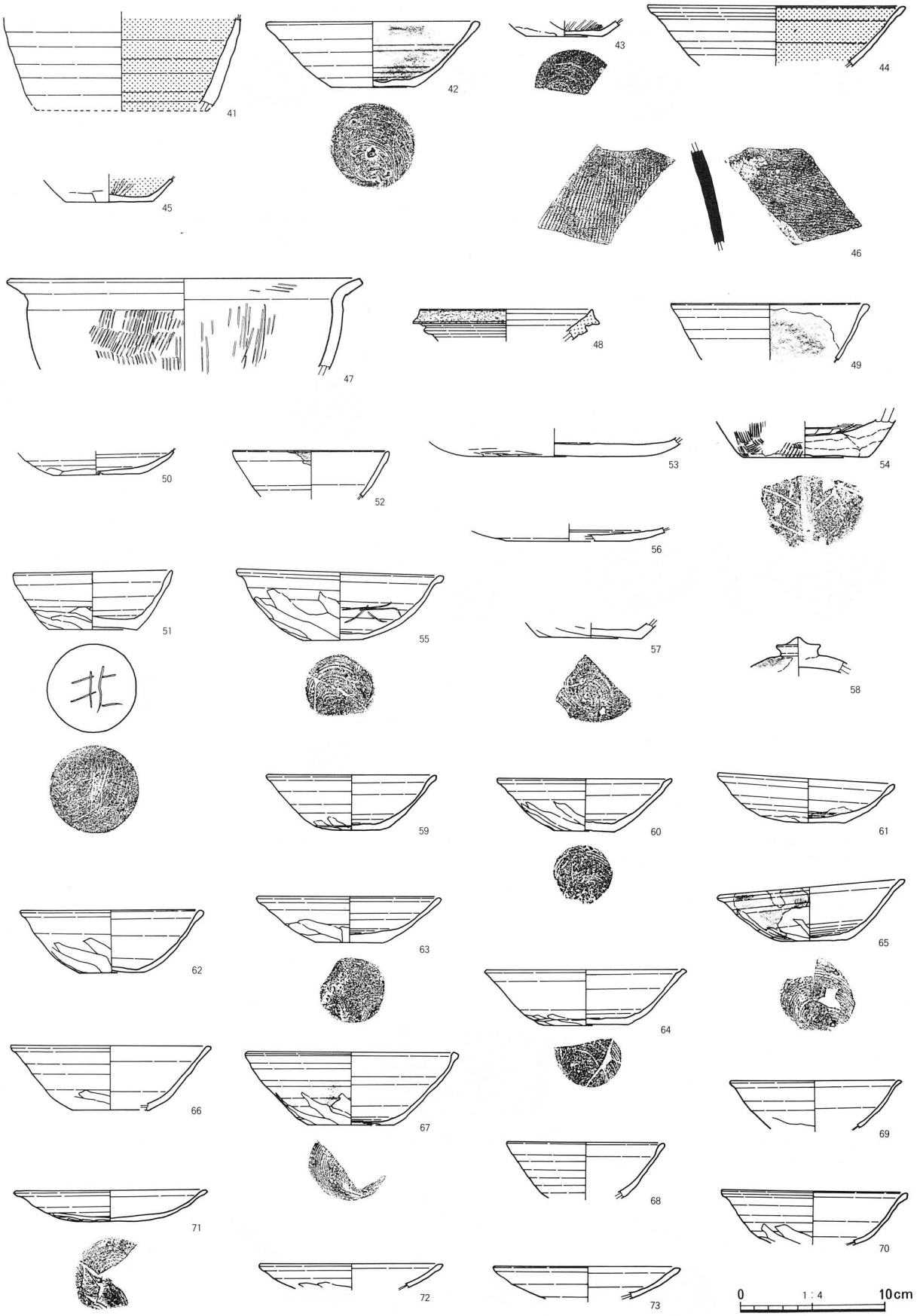
Ｄ－４グリッド北東隅付近で検出されており、87・142・175・176・201号ピット等と関連して、掘立柱建物の掘り方になる可能性もある。平面形態は不整円形を呈し、規模は長軸79cm、短軸70cm、深さは最深部で29cmを測り、形態・規模からすれば土坑としてもいいだろう。覆土はその上部は撹乱をうけており、黒褐色粘質土を主体としている。ピット内中央のやや南寄りの底面付近から、完形の甲斐型の坏が正置の状態で出土している。この坏の底部外面には「北」と記された線刻文字がみられる（第30図51）。土器は９世紀半ば頃のものと判断できる。

〔90号ピット〕（第25図）

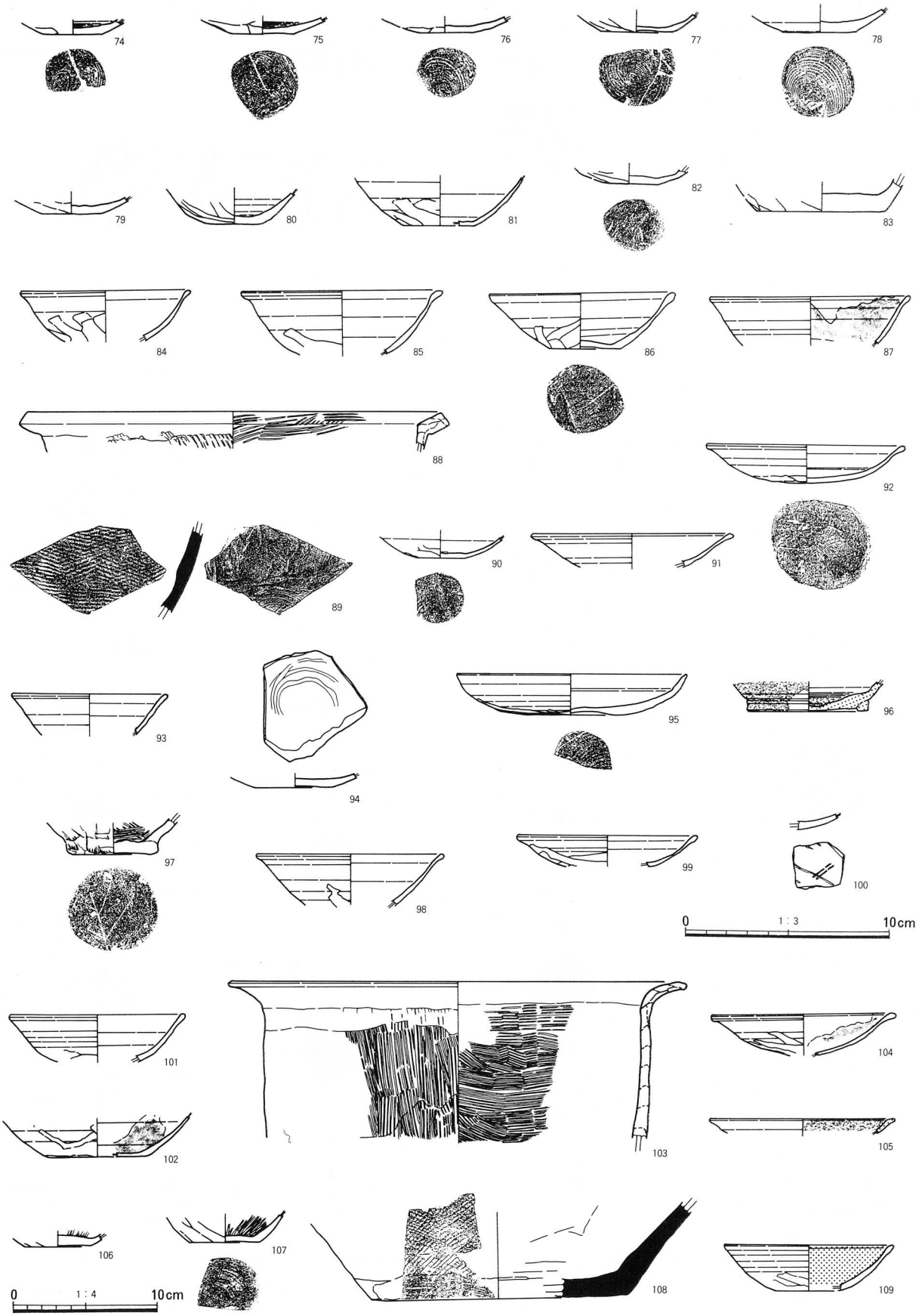
Ｄ－５グリッド中央南側で検出されており、91号ピットと重複し、同ピットを切っている。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西47cm、南北32cm、深さは現状で18cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。土器はピッ



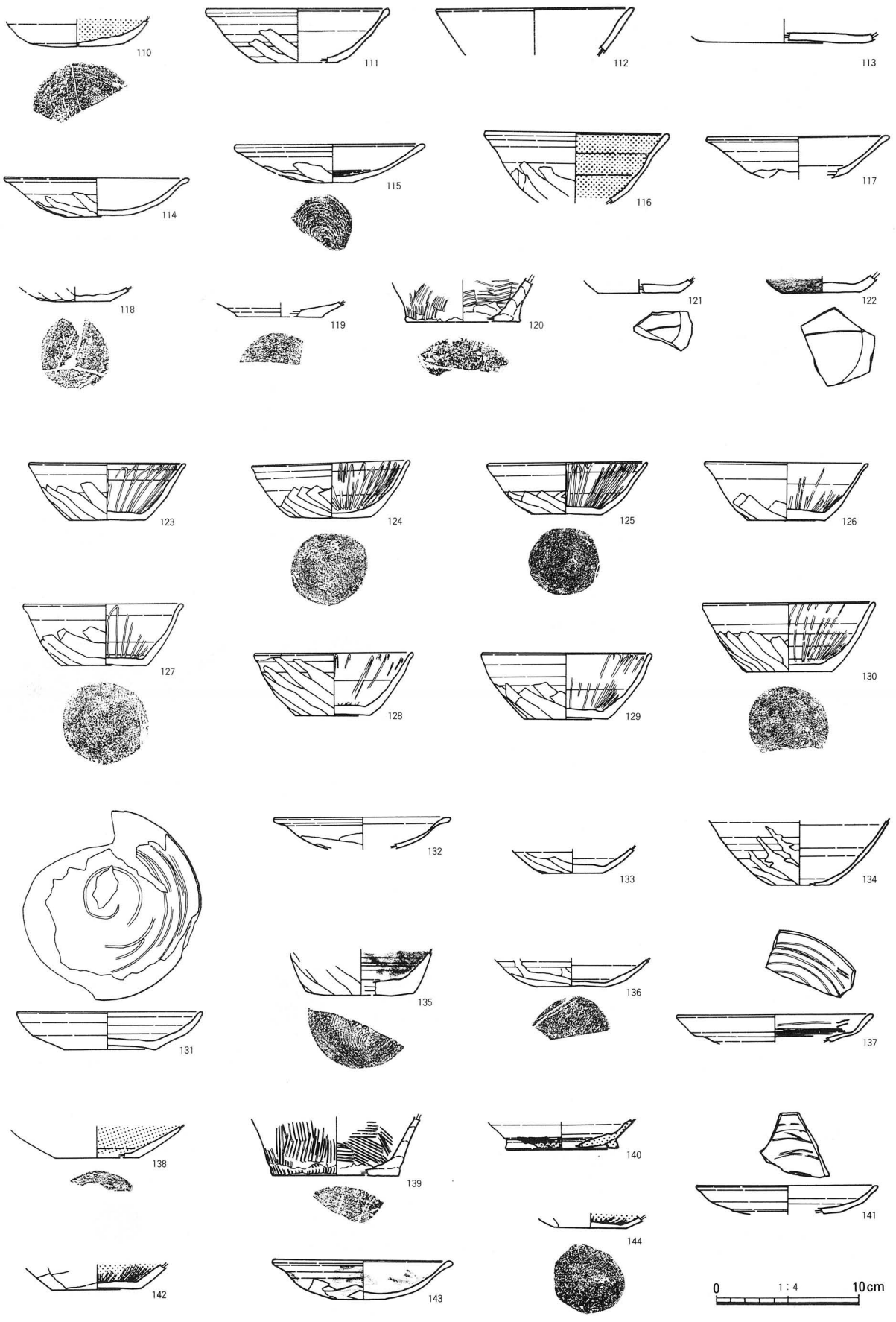
第29図　ピット出土遺物①〔1：4、17のみ1：3〕



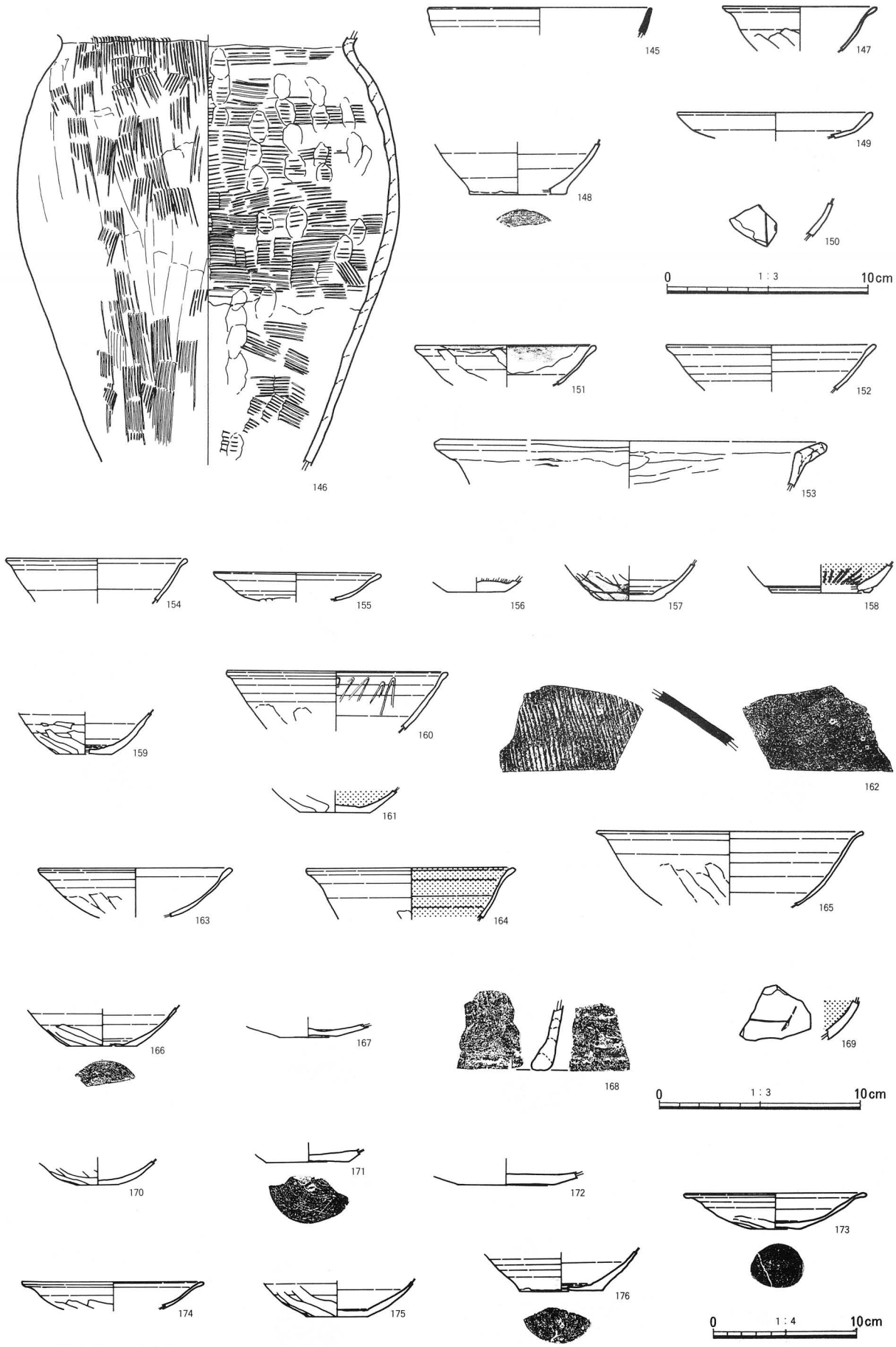
第30図　ピット出土遺物②〔1：4〕



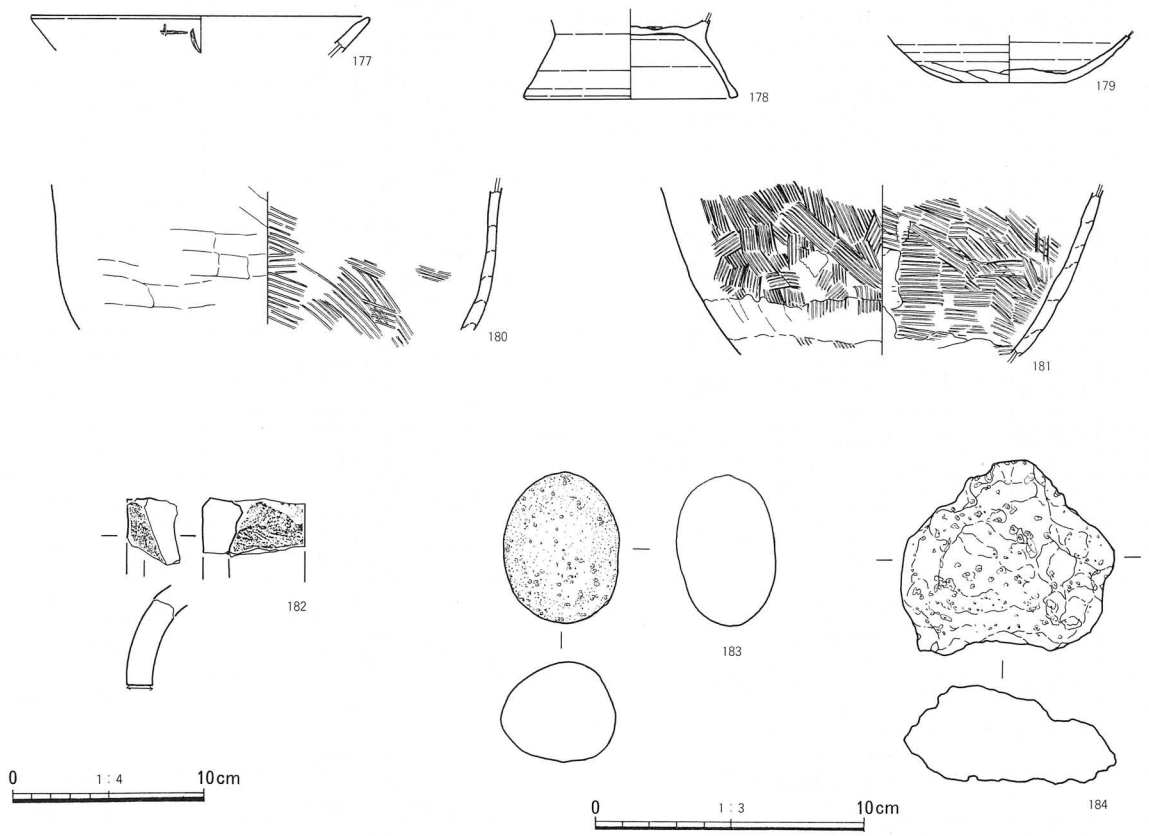
第31図　ピット出土遺物③〔1：4、100のみ1：3〕



第32図　ピット出土遺物④〔1：4〕



第33図　ピット出土遺物⑤〔1：4、150・169は1：3〕



第34図　ピット出土遺物⑥〔177～182は1：4、183・184は1：3〕

ト内の南東隅の、底面上約10cmのレベルから、倒置の状態で出土している。土器は口縁部の一部を欠いているが、故意に打ち欠いたものなのかどうかは不明である。土器は10世紀後半代のものと判断できる（第30図55）。

〔106号ピット〕（第25図）

Ｅ－５グリッド南西側、６号溝状遺構に近接して検出されている。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西63cm、南北67cm、深さは現状で35cmを測り、覆土は黒褐色粘質土を主体としている。ピット内ほぼ中央の底面から土師器甕の底部が正置の状態で出土している。土器の年代は不明である（第31図83）。

〔344号ピット〕（第28図）

Ｅ－７グリッド南西側で検出されており、343・345号ピット等と近接している。平面形態は不整円形を呈し、規模は長軸39cm、短軸36cm、深さは現状で21cmを測り、覆土は黒褐色粘質土の単一層である。土器は脚高高台土器の身部を欠いた脚部のみが、ピットの北北西反面に接するように、倒置の状態で底面上約４cmのレベルから出土している。土器は11世紀前葉のものと判断できる（第34図178）。

第10表　ピット出土遺物観察表（土器）

〔法量は上から口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値を示す〕

番号	ピット名	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	4	土師器 坏	(12.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
2	4	土師器 坏	— (6.0) —	外面：底部回転糸切り 内面：ロクロナデ　内外面共器面の摩滅著しい	灰白色	やや粗 赤・白色粒子	良好	反転
3	5	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙～橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
4	6	土師器 坏	(14.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	反転
5	6	土師器 皿	(12.4) (5.0) (2.9)	外面：体・底部回転ヘラ削り，黒変 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	明褐色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
6	8	土師器 ？	— — —	外面：底部ヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	底部破片
7	13	土師器 皿	(12.0) (5.0) 2.05	外面：体・底部手持ちヘラ削り，黒変 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.5　一括．反転
8	13	土師器 皿	(12.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子，小礫	良好	No.1　反転
9	15	土師器 坏	— (12.0) —	外面：体部横位手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，みこみ部にも暗文あり	橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
10	15	土師器 蓋	(14.0) — —	外面：ロクロナデ，回転ナデ 内面：ロクロナデ，暗文	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.4　反転
11	15	土師器 甕	— (9.0) —	外面：ヘラ削り，ナデ，底部木葉痕 内面：ヘラ削り	黄橙色	やや粗 赤・白色粒子，小礫	良好	No.5　反転
12	15	土師器 甕	— (9.0) —	外面：ヨコナデ，底部ヘラ削り 内面：ロクロナデ	褐色	密 やや粗 赤・白・黒色粒子	良好	No.6　反転
13	16	土師器 皿	— (6.0) —	外面：底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	黄橙色	緻密 白色粒子	良好	No.2　反転
14	29	須恵器 高台坏	— (8.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転ナデ 内面：ロクロナデ	灰色	密 白色粒子	良好	No.1　貼付高台　反転
15	39	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
16	39	土師器 高台坏	— (8.0) —	外面：回転ヘラ削り，底部ナデ 内面：ロクロナデ	外面 灰白色 内面 にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	貼付高台　反転 体外に線刻あり
17	39	土師器 坏	— — —	外面：底部ヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	底・外にヘラ書あり
18	44	黒色土器 高台坏	— (6.6) —	外面：体・底部回転ヘラ削り，削り出し高台 内面：ロクロナデ，暗文，内面黒色	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.1　反転 黒色化が一部外面までおよんでいる
19	45	土師器 坏	— (7.0) —	外面：回転ヘラ削り，黒変，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.1　反転
20	46	土師器 坏	(6.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
21	46	黒色土器 坏	— (7.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
22	46	土師器 坏	— (4.6) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙～橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
23	47	土師器 坏	(11.8) (5.0) 4.05	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文，内外器面の摩滅著しい	黄橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.4　反転
24	48	土師器 坏	(11.6) (5.4) 4.5	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文，内面摩滅している	褐色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
25	50	土師器 坏	— (8.4) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.2　反転
26	50	土師器 甕	— — —	外面：ロクロナデ，ヘラ削り 内面：ロクロナデ	褐色	やや粗 白・黒色粒子，小礫	良好	No.1　反転
27	55	土師器 坏	— 4.0 —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	粗 赤・白色粒子，小礫	良好	No.1
28	58	土師器 坏	(11.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，暗文	灰白色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
29	59	土師器 皿	(14.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	やや粗 赤・白・黒色粒子	良好	反転
30	60	土師器 皿	— (5.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り，底部黒変 内面：ロクロナデ，器面剥離	黄橙色	緻密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	反転
31	60	黒色土器 高台坏	— (7.0) —	外面：体・底部回転ヘラ削り，削り出し高台 内面：ロクロナデ，内面黒色	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
32	60	土師器 高台坏	— (7.0) —	外面：ロクロナデ，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	貼付高台　反転
33	61	黒色土器 坏	(16.0) — —	外面：ロクロナデ，黒変 内面：ロクロナデ，内面黒色	灰白色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転 体外に線刻あり
34	63	土師器 坏	(12.0) (6.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
35	63	黒色土器 高台坏	— (7.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転ナデ 内面：ロクロナデ，内面黒色	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	貼付高台　反転
36	64	土師器 坏	(11.0) (5.0) 4.2	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
37	64	土師器 皿	— (7.0) —	外面：ロクロナデ，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい黄橙色	緻密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	反転

番号	ピット名	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
38	64	土師器 坏	— (6.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ，暗文	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
39	64	土師器 皿	— (5.0) —	外面：手持ちヘラ削り，黒変している，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	底内にヘラ書あり 反転
40	65	土師器 坏	— (5.6) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい 黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
41	66	黒色土器 鉢?	— — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，内面黒色	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
42	66	土師器 坏	(15.0) 6.0 4.6	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ，黒変している	灰白色	やや粗 赤・白色粒子，小礫	良好	反転
43	67	土師器 坏	— 5.2 —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
44	67	黒色土器 坏	(18.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，内面黒色	褐色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
45	67	黒色土器 坏	— (6.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
46	71	須恵器 甕	— — —	外面：タタキ目 内面：タタキ目	青灰色	密 白色粒子，小礫	良好	No.1
47	73	土師器 甕	(25.0) — —	外面：ヨコナデ，ハケ目 内面：ハケ，ナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.1　反転
48	78	灰釉陶器 壷	(12.0) — —	外面：ロクロナデ，自然釉 内面：ロクロナデ	灰色	密 白・黒色粒子	良好	反転
49	82	土師器 坏	(14.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，内面黒変	浅黄橙色	密 赤・白色粒子，小礫	良好	反転
50	82	土師器 皿	— (6.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
51	84	土師器 坏	11.2 6.0 4.1	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後周辺手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	完形　底外に線刻「北」
52	84	土師器 坏	(11.0) — —	外面：ロクロナデ，黒変 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
53	87	土師器 盤状坏	— — —	外面：手持ちヘラ削り，ナデ 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 白色粒子，雲母 赤色粒子多い	良好	No.3　反転
54	87	土師器 甕	— (9.0) —	外面：ハケ目，底部木葉痕 内面：ヘラ削り	にぶい 黄褐色	やや粗 赤・白・黒色粒子 雲母，小礫	良好	反転
55	90	土師器 坏	14.6 4.2 4.8	外面：手持ちヘラ削り，外面表面剥離，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	No.1　器形ややゆがむ 体内に線刻「大」
56	90	土師器 皿	— (8.6) —	外面：回転ヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.1　反転
57	95	土師器 坏	— (7.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
58	95	土師器 蓋	— — —	外面：ロクロナデ，回転ヘラ削り，黒変 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.1　反転
59	96	土師器 坏	(12.0) 4.1 3.9	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	反転
60	96	土師器 坏	(13.0) 4.1 3.75	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後周辺手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.1　一括　反転
61	96	土師器 皿	(12.0) 6.1 3.1	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒変	浅黄橙色	密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	器形ゆがむ　反転
62	96	土師器 坏	(13.0) 4.8 4.4	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい 黄橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.12.14 一括　反転
63	96	土師器 坏	(13.0) 4.8 3.3	内面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 外面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	No.10.16 一括　反転
64	96	土師器 坏	(14.0) (5.8) 3.85	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	No.17　一括　反転
65	96	土師器 坏	(13.0) 4.6 3.9	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	器形ゆがむ
66	96	土師器 坏	(14.0) 5.4 4.5	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面荒れている	黄橙色	密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	反転
67	96	土師器 坏	(15.0) (6.0) 5.15	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，黒変，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	にぶい 赤褐色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.4.6.11.19 一括　反転
68	96	土師器 坏	(11.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.21　反転
69	96	土師器 坏	(12.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，器面荒れている 内面：ロクロナデ	暗褐色	密 赤・白色粒子	良好	No.9　反転
70	96	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	反転
71	96	土師器 皿	(13.6) — 2.15	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面摩滅している	赤褐色	密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	
72	96	土師器 皿	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
73	96	土師器 皿	(13.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.8　反転
74	96	土師器 坏	— (4.0) —	外面：手持ちヘラ削り，回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	灰白色	密 赤・白色粒子	良好	反転
75	96	土師器 皿	— 4.4 —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	

番号	ピット名	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
76	96	土師器 皿?	— (3.6) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	外 灰白色 内 にぶい橙色	密 赤色粒子，雲母	良好	No.5
77	96	土師器 坏	— (5.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	褐色	やや粗 赤・白色粒子 小礫	良好	反転
78	96	土師器 坏	— 5.0 —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.3
79	96	土師器 皿	— (4.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	
80	96	土師器 坏	— 4.0 —	外面：体・底部手持ちヘラ削り，外面摩滅している 内面：ロクロナデ	暗褐色	密 赤・白色粒子	良好	No.6 No.9と同一個体?
81	96	土師器 坏	— (5.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面摩滅している	赤褐色	密 赤・白色粒子	良好	反転
82	103	土師器 皿	— (3.8) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り，底部わずか回転糸切り痕 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	
83	106	土師器 甕	— (9.0) —	外面：体・底部ヘラ削り，底部外面黒変している 内面：ロクロナデ	褐色	粗 赤・白・黒色粒子 雲母	良好	No.1
84	113	土師器 坏	(12.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
85	113	土師器 坏	(14.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	やや粗 赤・白色粒子，小礫	良好	反転
86	114	土師器 坏	(13.0) 5.0 3.9	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	やや軟質	底外にヘラ書あり 反転
87	114	土師器 坏	(14.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，黒変	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
88	114	土師器 甕	(30.0) — —	外面：ヨコナデ，ハケ目 内面：ハケ目	褐色	やや粗 赤・白・黒色粒子 雲母，小礫	良好	反転
89	114	須恵器 甕	— — —	外面：タタキ目 内面：ハケナデ	灰色	密 白色粒子	良好	
90	115	土師器 坏	— (3.4) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子 白色粘土混入	やや軟質	反転
91	115	土師器 皿	(14.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子 白色粘土混入	やや軟質	内外面共荒れている 反転
92	116	土師器 皿	(11.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい 黄橙色	緻密 赤・白色粒子	やや軟質	No.1　反転
93	134	土師器 坏	(11.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 白色粒子 赤色粒子多い，雲母	良好	No.1　反転
94	134	土師器 皿	— (5.4) —	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	外 浅黄橙色 内 橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.2　反転
95	135	土師器 皿	(16.0) (6.0) 2.9	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.2　反転
96	135	灰釉陶器 壷	— (8.5) —	外面：ロクロナデ，底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	灰色	密 白色粒子，小礫	良好	No.1
97	147	土師器 甕	— (6.3) —	外面：ヘラ削り，ナデ，底部木葉痕 内面：ハケ目	褐色	やや粗 赤・白色粒子 雲母，小礫	良好	反転
98	158	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黒褐色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
99	160	土師器 皿	(12.6) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 白色粒子赤色粒子多い 白色粘土混入	良好	反転
100	165	土師器 坏?	— — —	外面：ヘラ削り，外面ヘラ書 内面：ロクロナデ	にぶい 黄褐色	緻密 赤・白色粒子	良好	
101	169	土師器 坏	(12.4) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	密 赤・白色粒子，小礫	良好	反転
102	169	土師器 坏	— (7.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，黒変	浅黄橙色	緻密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	反転
103	169	土師器 甕	(32.0) — —	外面：ヨコナデ，ハケ目，スス付着 内面：ヨコナデ，ハケ目	灰黄色	やや粗 赤・白・黒色粒子	良好	反転
104	170	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，黒変	黄橙色	緻密 白色粒子，雲母 赤色粒子多い	良好	反転
105	170	灰釉陶器 皿	(13.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，釉	灰白色	密 やや粗 赤・白色粒子	良好	反転
106	174	土師器 坏	— (4.6) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.1　反転
107	174	土師器 坏	— (5.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	緻密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	No.2　反転
108	174	須恵器 甕	— (18.0) —	外面：タタキ目，ヘラ削り，底部ヘラ削り 内面：ヘラナデ	灰色	やや粗 白色粒子，小礫	良好	No.3.4　反転
109	180	黒色土器 坏	(12.0) 4.6 3.3	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	灰黄色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
110	189	黒色土器 坏	— (6.8) —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ，内面黒色	灰黄色	やや粗 赤・白色粒子	良好	甲斐型ではない 反転
111	197	土師器 坏	(13.0) (5.4) 3.85	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，摩滅している	赤褐色	緻密 白色粒子 赤色粒子多い	良好	反転
112	199	土師器 坏	(14.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
113	199	土師器 坏	— (12.0) —	外面：ロクロナデ，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転

番号	ピット名	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
114	200	土師器 皿	(13.2) 4.5 2.8	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	やや粗 赤・白・黒色粒子 小礫	不良	No.1 内外面共部分的生焼状態
115	200	土師器 皿	(13.0) 3.1 2.75	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	橙色	密 白色粒子，雲母 赤色粒子多い	やや不良	No.1 内面やや生焼状態
116	211	黒色土器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	浅黄橙色	密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	ヘラ削りが乱暴　反転
117	213	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，表面やや荒れている 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	やや粗 赤・白色粒子	良好	反転
118	213	土師器 坏	— (5.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	反転 底外に線刻
119	214	土師器 皿	— (6.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り後ヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	内外面共荒れている 反転
120	214	土師器 甕	— (8.0) —	外面：ハケ目，底部木葉痕 内面：ハケ目，ヘラ削り	黄褐色	やや粗 赤・白・黒色粒子，雲母	良好	反転
121	223	土師器 坏	— (4.0) —	外面：体・底部ヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	底外に線刻　反転
122	223	土師器 坏	— (4.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り，黒変 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	底外に線刻　反転
123	224	土師器 坏	(11.2) 5.4 4.1	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.1　一括 器面やや荒れている
124	224	土師器 坏	(11.0) 5.8 3.95	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	黄橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.6　ほぼ完形 器面やや荒れている
125	224	土師器 坏	(11.4) 5.0 3.7	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.5，7，8　一括 ほぼ完形 器面荒れている
126	224	土師器 坏	(11.6) 5.4 4.15	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	No.5　一括　反転 器面荒れている
127	224	土師器 坏	(11.4) (6.0) 4.4	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	黄橙	密 赤・白色粒子	良好	No.8　反転 器面荒れている
128	224	土師器 坏	(11.2) 5.2 4.5	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	密 白色粒子，小礫 赤色粒子多い	良好	No.2　一括　反転 器面荒れている
129	224	土師器 坏	(12.0) (6.0) 4.75	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	黄橙色	密 赤・白色粒子，雲母 白色粘土混入	良好	No.2.5　反転 器面荒れている
130	224	土師器 坏	(12.2) (6.0) 4.9	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 白色粒子，雲母 赤色粒子多い	良好	No.3　反転 器面荒れている
131	224	土師器 皿	(13.3) 6.6 2.7	外面：ロクロナデ，回転ヘラ削り，底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，同心円状暗文，内面剥離	橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.4　反転
132	229	土師器 皿	(12.6) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	器面荒れている 反転
133	231	土師器 坏	— (4.2) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	やや粗 赤・白色粒子，小礫	良好	反転
134	231	土師器 坏	— (4.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
135	234	土師器 甕	— (7.6) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後周辺手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，黒変	橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.2　反転
136	234	土師器 皿	— (5.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	密 赤・白色粒子	やや良好 若干生焼の状態	No.1　一括　反転
137	237	土師器 皿	(14.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，同心円状暗文	にぶい橙色	やや粗 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
138	237	黒色土器 坏	— (6.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り後ヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	器面荒れている　反転
139	237	土師器 甕	— (9.0) —	外面：ハケ目，底部木葉痕 内面：ハケ目	暗褐色	やや粗 白・黒色粒子	良好	No.1　反転
140	240	灰釉陶器 壷	— (8.0) —	外面：ロクロナデ，底部ロクロナデ 内面：ロクロナデ	灰色	密 赤・白色粒子	良好	反転
141	257	土師器 皿	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
142	257	黒色土器 坏	— (6.4) —	外面：手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文，内面黒色	褐色	密 赤・白色粒子	良好	反転
143	259	土師器 皿	(12.8) 3.6 2.8	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	粗 赤・白色粒子 砂礫多い	良好	No.1 内外面に黒変あり
144	259	黒色土器 坏	— (5.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文，内面黒色	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
145	260	須恵器 坏	(16.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	灰色	密 白・黒色粒子	良好	No.7　反転
146	260	土師器 甕	— — —	外面：ハケ目 内面：ハケ目，指頭圧痕	茶褐色	やや粗 赤・白・黒色粒子 小礫	良好	No.1.3～6.8～12 一括　反転
147	261	土師器 坏	(11.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.2　反転 器面荒れている
148	261	土師器 坏	— (7.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	器面荒れている　反転
149	263	土師器 皿	(14.0) — —	外面：ロクロナデ，外面摩滅している 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転
150	270	土師器 坏	— — —	外面：手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密	良好	体外に線刻あり
151	280	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	灰白色	密 赤・白色粒子	やや良好	内外面に黒変あり 反転

番号	ピット名	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
152	280	土師器 坏	(15.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
153	280	土師器 甕	(28.0) — —	外面：ヨコナデ，ヘラ削り 内面：ヨコナデ，ヘラ削り	暗褐色	やや粗 白・黒色粒子，小礫	良好	反転
154	280	土師器 坏	(13.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	器面あれている 反転
155	280	土師器 皿	(12.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	灰白色	密 赤・白色粒子，雲母	やや良好	反転
156	280	土師器 坏	— (4.2) —	外面：体部不明，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	やや粗 赤・白色粒子，雲母	良好	器面荒れている 反転
157	282	土師器 坏	— (4.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面摩滅している	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	体部～底部にかけ黒変 外面剥離
158	282	黒色土器 高台坏	— (7.0) —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，暗文，内面黒色	内 灰色 外 にぶい橙色	やや粗 赤・白色粒子	良好	貼付高台　反転
159	283	土師器 坏	— (4.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.1　反転
160	289	土師器 坏	(16.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	
161	289	黒色土器 坏	— (5.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ナデ，内面黒色	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
162	289	須恵器 甕	— — —	外面：タタキ目 内面：ナデ	灰色	密 赤・白色粒子	良好	No.1
163	297	土師器 坏	(14.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
164	297	黒色土器 坏	(15.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内面黒色	灰白色	密 赤・白色粒子	やや不良	反転
165	301	土師器 坏	(19.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄褐色	緻密 赤・白色粒子	良好	No.1　反転 内外面剥離し荒れている
166	301	土師器 坏	— (5.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	No.2　反転
167	301	土師器 皿	— (4.0) —	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	No.5　反転
168	301	土師器 竈形土器	— — —	外面：ナデ，ハケ目，底部ヘラ削り 内面：ナデ	褐色	やや粗 赤・白・黒色粒子 雲母，小礫	良好	No.4
169	305	黒色土器 坏	— — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ，内面黒色	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	体外に線刻あり
170	306	土師器 坏	— (3.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
171	307	土師器 坏	— (6.0) —	外面：手持ちヘラ削り，回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
172	307	土師器 皿	— (7.0) —	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転
173	332	土師器 皿	(13.0) 3.4 2.6	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	黄橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転
174	332	土師器 皿	(13.0) — —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子 白色粘土混入	良好	反転
175	332	土師器 坏	— (4.4) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	やや粗 赤・白色粒子，小礫	良好	No.1　反転
176	334	土師器 坏	— (6.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	橙色	やや粗 赤・白色粒子，小礫	良好	No.1　反転
177	340	土師器 坏	(18.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	体外にヘラ書あり 反転
178	344	土師器 足高高台	— (7.4) —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	やや粗 赤・白色粒子，雲母	良好	No.1　反転 器面膨張して破裂している
179	354	土師器 坏	— (6.0) —	外面：ロクロナデ，手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	やや粗 赤・白色粒子	良好	反転
180	354	土師器 甕	— — —	外面：ヘラ削り，ナデ 内面：ハケ目，ナデ	浅黄橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.1　一括 pit354.355　反転
181	369	土師器 甕	— — —	外面：ハケ目，ナデ 内面：ハケ目，ナデ	暗褐色	やや粗 赤・白・黒色粒子 雲母，小礫	良好	No.2　反転

第11表　ピット出土遺物観察表（瓦）

〔法量は上から長軸長・短軸長・厚さの順，—は計測不能，（ ）は推定値を示す〕

番号	種別	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
182	丸瓦	タテ — ヨコ — 厚さ 1.4	凸面：ナデ，ヘラ削り 凹面：布目	灰色	密 赤・白色粒子	良好	60ピット出土

第12表　ピット出土遺物観察表（金属製品・石製品）

〔単位はcmおよびg〕

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
183	磨石?	輝石安山岩	5.6	4.4	3.6	120	369ピット出土，No.3
184	鉄滓	鉄	4.9	5.6	2.5	68.09	261ピット出土，No.1

第13表　大坪遺跡ピット一覧表

ピット番号	平面形態	断面形態	規模（m）			備考（出土遺物など）
			長軸	短軸	深さ	
1	楕円形	鍋底状	0.78	0.58	0.17	
2	不整円形	U字形	0.48	0.43	0.17	
3	不整楕円形	皿状	1.07	0.68	0.11	
4	不整楕円形	鍋底状	0.73	0.58	0.20	土師器坏片出土
5	不整円形	U字形	0.47	0.38	0.17	土師器坏片出土
6	不整楕円形	鍋底状	0.95	0.57	0.48	土師器坏・皿片出土
7	不整円形	鍋底状	0.63	0.55	0.15	
8	不整円形	鍋底状	0.75	0.67	0.32	土師器底部破片出土
9	不整円形	U字形	0.49	0.40	0.18	
10	楕円形	鍋底状	0.49	0.39	0.12	
11	不整円形	鍋底状	0.50	0.46	0.23	柱根状木片出土
12	楕円形	鍋底状	1.16	0.82	0.16	
13	不整円形	鍋底状	0.90	0.88	0.20	土師器皿片出土
14	不整円形	鍋底状	0.47	0.46	0.10	
15	楕円形	鍋底状	0.90	0.75	0.32	土師器坏・蓋・甕片出土
16	不整円形	U字形	0.50	0.43	0.21	土師器皿片出土
17	楕円形	皿状	0.78	0.57	0.13	
18	隅丸方形	鍋底状	0.85	0.82	0.18	1号掘立掘り方
19	不整円形	鍋底状	0.93	0.82	0.19	1号掘立掘り方
20	隅丸長方形	鍋底状	1.08	0.70	0.39	1号掘立掘り方
21	不整円形	U字形	0.56	0.48	0.26	
22	不整円形	U字形	0.34	0.30	0.21	
23	楕円形	U字形	0.51	0.31	0.24	
24	不整円形	U字形	0.71	0.62	0.22	
25	隅丸長方形	鍋底状	0.95	0.75	0.29	1号掘立掘り方
26	不整円形	鍋底状	0.74	0.62	0.34	
27	楕円形	鍋底状	0.80	—	0.31	
28	不整楕円形	U字形	0.86	—	0.30	
29	不整円形	鍋底状	0.79	—	0.27	須恵器高台坏片出土
30	不整円形	鍋底状	0.80	0.75	0.44	1号掘立掘り方
31	不整楕円形	鍋底状	0.99	0.70	0.23	
32	隅丸長方形	鍋底状	1.14	0.70	0.35	1号掘立掘り方
33	隅丸長方形	U字形	0.73	0.53	0.24	
34	不整円形	U字形	0.56	0.50	0.24	
35	不整円形	U字形	0.70	0.58	0.23	
36	不整円形	鍋底状	0.54	0.48	0.18	
37	楕円形	U字形	0.83	0.70	0.20	
38	隅丸長方形	鍋底状	0.78	0.63	0.16	1号掘立掘り方
39	不整円形	鍋底状	0.47	0.69	0.31	土師器坏片出土
40	楕円形	鍋底状	0.82	0.66	0.30	
41	不整楕円形	鍋底状	0.99	0.58	0.17	
42	不整円形	鍋底状	0.95	0.94	0.23	1号掘立掘り方
43	不整円形	鍋底状	0.57	0.50	0.29	
44	楕円形	鍋底状	0.65	—	0.20	黒色土器高台坏片出土
45	楕円形	鍋底状	—	0.70	0.25	土師器坏片出土
46	楕円形	U字形	0.44	0.35	0.29	土師器および黒色土器坏片出土
47	楕円形	U字形	—	0.57	0.24	土師器坏片出土
48	楕円形	鍋底状	0.54	0.36	0.17	土師器坏片出土
49	楕円形	鍋底状	—	0.51	0.19	扁平な礫出土
50	不整円形	鍋底状	0.45	0.45	0.19	土師器坏・甕片出土
51	隅丸方形	鍋底状	0.56	0.54	0.20	
52	隅丸方形	鍋底状	0.37	0.40	0.19	
53	楕円形	鍋底状	0.67	0.50	0.17	
54	不整楕円形	鍋底状	0.74	0.57	0.22	
55	不整円形	鍋底状	0.60	0.53	0.21	角柱状の礫，土師器坏片出土
56	不整円形	鍋底状	0.65	0.63	0.16	

ピット番号	平面形態	断面形態	規模（m）			備考（出土遺物など）
			長軸	短軸	深さ	
57	不整円形	U字形	0.80	0.67	0.19	
58	不整円形	皿状	—	0.69	0.15	土師器坏片出土
59	不整楕円形	鍋底状	0.79	0.47	0.17	土師器皿片出土
60	不整円形	鍋底状	0.81	0.76	0.34	土師器高台坏・皿片、黒色土器高台坏片出土
61	不整楕円形	U字形	(1.31)	0.59	0.24	黒色土器坏片出土
62	不整楕円形	U字形	0.61	0.37	0.55	
63	不整楕円形	鍋底状	0.87	0.58	0.30	土師器坏片、黒色土器高台坏片出土
64	不整楕円形	U字形	0.78	0.61	0.25	土師器坏・皿片出土(ヘラ書土器片含む)
65	不整楕円形	U字形	0.70	—	0.26	土師器坏片出土
66	不整円形	鍋底状	0.30	0.29	0.07	土師器坏、黒色土器鉢？片出土　土器埋納遺構か。
67	不整円形	鍋底状	0.71	0.62	0.29	黒色土器坏片出土
68	不整楕円形	U字形	0.72	0.55	0.21	
69	不整楕円形	鍋底状	0.64	0.50	0.29	須恵器甕片出土
70	不整円形	U字形	0.31	0.30	0.15	
71	不整円形	U字形	0.32	0.28	0.21	
72	不整円形	U字形	0.29	0.28	0.23	
73	不整円形	U字形	0.52	0.50	0.19	柱根状炭化材、土師器甕片出土
74	楕円形	鍋底状	0.62	0.50	0.15	
75	楕円形	鍋底状	0.59	0.46	0.16	
76	不整楕円形	U字形	0.88	0.50	0.16	
77	不整楕円形	U字形	0.89	0.59	0.26	
78	不整楕円形	鍋底状	1.36	0.97	0.24	灰釉陶器壷片出土
79	不整円形	U字形	0.38	0.37	0.27	
80	楕円形	鍋底状	0.80	0.57	0.25	
81	不整円形	鍋底状	0.56	0.54	0.21	
82	不整楕円形	鍋底状	0.43	0.35	0.25	土師器坏・皿片出土
83	不整円形	U字形	0.34	0.34	0.21	
84	不整円形	鍋底状	0.79	0.70	0.29	坑底近くから線刻文字を伴う土師器坏完形品出土
85	不整楕円形	鍋底状	0.66	0.55	0.19	
86	不整楕円形	U字形	—	0.50	0.23	
87	不整楕円形	U字形	1.10	0.66	0.30	土師器坏・甕片出土
88	楕円形	鍋底状	0.67	0.51	0.25	
89	不整円形	鍋底状	0.73	0.71	0.17	
90	隅丸長方形	鍋底状	0.47	0.32	0.18	土師器皿片出土
91	隅丸長方形	鍋底状	0.55	0.47	0.36	線刻文字を伴う土師器坏出土，土器埋納遺構か
92	不整円形	鍋底状	0.59	0.50	0.12	
93	隅丸方形	鍋底状	0.53	0.50	0.22	
94	不整楕円形	鍋底状	0.81	0.52	0.15	
95	隅丸長方形	鍋底状	0.53	0.46	0.20	土師器坏・蓋片出土
96	不整楕円形	皿状	1.17	0.84	0.12	土師器焼成遺構と考えられる，焼土および灰が顕著である，多量の坏・皿出土
97	不整楕円形	鍋底状	0.73	0.50	0.08	
98	不整円形	U字形	0.43	0.38	0.22	
99	不整円形	鍋底状	0.58	0.58	0.19	
100	不整円形	鍋底状	0.60	0.54	0.11	
101	楕円形	鍋底状	0.57	0.41	0.15	
102	不整円形	鍋底状	0.62	0.64	0.14	
103	不整楕円形	鍋底状	1.02	0.76	0.26	土師器皿片出土
104	不整楕円形	鍋底状	0.79	0.65	0.14	
105	不整円形	鍋底状	0.66	0.63	0.11	
106	隅丸方形	鍋底状	0.67	0.63	0.35	坑底から土師器甕底部出土
107	不整円形	鍋底状	0.85	0.70	0.34	
108	不整円形	鍋底状	0.48	0.46	0.11	
109	不整円形	U字形	0.41	0.40	0.35	
110	不整円形	U字形	0.96	0.87	0.23	
111	楕円形	皿状	0.70	0.51	0.15	
112	楕円形	鍋底状	0.67	0.53	0.11	
113	楕円形	鍋底状	0.42	0.37	0.29	土師器坏片出土

ピット番号	平面形態	断面形態	規模（m）			備考（出土遺物など）
			長軸	短軸	深さ	
114	不整円形	鍋底状	0.68	0.63	0.30	土師器坏(ヘラ書)・甕片出土
115	不整円形	鍋底状	—	0.36	0.08	土師器坏・皿片出土
116	楕円形	皿状	0.98	0.70	0.13	土師器皿出土
117	不整楕円形	鍋底状	0.41	0.40	0.06	
118	不整円形	U字形	0.35	0.31	0.07	
119	楕円形	U字形	0.30	0.20	0.10	
120	不整円形	鍋底状	0.39	0.36	0.22	
121	不整円形	鍋底状	0.40	0.37	0.15	
122	楕円形	鍋底状	0.43	0.38	0.13	
123	楕円形	鍋底状	0.48	0.43	0.09	
124	不整円形	鍋底状	0.43	0.42	0.11	
125	不整円形	鍋底状	0.37	0.34	0.13	
126	不整円形	U字形	0.21	0.17	0.17	
127	不整円形	U字形	0.52	—	0.30	
128	不整円形	鍋底状	0.70	0.60	0.12	1号掘立掘り方
129	不整楕円形	鍋底状	0.51	0.36	0.09	
130	不整円形	U字形	0.15	0.15	0.06	
131	不整楕円形	鍋底状	0.62	0.37	0.11	
132	楕円形	擂鉢状	0.36	0.28	0.10	
133	不整円形	鍋底状	0.43	0.40	0.16	
134	不整楕円形	鍋底状	0.65	0.46	0.20	土師器坏・皿片出土
135	楕円形	鍋底状	1.00	0.80	0.23	土師器皿・灰釉陶器壷底部破片出土
136	不整円形	鍋底状	0.35	0.34	0.11	
137	不整円形	皿状	0.21	0.19	0.05	
138	不整円形	鍋底状	0.30	0.26	0.13	
139	不整円形	U字形	0.20	0.18	0.12	
140	楕円形	U字形	0.48	0.29	0.17	
141	隅丸方形	鍋底状	0.66	0.60	0.29	
142	不整楕円形	鍋底状	0.83	0.58	0.13	
143	不整円形	鍋底状	0.36	0.35	0.18	
144	不整円形	U字形	0.20	0.18	0.07	
145	不整楕円形	U字形	0.29	0.19	0.17	
146	不整円形	擂鉢状	0.32	0.31	0.15	
147	不整楕円形	皿状	0.53	0.34	0.05	土師器甕底部片出土
148	不整楕円形	鍋底状	0.45	0.39	0.09	
149	不整円形	U字形	0.49	0.49	0.22	
150	不整円形	U字形	0.51	0.40	0.29	
151	不整楕円形	U字形	0.44	0.41	0.24	
152	不整楕円形	皿状	0.69	0.62	0.08	
153	不整円形	鍋底状	0.58	0.57	0.13	
154	楕円形	皿状	0.81	0.71	0.10	
155	不整楕円形	鍋底状	0.75	0.48	0.12	
156	不整円形	皿状	0.51	0.46	0.08	
157	不整楕円形	U字形	0.64	0.40	0.20	
158	不整楕円形	鍋底状	0.73	0.56	0.09	土師器坏片出土
159	不整楕円形	U字形	0.54	0.45	0.28	
160	不整円形	鍋底状	0.43	0.37	0.26	土師器皿片出土
161	楕円形	U字形	0.46	0.38	0.21	
162	不整円形	U字形	0.34	0.32	0.31	
163	不整円形	皿状	0.49	0.45	0.08	
164	楕円形	鍋底状	0.53	0.39	0.38	
165	不整円形	U字形	0.38	0.35	0.20	土師器坏片出土
166	楕円形	皿状	0.44	0.39	0.05	
167	不整円形	U字形	0.40	0.39	0.16	
168	不整円形	U字形	0.42	0.39	0.14	
169	不整楕円形	鍋底状	0.47	0.38	0.42	土師器坏片・甕片出土
170	不整楕円形	鍋底状	0.62	0.50	0.31	土師器坏片、灰釉陶器片出土

ピット番号	平面形態	断面形態	規模（m）			備考（出土遺物など）
			長軸	短軸	深さ	
１７１	不整円形	鍋底状	０.６２	０.５３	０.１５	
１７２	不整円形	Ｕ字形	０.２７	０.２１	０.２２	
１７３	楕円形	鍋底状	０.４７	０.４０	０.３３	
１７４	不整円形	鍋底状	０.４５	０.３９	０.１６	土師器坏片、須恵器甕底部片出土
１７５	不整楕円形	鍋底状	０.８４	０.５７	０.２５	
１７６	不整楕円形	鍋底状	０.９８	０.５３	０.１５	
１７７	不整楕円形	Ｕ字形	０.７４	０.５４	０.２０	
１７８	楕円形	Ｕ字形	０.７０	０.５４	０.１５	
１７９	楕円形	Ｕ字形	—	０.４６	０.１８	
１８０	不整楕円形	Ｕ字形	１.０７	０.４６	０.５１	黒色土器坏片
１８１	楕円形	擂鉢状	０.３５	０.２４	０.０９	
１８２	不整円形	Ｕ字形	０.２６	０.２３	０.２４	丸瓦片出土
１８３	不整円形	Ｕ字形	０.３０	０.２７	０.２９	磨石状の石器出土
１８４	不整円形	Ｕ字形	０.２６	０.２６	０.１４	鉄滓出土
１８５	楕円形	Ｕ字形	０.２５	０.１８	０.１２	
１８６	不整円形	擂鉢状	０.２９	０.２６	０.１３	
１８７	不整円形	擂鉢状	０.２０	０.２０	０.１４	
１８８	不整楕円形	皿状	０.２４	０.１５	０.０８	
１８９	不整楕円形	鍋底状	０.６３	０.４７	０.１０	黒色土器坏片出土
１９０	不整楕円形	皿状	０.４７	０.２８	０.０４	
１９１	不整円形	鍋底状	０.４８	０.４７	０.１５	
１９２	不整円形	Ｕ字形	０.２４	０.２２	０.１７	
１９３	不整円形	擂鉢状	０.３９	０.３９	０.３２	
１９４	不整円形	擂鉢状	０.２３	０.２１	０.１６	
１９５	不整円形	擂鉢状	０.２５	０.２３	０.０４	
１９６	不整円形	Ｕ字形	０.２０	０.２０	０.０７	
１９７	不整円形	Ｕ字形	０.２０	０.１９	０.０８	土師器坏片出土
１９８	不整円形	鍋底状	０.５３	０.５１	０.２２	
１９９	不整楕円形	鍋底状	０.８２	０.７４	０.３７	土師器坏片出土
２００	不整円形	皿状	０.３５	０.３２	０.０２	生焼状態の土師器皿２点出土
２０１	楕円形	Ｕ字形	０.７２	０.５３	０.２５	
２０２	楕円形	鍋底状	０.５３	０.４５	０.２２	
２０３	楕円形	Ｕ字形	０.５１	０.４４	０.３４	
２０４	不整楕円形	鍋底状	０.３８	０.３７	０.１２	
２０５	不整円形	鍋底状	０.４６	０.４０	０.２０	
２０６	不整円形	鍋底状	０.２０	０.１７	０.１０	
２０７	不整円形	鍋底状	０.３８	０.３４	０.０７	
２０８	不整円形	鍋底状	０.２９	０.２７	０.０４	
２０９	楕円形？	鍋底状	—	０.５５	０.２４	
２１０	楕円形	鍋底状	０.４３	０.３３	０.０８	
２１１	隅丸長方形	鍋底状	０.９０	０.７２	０.４６	黒色土器坏片出土
２１２	楕円形	鍋底状	０.４８	０.３６	０.１３	
２１３	不整円形	鍋底状	０.５２	０.５２	０.２７	土師器坏片出土
２１４	楕円形	鍋底状	—	０.４７	０.４０	柱根状木片、土師器皿・甕片出土
２１５	不整楕円形	鍋底状	０.２７	０.２５	０.１５	
２１６	楕円形	鍋底状	０.４４	０.３５	０.２２	
２１７	不整楕円形	Ｕ字形	０.５９	０.５０	０.３８	
２１８	不整円形	鍋底状	０.５１	０.４８	０.１５	
２１９	不整楕円形	鍋底状	０.９１	０.７５	０.２１	
２２０	楕円形	鍋底状	０.６８	０.５４	０.３１	
２２１	不整円形	Ｕ字形	０.７５	０.６９	０.３７	
２２２	不整円形	Ｕ字形	０.３９	０.３９	０.１８	
２２３	不整円形	皿状	０.５０	０.４２	０.１１	土師器坏片出土（線刻）
２２４	楕円形	皿状	０.９０	０.６５	０.１０	土師器坏・皿が集積した状態で出土
２２５	不整円形	鍋底状	０.５０	０.４５	０.２８	
２２６	楕円形	鍋底状	０.６４	０.５３	０.４７	
２２７	不整楕円形	Ｕ字形	０.５１	０.４２	０.３１	

ピット番号	平面形態	断面形態	規模（m）			備考（出土遺物など）
			長軸	短軸	深さ	
228	楕円形	皿状	0.55	0.45	0.13	
229	不整円形	鍋底状	0.48	0.40	0.19	土師器皿片出土
230	楕円形	楕円形	—	0.39	0.05	
231	不整楕円形	鍋底状	1.13	—	0.23	土師器坏片出土
232	不整楕円形	鍋底状	—	0.73	0.25	
233	不整楕円形	鍋底状	0.76	0.55	0.13	
234	不整円形	鍋底状	0.40	0.39	0.24	土師器皿・甕片出土
235	不整円形	U字形	0.26	0.24	0.12	
236	楕円形	鍋底状	0.62	0.37	0.30	
237	不整円形	鍋底状	0.67	—	0.26	土師器皿・甕片、黒色土器坏片出土
238	楕円形	U字形	0.30	0.24	0.11	
239	不整円形	U字形	0.32	0.31	0.15	
240	不整楕円形	鍋底状	1.35	0.87	0.28	灰釉陶器壷底部片出土
241	不整楕円形	鍋底状	0.44	0.35	0.26	
242	不整円形	擂鉢状	0.28	0.27	0.24	
243	不整円形	鍋底状	0.31	0.29	0.08	
244	不整円形	U字形	0.13	0.12	0.09	
245	楕円形	U字形	0.13	0.10	0.09	
246	楕円形	U字形	0.25	0.19	0.09	
247	不整円形	U字形	0.14	0.13	0.11	
248	不整円形	U字形	0.18	0.16	0.07	
249	不整円形	U字形	0.27	0.27	0.06	
250	不整円形	U字形	0.17	0.17	0.07	
251	楕円形	鍋底状	0.30	0.23	0.08	
252	不整円形	U字形	0.22	0.22	0.07	
253	不整円形	鍋底状	0.45	0.41	0.09	
254	不整円形	U字形	0.13	0.12	0.10	
255	不整楕円形	鍋底状	0.35	0.25	0.12	
256	不整円形	鍋底状	0.50	0.49	0.11	
257	不整円形	鍋底状	0.79	0.69	0.29	土師器皿片、黒色土器坏片出土
258	不整円形	鍋底状	0.38	—	0.26	
259	不整楕円形	鍋底状	—	0.50	0.31	土師器皿片、黒色土器坏片出土
260	楕円形	鍋底状	1.30	1.02	0.37	覆土中層から破壊された土師器甕片散乱して出土、須恵器細片出土
261	不整円形	鍋底状	0.25	0.24	0.16	土師器坏片出土
262	楕円形	U字形	0.72	0.61	0.20	
263	楕円形	鍋底状	0.49	0.39	0.23	土師器皿片出土
264	不整楕円形	鍋底状	0.48	0.38	0.34	
265	不整円形	鍋底状	0.44	0.43	0.35	
266	楕円形	鍋底状	0.45	0.30	0.20	
267	不整円形	擂鉢状	—	0.24	0.16	
268	楕円形	鍋底状	0.36	0.30	0.18	
269	不整楕円形	鍋底状	0.60	0.30	0.21	
270	楕円形	U字形	0.27	0.23	0.10	土師器坏線刻土器片出土
271	不整楕円形	皿状	0.42	0.37	0.08	
272	不整円形	鍋底状	0.43	0.39	0.18	
273	不整円形	U字形	0.31	0.28	0.14	
274	不整楕円形	擂鉢状	0.29	0.25	0.16	
275	不整円形	U字形	0.26	0.24	0.04	
276	不整円形	U字形	0.27	0.26	0.14	
277	不整円形	擂鉢状	0.34	0.33	0.20	
278	不整円形	鍋底状	0.33	0.27	0.12	
279	楕円形	鍋底状	0.28	0.17	0.04	
280	楕円形	鍋底状	—	0.47	0.25	土師器坏・皿・甕片出土
281	隅丸長方形	鍋底状	0.67	0.54	0.20	
282	不整円形	鍋底状	0.54	0.49	0.21	土師器坏片、黒色土器高台坏片出土
283	不整楕円形	鍋底状	0.76	—	0.28	土師器坏片出土
284	不整円形	鍋底状	0.64	0.53	0.21	

ピット番号	平面形態	断面形態	規模（m）			備考（出土遺物など）
			長軸	短軸	深さ	
285	不整楕円形	鍋底状	0.79	0.48	0.15	
286	不整円形	鍋底状	0.35	0.35	0.03	
287	不整楕円形	鍋底状	0.52	0.43	0.29	
288	不整円形	鍋底状	0.58	0.55	0.22	
289	不整楕円形	鍋底状	0.80	0.57	0.25	土師器坏片、黒色土器坏片、須恵器甕片出土
290	不整円形	U字形	0.33	0.30	0.17	
291	不整楕円形	鍋底状	0.51	0.42	0.19	
292	楕円形	U字形	0.52	0.35	0.24	
293	不整楕円形	U字形	0.37	0.31	0.08	
294	楕円形	擂鉢状	0.22	0.19	0.14	
295	不整円形	鍋底状	0.38	0.37	0.12	
296	不整楕円形	鍋底状	0.52	—	0.24	
297	不整円形	鍋底状	0.41	0.39	0.15	土師器坏片、黒色土器坏片出土
298	不整楕円形	U字形	0.37	0.37	0.36	
299	不整円形	U字形	0.26	0.23	0.20	
300	不整円形	U字形	0.48	0.36	0.11	
301	不整楕円形	U字形	0.81	0.65	0.40	土師器坏・皿片、竈形土器片出土
302	不整円形	鍋底状	0.28	0.23	0.15	
303	楕円形	鍋底状	—	0.30	0.08	
304	不整円形	皿状	0.43	0.42	0.15	
305	楕円形	鍋底状	0.44	0.31	0.11	黒色土器坏片出土
306	不整円形	皿状	0.52	0.47	0.17	土師器坏片出土
307	不整楕円形	皿状	0.84	0.66	0.12	土師器坏・皿片出土
308	不整円形	皿状	0.40	0.40	0.10	
309	不整円形	鍋底状	0.77	0.72	0.18	
310	不整円形	鍋底状	0.72	0.64	0.18	
311	不整円形	鍋底状	0.65	0.59	0.34	
312	不整円形	鍋底状	0.41	0.35	0.19	
313	不整円形	鍋底状	0.32	0.29	0.10	
314	楕円形	皿状	0.38	0.28	0.10	
315	不整楕円形	鍋底状	1.50	0.64	0.19	
316	楕円形	鍋底状	0.85	0.75	0.15	
317	楕円形	皿状	0.60	0.45	0.07	
318	不整楕円形	鍋底状	1.03	0.67	0.18	
319	不整楕円形	皿状	0.42	0.29	0.17	
320	不整円形	皿状	0.59	0.53	0.07	
321	不整楕円形	鍋底状	0.78	0.50	0.15	
322	楕円形	皿状	0.61	0.47	0.07	
323	不整円形	鍋底状	0.73	0.66	0.12	
324	楕円形	鍋底状	0.43	0.38	0.10	
325	楕円形	皿状	0.74	0.57	0.08	
326	不整円形	皿状	0.52	0.50	0.15	
327	不整楕円形	鍋底状	0.39	0.32	0.15	扁平な礫出土
328	不整楕円形	鍋底状	0.73	0.72	0.21	
329	不整楕円形	鍋底状	—	0.41	0.28	
330	楕円形	鍋底状	0.54	0.47	0.18	
331	不整円形	鍋底状	0.38	—	0.06	
332	不整円形	鍋底状	0.53	0.48	0.34	土師器坏片・皿出土
333	不整円形	U字形	0.48	0.47	0.25	
334	不整円形	鍋底状	0.63	0.62	0.16	土師器坏片出土
335	楕円形	皿状	0.27	0.22	0.05	
336	不整円形	鍋底状	0.23	0.23	0.08	
337	不整円形	U字形	0.18	0.16	0.02	
338	不整楕円形	U字形	0.19	0.17	0.02	
339	不整楕円形	U字形	0.26	0.23	0.08	
340	隅丸長方形	鍋底状	0.64	—	0.36	根石状の扁平な礫、土師器坏片（ヘラ書）出土
341	不整円形	U字形	0.27	0.26	0.15	

ピット番号	平面形態	断面形態	規模（m）			備考（出土遺物など）
			長軸	短軸	深さ	
342	不整円形	U字形	0.24	0.23	0.10	
343	不整円形	U字形	0.28	0.25	0.10	
344	不整円形	鍋底状	0.39	0.36	0.21	脚高高台の脚部が倒置状態で出土、土器埋納遺構か
345	楕円形	U字形	0.30	0.27	0.16	
346	楕円形	U字形	0.34	0.29	0.24	
347	不整円形	U字形	0.32	0.27	0.12	
348	不整円形	鍋底状	0.39	0.39	0.15	
349	不整円形	鍋底状	0.30	0.29	0.11	
350	不整円形	鍋底状	0.48	0.47	0.18	
351	不整円形	擂鉢状	0.45	0.39	0.21	
352	不整円形	鍋底状	0.49	0.42	0.07	
353	不整円形	鍋底状	0.51	0.45	0.20	
354	不整楕円形	鍋底状	0.54	0.49	0.32	土師器坏・甕片出土
355	不整楕円形	鍋底状	—	0.51	0.36	
356	不整円形	鍋底状	0.38	0.34	0.11	
357	楕円形	鍋底状	0.28	0.23	0.10	
358	不整楕円形	鍋底状	0.45	0.35	0.12	
359	楕円形	鍋底状	0.38	0.32	0.10	
360	楕円形	鍋底状	0.49	0.40	0.12	
361	楕円形	鍋底状	0.36	0.29	0.09	
362	不整円形	皿状	0.43	0.43	0.13	
363	不整円形	鍋底状	0.39	0.37	0.12	
364	不整円形	U字形	0.25	0.23	0.17	
365	楕円形	鍋底状	0.46	—	0.09	
366	不整円形	U字形	0.25	0.22	0.06	
367	楕円形	鍋底状	—	0.29	0.07	
368	楕円形	擂鉢状	0.64	0.48	0.38	
369	不整円形	皿状	0.32	0.27	0.13	土師器甕片出土
370	不整楕円形	鍋底状	0.79	0.54	0.14～0.52	
371	楕円形	皿状	0.37	0.25	0.22	
372	不整円形	鍋底状	0.37	0.36	0.12	
373	楕円形	U字形	0.24	0.20	0.13	
374	不整円形	U字形	0.14	0.14	0.14	
375	不整円形	U字形	0.15	0.14	0.08	
376	不整円形	U字形	0.23	0.20	0.10	
377	不整円形	U字形	0.10	0.09	0.09	
378	楕円形	鍋底状	0.53	—	0.16	
379	楕円形	鍋底状	—	0.40	0.07	根石状の扁平な礫出土
380	不整円形	皿状	0.36	0.33	0.07	
381	楕円形	擂鉢状	0.28	0.24	0.13	
382	楕円形	擂鉢状	0.30	0.23	0.16	
383	楕円形	鍋底状	0.28	0.23	0.09	
384	不整楕円形	皿状	0.52	0.34	0.07	
385	不整円形	U字形	0.15	0.14	0.10	
386	不整楕円形	皿状	0.25	0.15	0.08	
387	楕円形	U字形	0.20	0.17	0.12	
388	楕円形	U字形	0.19	0.16	0.13	
389	不整円形	鍋底状	0.39	0.37	0.11	
390	不整楕円形	U字形	0.38	0.36	0.26	
391	楕円形	U字形	—	0.28	0.12	
392	不整楕円形	鍋底状	—	0.67	0.11	
393	不整楕円形	U字形	0.28	0.24	0.07	
394	不整円形	鍋底状	0.34	0.33	0.11	
395	楕円形	U字形	0.20	—	0.12	
396	不整円形	U字形	0.09	0.09	0.15	

第５節　その他の遺構と遺物、遺構外出土遺物

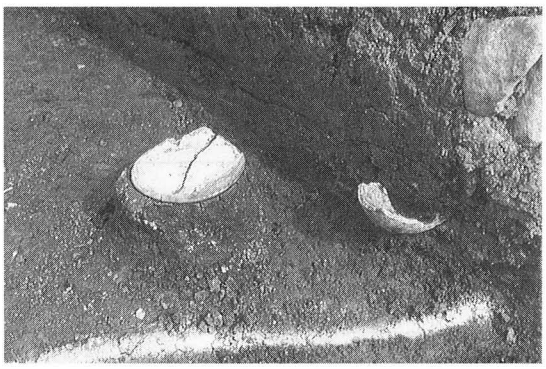
【その他の遺構】

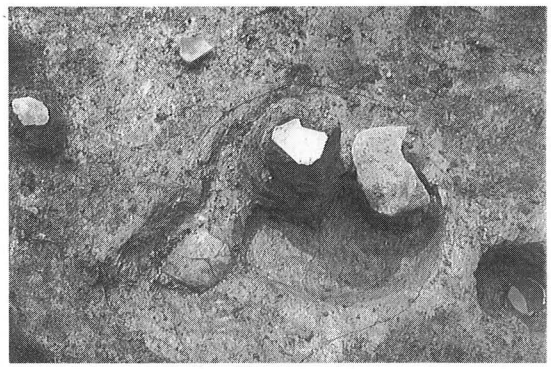
〔溝状凹地遺構〕（第35図）

当遺構は、Ｅ－６・Ｆ－６グリッドにまたがって検出されている遺構で、当初は当遺構を自然流路かと思い調査を進めていたが、土層観察を行ったところ、絶えず流水していたという状況が認められず、酸化鉄の薄い沈着層が数面みられることから、水の流入はみられるものの、幾度かの滞水が繰り返し起こっている状況が観察できた。そのため単なる溝状遺構というよりは、自然の作用によって形成された凹地に水が流れ込んで、池や沼的な状態を呈しながら埋没が進んだ遺構ではないかと判断し、溝状凹地遺構と命名した。167・168・354・355・364・365・367・378・380・384号ピットと重複し、378号ピット以外は当遺構を切り込んで構築している。

当遺構は、半月形で検出されており、規模は東西3.70m、南北9.45m、深さは確認面から約30cmを測り、浅い皿状の断面形態をもつ。埋没状況を観察すると、当遺構に伴う層位は第４層から第８層で、基本層序第Ⅴ層－㉒である褐灰色砂質シルト層を切り込んでいる。酸化鉄の沈着層を挟みながら、中砂～粗砂混じりの黒褐色・青黒色シルトが堆積している。その上位には、平安時代の層位である基本層序第Ⅱ層－⑥、第Ⅲ層－⑩が堆積している。この中で良好な遺物の出土状態を示した層位は、第６層の青黒色中砂～粗砂混じりシルト（10BG 3/1）層で、古墳時代後期の土器群を含んだ層である。この土層観察の結果、凹地状を形成していた時期は、後述の出土遺物の状況からしても古墳時代後期頃と思われ、これは先の２号溝状遺構等の自然流路が存在していた時期と同じであるが、平安時代には同様に埋没し平坦化している。当遺構の存在が示すように古墳時代後期は、当調査区を含め周辺一帯が微起伏のある低湿な土地条件であったことが窺われる。

遺物の出土状態は、遺構内全体にわたって散在して出土しており、特に南北のそれぞれの縁辺部からの出土が目立っている。南縁付近には長径１m前後を測る浅いピット状の落ち込みが数基確認されており、その内外から土師器赤彩土器を含む坏が７点、甑３点、手捏土器片、用途不明石器数点等が出土している。北縁部分では甕形土器を



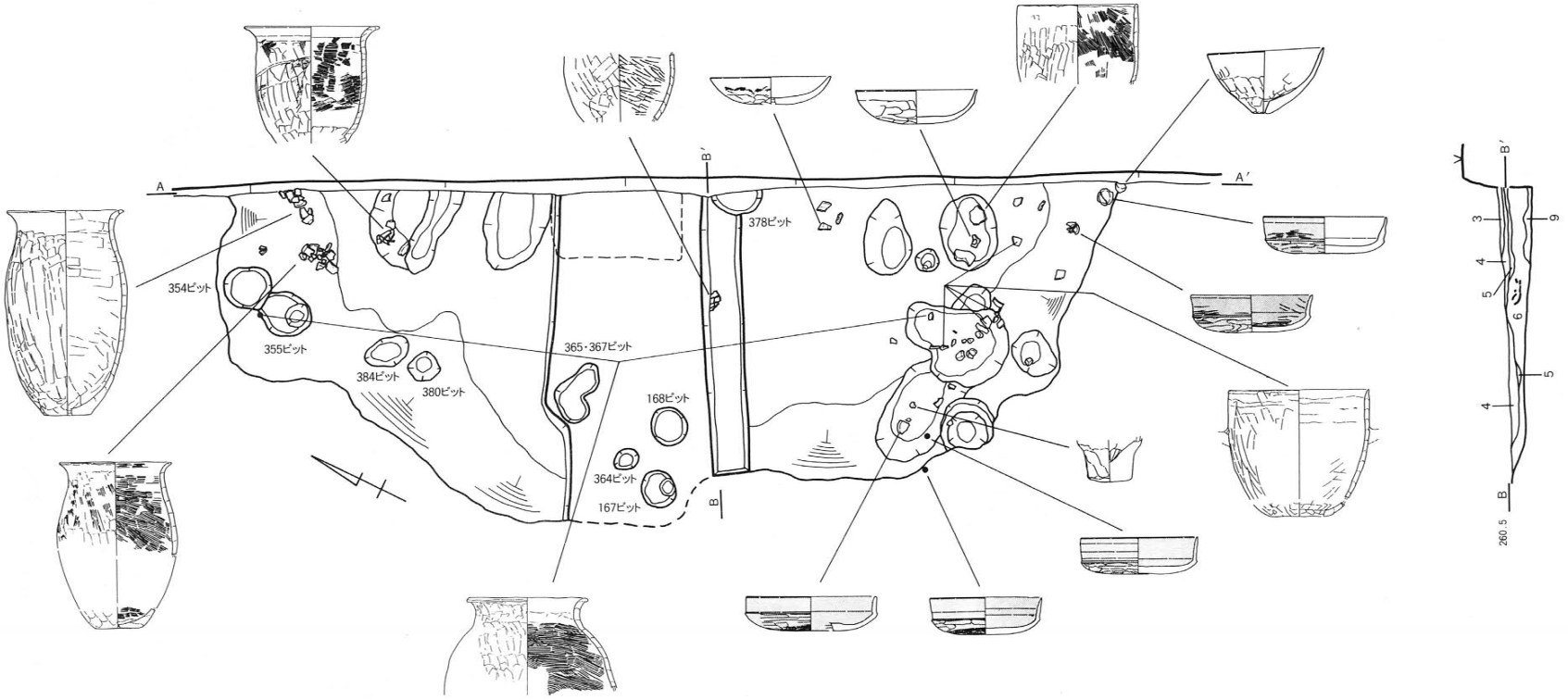


中心に数点出土している（第36・37図１～27）。甕・甑類はいずれも潰れた状態で出土している。これら遺物の出土状態をみると、自然流入によって混入した遺物とは考えにくく、祭祀具である手捏土器等がみられることこから、水辺周辺においての祭祀的行為が行われた結果、人為的に廃棄された遺物とみることができよう。

遺物は前述のとおり、土師器坏・甑・甕を中心に出土している。第36図１～８は土師器坏である。１～５は口縁部が直立し、体部が半球形となる坏で、内外面または外面に赤彩の痕跡が残っている。器面は荒れているものの、細かいミガキを施し丁寧なつくりである。６～８は体部が半円球形のもので、口縁部がわずかに直立している。９は小型の甑で底部に小孔が開けられている。10～16は長胴甕と球胴甕である。17・18は口径20cm程度を測る大型の甑である。第37図19・20は手捏土器の破片資料である。21は平安時代の線刻土器片資料。22～27はホルンフェルス製等の用途不明石器群である。

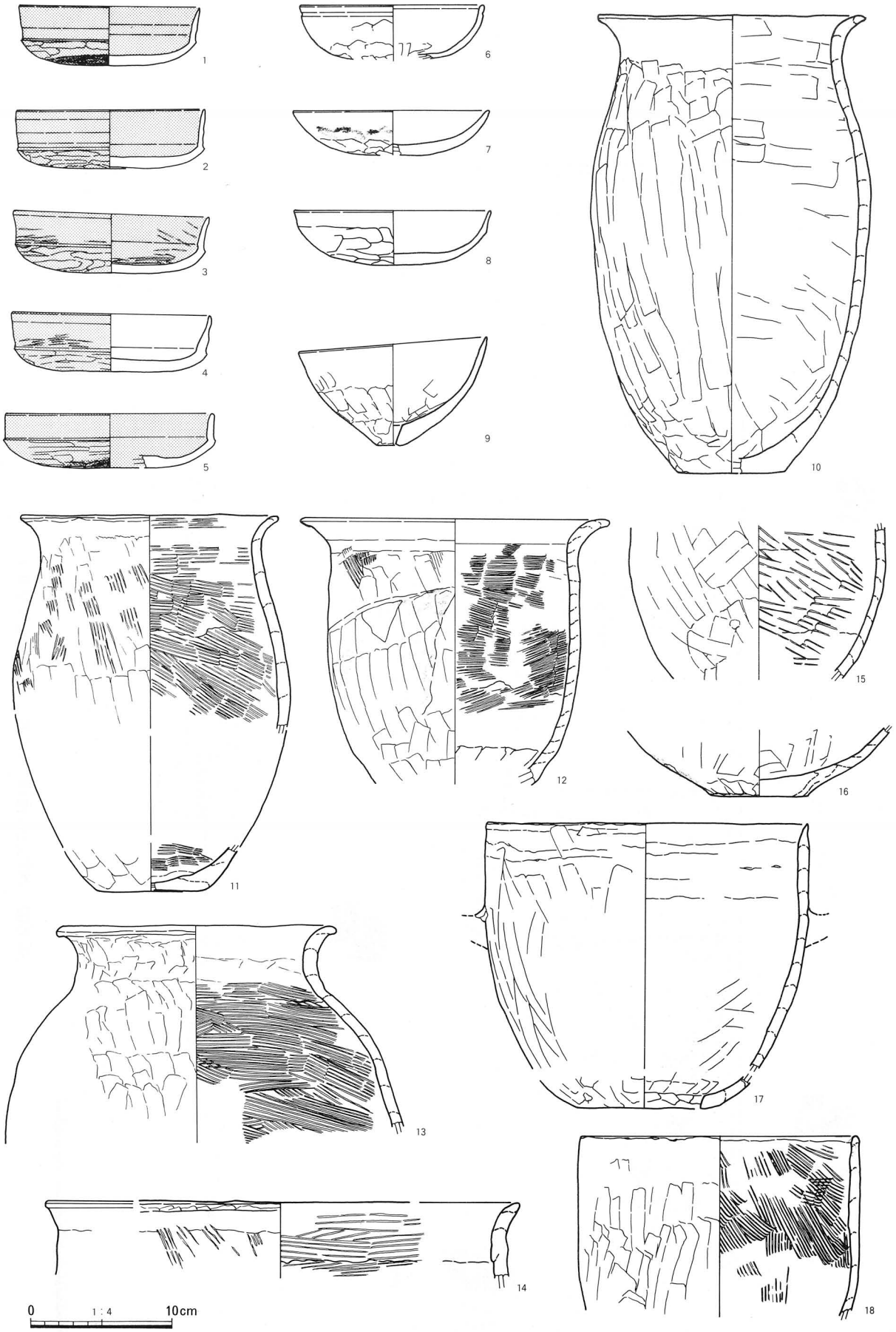
〔水田状遺構〕（第３図参照）

当遺構は水田跡とする決定的な要素を欠いているため、水田跡の可能性もあるという意味で水田状遺構とよんで

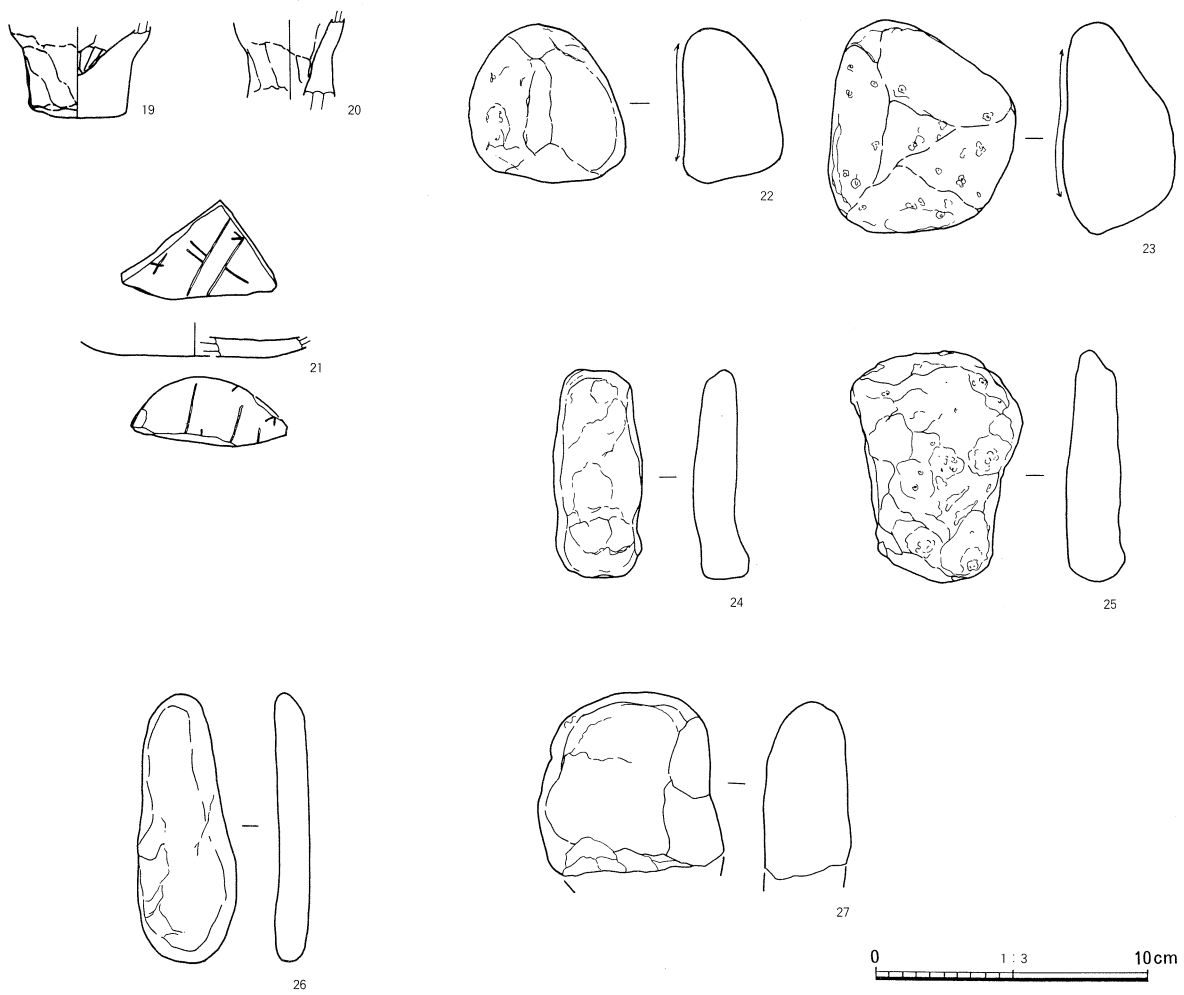


1. 表　土
2. 黒褐色砂質シルト　10YR2/2　基本土層Ⅱ－⑥
3. にぶい黄褐色粗砂　10YR5/3　基本土層Ⅲ－⑩
4. 黒褐色中砂～粗砂混じりシルト　7.5YR3/1　黒褐色砂質シルトブロック含む
5. にぶい黄褐色粗砂　10YR5/3　酸化鉄沈着顕著
6. 青黒色中砂～粗砂混じりシルト　10BG3/1　黒褐色砂質シルトブロック・灰黄褐色シルトブロック含む
7. 黒褐色シルト～粘土　7.5YR2/2　酸化鉄混在
8. 褐灰色砂質シルト　10YR4/1　細砂混じる
9. 褐灰色粗砂混じりシルト～粘土　7.5YR4/1　基本土層Ⅴ－㉒

第35図　溝状凹地遺構〔1：80、遺物は縮尺不同〕



第36図　溝状凹地遺構出土遺物（土器）〔1：4〕



第37図　溝状凹地遺構出土遺物（土器・土製品・石器）〔1：3〕

第14表　溝状凹地遺構出土遺物観察表（土器）

〔法量は上から口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値を示す〕

番号	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 坏	(13.0) — 4.2	外面：手持ちヘラ削り後ナデ，底部黒変 内面：ナデ	黄橙色	密 赤・白色粒子	やや軟質	F-6 Ⅱ層 No.5.6.7 反転 内外面に赤彩の痕跡が残る
2	土師器 坏	13.6 — 4.25	外面：手持ちヘラ削り後ナデ 内面：ナデ	黄橙～にぶい橙色	密 赤・白色粒子	やや軟質	F-6 内外面に赤彩の痕跡が残る
3	土師器 坏(赤彩)	(14.0) — 4.3	外面：手持ちヘラ削り，ヨコナデ，ミガキ 内面：ナデ，ミガキ	浅黄橙色	緻密 白・赤色粒子，小礫	良好	No.25
4	土師器 坏	(14.4) — 4.2	外面：手持ちヘラ削り，ヨコナデ，ミガキ 内面：ナデ	にぶい黄橙色	緻密 白・赤色粒子，雲母	良好	No.26 外面のみ赤彩
5	土師器 坏(赤彩)	(15.0) — 3.9	外面：手持ちヘラ削り，ヨコナデ　底部黒変 内面：ナデ	黄橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.7　反転 内外面赤彩
6	土師器 坏	(15.0) — —	外面：手持ちヘラ削り，ナデ 内面：ヘラ削り，ナデ	橙色	密 赤・白色粒子，小礫	良好	反転
7	土師器 坏	(14.0) — —	外面：手持ちヘラ削り，ナデ，黒変 内面：ナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子，小礫	良好	No.5　反転
8	土師器 坏	(14.0) — 3.9	外面：手持ちヘラ削り，ヨコナデ 内面：ナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.21　反転
9	土師器 甑	13.4 — 7.3	外面：手持ちヘラ削り，ナデ 内面：ナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	No.27 やや器面荒れている
10	土師器 甕	(19.0) (7.6) 33.0	外面：ヘラ削り後ナデ，底部ヘラ削り 内面：ヘラナデ	にぶい黄褐色	やや粗 白・赤・黒色粒子 小礫	良好	No.1　反転
11	土師器 甕	18.4 8.0 —	外面：ヘラ削り，ハケ目 内面：ハケ目	褐灰色	やや粗 白・赤・黒色粒子 小礫	良好	No.2.38 E-6Ⅲ層
12	土師器 甕	(22.0) — —	外面：ヨコナデ，ヘラ削り，ハケ目，黒変 内面：ヨコナデ，ハケナデ	褐灰色	やや粗 白・赤・黒色粒子 小礫	良好	No.3　反転
13	土師器 甕	20.0 — —	外面：ヘラ削り，ナデ 内面：ナデ，ハケ目	にぶい黄橙色	密 白・赤色粒子	やや軟質	F-6 Ⅱ層 No.1 E-6 F-6 外面やや荒れている
14	土師器 甕	(34.0) — —	外面：ヨコナデ，ハケ目 内面：ハケ目	にぶい橙色	密 赤・白色粒子，雲母	良好	No.6.11.12.19.20 反転

番号	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
15	土師器 甕	— — —	外面：ヘラ削り後ナデ 内面：ハケ目，ナデ	灰黄褐色	やや粗 赤・白色粒子，礫多い	良好	No.30　反転
16	土師器 甕	— (7.0) —	外面：ヘラ削り，ナデ，黒変 内面：ヘラ削り，ナデ	にぶい 黄橙色	やや粗 赤・白色粒子 雲母，小礫多い	良好	No.24 反転
17	土師器 甑	23.0 8.0 —	外面：ヘラ削り，ナデ 内面：ヘラ削り，ナデ	灰白色 ～橙色	密 白・赤色粒子多い	良好	No.3.4.10.13.15.16.23.28
18	土師器 甑	20.0 — —	外面：ヘラナデ，ヘラ削り 内面：ナデ，ハケ目	橙色	密 白・赤色粒子多い	良好	No.22
21	土師器 皿	— (5.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 白・赤色粒子，雲母	良好	No.18　反転 底部内外面に線刻あり

第15表　溝状凹地遺構出土遺物観察表（土製品・石製品）

〔単位はcmおよびg〕

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
19	手捏土器	土製	—	(3.6)	—	—	色調：にぶい橙色，胎土：白色粒子 焼成：良好，No.8 反転，ヘラ削り，ナデ，指頭調整
20	手捏土器	土製	—	—	—	—	色調：黄橙色，胎土：白色粒子 焼成：良好，反転 ヘラ削り，ナデ
22	磨石？	ホルンフェルス	5.9	5.7	3.6	164	No.32　灰白色
23	磨石？	安山岩	8.0	6.8	4.1	324	No.34　灰白色
24	不明	ホルンフェルス	7.8	3.4	1.6	90	No.36　灰色
25	不明	輝石安山岩	8.7	5.9	2.1	176	No.35　灰色
26	不明	ホルンフェルス	10.1	3.7	1.3	78	No.37　灰色
27	不明	花崗閃緑岩	5.7	6.7	3.2	216	No.33　灰白色

おり、特に詳細な図面も示していない。その検出状況については第３図の全体図を参照していただきたい。

当遺構はＥ－５グリッドを中心に、東西約８ｍ、南北約12ｍの範囲にわたって検出されているものである。同範囲は、他のエリアに比べピット等の他の遺構の存在が希薄なエリアである。特に断面観察は行っていないが、基本層序第Ⅲ層－⑩上面で確認されたもので、酸化鉄の沈着がみられない幅約30㎝前後の黒色の帯が畦畔状に、水田の区画を構成するかのように展開している。もしこれを畦畔とするならば、すでにその盛土は失っており、その基底部の一部がわずかに残存するにすぎない。区画は明確ではないが、その面積は３～６㎡前後で小区画のものである。

特に出土遺物はないが、区画内を中心として径６～７㎝程度の小ピットが1,000個以上確認されている。その性格は定かではないが、稲株の痕跡である可能性も考えられる。

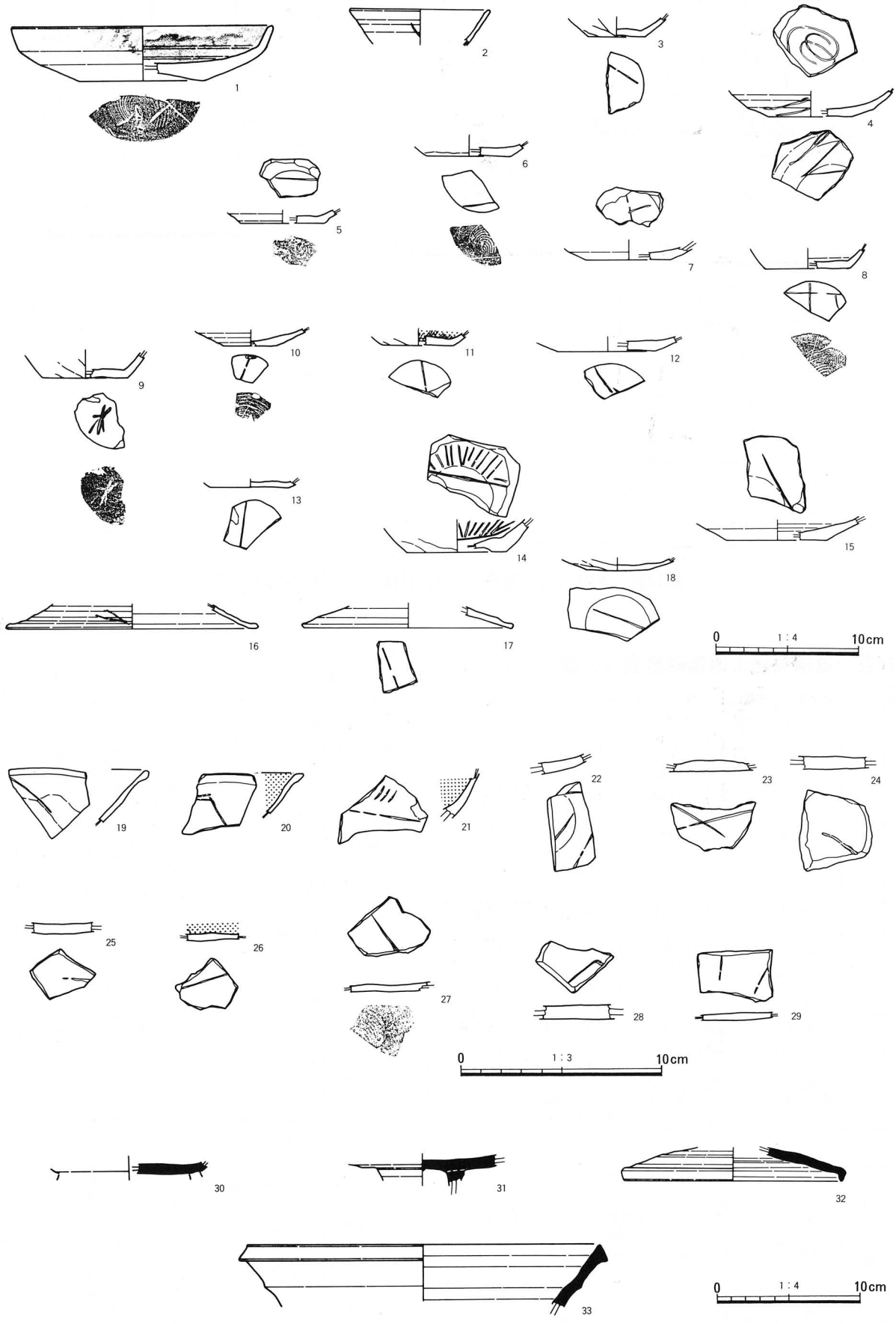
当遺構の詳細な時期は不明であるが、確認された層位からすると平安時代以降のもので、その範囲は、もう少し広い範囲に展開していたものと考えられる。

【遺構外出土遺物】

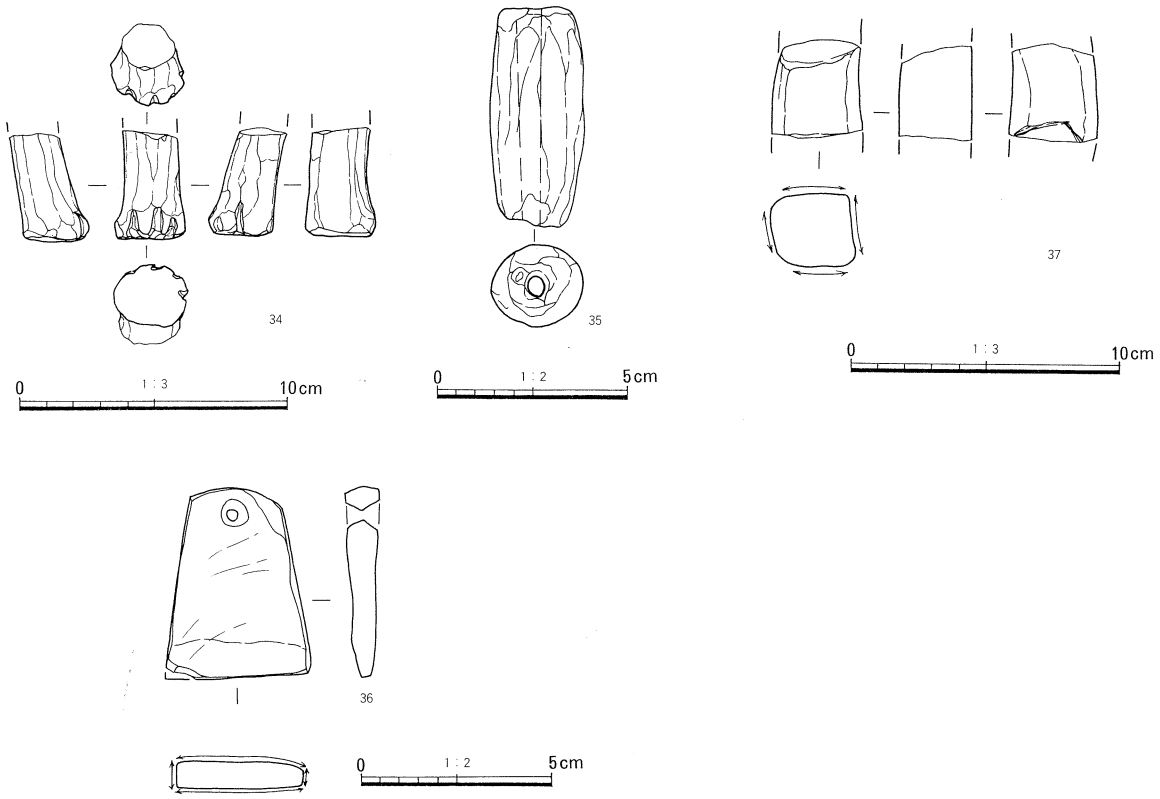
遺構外出土遺物は、各グリッド内外から多数出土している。ここでは紙数の都合上、当遺跡の性格を考える上で重要だと思われるヘラ書土器、線刻土器の破片資料を中心に報告し、その他当遺跡では出土点数が極めて少ない須恵器片や土製品および石製品を報告することにする。各遺物の詳細については、以下の観察表を参照していただきたい。

ここでヘラ書土器といっているものは、周知のように、焼成前にヘラ状工具で文字もしくは記号等記した土器のことをいっている。そして線刻土器といっているものは、焼成後に釘状または刀子状の道具で文字もしくは記号を記した土器のことをいっている。「刻書土器」という用語も一般的に使用されているが、ここでは同じような意味で線刻土器という用語を使用している。

ヘラ書を伴う土器片は第38図１・５・６・９・10・14・15・24・27・28で、線刻を伴う土器片は同図２・３・４・７・８・11・12・13・16・17・18・19・20・21・22・23・25・26・29で、すべて土師器である。30～33は須恵器片で高台坏・高坏・蓋・甕等がみられる。34は獣足状の土製品、35は大型の土錘（管状土製品）の完形品である・36・37は砥石で、36は緑色凝灰岩製で、小孔が穿たれている。



第38図　遺構外出土遺物①〔1～18、30～33は1：4、19～29は1：3〕



第39図　遺構外出土遺物②〔34・37は1：3、35・36は1：2〕

第16表　遺構外出土遺物観察表（土器）

〔法量は上から口径・底径・器高の順、—は計測不能、（ ）は推定値を示す〕

番号	グリッド	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	D-5	土師器 坏	(18.6) (9.0) 3.9	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 白色粒子，雲母	軟質	反転 内外面に黒変あり 底外にヘラ書あり
2	B-5	土師器 坏	(9.8) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	Ⅱ層．反転 体外に線刻あり
3	B-5	土師器 坏	— (4.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	Ⅱ層．反転 底外に線刻あり
4	B-6	土師器 皿	— (6.0) —	外面：回転ヘラ削り，底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文	橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転 体外・底外に線刻あり
5	C-5	土師器 坏	— (6.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転 底内にヘラ書あり
6	D-6	土師器 坏	— (5.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 赤・白色粒子，雲母	良好	反転 底外にヘラ書あり
7	D-6	土師器 皿	— (6.0) —	外面：回転ヘラ削り，底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，内外面共磨滅	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	Ⅱ層．反転 底内に線刻あり
8	E-5	土師器 坏	— (6.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ナデ	にぶい橙色	緻密	良好	反転 底外に線刻あり
9	D-4	土師器 坏	— (6.0) —	外面：手持ちヘラ削り，底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	緻密 白色粘土混入 赤・白色粒子	良好	Ⅱ層．反転 底外にヘラ書あり
10	E-6	土師器 皿	— (4.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	黄色～橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転 底外にヘラ書あり
11	E-5	黒色土器 坏	— (5.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ，暗文，内面黒色	黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	反転 底外に線刻あり
12	E-6	土師器 皿	— (7.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	やや軟質	反転 底外に線刻あり
13	E-6	土師器 坏	— (5.6) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	褐色	密・白色粘土混入 白色粒子，雲母 赤色粒子多い	良好	反転 底外に線刻あり
14	E-6	土師器 坏	— (7.0) —	外面：体・底部手持ちヘラ削り，底部外面剥離 内面：ロクロナデ，暗文	黄橙色	密 赤・白色粒子	軟質	反転 底内にヘラ書あり
15	E-6	土師器 皿	— (7.0) —	外面：体・底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	反転 体内にヘラ書あり
16	B-5	土師器 蓋	(17.7) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	にぶい黄橙色	密 赤・白・黒色粒子 雲母	良好	Ⅱ層．反転 体外に線刻あり
17	表採	土師器 蓋	(15.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	Ⅱ層．反転 体内に線刻あり
18	表採	土師器 皿？	— (4.4) —	外面：手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	反転 底外に線刻あり

番号	グリッド	器種・器形	法量(cm)	製作技法および器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
19	C-5	土師器 坏	(17.8) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	破片 体外に線刻あり
20	D-5	黒色土器 坏	(16.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	浅黄橙色	緻密 赤・白色粒子	良好	破片 体外に線刻あり
21	C-6	黒色土器 坏	— — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	破片 体外に線刻あり
22	C-4	土師器 坏	— — —	外面：体・底部手持ちヘラ削り 内面：ナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	破片 体外・底外に線刻あり
23	B-5	土師器 坏	— — —	外面：底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	II層．破片 底外に線刻あり
24	B-5	土師器	— — —	外面：底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白色粒子	良好	II層．破片 底外にヘラ書あり
25	C-5	土師器	— — —	外面：手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	破片 底外に線刻あり
26	C-5	黒色土器	— — —	外面：底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	破片 底外に線刻あり
27	C-5	土師器	— — —	外面：底部回転糸切り後手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	破片 底内にヘラ書あり
28	表採	土師器	— — —	外面：底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	にぶい橙色	密 赤・白・黒色粒子	良好	破片 底内にヘラ書あり
29	表採	黒色土器	— — —	外面：底部手持ちヘラ削り 内面：ロクロナデ	橙色	密 赤・白色粒子	良好	破片 底内に線刻あり
30	D-5	須恵器 高台付坏	— (10.0) —	外面：ロクロナデ，底部回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	青灰色	密 白・黒色粒子	良好	反転
31	C-5	須恵器 高坏	— — —	外面：ロクロナデ，底部回転ヘラ削り 内面：ナデ	灰色	密 赤・白・黒色粒子	良好	反転
32	D-3	須恵器 蓋	(15.6) — —	外面：ロクロナデ，回転ヘラ削り 内面：ロクロナデ	灰色	密 白色粒子，小礫	良好	反転
33	E-5	須恵器 甕	(35.0) — —	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	灰色	密 白・黒色粒子	良好	反転

第17表　遺構外出土遺物観察表（土製品・石製品）

〔単位はcmおよびg〕

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
34	獣足	土製	4.0	2.7	—	—	表採、浅黄橙色 ヘラ削り、ヘラ状工具による刻み
35	土錘	土製	5.8	2.0	2.4	37.0	E-6 グリッド、ほぼ完形 一部黒変している 橙色、整形ーナデ
36	砥石	緑色凝灰岩	5.05	3.8	0.7	21.0	E-6 グリッド、ほぼ完存 孔有り、4面使用
37	砥石	ホルンフェルス	3.7	3.4	2.8	68.0	C-6 グリッド、欠損品 4面使用

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　大坪遺跡のテフラ分析

河　西　　学（㈶山梨文化財研究所）

はじめに

大坪遺跡は、甲府市東部にあって、甲府盆地北部の山地から盆地に遷移する地点での沖積面上に立地する遺跡である。これらの山地は鮮新世の水ケ森火山岩からなる八人山・大蔵経寺山などから構成される。八人山から大蔵経寺山の間には、濁川の支流である十郎川によって形成された急勾配の扇状地が分布している。遺跡周辺の十郎川は、この扇状地面と笛吹川の扇状地（沖積低地）との境界を南西から西方向に流れて、酒折一丁目付近で濁川と合流し、南流して笛吹川に至る。本遺跡では、平安期の土師器を中心とする遺物包含層の下位に厚い黒色腐植質土が堆積し、より下位の青灰色シルト中には厚さ５～８㎝の姶良Tnテフラ（AT）の純層が確認されている。ここではATの記載とともに黒色腐植質土中で広域テフラを検出することを目的としてテフラ分析を行ったので、以下に報告する。

Ⅰ．姶良Ｔｎテフラ（ＡＴ）

テフラ層は、地表下約1.4～1.8ｍに厚さ５～８㎝で挟在している。野外では堆積最下部の約２㎝程度が褐色を帯び粗粒であり、上方では白色で細粒化する。テフラを水洗後顕微鏡下で観察すると、無色火山ガラスから構成され、粒子の形態は、A・A'型のいわゆるバブルウォール（泡壁）型がほとんどで、D・E型をわずかに含む。火山ガラスの屈折率は、位相差顕微鏡による浸液法（新井，1972）によって測定され、ｎ＝1.498～1.501（モード 1.4995）の測定値が得られた（第18表）。以上の火山ガラスの諸特徴からこのテフラは、姶良Tnテフラ（AT）（町田・新井，1976）に対比される。

ATは、本遺跡の深掘トレンチにおいて地表下約1.4～1.8ｍの深さにほぼ同様の層厚で検出される。ここでのATは水成堆積テフラと考えられる。堆積後、上位に青灰色砂質シルト～シルトが堆積するが、これらの堆積物中に後述のNos．20，21で顕著なAT火山ガラスの二次堆積粒子の混入が認められる。

第18表　ＡＴの産出地点と諸特性

地　　点	深度(m)	厚さ(cm)	火山ガラス		火山ガラスの屈折率レンジ（モード）
			形　態	色	
大坪遺跡（甲府市桜井町）	1.4～1.8	5～8	泡壁型(A・A'型)	無	1.498～1.501(1.4995)
上土器遺跡（甲府市桜井町)(1)	1.4	5	泡壁型(A・A'型)	無	1.499～1.501(1.500)
甲府市和戸町富士塚367（旧日産跡地)(2)	1.7	5	—	—	—
甲府市東部市民センター南の交差点付近	1±	5	泡壁型(A・A'型)	無	1.497～1.502(1.500)

(1) 田代ほか（1988）、(2) 甲府市教育委員会による。

大坪遺跡周辺でのATの検出例は以下の通りである（第18表）。甲府市桜井町上土器遺跡で地表下1.4ｍで厚さ５㎝のガラス質テフラ層が屈折率測定によりATと同定されている（田代ほか，1988）。甲府市和戸町富士塚367番地（旧日産跡地）の試掘調査で、地表下1.7ｍで厚さ５㎝でATと推定されるガラス質テフラ層が甲府市教育委員会によって確認されている。また甲府市和戸町の甲府市東部市民センター南の交差点付近において、地表下約１ｍ程度と見積もられる深度で厚さ５㎝のATが確認された。ATの深度は各地点で一定しているわけではないが、どの地点でも青灰色から灰色のシルト～粘土層などの水成堆積物中にATが挟在されていることが共通する。今後この地域のATが、発掘調査を行う上で降灰前後の微地形の復元などに有力な鍵層となると期待される。

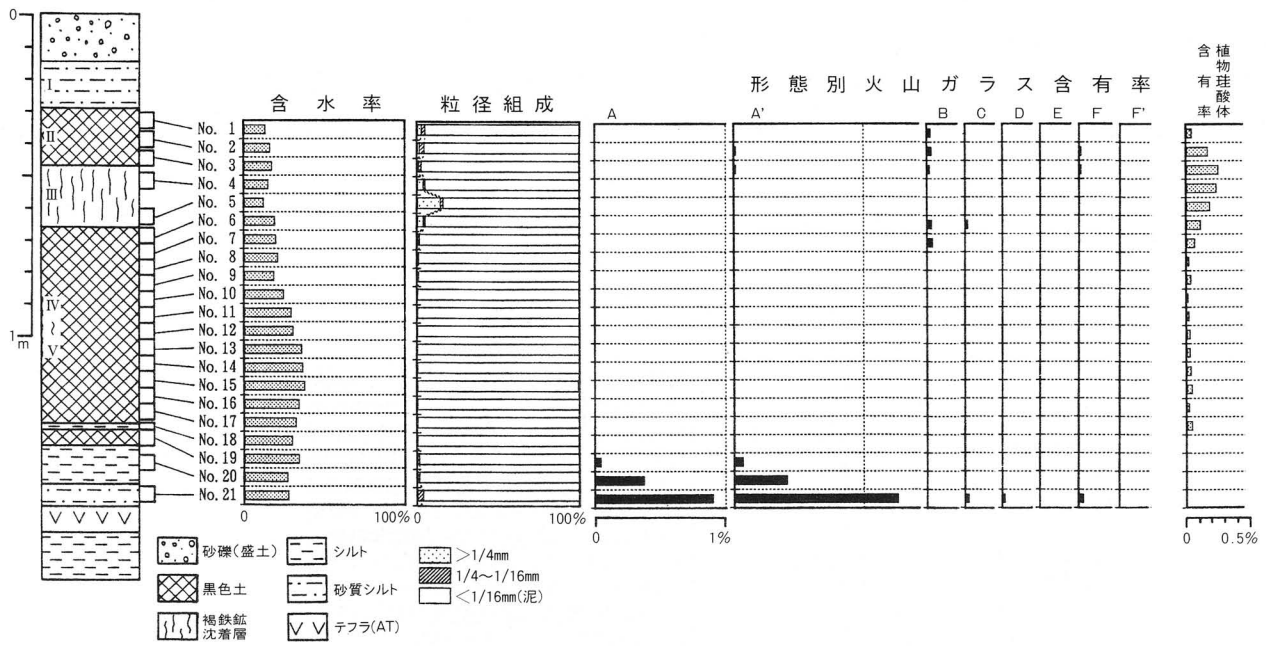
Ⅱ．トレンチ断面連続試料からのテフラの検出

１．試料

分析試料は、深掘トレンチの東西断面のうち西側で採取したものである。柱状図は結果とともに示す（第40図）。

第19表　大坪遺跡試料の計数鉱物粒数（＋は計数以外の検出を示す）

	試料番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19	No. 20	No. 21
火山ガラス	A　無色		2	2			5	1			1	2			3	2	5	5	25	23	133	115
	A　褐色			1																	＋	＋
	A' 無色	3	3	5	2	3		1		1	1	1	1	2		4	9	9	25	34	148	162
	A' 褐色											1					3	2				
	B　無色	7	6	6	3	3	16	23	7	6	4			1		1	2		8	1	5	
	B　褐色																					
	C　無色	1	2	2	5	3	10	5	2	3	3	1						3	1		3	4
	C　褐色					1										1						
	C　緑褐色																					
	D　無色																			1	2	3
	E　無色																					
	F　無色	3	3	4		1					2								1		1	5
	F　褐色																					
	F　緑褐色																					
	F' 無色																			1	1	
	F' 褐色																					
	F' 緑褐色																					
	長石＋石英	242	312	202	123	139	302	384	426	441	443	440	430	383	310	352	344	295	300	357	164	162
	斜方輝石	26	21	33	10	7	2	4	3	2	2	1		32	38	22	3	7	7	10	＋	
	単斜輝石	2	5	5	1	2								1	1	1			1	2		
	角閃石	7	21	2	3	2	12	3	1	1	1	4	1		1	6	7	21	35	15	6	10
	酸化角閃石											1		1		1						
	緑簾石			2		1								1				1	1			1
	ザクロ石						1															
	不透明鉱物	5	14	7	8	2	1	3					1	5	5	2	1	3	4			
	黒雲母														1			1		1	1	6
	植物珪酸体	11	27	67	119	50	45	33	23	26	18	22	44	52	52	49	53	47	17		2	
	その他	193	84	162	226	286	106	43	38	20	25	27	23	22	89	59	73	106	75	55	34	32
	合計	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500



第40図　大坪遺跡の火山ガラス・植物珪酸体含有率

試料を採取した断面は、採取直後に崩落したため、本文中の断面図（第４図）と層序区分が若干異なっている。

２．分析方法

試料は、湿ったまま約20ｇを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析篩（＃250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩（＃60，＃250）を用いて＞1/4㎜および1/4～1/16㎜の粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析試料の乾燥重量は、別に同一試料約５～10ｇを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105℃、５時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/4～1/16㎜の粒径砂をスライドグラスに封入し

偏光顕微鏡下で行なった。１試料ごとに火山ガラス・風化物・その他の粒子を含めた合計が500粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）の方法に従った。細粒結晶を包有するF型火山ガラスはF'型として区別した。

３．分析結果・考察

偏光顕微鏡下での計数結果を第19表に示す。これをもとに含水率（注1）、粒径組成、1/4～1/16㎜の形態別火山ガラス含有率、および1/4～1/16㎜サイズの植物珪酸体含有率を算出し第40図に示す。なお形態別火山ガラス含有率および植物珪酸体含有率は、試料単位重量当たりの1/4～1/16㎜粒径の各粒子の割合で表示した（注２）。

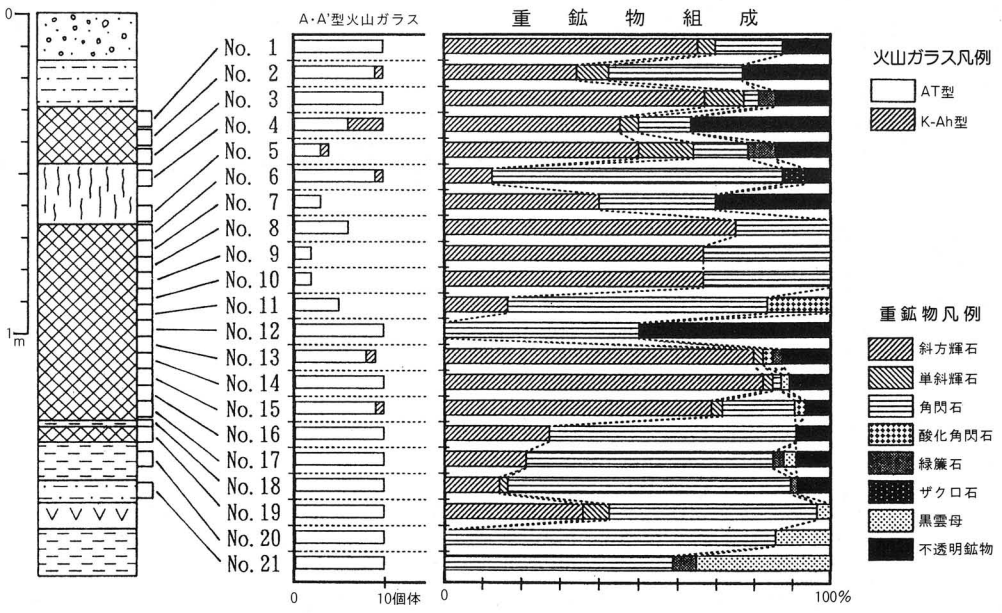
以下に各地点の特徴について述べる。

AT直上の火山ガラスの含有は、No.21でA型0.9%、A'型1.3%を示すのを最大に上方に向かって急激に減少し、No.18から上位では極めてわずかしか検出されない。これは肉眼観察でも確認できたATの上方への二次堆積を顕著に示している。

Nos.8～18の間の黒色腐植質土においては火山ガラスの含有は極めてわずかである。Nos.1～7の間では、0.05%未満という極めてわずかのB・C型火山ガラスが連続して検出される。形態的には立川ローム層中のUG（約13000年前）に類似した火山ガラスである。B・C型の含有率が微量であり、堆積物中の含砂率が増加する層準に相当すること、平安時代遺物包含層（Ⅱ層）に近接していること、などからテフラの一次堆積か疑問である。

甲府盆地のテフラ分布からこの地域でAT以降に降灰が予想される広域テフラは、UG、鬼界－アカホヤ火山灰（K－Ah，約6300年前）、カワゴ平軽石（Kg 2900～2800年前）などである。そこでA・A'型火山ガラスを屈折率の差によってAT型とK－Ah型とに区別してみた（第41図）。低屈折率のATと高屈折率のK－Ahとの中間の屈折率をもつ浸液と比較し、火山ガラス周縁部は厚さ約５μmのハイドレーション（水和）層を示し浸液屈折率より高いA・A'型をK－Ah型火山ガラス、浸液より屈折率が低いA・A'型をAT型火山ガラスとした。第41図では、すべての試料でAT型が優勢である。平安の包含層堆積期でも二次堆積テフラ粒子としてATの方が優勢であった。K－Ahの明瞭なピークは認められない。しかしNos.13，15でK－Ah型が検出されることからⅣ～Ⅴ層の多くの部分はK－Ah降灰以降の堆積物である可能性がある。また上述のB・C型火山ガラスは二次堆積の可能性が高い。なおⅤ層の下位には灰白色シルトがブロック状に混在する28層がほぼ水平に連続して堆積している。28層の堆積期に大きな時間間隙（不整合）が存在すると考えられる。

今回の試料中にはシルトサイズ（<1/16㎜）以下の粒子を除去しているにもかかわらず多くの植物珪酸体が含まれていた。珪酸体の同定はできないが、珪酸体の多くは、細長い大きめの機動細胞型でヨシ属の形態に類似してい



第41図　屈折率によるA・A'型火山ガラスの区分と重鉱物組成

る。珪酸体はⅡ層下部No.３の極大（0.25%）を中心として、Ⅱ～Ⅲ層に集中する傾向が認められる。これは、別項同章第２節で花粉化石とともに報告されている植物珪酸体のヨシ属がⅡ層中で極大を示すことと調和的である。

重鉱物量はあまり多くはないが、この地域の堆積物の供給源を推定するために重鉱物組成図を作成した（第41図）。Nos.20～21において、角閃石・黒雲母が主体をなす。黒雲母は、上方に向かって急減する。これに変わってNo.19から上位では斜方輝石・単斜輝石・角閃石・不透明鉱物からなる組成が連続する。十郎川流域には単斜輝石・斜方輝石・安山岩からなる水ケ森火山岩が分布している（三村ほか、1984）。従って黒色腐植質堆積物中に含まれる斜方輝石・単斜輝石は近接する十郎川流域から供給されたものである。これに対しAT上位の青灰色シルト質堆積物中に含まれる角閃石・黒雲母は、笛吹川流域の主として花崗岩類から供給されたものと推定される。また黒色腐植質堆積物中にも角閃石が連続的に含有されていることから、湿地的堆積環境に十郎川流域堆積物ばかりでなく笛吹川流域堆積物も供給されていたことがわかる。これらのことから遺跡周辺では、笛吹川の沖積低地に位置していた時期にATの降灰があり、その後水位が下がって湿地化がはじまり、不整合を挟んで本格的な湿地環境が継続していく中で、十郎川流域からも笛吹川流域からも細粒堆積物の供給が継続的にあったものと推定される。

注１　全重量に対する水分量の割合。湿重基準含水率。

注２　形態ｘ型の火山ガラスの含有率Axは、

$$Ax\ (\%) = (C/B) \times (Ex/D) \times 100$$ で算出される。

ただし、Ｂ：試料の乾燥重量（ｇ）

Ｃ：1/4～1/16㎜粒径砂分の重量（ｇ）

Ｄ：計数した1/4～1/16㎜粒径粒子の総数

Ex：計数したｘ型火山ガラスの粒数

引用文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定―テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、254-269。

遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学，13，19-30。

町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―。科学，46，339-347。

田代孝・櫛原功一・宮沢公雄（1988）上土器遺跡発掘調査報告書。甲府市史研究、６、69-92。

第２節　甲府市大坪遺跡の花粉化石

鈴　木　　茂（パレオ・ラボ）

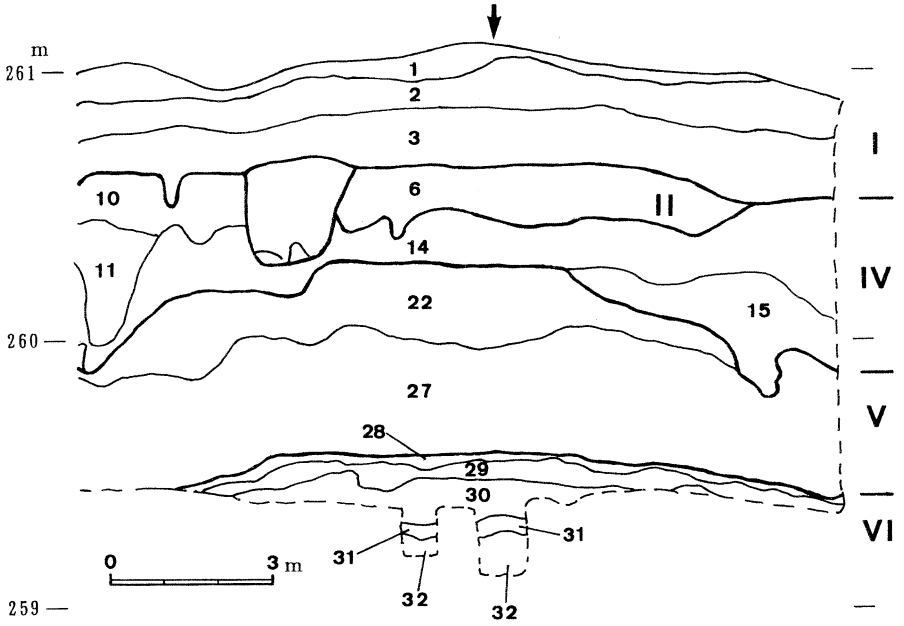
１．はじめに

甲府市桜井町に所在する大坪遺跡において発掘調査が行われ、平安時代の遺構・遺物が多数検出されている。さらに調査区北壁（東西断面）においては遺構・遺物包含層の下位層についても土層調査が行われ、約2.2－2.5万年前に噴出・降灰した姶良Tnテフラ（町田・新井　1992）が検出されている。これまで甲府市近辺においては古い時代からの植生変遷的な調査例は少なく、未知の点が多い。こうしたことから、調査区北壁の土層より採取した試料を用いて花粉分析を行い、約２万年前以降の遺跡周辺の植生変遷について検討した。

２．試料

試料は東西断面北壁の東端より西に６ｍほどの地点で、平安時代の遺構・遺物包含層（６層）より下位について柱状で採取した（第42図）。花粉分析はこの柱状試料より実験室内での再度の観察後分割した12点（第43図）について行った。なお、第42、43図に示した層位番号については、資料として頂いた断面図に使用されていたものを用いた。各土層の詳しい記載については本論の土層の章を参照して頂き、以下には試料を採取した土層を中心に簡単な記載を示した。

１～３層（Ｉ層）は盛土で、砂礫を含む黒色粘土（２層）や黄褐色の砂質土（３層）が認められる。６層（II層）は砂礫混じりの黒褐色粘土で、小さな空隙がやや多く認められる。また、細い根状の植物遺体が縦にみられる。14層（IV層）は褐色の粘土で、粘性が高く、小さな空隙が多くはいり、赤褐色の酸化鉄がほぼ全体に認められる。22層（Ｖ層）は暗褐色の粘土で、粘性が高く、灰白色粘土が主として中・下部において斑状に認められる。また、根状の植物遺体が点在しており、赤褐色の酸化鉄の集積が細く縦に認められる。27層（Ｖ層）は黒色の粘土で、粘性が高い。28層（VI層）は黄灰色の極細粒砂～シルトで、一部灰白色を呈し、レンズ状となる部分も認められる。29層（VI層）は黒色の粘土で、黄灰～黒灰色砂質シルトの小塊（径１～１㎜）が多く認められる。30層（VI層）の上部は暗褐色の砂質粘土で、青灰色の極細粒砂が多い部分も認められる。下部は黄色を帯びた灰白色のシルト質極細粒砂である。31層（VI層）は褐色を帯びた灰白色のテフラ層（姶良Tnテフラ）である。32層（VI層）は極細粒砂層で、褐色を帯びた黒灰色、青灰色、黄褐色などを呈している。

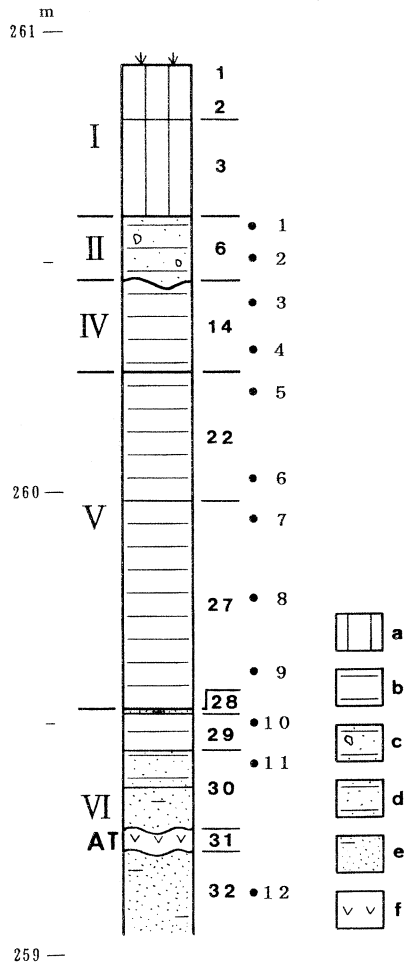


第42図　試料採取地点（矢印）付近の土層断面図

3．分析方法

上記した各土層のうちの６層より下位より採取した12試料（第43図）について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約２～５ｇ）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、重液分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。



第43図　試料採取地点の地質柱状図と花粉分析層準

a：盛土　b：粘土　c：砂礫混じり粘土
d：砂質粘土　e：シルト質砂　f：テフラ

4．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉29、草本花粉23、形態分類で示したシダ植物胞子２の計54である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を第20表に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を第44図に示した。しかしながら、試料３、４については検出できた樹木花粉数が非常に少なく分布図として示すことができず、試料12も樹木花粉の産出数が少ないことから樹木花粉の出現傾向については参考までにみて頂きたい。なお、分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を作成し、各々にPLC．SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、樹木花粉の産出傾向から下位よりⅠ～Ⅳの４つの花粉化石群集帯を設定した。

Ⅰ帯（試料12）は草本花粉の占める割合が約85%と高く、その中でもヨモギ属が非常に多く検出されている。その他、カラマツソウ属は他層準試料と比べ突出して多く得られており、ヨモギ属を除くキク亜科（他のキク亜科）も同様の傾向を示している。また、タンポポ亜科も目立って検出されており、上位層準試料に比べては少ないがイネ科や単条型のシダ植物胞子も比較的多く産出している。樹木花粉は、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属単維管束亜属（いわゆるゴヨウマツ類）、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などがわずかに検出されているだけである。

Ⅱ帯（試料10、11）は単条型シダ植物胞子の占めている割合が高く、60%ほどに達している。樹木花粉ではカバノキ属が20%を越え、ハンノキ属やコナラ亜属も20%前後の出現率を示している。その他、ツガ属は10%を越え、クマシデ属－アサダ属やニレ属－ケヤキ属は5%を越えて得られている。草本類ではイネ科やカヤツリグサ科が増加し、一方、Ⅰ帯で非常に多く検出されていたヨモギ属やカラマツソウ属は激減している。

Ⅲ帯（試料３～９）はモミ属やツガ属の増加で特徴づけられ、出現率は20%前後を示している。同じ針葉樹のマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）も上部では少ないが、下部では７、８%得られている。ハンノキ属も20%前後検出され、試料５では66%に達している。一方、カバノキ属は出現率が10%ほ

第20表　大坪遺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
樹木													
マキ属	*Podocarpus*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	1	1	-	-	11	77	29	37	63	7	5	1
ツガ属	*Tsuga*	2	6	-	1	40	82	50	52	46	26	34	7
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	1	2	4	1	1	2	2	1
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	1	3	2	-	1	12	6	14	17	4	2	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	2	2	-	-	1	3	2	6	4	6	7	4
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	3	4	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
スギ属	*Cryptomeria*	9	20	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	15	10	-	-	-	1	-	2	-	3	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	1	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	4	3	-	-	1	6	12	5	3	15	21	-
ハシバミ属	*Corylus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	2
カバノキ属	*Betula*	-	2	-	1	2	20	23	14	11	44	70	11
ハンノキ属	*Alnus*	3	2	-	13	119	36	65	39	25	30	62	13
ブナ属	*Fagus*	1	2	-	-	-	1	-	-	2	3	2	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	27	27	-	-	-	7	21	23	24	52	34	10
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	13	13	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	3	3	-	-	2	4	2	-	8	11	11	1
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カエデ属	*Acer*	1	-	-	-	-	1	1	-	-	1	4	1
シナノキ属	*Tilia*	-	-	-	-	-	-	1	-	2	1	-	1
マタタビ属近似種	cf. *Actinidia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ウコギ科	Araliaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
アオキ属	*Aucuba*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-
草本													
ガマ属	*Typha*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	96	62	-	2	18	62	352	746	746	484	361	164
カヤツリグサ科	Cyperaceae	17	31	1	-	6	6	23	89	67	219	79	4
クワ科	Moraceae	6	3	-	2	1	1	3	1	-	2	-	-
イブキトラノオ節	*Polygonum* sect. Bistorta	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	4	-	-	1	-	-	1	2	-	-	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	15	9	-	-	-	-	-	1	2	-	-	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	-	-	-	-	6	5	19	31	5	16	107
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	1	-	-	1	-	-	-	1	1	8	1
アブラナ科	Cruciferae	6	2	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	-	-	1	7	5	3	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	3	1
マメ科	Leguminosae	3	-	-	-	1	1	-	2	-	4	1	1
フウロソウ属	*Geranium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	-	-	-	-	-	5	4	-	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	-	-	-	-	-	-	2	-	3	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	*Artemisia*	43	37	-	-	4	14	27	43	54	27	48	627
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	4	-	1	3	2	3	10	14	4	12	45
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	11	-	-	-	-	-	-	5	1	2	10
シダ植物													
単条型胞子	Monolete spore	54	52	1	69	1545	1272	1207	764	2136	1403	1212	119
三条型胞子	Trilete spore	3	3	1	4	-	1	1	-	2	-	5	2
樹木花粉	Arboreal pollen	88	102	4	15	179	253	217	197	208	212	262	55
草本花粉	Nonarboreal pollen	195	166	1	5	35	92	414	923	933	758	534	964
シダ植物胞子	Spores	57	55	2	73	1545	1273	1208	764	2138	1403	1217	121
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	340	323	7	93	1759	1618	1839	1884	3279	2373	2013	1140
不明花粉	Unknown pollen	35	48	3	2	12	23	29	36	46	37	42	48

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

どに減少し、コナラ亜属も上部に向かい出現率を下げている。草本類はイネ科が出現率を上げて試料８では40%弱を示すが、上部では急減している。その他はいずれも低率で、カヤツリグサ科やヨモギ属もやっと１%を越えた程度で、やはり上部では減少している。単条型のシダ植物胞子が非常に多く得られ、試料５では90%近くに達している。なお、試料３、４は検出花粉数が少なく、その傾向については不明であるが、試料４でハンノキ属が比較的検出され、試料３については４と同層位であることなどから、便宜的な部分も含めてⅢ帯とした。

Ⅳ帯（試料１、２）はスギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属の増加で特徴づけられる。これまで殆ど検出されなかったスギ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科は10～20%の出現率を示し、同じ針葉樹でⅡ帯において多くみられたモミ属やツガ属は1%前後に減少している。コナラ亜属は30%前後の出現率を示し、アカガシ亜属も10%を越えて得られ、シイノキ属－マテバシイ属も若干認められる。草本類ではイネ科やヨモギ属が再び増加しており、カヤツリグサ科やアカザ科－ヒユ科も5%前後検出されている。また、単条型胞子は急減している。

５．遺跡周辺の古植生変遷

１）時期設定について

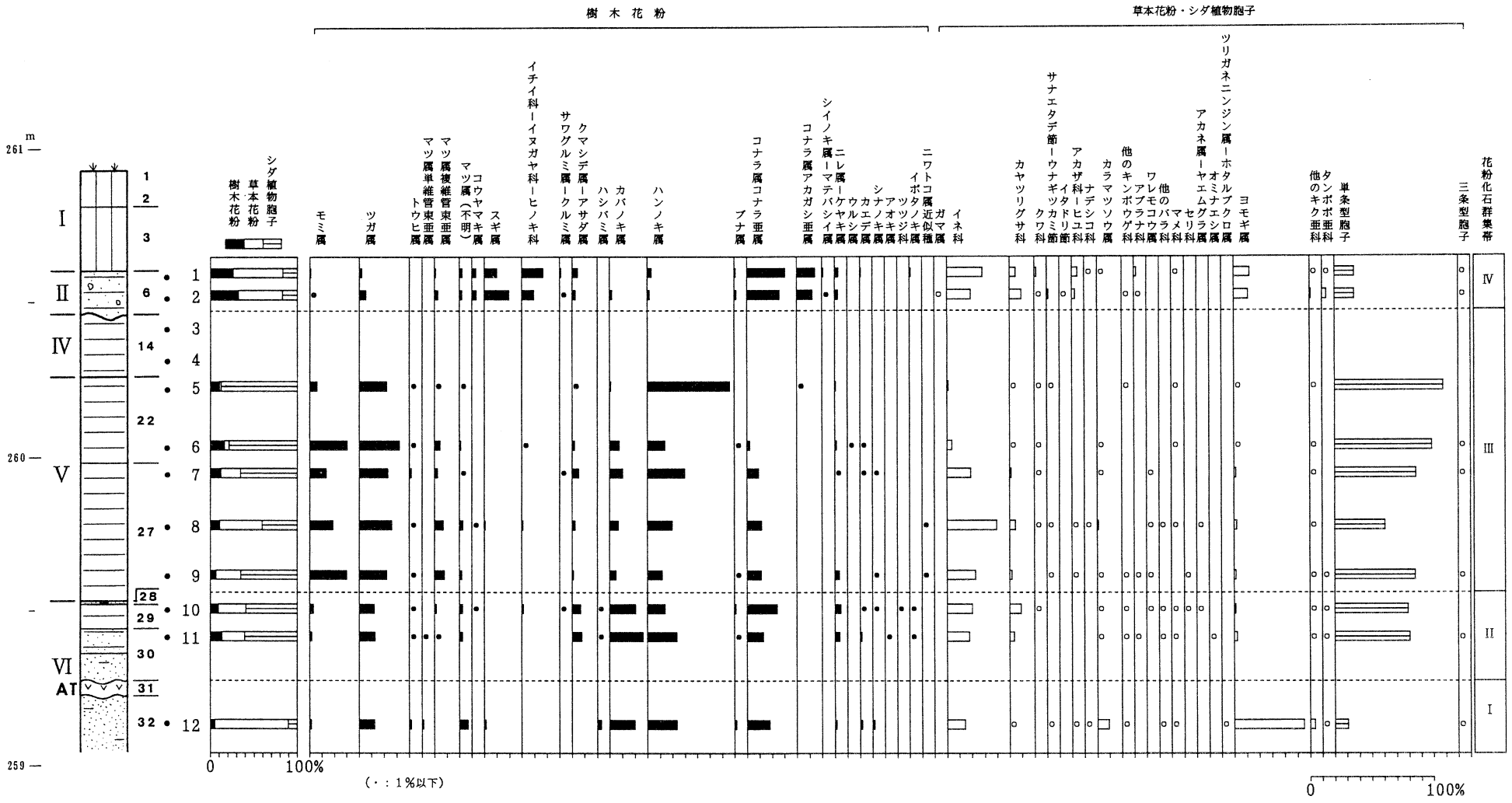
層位区分の６層（Ⅱ層）からは平安時代の遺構・遺物が多数検出されており、花粉帯Ⅳはこの頃と推測される。この下位層については遺構・遺物が検出されておらず時代については不明である。また、31層（Ⅵ層）はガラス質火山灰層で、火山灰分析の結果（同章第１節）2.2～2.5万年前に噴出した姶良Tnテフラと同定され、31層の堆積年代はこの頃の最終氷期最寒冷期頃と考えられる。

２）遺跡周辺の古植生

上記したように、今回の分析層準についての時期設定がほとんどできないことから、花粉帯を基に古植生について検討した。

Ⅰ帯：ヨモギ属やイネ科、カラマツソウ属などの草本類が圧倒的に多く検出され、これらを主体とした草地的な植生が主体であったと予想される。このうちカラマツソウ属は主に日当りのよい草地にみられるものが多く、ヨモギ属とともに草原的景観を周辺山地・丘陵部に形成していたのであろう。また、イネ科については他の試料にも多く検出されていることから、予察的ではあるがプラント・オパール分析を試みたところヨシ属が多く検出され（第21表）、遺跡周辺低地部はヨシ属が生育する湿地的な環境が予想される。森林植生としては、モミ属、ツガ属、トウヒ属、ゴヨウマツ類などの針葉樹類や、カバノキ属、コナラ亜属、ハシバミ属などの落葉広葉樹類、ハンノキ属の湿地林的なものがわずかにみられるだけであった。このように、この時期の大坪遺跡周辺の植生について、山地・丘陵部はヨモギ属やカラマツソウ属を主体とした草原が広がり、針葉樹や落葉広葉樹類はわずかにみられるだけであったと推測される。一方、低地部はヨシ属が生育する湿地が広がっていた。時代としては、上位に2.2～2.5万年前に降下した姶良Tnテフラが存在することから、これよりも古い時期と考えられる。また、３～４万年前の関東地方中・南部ではハンノキ属・コナラ属が多く、ブナやスギ、トウヒ属、ゴヨウマツ類をともなっている（辻　1983）。今回の分析結果はこれに類似しているように思われ、現時点ではⅠ帯の年代についてはこの当りではないかと考えているが、根拠などは何もなく今後の課題である。

Ⅱ帯：カバノキ属やコナラ亜属が多く検出されており、これらにクマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属などを含めた落葉広葉樹林が遺跡周辺の主に山地・丘陵部分に成立していた。また、ツガ属やモミ属などの針葉樹林も成立していたであろう。このように、山地・丘陵部においてはこの時期すでに森林が侵入しており、ヨモギ属やカラマツ属など、Ⅰ帯でみられた草原的な景観は急速に縮小したと思われる。遺跡周辺の低地部はこの時期においてもヨシ属やカヤツリグサ科が生育する湿地的な環境が広く存在し、こうしたところにハンノキ属が分布を拡大し、湿地林を形成した。なお、シダ植物については形態分類の研究が花粉ほど進んでいないことから、当遺跡で検出された胞子の母植物については全く解らず、多産からの古植生についても不明である。一つには、上記した落葉広葉



第44図　大坪遺跡の花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草木花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

第21表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数

試料番号	イ　ネ	ネザサ節型	クマザサ属型	他のタケ亜科	ヨ　シ　属	キ　ビ　族	ウシクサ族	不　明
	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）
1	3,700	138,100	11,100	4,900	166,400	0	11,100	25,900
6	0	0	2,800	0	16,600	0	0	1,400
8	0	5,500	5,500	0	44,400	0	2,700	1,400
10	0	4,100	5,500	0	37,300	1,400	0	4,100
11	0	6,400	3,800	0	30,800	1,300	0	6,400
12	0	9,600	4,800	0	27,500	0	0	2,400

樹林や針葉樹林が分布を拡大するとともにこれらの下草としてシダ植物も増えたのかも知れないが、これについては今後の課題としたい。

Ⅲ帯：この時期の遺跡周辺山地・丘陵部はモミ属やツガ属、ニヨウマツ類といった針葉樹林が優勢となり、カバノキ属やコナラ亜属などの落葉広葉樹林はその分布域を狭めていった。低地部においてはこの時期も湿地的環境が広がり、ヨシ属が生育しており、ハンノキ属湿地林も拡大する方向であった。しかしながら、時代が進むにつれてこうした環境は狭まり、ヨシ属の生育地は急速に縮小した。花粉化石が殆ど得られなかった試料３、４の14層は全体に酸化鉄の集積がみられ、小空隙が多くみられるなど、14層堆積後において乾陸化し、それにともないかなりの酸化作用・土壌化作用をうけたのではないかと思われる。この酸化や土壌化作用により花粉化石の多くは分解・消失した可能性が高い。このように、ハンノキ属湿地林やヨシなどがみられた低地部は次第に陸化したと推測される。この頃の時代については不明であるが、モミ属やツガ属が多く検出され特徴的である。埼玉県所沢市のお伊勢山遺跡では弥生時代終末期から平安時代の土層から検出された木材化石のうちモミ属が最も多く得られ（能城・鈴木 1990）、丘陵部ではモミ、カヤといった針葉樹や常緑広葉樹が主要素となる暖温帯林が成立していた（辻　1990）。また、大阪の河内平野周辺の山地では縄文時代晩期にスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガなどが増加し、中間温帯針葉樹林が成立したと考えられている（那須　1989）。このように、縄文時代晩期から平安時代にかけて針葉樹類の増加がみられ、大坪遺跡のⅢ帯についてもこの時期に当たるのではないかと考えているが、他地点における確認作業など、これも今後の課題である。

Ⅳ帯：本帯は平安時代の遺構・遺物が多く検出されている６層堆積期に当たる。遺跡周辺丘陵部の針葉樹林はモミ属、ツガ属に代わりスギ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が主体となった。また、落葉広葉樹のコナラ亜属も優勢となり、照葉樹林要素のアカガシ亜属やシイノキ属－マテバシイ属もみられるようになった。辻（1989）は、埼玉県川口市の赤山陣屋跡遺跡において画期Ｅ３(4,000年前）以降に目立つ存在となったスギ，ヒノキ類，アカガシ亜属について、いずれも人間の自然への強い干渉の結果と考えている。大阪の河内平野では弥生時代Ⅴ期（後期）は河川の侵食・運搬営力は一段と強まり、奈良時代になるといっそう激化した（那須　1989）。先の川口市赤山陣屋跡遺跡においても2,200年前に谷内の縁辺を中心とする軽微な侵食谷の形成がみられる（辻　1989）など、弥生時代から古墳時代にかけて気候は悪化し、土地は不安定となった。大坪遺跡およびその周辺部も、遺構・遺物の検出にみられる人間活動の活発化や、丘陵部における侵食などの土地の不安定な時期が存在したと予想される。こうしたことによりモミ属やツガ属は生育地を狭め、跡地にスギ属やヒノキ類、コナラ亜属、アカガシ亜属が進入し、分布を拡大した。

また、低地部においてはヨシ属やカヤツリグサ科などが生育する湿地的環境が再びみられるようになった。しかしながら、検出できた花粉粒数は少なく、傷んでいるものが多いなど、Ⅲ帯同様乾陸化による土壌化作用をうけていると思われ、そうした環境も存在したことが予想される。その他、ヨモギ属やタンポポ亜科などのキク科、アカザ科－ヒユ科などの雑草類も目立つ存在となり、これも人間の自然への干渉の結果と推測される。

なお、予察的に行ったプラント・オパール分析において試料１よりイネが検出されており、遺跡周辺において稲作が行われていた可能性が考えられる。

6．まとめ

姶良Tnテフラ降下（2.2～2.5万年前）以前の大坪遺跡周辺の古環境は、低地部はヨシ属やハンノキ属が生育する湿地が広がり、山地・丘陵部は草原的景観であったと予想される（花粉帯Ⅰ）。

姶良Tnテフラ降下後は、遺跡周辺低地部は依然として湿地が広がっていたが、山地・丘陵部は草原から落葉広葉樹林や針葉樹林といった森林がみられるようになった（花粉帯Ⅱ）。

その後、針葉樹林はさらに優勢になったが、落葉広葉樹林は縮小する傾向に向かった。低地部はこの頃もヨシ属が生育する湿地が広がっていたが、ハンノキ属が侵入し湿地林を形成した。しかしながら、この湿地的環境もその後乾陸化が起こったと推測される（花粉帯Ⅲ）。

平安時代の針葉樹類はモミ属、ツガ属に代わり、スギ属、ヒノキ類が分布を広げ、落葉広葉樹のコナラ亜属や、照葉樹林要素のアカガシ亜属やシイノキ類もみられるようになった。低地部は再びヨシ属が生育する湿地的環境となり、一部には稲作が行われ、雑草類も多くなった。この森林構成要素の交代や雑草類の増加は人間活動が大きく影響していると思われる。

7．おわりに

以上が今回の分析結果およびその考察であるが、各花粉帯の年代や酸化・分解作用、シダ植物などいくつか問題点もあるが、草原的景観やモミ属・ツガ属を主体とした針葉樹林の優勢な時期の存在など興味ある分析結果が得られた。また、甲府市周辺においてはこのような古い時代以降の植生変遷について述べられたものはほとんどなく、今後における参考となる成果が得られたと考える。

引用文献

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス〔日本列島とその周辺〕．東京大学出版会，276p.

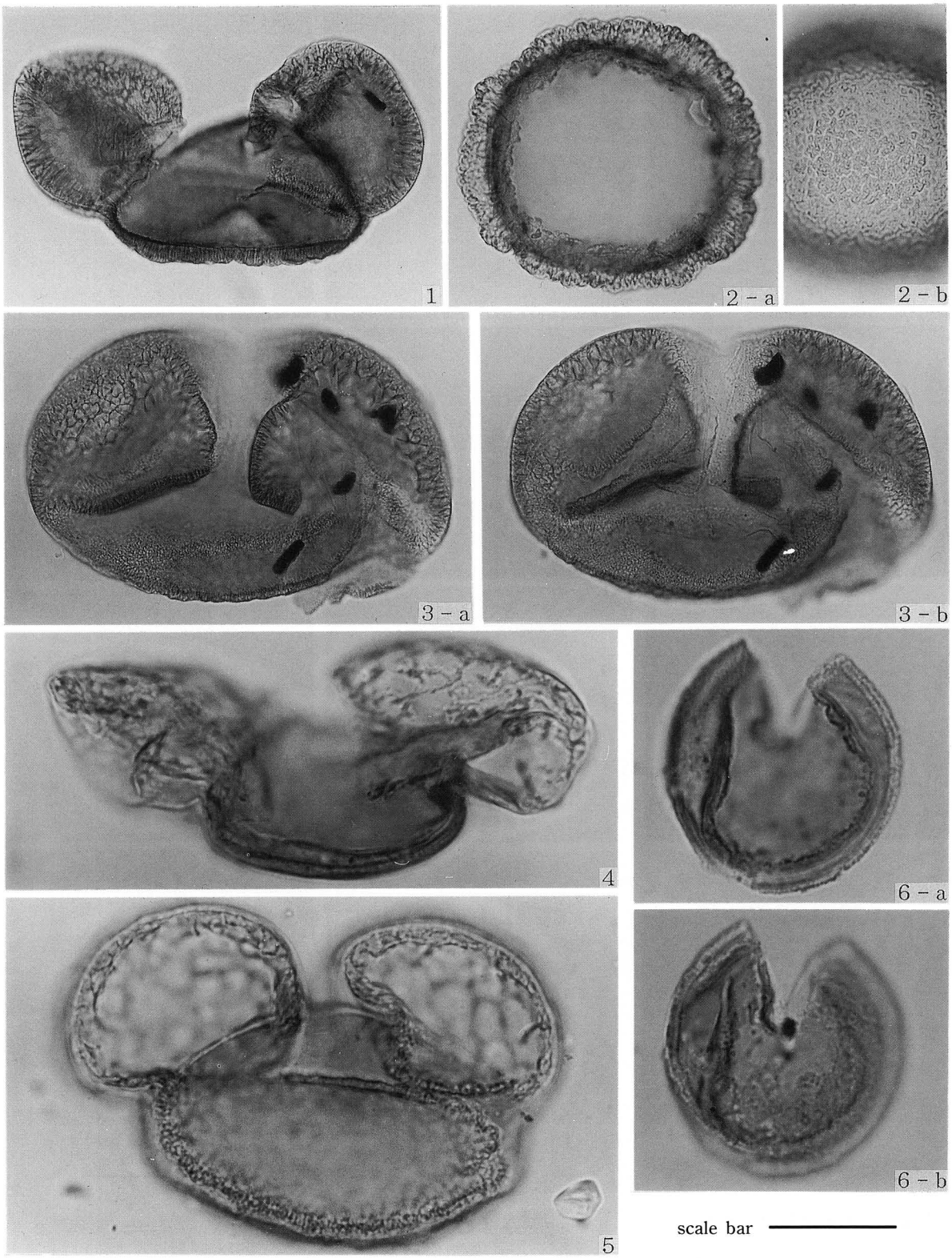
那須孝悌（1989）活動の舞台：概論．弥生文化の研究１　弥生人とその環境，雄山閣出版株式会社，p.119-130.

能城修一・鈴木三男（1990）木材化石群集．お伊勢山遺跡の調査　第４部　弥生時代から平安時代，早稲田大学所沢校地文化財調査室編，p.39-50.

辻　誠一郎（1983）下末吉期以降の植生変遷と気候変化．アーバンクボタ，21，p.44-47.

辻　誠一郎（1989）開析谷の遺跡とそれをとりまく古環境復元：関東平野中央部の川口市赤山陣屋跡遺跡における完新世の古環境．第四紀研究，27，p.331-356.

辻　誠一郎（1990）小括：弥生時代から平安時代の古環境．お伊勢山遺跡の調査　第４部　弥生時代から平安時代，早稲田大学所沢校地文化財調査室編，p.71-75.



scale bar

1～3 ：50μm

4～6 ：20μm

写真１　大坪遺跡の花粉化石

1：モ ミ 属　PLC. SS　1519　試料11

2：ツ ガ 属　PLC. SS　1517　試料11

3：トウヒ属　PLC. SS　1534　試料11

4：マ キ 属　PLC. SS　1526　試料２

5：マツ属複維管束亜属　PLC. SS　1523　試料６

6：ス ギ 属　PLC. SS　1527　試料２

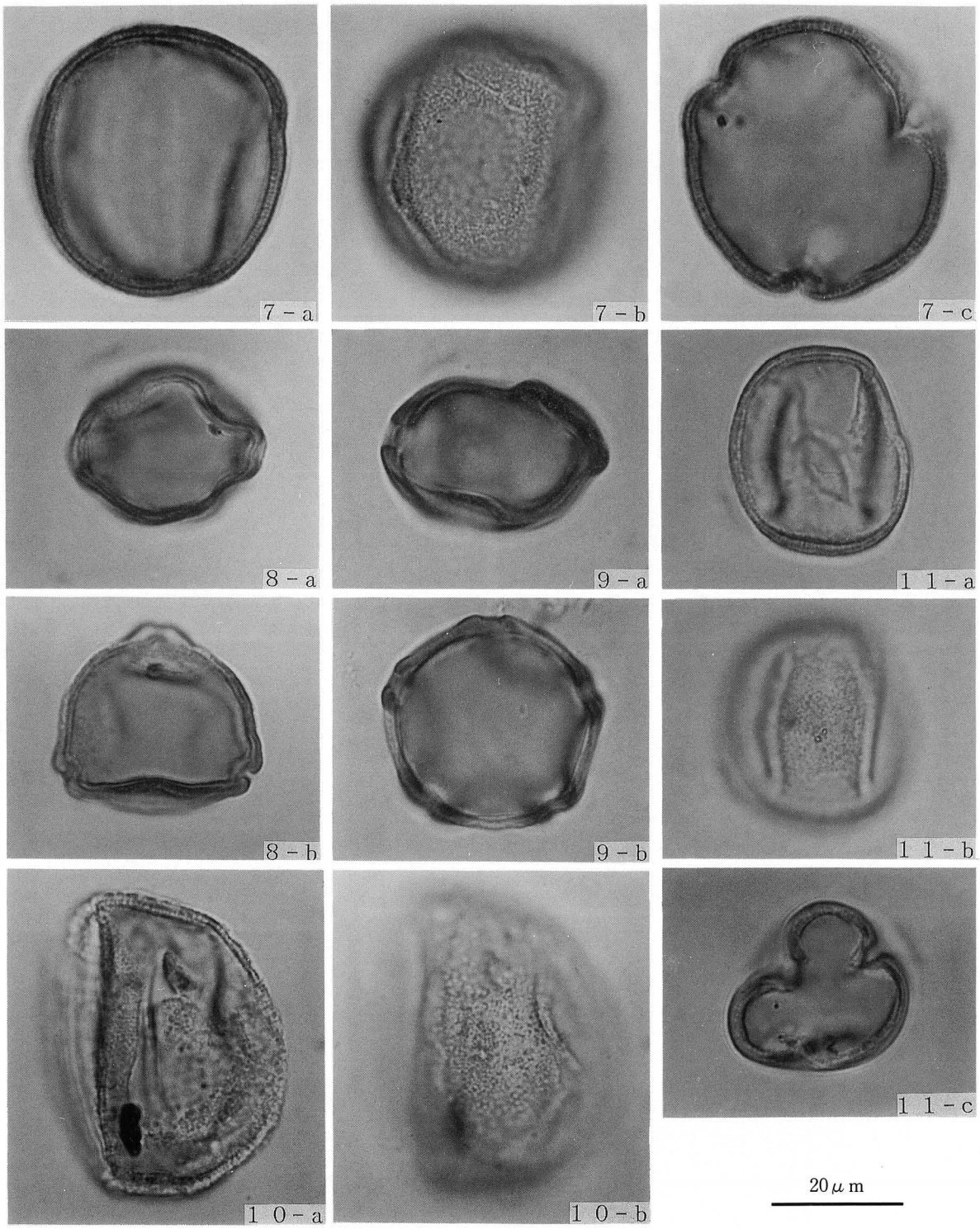


写真２　大坪遺跡の花粉化石

7：ブ　ナ　属　PLC. SS　1522　試料11
8：カバノキ属　PLC. SS　1532　試料11
9：ハンノキ属　PLC. SS　1519　試料11
10：コナラ属コナラ亜属　PLC. SS　1525　試料２
11：コナラ属アカガシ亜属　PLC. SS　1529　試料１

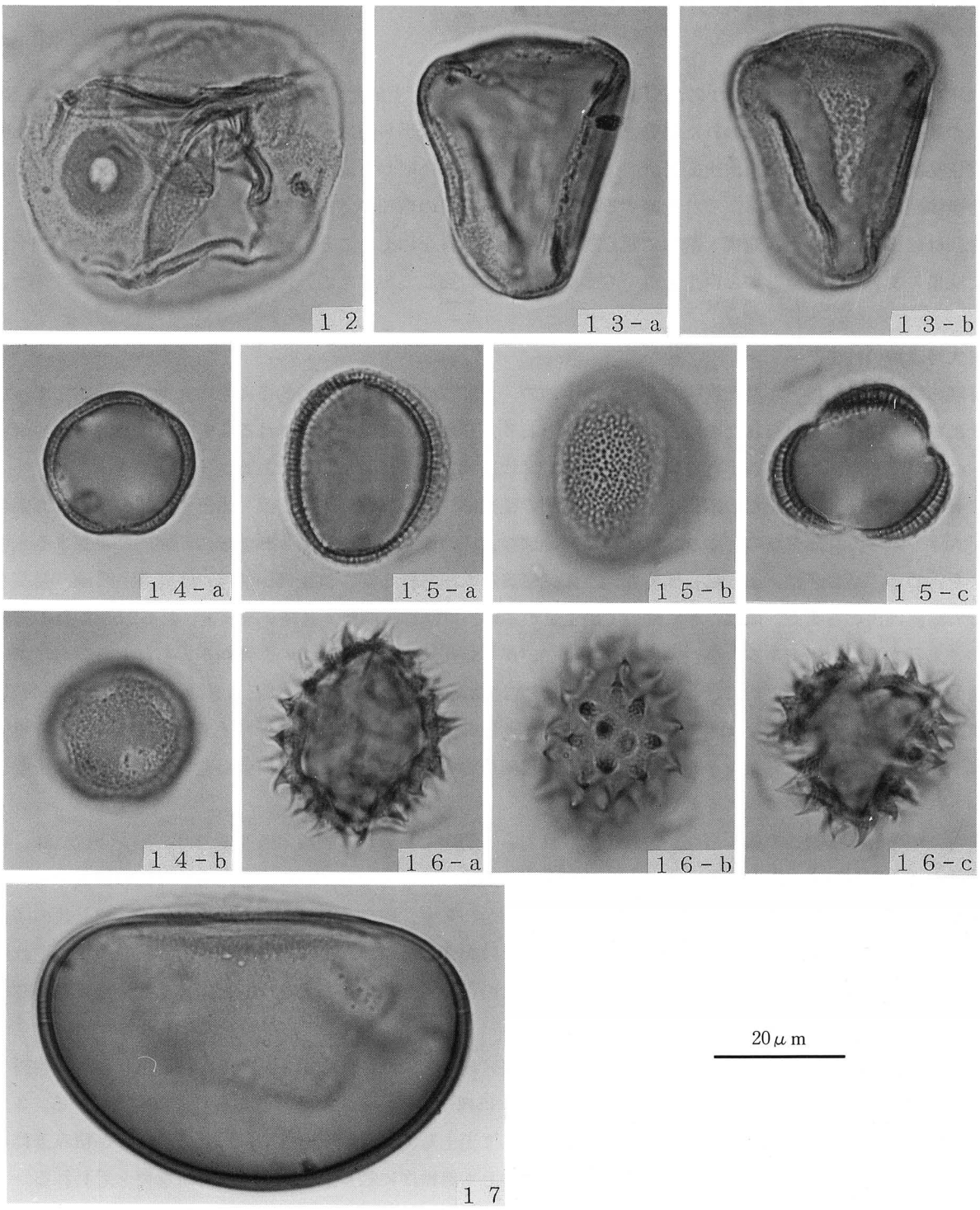


写真３　大坪遺跡の花粉化石

12：イ　ネ　科　PLC. SS　1522　試料２

13：カヤツリグサ科　PLC. SS　1524　試料２

14：カラマツソウ属　PLC. SS　1518　試料11

15：ヨ　モ　ギ　属　PLC. SS　1533　試料11

16：ヨモギ属を除く他のキク亜科　PLC. SS　1530　試料11

17：単条型シダ植物胞子　PLC. SS　1531　試料11

第Ⅶ章　調査の成果と総括

大坪遺跡は、先にも述べたように、古代甲斐国一円に供給された土師器の製作に関わる遺跡として知られてきた。今回の調査では、過去二回行われた調査とは異なり、狭い面積ながら面的に調査を行うことができ、竪穴建物跡や掘立柱建物跡、土器埋納遺構、土師器焼成遺構等、土師器製作に関わる遺構も検出できた。しかしながら、土師器の生産体制を立体的に復元し、それを論ずるにはさらなる資料の増加が望まれるところである。

今回は、紙数の都合上、遺構・遺物に関し詳細な検討・考察を加えることができないが、今回の発掘調査で得られた成果のまとめと、そこから派生するいくつかの問題を指摘しておきたい。

1．大坪遺跡の性格

今回の調査では、検出された遺構数が少ないものの、土師器の出土量は比較的多いといえる。今回まとまった量で土師器の一括資料を得られたのは、先の報告のとおり、９世紀半ば頃に比定される１号竪穴建物跡と３号溝状遺構・ 224号ピット、10世紀前半代に比定される６号溝状遺構と96号ピットからである。

１号竪穴建物跡の出土土器の観察をすると、器形の種類は、坏・高台坏・皿・蓋・黒色土器坏の供膳具形態のものが大半である。完形資料の坏の法量は、口径11cm前後、底径４cm前後、器高５cm前後の範囲内におさまるものが大半を占める。高台坏は、出土量自体少ないうえ完形資料も限られるが、口径15cm前後、底径５～６cm、器高６～７cmの範囲内におさまる。皿は、坏に続いて出土量が多い。口径13cm前後、底径６cm前後、器高2.5cm前後の範囲内におさまるものが大半である。蓋は、完形資料はないが、口径16cmと23cm前後の二種類がみられ、各器形において法量的な規格化をみることができる。これは、１号竪穴建物跡と同時期と考えられる３号溝状遺構および224号ピットでも同じ傾向をみることができる。両遺構とも、坏と皿の供膳具のみの出土で、坏・皿の法量ともに１号竪穴建物跡出土土器と同じ法量分布を示している。一般の集落遺跡の例から考えても、複数の遺構で同一器形の法量分布が、これほどまとまるのは極めて希といえよう。

また、昭和50年度調査の報告のなかでも指摘されている問題であるが、一般集落遺跡では、平安時代以降、墨書土器等の文字資料が少なからず出土することは現在では周知のこととなっている。ところが今回の調査でも、過去の調査と同様に、多量の土師器が出土しているのにもかかわらず、墨書土器は１点も確認されず、記号状の字句を記したヘラ書土器と線刻土器のみが確認されていることは大変興味深い。墨書土器は、土器の消費地で記されるもの、ヘラ書土器は、須恵器のように生産地で記されるものといった従前からのこうした指摘に従えば、当遺跡の性格もよりいっそう浮かび上がってくると思われる。

次に各遺構における遺物の出土状況をみると、１号竪穴建物跡では、坏や皿・瓦などが積み重ねられた状態で集中して出土し、224号ピットでもピットの長軸に沿って、ほぼ一列に坏と皿が積み重ねられて出土している。３号溝状遺構では、坏と皿がコンパクトにまとまり、重ねられて出土し、６号溝状遺構では、部分的に坏が積み重ねられて出土している他、単独でも数点出土している。各遺構とも無秩序に放り込まれたものではないと思われる。１号竪穴建物跡の土器は、器面が剥離し、暗文を施すべき土器に、それを施していない中途半端なつくりの土器や[1]、焼成も甘く、生焼きに近い土器がいつくか存在することから、製品として流通されなかった土器を、建物の廃絶を期に廃棄しているのではないかと考えられる。96号ピットでは、土器はピット内東側に重なり合って出土し、破損品ばかりである。これらの状況をまとめてみると以下のとおりである。

①各遺構の出土土器の器形は、坏・皿等といった供膳具形態が中心を占め、甕等の煮炊具は極めて少ない。それらの年代は、おおよそ９世紀前半代と10世紀前半代のものが中心である。

②出土土器の法量分布がまとまっており、規格性が認められ、形態もそれぞれ酷似している。

③出土土器のなかには破損品、生焼け状態のもの、半製品のものが多い。

④土器の消費地で多数出土する墨書土器が、当遺跡では１点の出土もなく、生産地での出土が多いといわれるヘラ書土器、線刻土器が中心で、記された字句は記号状のものが多い。

⑤１号竪穴建物跡出土土器は、土器の保管というよりは、建物の廃絶を期に土器も廃棄したものと考えられる。

以上のようであるが、今回の調査では、わずかであるが土師器生産に関わる具体的な遺構の検出もみられ、当遺跡の性格もより明確となってきたといえよう。そして従来からの指摘どおり、当遺跡は土師器生産遺跡としての性格が、より鮮明となったといえる。

２．大坪遺跡の構造と土師器生産に関わる問題について

次に「土師器生産遺跡」と再確認した大坪遺跡の構造について考えてみたい。しかし最初に述べたとおり、狭い調査範囲のため、遺構群は部分的に検出したにすぎず、その立体的復元は難しいといえる。土師器製作に関わる遺構の年代は、今回の調査では、９世紀半ばと10世紀前半代に限られ、前者は、１号竪穴建物跡がそれに該当し、224号ピットも土師器焼成遺構としての可能性はある。後者は、２号竪穴建物跡と96号ピットが該当するのみで、その他は捉えられない。他時期については、１号掘立柱建物跡もおそらくそれらに関わる遺構の一つだと思われるが、その時期については、報告では、８世紀前半代としているが、出土土器が小片であるため、流動的な部分も多い。

また、多数のピットが検出されたものの、土師器焼成遺構と明確に捉えられるのは、96号ピットのみで、可能性を残すピットとしても224号ピットが挙げられる程度で、本来あまり数多くは存在しなかったのではなかろうか。そして竪穴建物跡も間隔をおいて点在することから、密集して存在したとは考えにくい。推測になってしまうが、考えられる構造としては、２～３軒の竪穴建物と１～２基の土師器焼成窯が比較的近接して存在し、こうした群がいくつか存在していたのではなかろうか。そして掘立柱建物を中心とした群も存在した可能性が強い。

さて、昭和50（1975）年度の大坪遺跡の発掘調査にも携わった坂本美夫氏は、1983年に神奈川考古同人会主催のシンポジウム「奈良・平安時代の諸問題－相模国と周辺地域の様相－」のなかで（以下、83年シンポと称する）、Ⅰ期からXV期にわたる甲斐国の土器編年案を提示し、「甲斐型坏」の提唱を行っている[2)]。以後、この編年案は現在まで多くの県内研究者に援用され、甲斐型坏も県内外に広く認知されたといってよい。

しかし甲斐型坏の資料増加に伴って、1992年には山梨県考古学協会主催の「甲斐型土器－その編年と年代－」と題する研究集会が行われ、その編年観と年代観について資料の再検討が行われた[3)]。そこでは甲斐型坏の出現期が、坂本氏の編年では８世紀末とされていたのを、８世紀第３四半期頃まで遡る年代観が提示され、それに伴い各期の年代観も遡ることとなった。さらに「甲斐型」という概念を坏だけではなく、他の器形にも与え、甲斐国内における土器生産の全体の流れのなかで、甲斐型土器を広く捉えようとする試みが図られた。それに基づいて各器形の分析を行った結果、器形の種類やその構成、各器形の形態的・製作技法的変遷については、坂本氏の見解を追認するかたちとなっている。なお、今回の報告における各遺構の時期決定に際しては、これらの研究成果に依拠している。

83年シンポ編年の史的背景を述べるなかで坂本氏は、９世紀代に入って県内一円に斉一性のある土器が行き渡ることは、「専業集団の一元的生産体制が確立」されたものとし、大坪遺跡はその時期に成立した土師器窯業址としている。また、甲斐編年の「Ⅷ期以降Ｘ期まで坏と皿の整形方法には明らかに違いが見られることから、その体制の中身はこれに甕を加えた３部門の製作者集団が存在した」とし、器形ごとに製作者が異なっていることを想定している。

今回の調査の成果では、９世紀半ばには、坏（高台坏も含む）・皿・蓋等の食膳具を中心とする器形の生産を、本遺跡内およびその周辺で行っていた可能性が強い。こうした状況を踏まえると、坂本氏の述べる坏・皿各部門の製作者集団は、同一の地で生産していたことになり、甕部門の製作者集団は、今回の調査区内には存在していなかったといえるだろう。さらに坂本氏は、XI期おける坏・皿・甕の形態的な変化を「完全な一元的生産体制の確立」を目指した製作者集団の再編と想定しているが、これは10世紀前半代においても、甕形土器自体の出土量が増加しない状況からみて、当該期においても甕は、少なくとも本調査区周辺では生産されていなかった可能性が強く、坂本氏が述べるような「完全な一元的生産体制の確立」の状況を読みとることは少々難しいような気がする。

当調査区の製作者集団は、遺跡全体の状況をみると、ここに居住し日常生活を送りながら土師器生産に携わっていたとは考えられない。彼らの居住地は別の場所にあり、各居住地から動員された製作者達が、仮住まい的な状況で土師器生産に携わっていたとみるほうが妥当ではあるまいか。

先に想定した遺跡の構造からすれば、土師器焼成窯が多数存在し、工房が軒を連ね、組織的にしかも大々的に操業を行っていたというイメージはあまり感じられず、血縁を中心とした小規模な家族経営のなかでの土師器生産というイメージが強い。こうした小規模経営体が、いくつか存在して、土師器生産に携わっていたと思われる。彼らは基本的に農業に従事していた農民であり、土師器の生産は恒常的ではなく、農閑期を中心に生産を行う分業体制だったと推察できる。こうした彼らを支配していたのは、詳しい考察はできないが、在地の有力層、つまり富豪層であろう。富豪層は、農業と土器生産という二重の収奪を彼らから繰り返しながら、自らの私富の蓄積を高めていったに違いない。

以下に、大坪遺跡の土師器生産における、今後に残された問題および課題を挙げておきたい。

①大坪遺跡では、９世紀前半代と10世紀前半の土師器生産に関わる遺構・遺物が中心であるが、９世紀以前および９世紀後半代の遺構の存在が明確ではなく、これら時期の土器生産の状況が不明瞭である。

②坏・皿といった器形ごとの製作者集団が明確に区別されていたのか。

③土師器生産における生産体制のあり方、工人層（土器製作者集団）と支配者層との関係。

④大坪遺跡周辺で行われていたと思われる、瓦生産や須恵器生産との関係。

３．大坪遺跡の土地利用について

最後に本遺跡の土地利用についてふれておきたい。地形の平坦化が始まる奈良・平安時代に、竪穴建物等の建造物が建てられるようになり、また、水田状遺構の存在からも窺えるように、耕地化も積極的に進められたものと思われる。それ以前の古墳時代の段階では、花粉分析の結果や２号溝状遺構、溝状凹地遺構等考古学的に検出された遺構の状況から、沼沢状の葦原で、網目状に自然流路群が存在する低湿な環境であったと推定される。しかしこのような環境のもとでも、人間のこの土地への働きかけはあり、それは溝状凹地遺構にみる祭祀的行為の痕跡が、それを物語っている。

基本層序第Ⅱ層は、平安時代の遺構確認面かつ遺物包含層であるが、その層準中には夥しい量の土器が包含され、今回の調査区のみならず、周辺で行われた発掘調査例からも、かなり広い範囲にわたって包含している状況が認められる。土器はその大半が小片ないしは細片で、割れ口は概して摩滅しておらず、器形の種類もほぼ坏と皿に限られている。同層準内には洪水堆積物がほとんどみられないことから、単なる自然流入とは考えられず、人為的な要因が加わった可能性が強い。夥しい量の土器片を包含する層が、数百メートル、数キロメートル単位のブロックで、広範囲にわたって点在するものなのか、それとも当該地域全域の普遍的な状況なのか、仮に前者であれば、湿地開発および土地利用に伴う何らかの行為とも考えられ、今後の当該地域での調査で、注意されるべき問題だと思われる。

土地開発に関連してもう少しふれておきたい。第Ⅰ章においても若干述べたが、当遺跡周辺の表層には条里型土地割（以下、表層条里とよぶ）が残存している。この表層条里は、濁川左岸地域と平等川右岸地域に展開するもので、その東端部に当遺跡は位置している。当該地域における条里型土地割の研究は、歴史地理学的視点での研究は進んでいるもの[4]、考古学的調査は実施されておらず、その初源年代や変遷については確定的な結論がでていないのが現状である。今回の調査でも条里型土地割に伴う畦畔遺構等の検出はみられなかったが、１号・４号溝状遺構については、条里型土地割に関わる溝である可能性が考えられる。両溝とも掘削年代は明確ではないが、他遺構との重複関係から９世紀半ば以降と推察される。

さて、表層条里は、その方位を真北に対し約15°東に振っているのに対し、１号溝状遺構は、ほぼ磁北方向に沿って延びており、表層条里とは方位を異にしている。一方、４号溝状遺構は東西に延びる溝であるが、これも表層条里とは逆の方位にその軸を振っており、異なる展開を示している。両溝とも表層条里とは方位においてズレがみられるが、これを施行の時期差と考えれば、埋没した条里型土地割が存在する可能性も考えられる。

また、土器埋納遺構が数基検出されているが、同遺構は近年の研究から、条里型水田の開発や再開発との関連が指摘されており[5]、地鎮めに伴う祭祀的行為の一つと考えられている。こうした近年の研究成果に従えば、土器埋納遺構に埋納された土器の示す年代が、大規模な土地開発を推進した時期を表すということで、同遺構の存在は大変興味深い。

註

1）集落遺跡から出土する当該期（９世紀半ば）の坏の器体部内面には、放射状暗文が施されているものがほとんどであるという状況から考えて、本遺構の坏は未製品だと判断している。

2）坂本美夫・末木　健・堀内　真　「甲斐地域」『奈良・平安時代の諸問題－相模国と周辺地域の様相－』　神奈川考古同人会　1983

3）甲斐型土器研究グループ『甲斐型土器－その編年と年代－』山梨県考古学協会　1992

4）須藤　賢・谷岡武雄　「甲斐条里の諸問題」『地理学評論』1951

5）江浦　洋　「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』　財団法人大阪文化財センター　1992

参考文献

高木勇夫　『条里地域の自然環境』　古今書院　1985

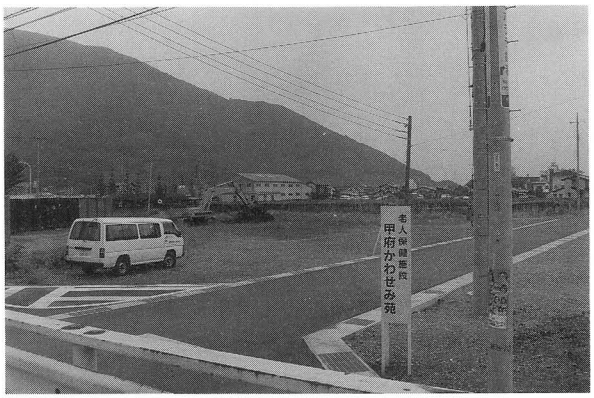
広瀬和雄　「中世への胎動」『岩波講座　日本考古学６　変化と画期』　岩波書店　1986

平川　南・天野　努・黒田正典　「古代集落と墨書土器－千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集　1989

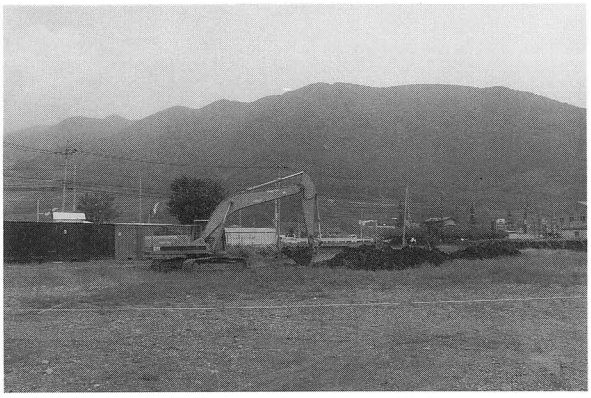
山中　章　「古代都城の線刻土器と記号墨書土器」『古代文化』第41巻第12号　財団法人古代学協会　1989

図版１

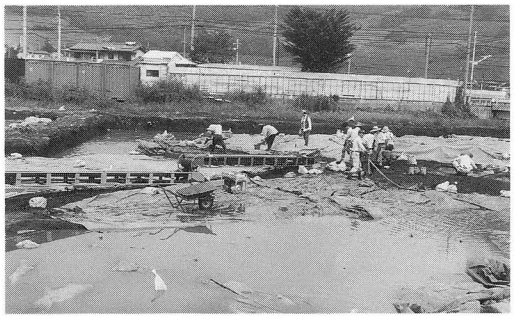
大坪遺跡全景　空中写真



調査前風景（南より）



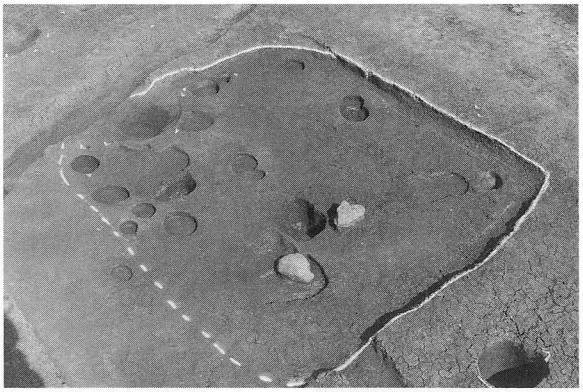
トレンチ掘削風景



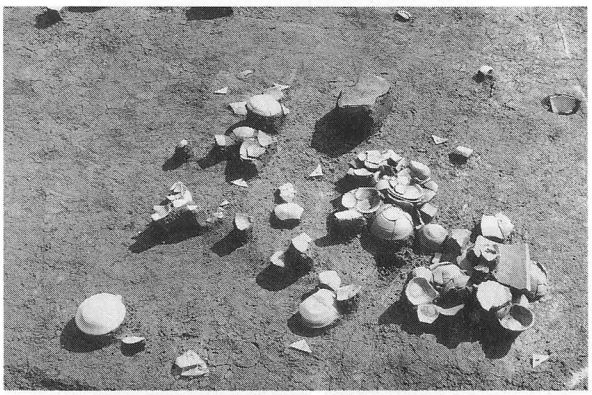
雨のたびに水びたしとなる遺跡

遺構確認作業風景

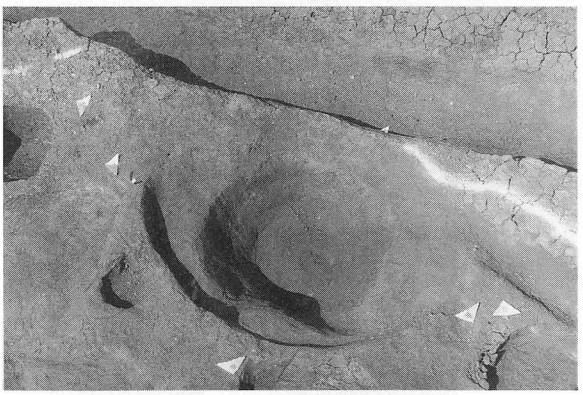
１号竪穴建物跡遺物出土状態（北西より）



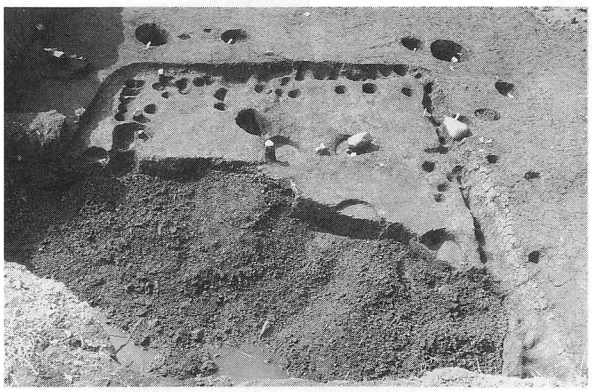
１号竪穴建物跡完掘（南西より）



１号竪穴建物跡遺物出土状態近景（北西より）



１号竪穴建物跡 竈（南東より））



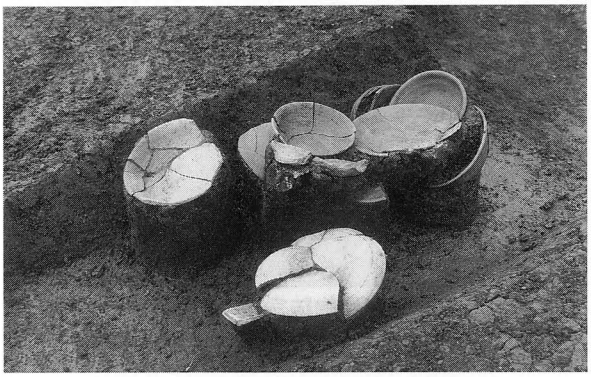
２号竪穴建物跡（東より）

２号溝状遺構西側部分（南より）

１号溝状遺構（南より）

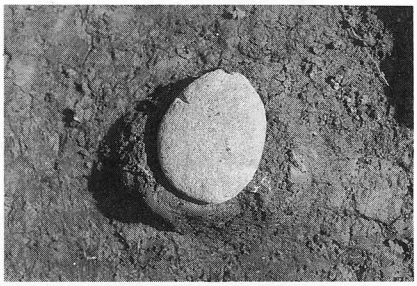
３号溝状遺構（南より）

図版３

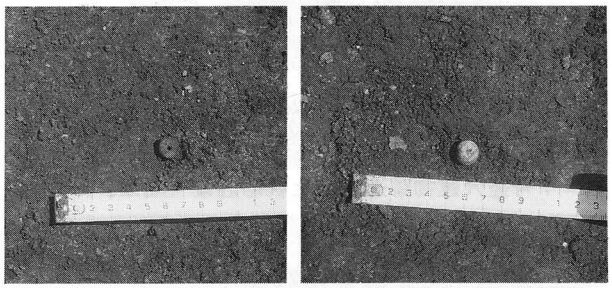


３号溝状遺構遺物出土状態（南東より）

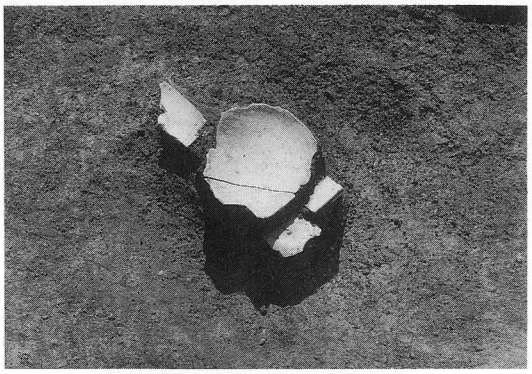
４号溝状遺構（東より）



４号溝状遺構出土　土錘

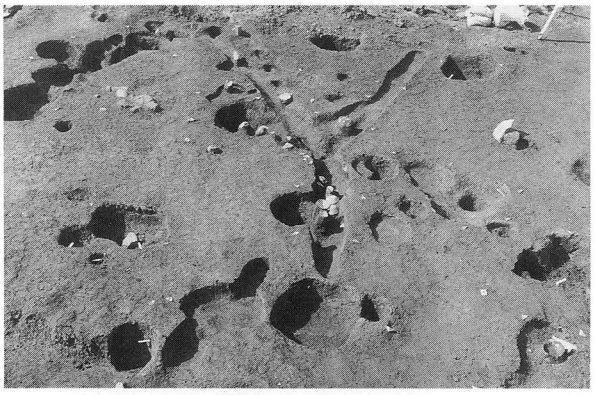


４号溝状遺構出土　土製玉



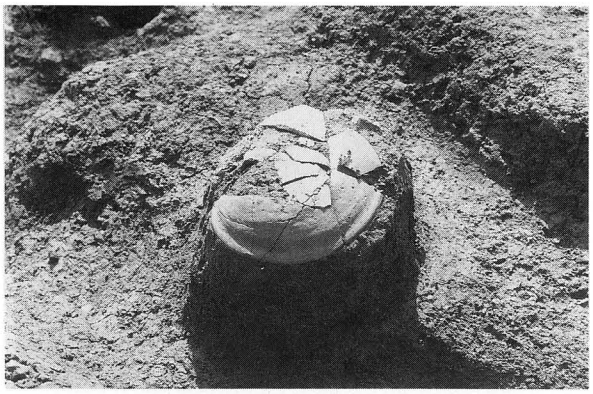
５号溝状遺構遺物出土状態

５号溝状遺構（西より）



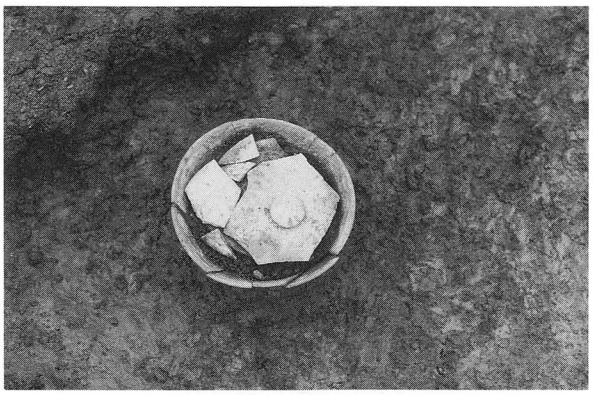
６号溝状遺構（南より）

６号溝状遺構遺物出土状態 ①

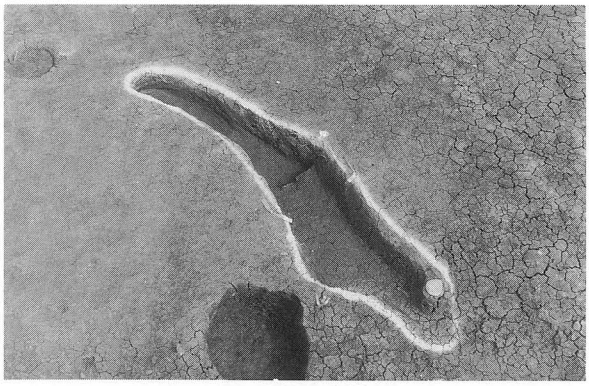


６号溝状遺構遺物出土状態 ②

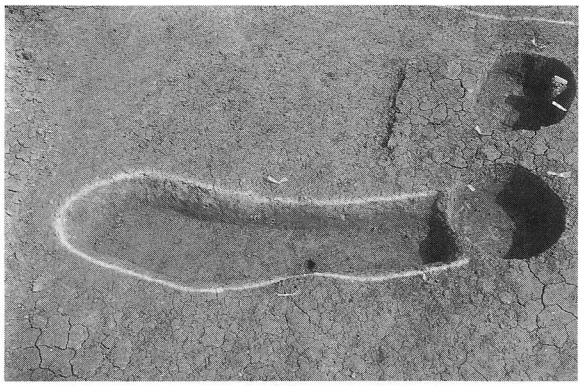
７号溝状遺構



７号溝状遺構遺物出土状態



８号溝状遺構



９号溝状遺構

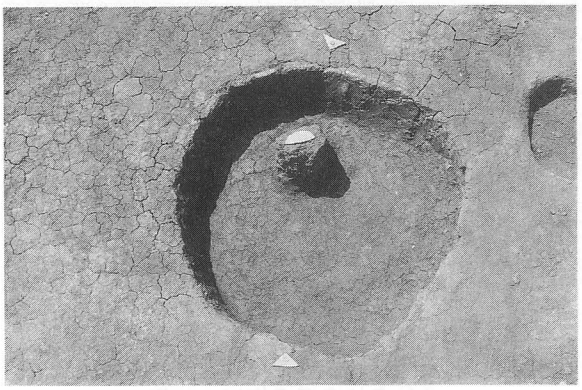
10号溝状遺構断面確認状況

13号ピット

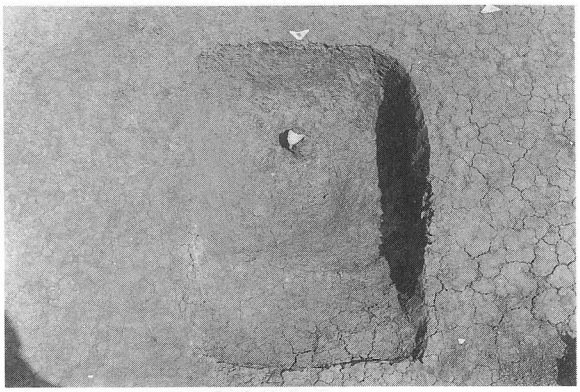
図版５

15号ピット

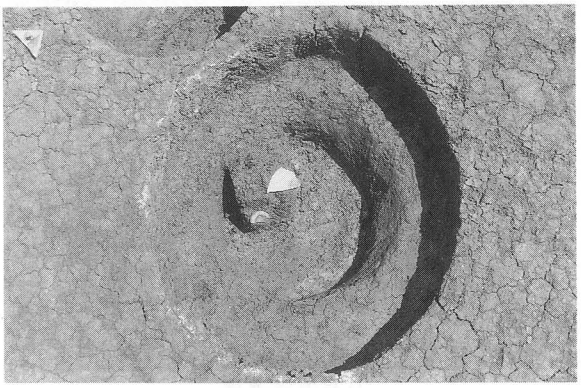
16号ピット



18号ピット



20号ピット



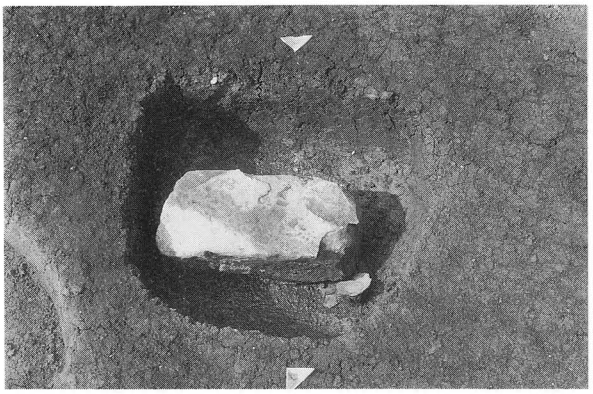
21号ピット

25号ピット

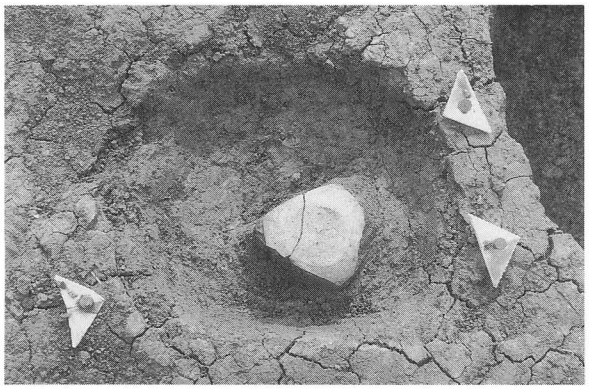
26・27号ピット

44号ピット

50号ピット

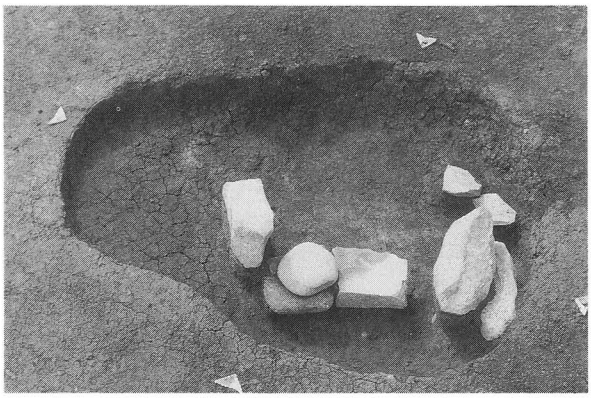


55号ピット



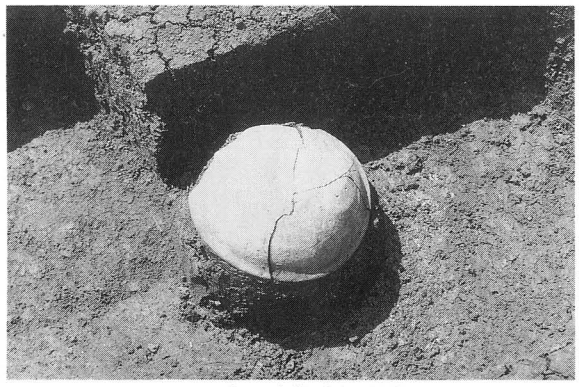
66号ピット

73号ピット



78号ピット

84号ピット



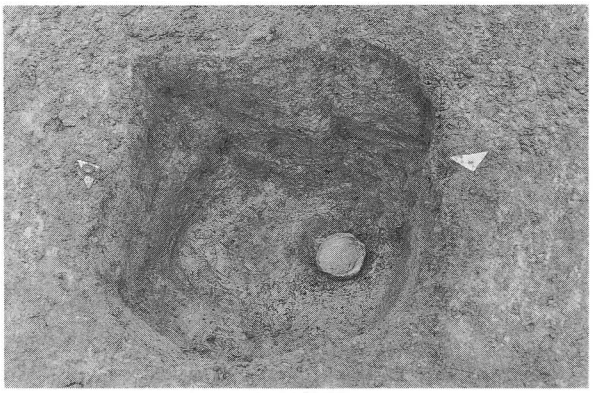
90号ピット遺物出土状態

84号ピット遺物出土状態

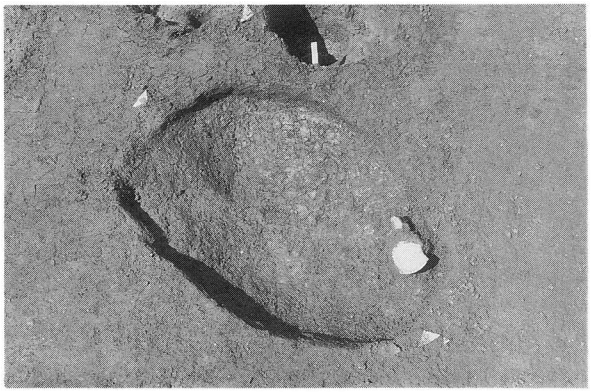
図版７

96号ピット

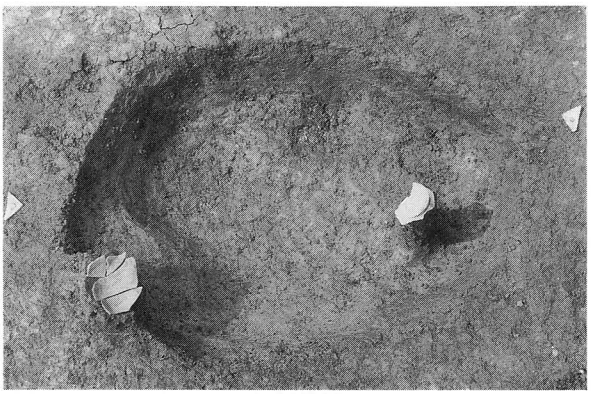
96号ピット遺物出土状態



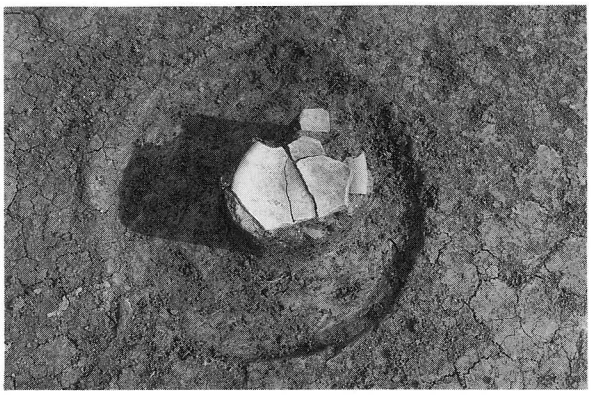
106号ピット



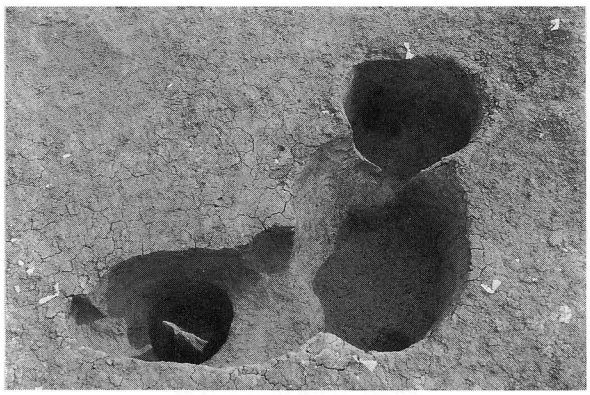
116号ピット



135号ピット

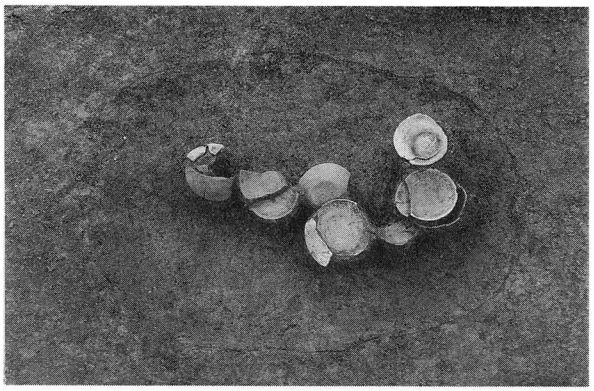


200号ピット

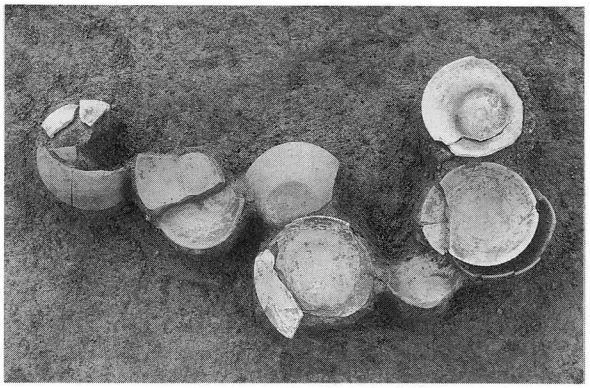


199・214・217号ピット

214号ピット出土　木柱痕



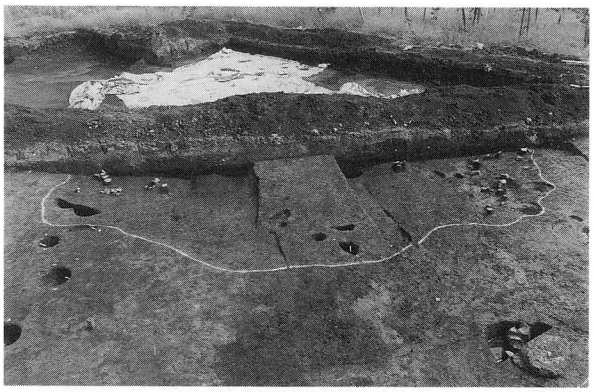
224号ピット



224号ピット遺物出土状態

260号ピット

344号ピット



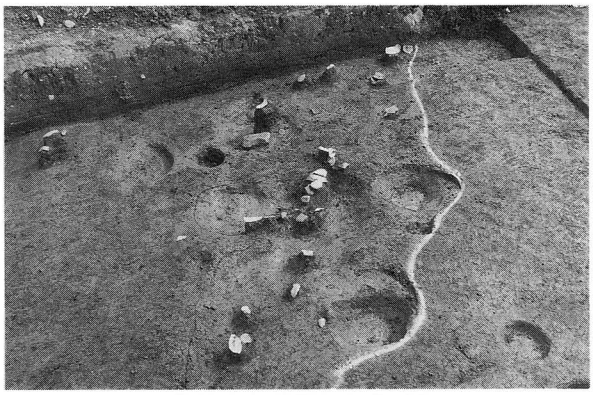
溝状凹地遺構（西より）

344号ピット遺物出土状態

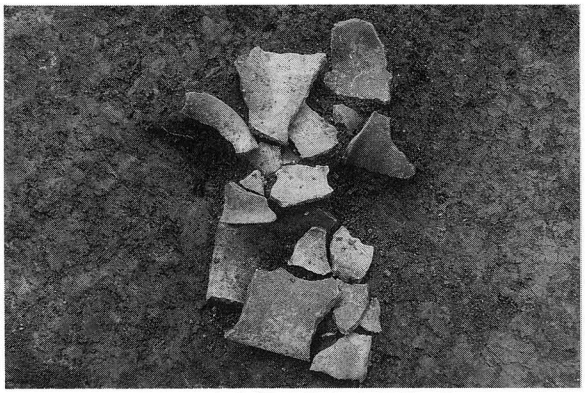
溝状凹地遺構　セクション

溝状凹地遺構北側遺物出土状態

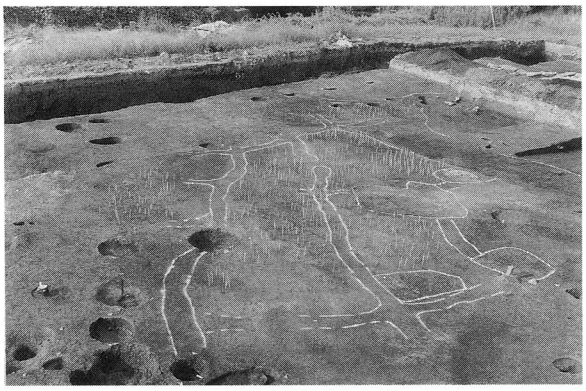
図版９



溝状凹地遺構南側遺物出土状態

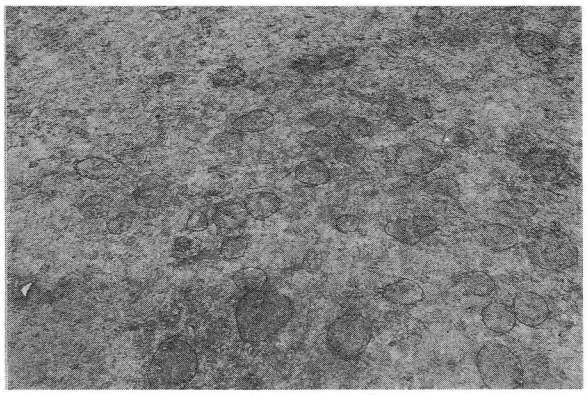


溝状凹地遺構遺物出土状態 ①

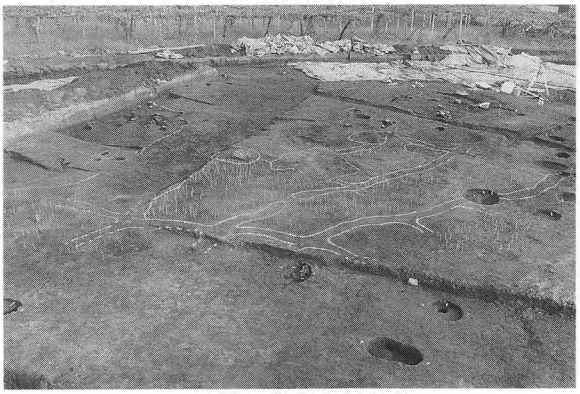


水田状遺構（南より）

溝状凹地遺構遺物出土状態 ②



水田状遺構内　小ピット群確認状況



水田状遺構（北西より）

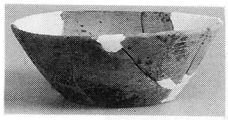
テフラ分析土壌サンプリング風景

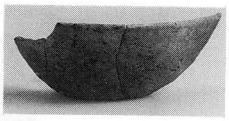
花粉分析土壌サンプリング風景

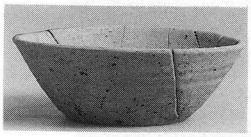
7図－1

7図－4

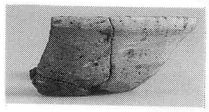
7図－6


7図－7


7図－9


7図－11

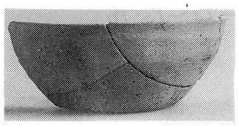
7図－13

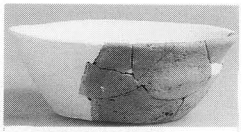

7図－15

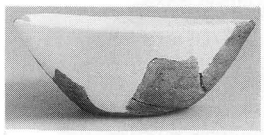
7図－16

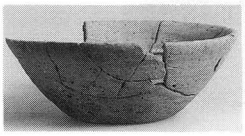
7図－17

7図－24


7図－25


7図－26


7図－27

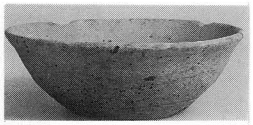

7図－29

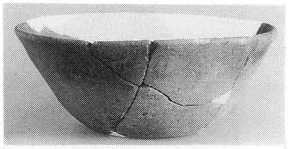
7図－30

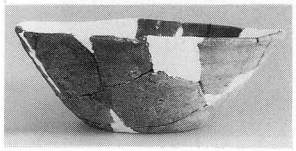
7図－31

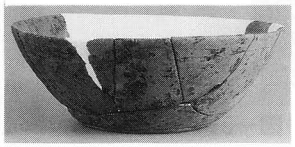
7図－32

7図－33

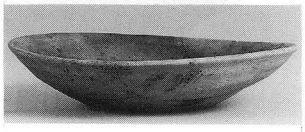

7図－34


7図－37

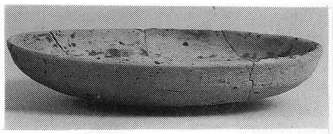

8図－41


8図－43

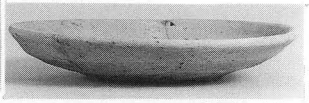
8図－44

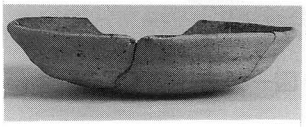

8図－49

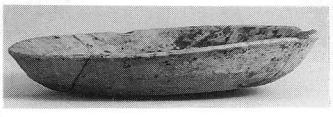
8図－50

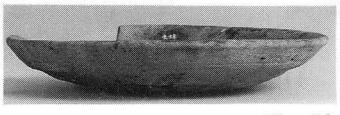

8図－51

8図－52

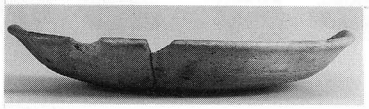

8図－56

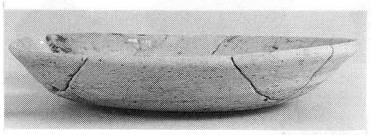

8図－57


8図－58


9図－59

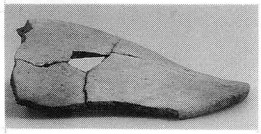
9図－60


9図－61


9図－62

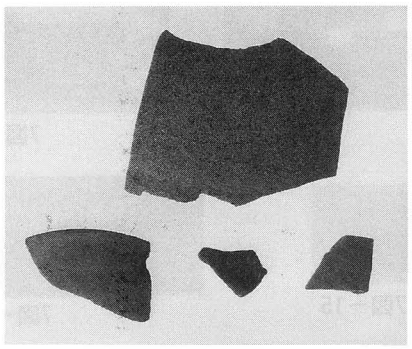
9図－66

9図－67

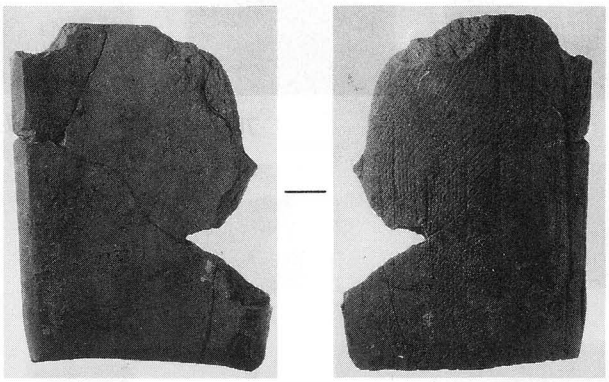

9図－72

1号竪穴建物跡出土遺物

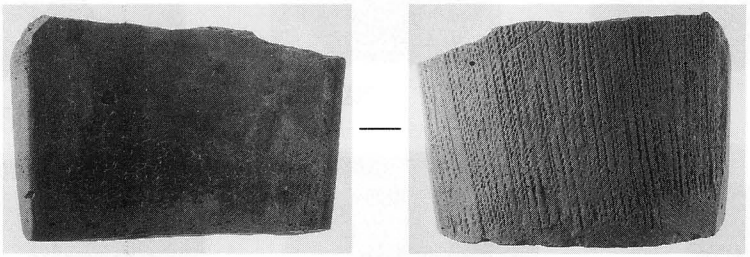
図版11



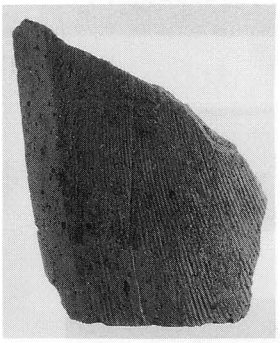
9図－72～73・76



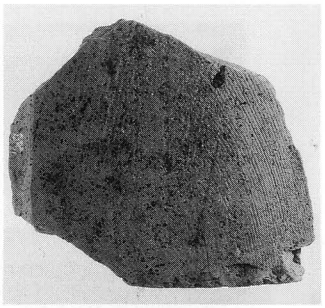
10図－77



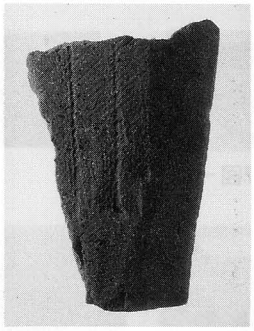
10図－78



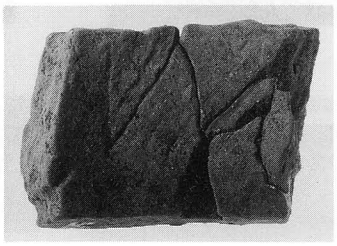
11図－79



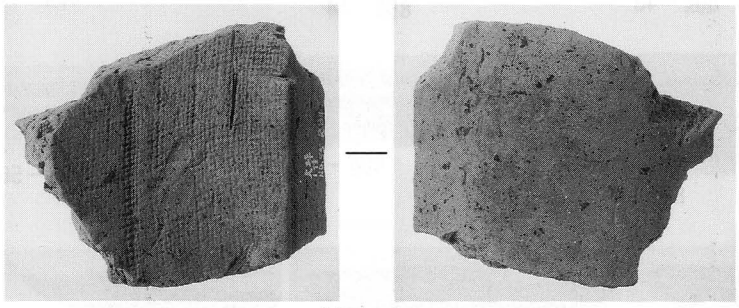
11図－80



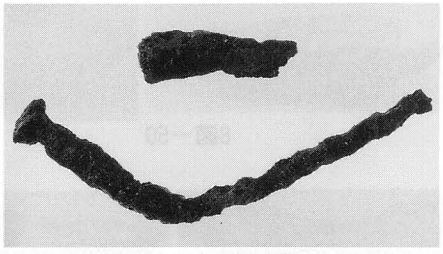
11図－81



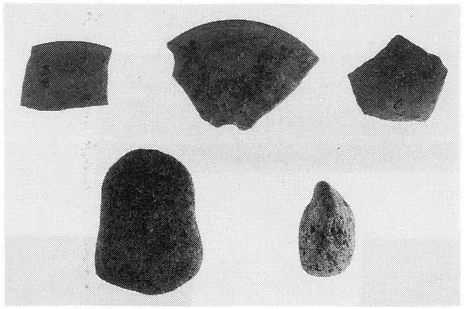
11図－82



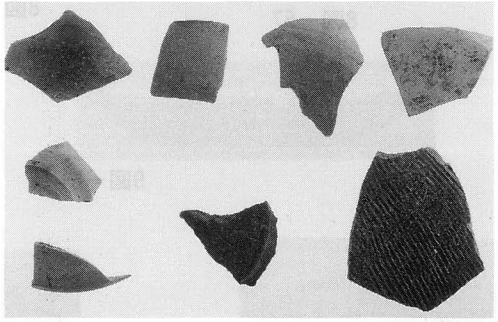
11図－83



11図－84・85

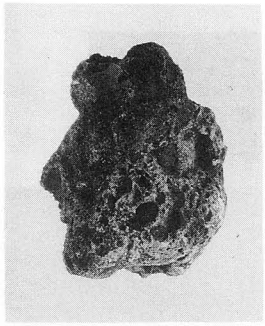


2号竪穴建物跡

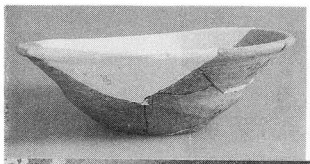


1号掘立建物跡

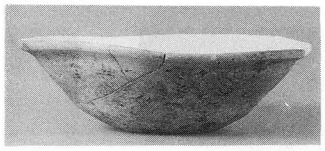
1号竪穴建物跡・2号竪穴建物跡・1号掘立柱建物跡出土遺物



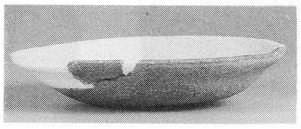
19図－1



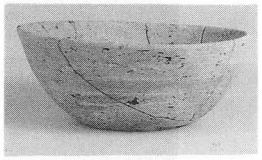
19図－7



19図－9

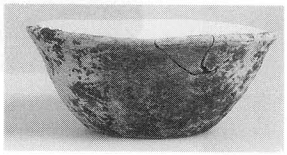


19図－13

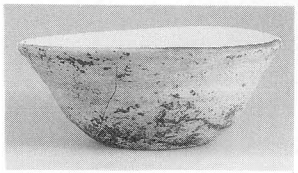


19図－19

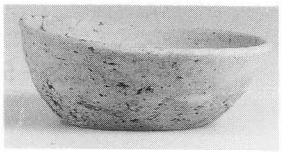
19図－18



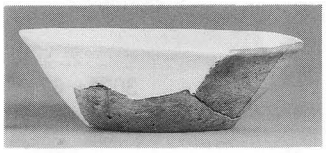
19図－20



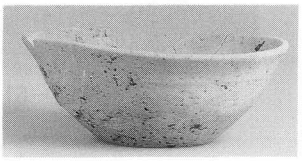
19図－21



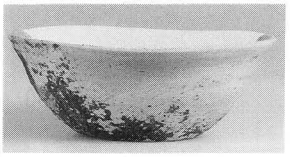
19図－22



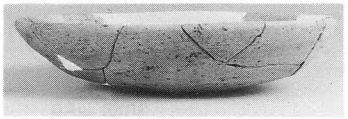
19図－23



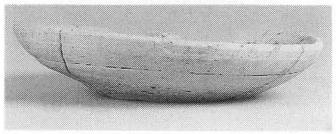
19図－24



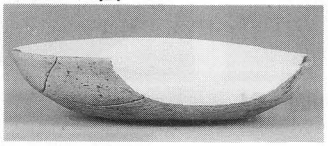
19図－25



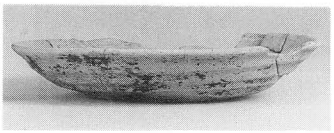
19図－27



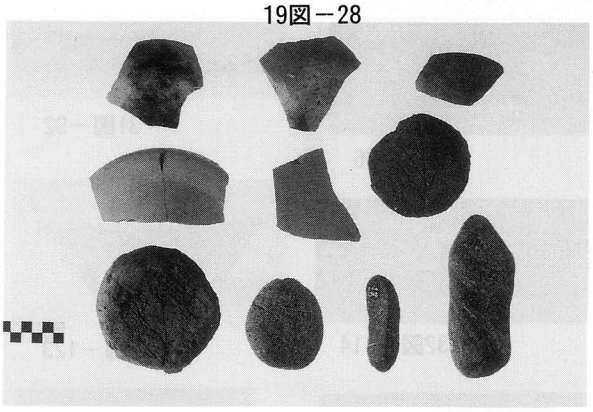
19図－28



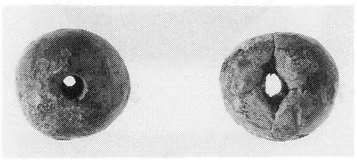
19図－29



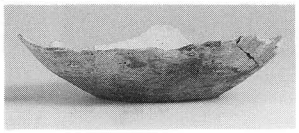
19図－30



20図－31～38



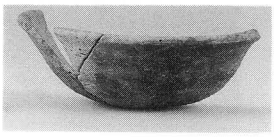
20図－39・40



20図－44

21図－45

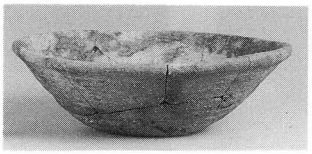
21図－46



21図－47

21図－48

21図－49

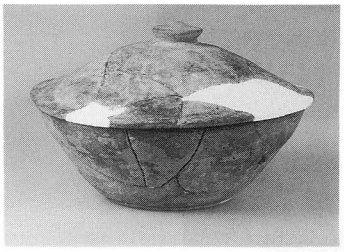


21図－50

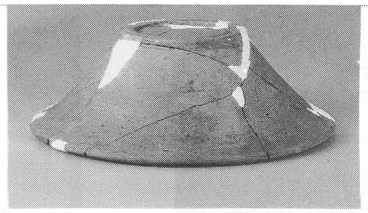
21図－53

溝状遺構出土遺物

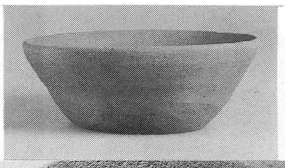
図版13

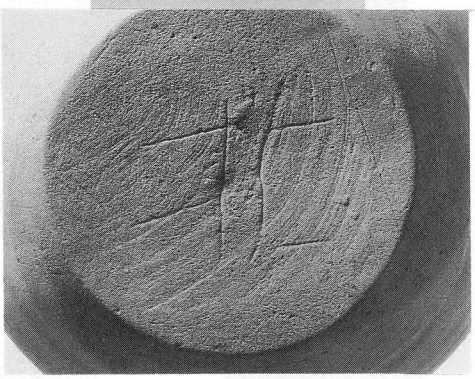


21図－57・58

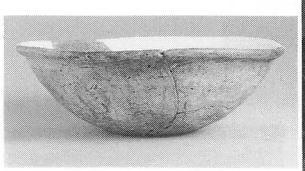


21図－60

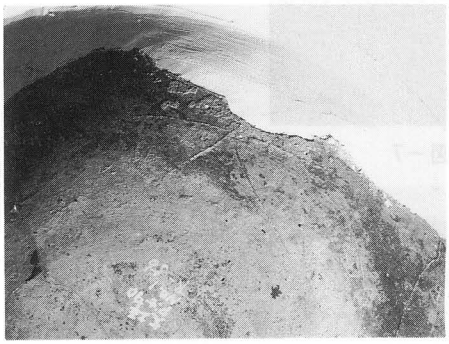


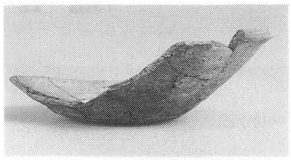


30図－51

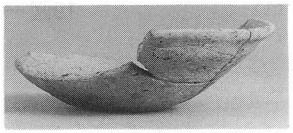


30図－55

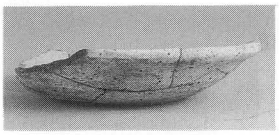




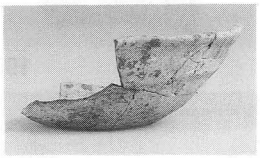
30図－59



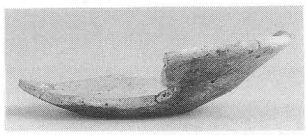
30図－60



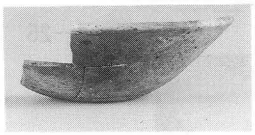
30図－61



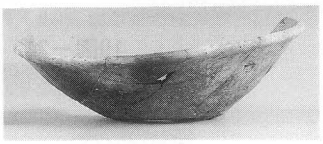
30図－62



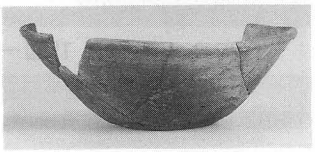
30図－63



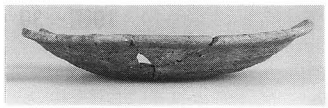
30図－64



30図－65

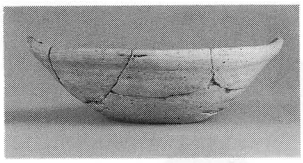


30図－67

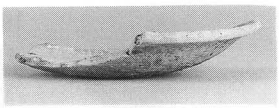


30図－71

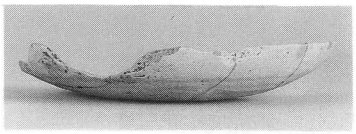
31図－80



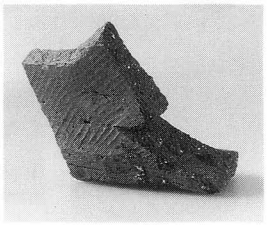
31図－86



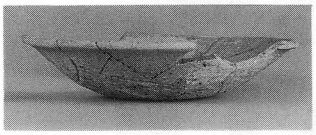
31図－92



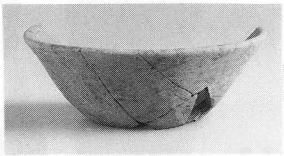
31図－95



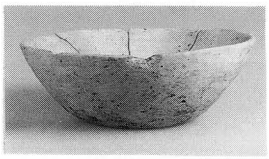
31図－108



32図－114

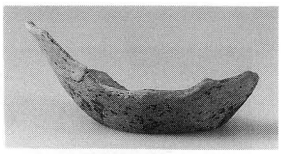


32図－123

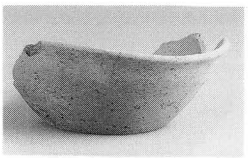


32図－124

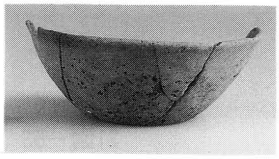
32図－125



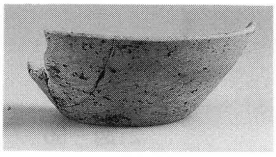
32図－126



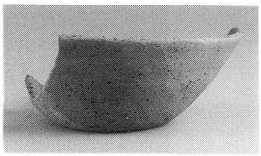
32図－127



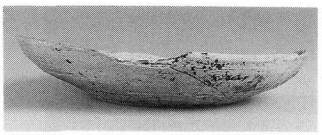
32図－128



32図－129

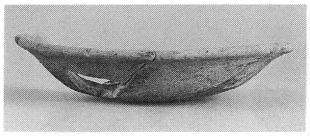


32図－130

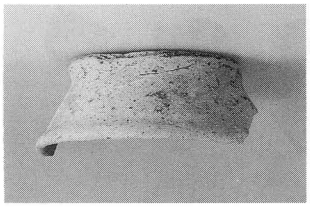


32図－131

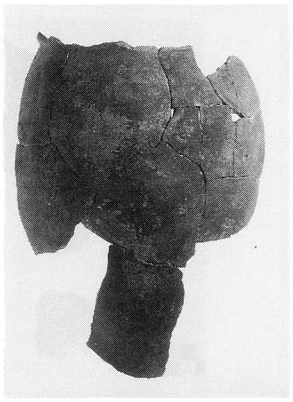
溝状遺構・ピット出土遺物



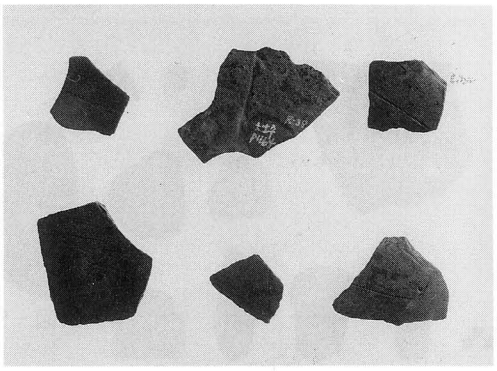
32図－143



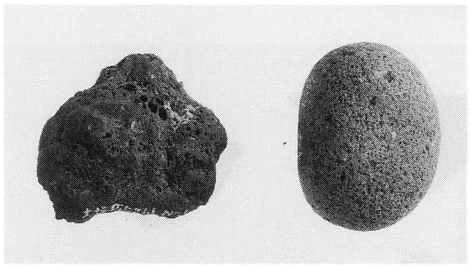
34図－178



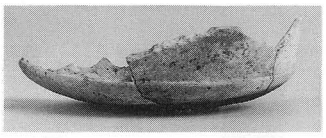
33図－146



39・64・115・223・270・305ピット出土
ヘラ書・線刻土器片

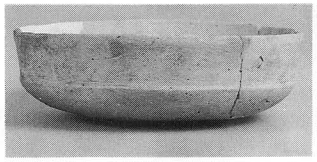


34図－184　34図－183

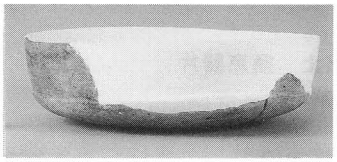


36図－1

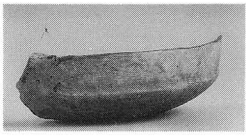
36図－2



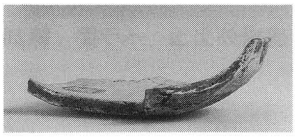
36図－3



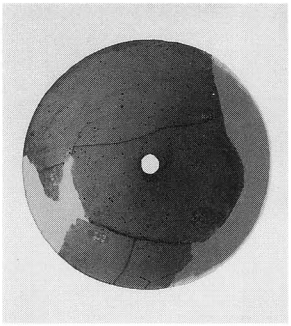
36図－4



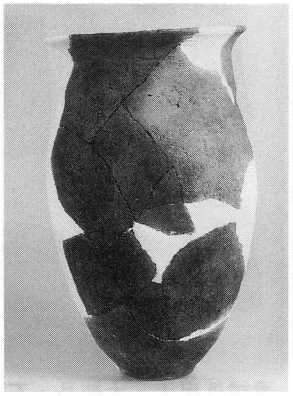
36図－5



36図－8



36図－9



36図－10

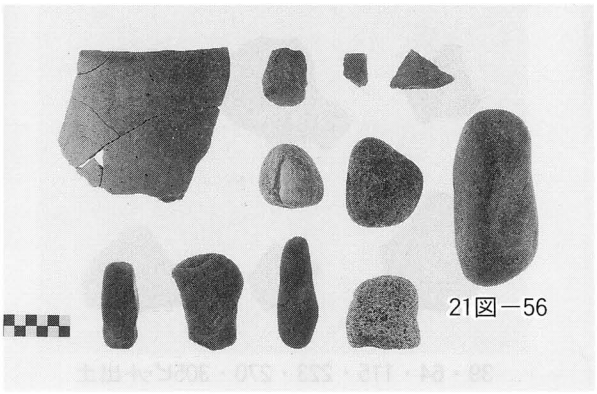
36図－11

36図－13

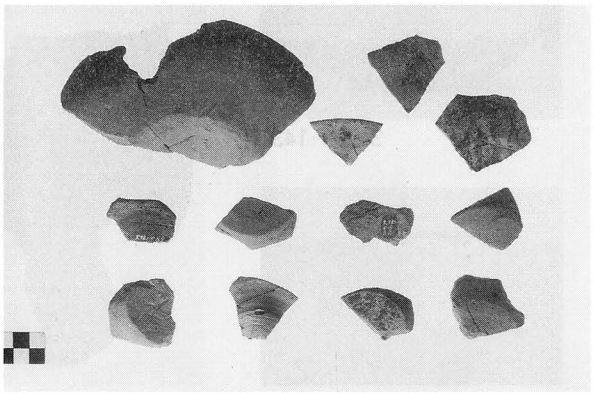
36図－17

ピット・溝状凹地遺構出土遺物

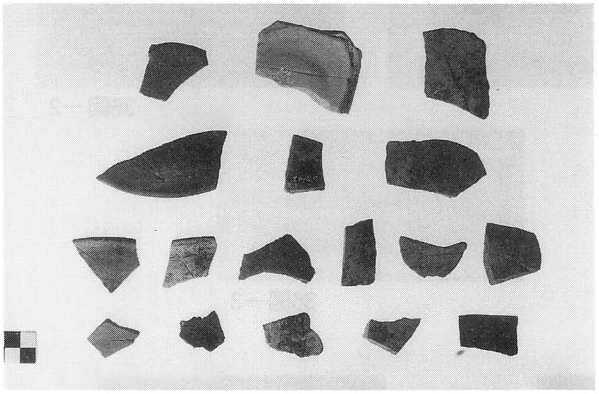
図版15



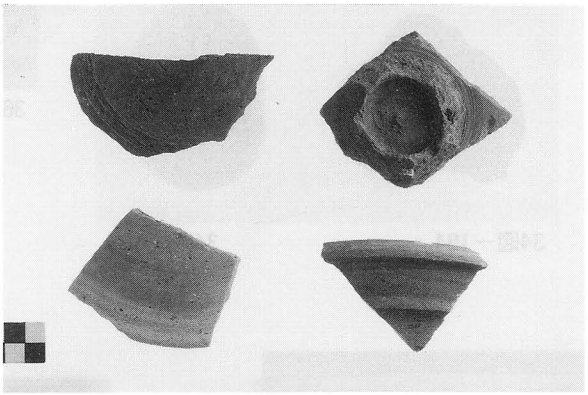
溝状凹地遺構出土遺物および６号溝状遺構出土石器



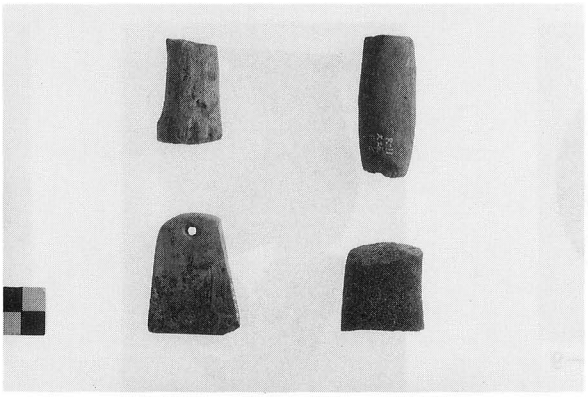
遺構外出土　ヘラ書・線刻土器片 ①



遺構外出土　ヘラ書・線刻土器片 ②



遺構外出土　須恵器片



遺構外出土　土製品・石製品

報告書概要

フリガナ		オオツボイセキハックツチョウサホウコクショ	
書名		大坪遺跡発掘調査報告書Ⅲ	
副題		ケアハウス　グレープハウス建設に伴う調査	
シリーズ		シリーズ名なし	
著者名		平野　修・河西　学・鈴木　茂	
発行者名		甲府市遺跡調査会・甲府市教育委員会・社会福祉法人緑樹会	
編集機関		甲府市遺跡調査会	
住所・電話番号		〒400 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号　電話0552(37)1161(代)　内線3960	
印刷所		峡北印刷株式会社　〒408 山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2313　電話0551(32)3245(代)	
印刷日・発行日		平成８(1996)年２月20日・平成８(1996)年３月31日	
大坪遺跡	所在地	山梨県甲府市桜井町字角田610番地	
	25,000分の1地図名・位置・標高	甲府	北緯35°39′22″ 東経138°37′25″ 標高：266m
概要	主な時代	古墳時代・奈良時代・平安時代	
	主な遺構	竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・ピット(土師器焼成遺構・土器埋納遺構・土坑を含む)、溝状凹地遺構、水田状遺構	
	主な遺物	土師器坏(ヘラ書土器・線刻土器含む)・皿・蓋・甕・甑・黒色土器坏、須恵器片、灰釉陶器片、鉄製品、鉄滓、砥石、石錘、土玉、土錘、獣足片、手捏土器	
	特殊遺構	土師器焼成遺構・土器埋納遺構	
	特殊遺物	特になし	
	調査期間	平成６(1994)年７月18日～同年10月14日	

大坪遺跡発掘調査報告書Ⅲ

―ケアハウス　グレープハウス建設に伴う調査―

平成８(1996)年３月31日発行

編集・発行　甲府市遺跡調査会
〒400 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号
電話 0552(37)1161(代)　内線3960

印刷　峡北印刷株式会社
〒408 山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2313
電話 0551(32)3245(代)